沖縄県文化財調査報告書第67集

シヌグ堂遺跡

— 第１・２・３次発掘調査報告 —

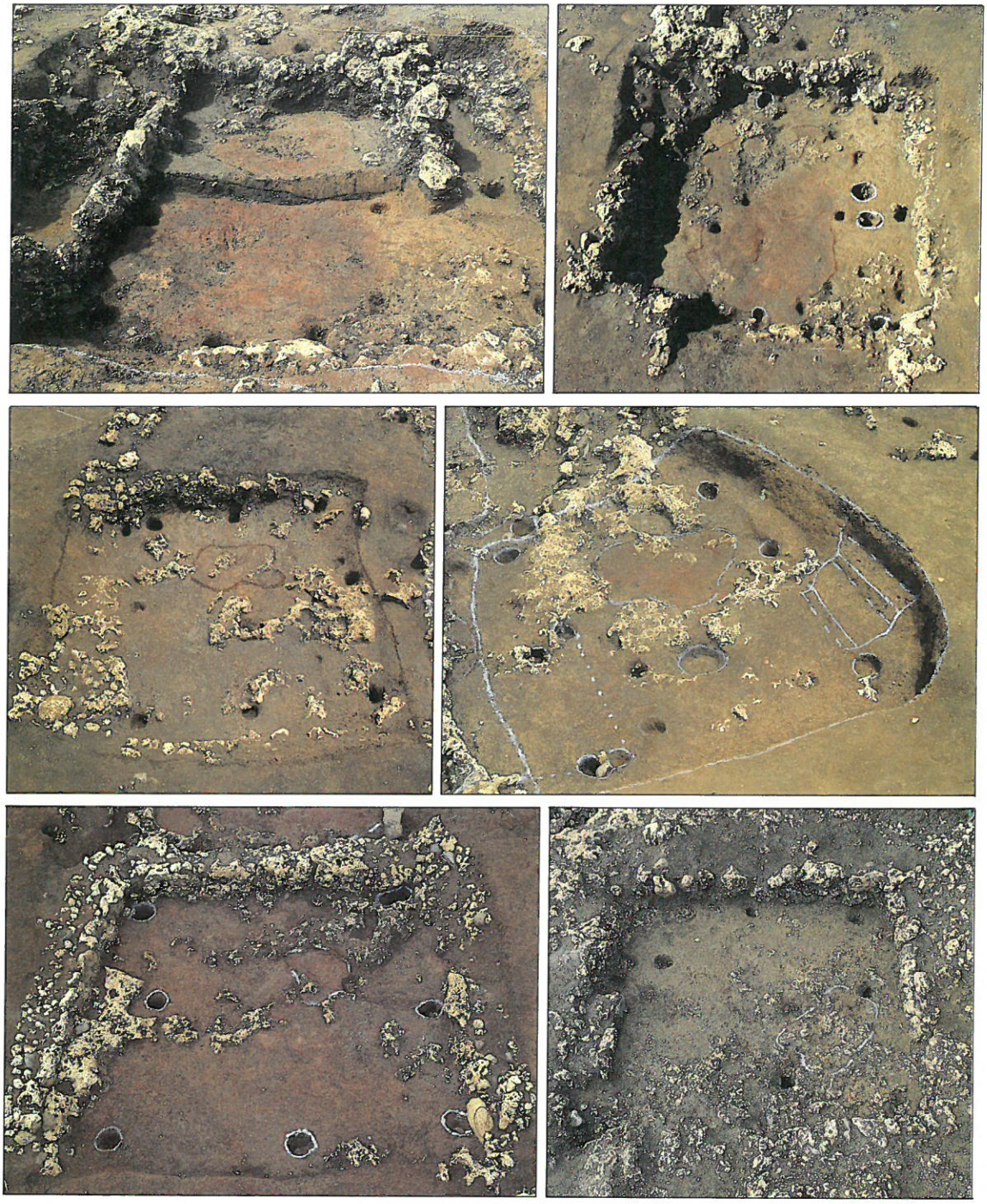
１９８５

沖縄県教育委員会

第4段丘の竪穴住居跡群（南から）

左：骨　製　品
　　貝　製　品
上：深鉢形土器
　　（B群土器）
下：チャート製石鏃

巻首図版1



巻首図版 2　上左：50号・58号竪穴の重複（上の炉跡50号、下の炉跡58号）

上右：58号竪穴住居跡（50号の下から検出）

中左：23号竪穴住居跡　　中右：38号竪穴住居跡

下左：47号竪穴住居跡　　下右：57号竪穴住居跡

序

この報告書は、与那城村宮城島在、シヌグ堂遺跡発掘調査の内容を記録したものであります。発掘調査は、文化庁の補助および指導を得て、昭和57、58、59年度の3次にわたって実施されました。

近年、県下の多くの地域において農業基盤整備事業が実施されておりますが、宮城島においても大規模な圃場整備計画が進められております。これに伴い、その一角に存在する埋蔵文化財シヌグ堂遺跡の範囲と内容を明らかにし、これを適切に保存するための基礎資料を得る必要が生じてまいりました。このことを目的として、3次にわたる発掘調査を実施したわけでありますが、本文に紹介してありますように、石器時代の貴重な遺構、遺物が数多く発見されております。とりわけ多数の住居跡を伴う集落跡の検出は県下においても数少ない例であります。また石器、土器、骨器、貝器なども豊富に出土しており、石器時代人の日々の暮らしと社会の様相を伝える、たいへん貴重な内容をもった遺跡であります。

幸い、圃場整備計画についても設計等を配慮していただき適切な現地保存を図る方向で協議が進んでおります。当委員会としてもひきつづきこの貴重な歴史的環境が一層大切にされ、活用されるよう努める所存であります。

本書がより多くの方々によって、はるかな時代の祖先の暮らしと社会の歩みを知る手がかりとして有効に活用されることを希望すると共に、文化財愛護思想の高揚、諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待するものであります。

昭和60年3月

沖縄県教育委員会
教育長 米村幸政

例　　言

1．本書は、沖縄県教育委員会が国の補助（80％）を受けて、昭和57・58・59年度に実施した「シヌグ堂遺跡範囲確認調査」の成果を収録したものである。

2．脊椎動物遺体の同定は金子浩昌氏（早稲田大学考古学研究室）、石質の同定は大城逸朗氏（教育センター研究主事）の御協力を得た。記して謝意を表する。

3．本報告の執筆は下記のとおりである。なお、編集は金武があった。

第Ⅰ章		金武　正紀　（沖縄県教育庁文化課主任専門員）
第Ⅱ章		〃
第Ⅲ章		〃
第Ⅳ章	第１節	〃
	第２節	〃
	第３節	比嘉　春美　（沖縄県教育庁文化課専門員）
	第４節	〃
	第５節	〃
	第６節	〃
	第７節	金子　浩昌　（早稲田大学考古学研究室）
第Ⅴ章		金武　正紀

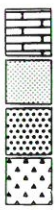
4．資料整理は下記のメンバーで行なった。

実測・復元	大田　宏好・城間　千栄子・盛本　明子・知念　千恵子・比嘉　優子
トレース等	高良　三千代・上地　千賀子・城間　光子・伊波　寿賀子・島袋　聖子
	渡慶次　純子・下地　洋子・田畑　利枝子・当真　須賀子・当真　美幸
	瑞慶覧　尚美・比嘉　春美・金武　正紀
写真撮影	金武　正紀
〃　焼付	大城　　剛　（沖縄県教育庁文化課専門員）

5．出土遺物のうち人工遺物は５桁の番号で示した。前２桁は住居跡番号、後３桁は遺物通し番号である。遺物通し番号は土器の001から最後は石製品の385である。なお、遺物通し番号の前にＰとあるのはＰ－９、Ｐ－10グリッド出土で、Ｂとあるのは遺構外出土である。

6．遺構・石器はつぎのような記号で表現した。

遺　構



岩盤（琉球石灰岩）
琉球石灰岩以外の石
第Ⅰ層（耕土）
地山（琉球石灰岩風化土）

石　器

研磨面
研磨のない面

目　　次

第Ⅰ章　序　言 ……1
第1節　調査にいたる経緯 ……1
第2節　遺跡の位置と環境 ……1
第Ⅱ章　調　査　概　要 ……3
第1節　調査地域 ……3
第2節　調査経過 ……3
(1)　第1次発掘調査 ……3
(2)　第2次発掘調査 ……5
(3)　第3次発掘調査 ……6
第3節　調査体制 ……6
第Ⅲ章　遺　跡 ……9
第1節　層序 ……9
第2節　遺構 ……10
第Ⅳ章　遺　物 ……97
第1節　土器 ……97
1　A群土器 ……97
2　B群土器 ……113
第2節　石器 ……129
第3節　骨製品 ……149
A　実用品 ……150
B　装飾品 ……157
C　用途不明 ……159
第4節　貝製品 ……160
A　実用品 ……162
B　装飾品 ……167
C　その他 ……168
第5節　石製品 ……169
第6節　貝類 ……180
第7節　脊椎動物遺骸 ……183
第Ⅴ章　総　括 ……195

挿　　図

1　位置図
2　宮城島の地形図と遺跡分布 ……2
3　地形図とグリッド設定図 ……4
4　層　序 ……5
5　竪穴住居跡配置図と段丘断面図 ……11
6　第７・８・61号竪穴住居跡……14
7　第９号竪穴住居跡……18
8　第11・12・13・14・21号竪穴住居跡……20
9　第15号竪穴住居跡……26
10　第20号竪穴住居跡……28
11　第22号竪穴住居跡……30
12　第23号竪穴住居跡……32
13　第25号竪穴住居跡……34
14　第19・32号竪穴住居跡……36
15　第32号竪穴住居跡……37
16　第35・36・37・18号竪穴住居跡……40
17　第38・39・40号竪穴住居跡……45
18　第41・42号竪穴住居跡……49
19　第43・44号竪穴住居跡……52
20　第45・46・47号竪穴住居跡……55
21　第48・59号竪穴住居跡……59
22　第49号竪穴住居跡……62
23　第50号竪穴住居跡……64
24　第58号竪穴住居跡……65
25　第57号竪穴住居跡……68
26　第60号竪穴住居跡……70
27　第26・29・30・31号竪穴住居跡と第２号屋外炉跡……72
28　礫床住居跡配置図と段丘断面図 ……77
29　第１・３号礫床住居跡……79
30　第６号礫床住居跡……81
31　第10号礫床住居跡……82
32　第24号礫床住居跡……84

33　第27号礫床住居跡……85
34　第28号礫床住居跡……87
35　第33号礫床住居跡……88
36　第34号礫床住居跡……90
37　第52号礫床住居跡……91
38　第55号礫床住居跡……93
39　第56号礫床住居跡……94
40　土留め石積みの平・断面図と第53号礫床遺構……96
41　A類土器（Fig.41～Fig.47）……106
42　B類土器（Fig.48～Fig.55）……121
43　石器（Fig.56～Fig.65）……139
44　貝刃模式図……161
45　螺蓋製貝斧模式図……162
46　スイジガイ製利器模式図……163
47　骨製品（Fig.69～Fig.75）……170
48　貝製品（Fig.76～Fig.78）……177

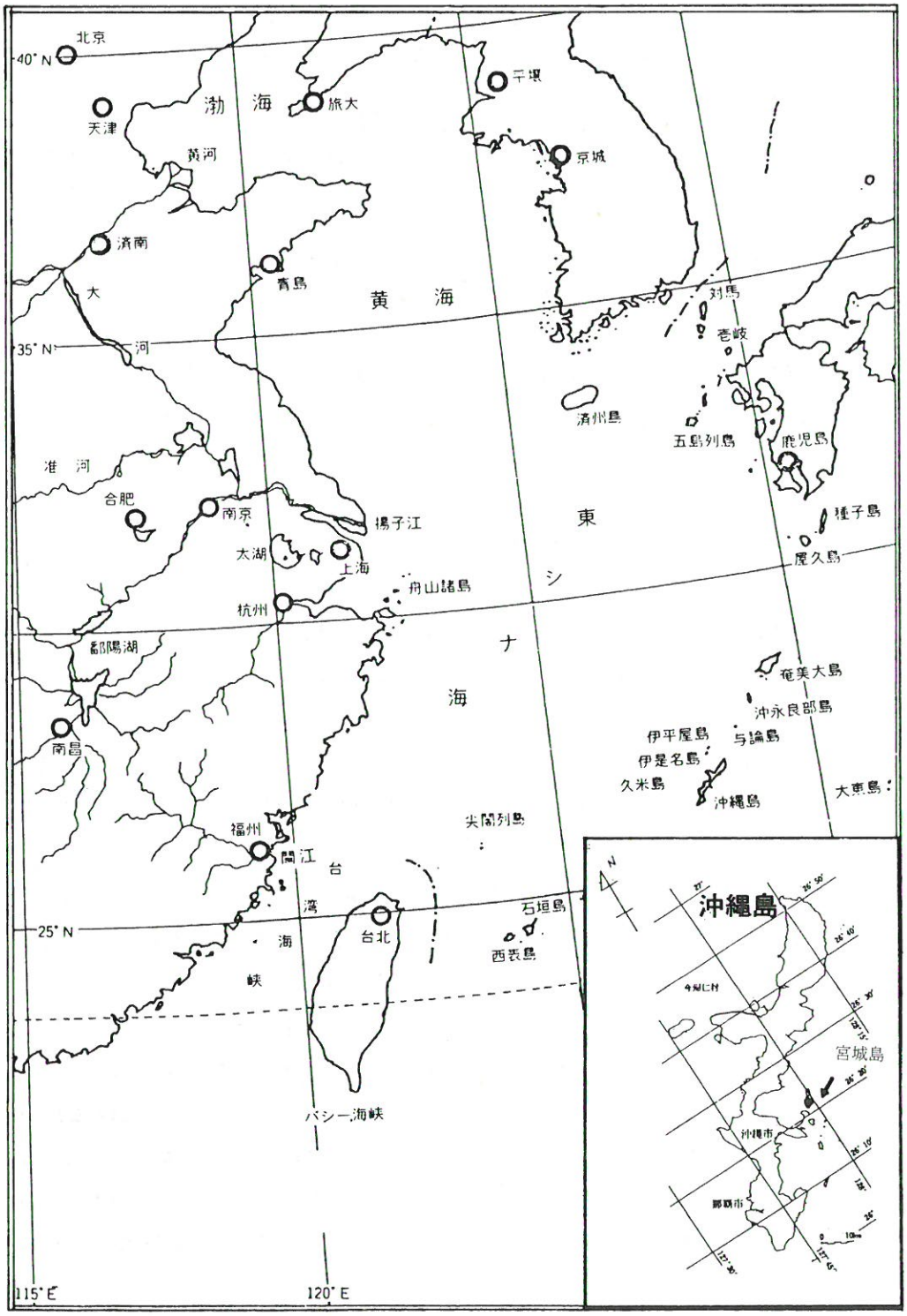

北京
40° N
天津
渤 海
旅大
平壌
京城
黄河
済南
青島
大
河
黄 海
対馬
壱岐
35° N
済州島
五島列島
鹿児島
准 河
合肥
南京
揚子江
東
種子島
太湖
上海
屋久島
舟山諸島
シ
杭州
鄱陽湖
ナ
海
奄美大島
沖永良部島
伊平屋島
与論島
伊是名島
久米島
沖縄島
大東島
南昌
尖閣列島
福州
閩江
台
湾
海
峡
25° N
台北
石垣島
西表島
バシー海峡
115° E
120° E
沖縄島
宮城島
沖縄市
那覇市

Fig. 1　　位置図

シヌグ堂遺跡

— 第1・2・3次発掘調査報告 —

第Ⅰ章　序　　言

本書は、昭和57・58・59年度に実施した「圃場整備に伴うシヌグ堂遺跡範囲確認調査」で得た成果を収録したものである。

第1節　調査にいたる経緯

本遺跡は、昭和47年、金武と当時の沖縄考古学連合会との共同調査で1.5m×1.5mの試掘調査を入れたところ、後述する第19号竪穴住居跡の一部が検出され、一帯が集落跡であることが確認された。

昭和50年には、与那城村の水道管敷設工事で、遺跡内を南北に縦走する村道の東端沿いで幅80cm、長さ80mにわたって破壊された。そのときの事後調査で、掘削溝の断面に5軒の竪穴住居跡が確認された。(注1)

昭和57年12月には、日本電信電話公社の電話線敷設工事で、今度は村道の西端沿いで幅60cm、長さ100mにわたって破壊された。工事を一時中止させ、第1次発掘調査期間中に事後処理調査を実施した。掘削溝の断面に竪穴住居跡が3軒確認された。

このような二度の遺跡破壊のあと、またまた破壊されそうな状況が発生した。それは宮城地区県営圃場整備事業である。1982年から9カ年計画で総面積121 haの大圃場整備である。遺跡破壊を三度許してはならないという文化財保護の立場から、今回の「シヌグ堂遺跡範囲確認調査」が実施された。調査の結果、遺跡の範囲は丘陵上だけで約14,000m²に及ぶことが確認された。この調査結果に基づいて、沖縄県中部農林土木事務所と協議を行ない、村道の西側一帯は現道より下がっているので、0.5 ～1mの埋土をして保存し、道路の東側一帯は圃場整備をしないことでまとまった。

注1　「宮城島シヌグ堂遺跡」　与那城村教育委員会　1977

第２節　遺跡の位置と環境

本遺跡は、与那城村宮城島の標高97～112ｍの琉球石灰岩を基盤とする丘陵上に所在する。地籍は大字上原小字万川原・仲原である。この地は字上原の「シヌグ祭り」を行なう所で、俗にシヌグ堂と呼ばれている。本遺跡の名称もそこから生まれた。島は周囲約12km、島を縦断する座標軸Ｙ＝48,000で切ると、断面は上底約1.8km、下底約2.6km、高さ約107ｍの台形状を呈する島である。島の中央部の台地は約130ha で、ほぼ全域が現在進められている圃場整備の範囲である。この広大な台地の東崖上には５段の自然段丘があり、その段丘上に形成された集落跡が本遺跡である。東崖下には本遺跡から投げ捨てられて形成された貝塚があり、その貝塚の下層には本遺跡より一時期古い貝塚が存在する。

本遺跡は崖上の集落が約14,000㎡、崖下の貝塚が約12,000㎡、計26,000㎡にも及ぶ大規模な遺跡である。東崖下には「万川（マンガー）」と呼ばれている湧水があり、貝塚人もこの湧水を利用したものと考えられる。遺跡に立つと、東眼下に赤瓦葺きの多い上原・宮城部落、北東眼下には伊計島、北は遠く国頭の連山が眺望できる。

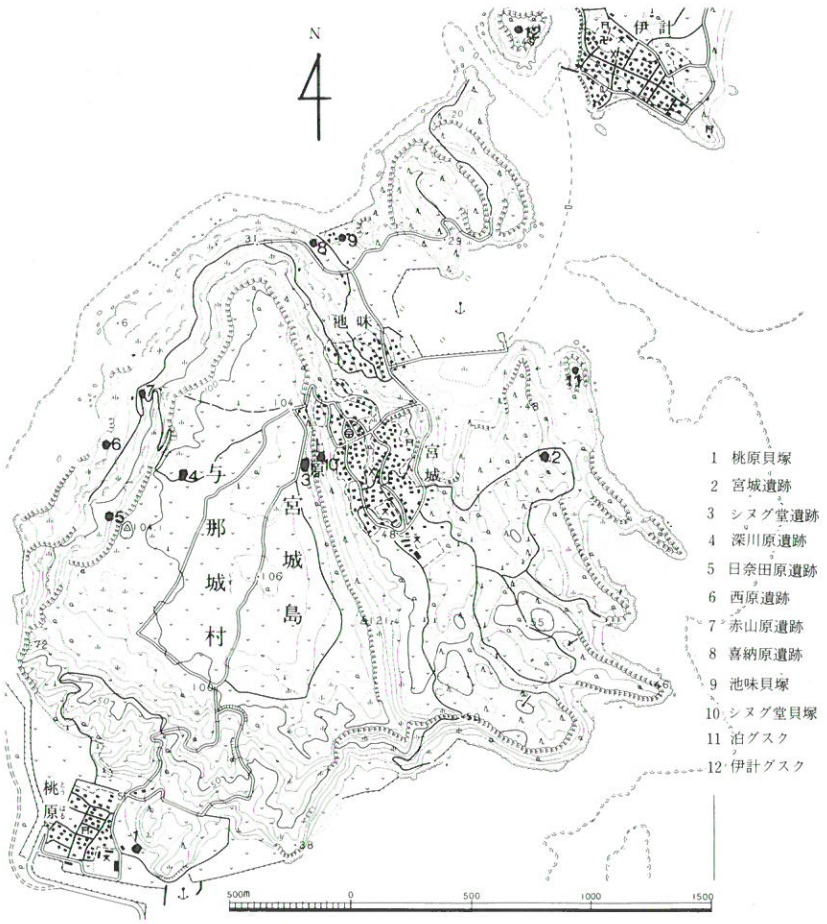


Fig. 2　　宮城島の地形図と遺跡分布

第II章　調査概要

第1節　調査地域

遺跡内の地形は東西方向へ5段の自然段丘が形成されている。東の高い所から西の低い所へと、第1段丘（標高約112m）、第2段丘（標高約111m）、第3段丘（標高約110m）、第4段丘（標高約109m）、第5段丘（標高約107m）と呼ぶ。遺跡の範囲を確認するために、全段丘にFig.3のようにグリッドを設定した。発掘を実施したグリッドのうち第1段丘から第4段丘まではFig.5に示したとおりであり、第5段丘はP-9、P-10グリッドである。発掘は本遺跡の中心である第4段丘を中心にして進め、全体では約1,200m²の発掘調査を実施した。

第2節　調査経過

調査は第1次発掘調査昭和58年1月31日～3月25日、第2次発掘調査昭和58年5月31日～8月31日、第3次発掘調査昭和59年11月13日～11月27日にわたって実施した。村道沿いに№1（X＝40,701.657、Y＝48,169.987、H＝109.317）、№2（X＝40,659.442、Y＝48,165.792、H＝109,198）の座標点を設け、この2点を結ぶ座標軸（平面直角座標系より5°40′47″東へ偏る座標軸）をシヌグ堂遺跡の局地座標軸とする。この座標軸を東へ2m平行移動した座標軸を7ライン（南北基準座標軸）とし、座標点№1をとおり、南北基準座標軸に直角に交わる東西座標軸を4m南へ平行移動した座標軸をNライン（東西基準座標軸）とした。この7ラインとNラインを基準座標軸として、Fig.3のように8m×8mのグリッドを第1段丘から第5段丘までに配置した。グリッド番号は東から西へ0・1・2・…、南から北へK・L・M…とする。なお、さらにFig.5のように2m単位で枝番号を付けた。

(1)　第1次発掘調査　（1983年1月31日～3月25日）

第4段丘の発掘から始める。K-5・6からO-5・6までの発掘である。この一帯はニンニク、カボチャなどの野菜畑であったので第Ⅰ層（耕土）は鍬を使って発掘した。第Ⅰ層の下は遺構のない所では遺物包含層が殆んど見られず、すぐ地山（琉球石灰岩風化土で赤褐色土）に達した。地山を薄く削りながら遺構の輪郭を追った。礫床遺構や竪穴遺構などの輪郭が把握された。しかし、1つの遺構と思ったのが、発掘を進めていく過程で2つになったり、2つと思ったのが1つになったりした。そのために遺構番号の追加・削除が出て番号の不統一を招く結果となった。

礫床住居跡の礫床上には第II層（黒褐色遺物包含層）がよく残っていたので、それを発掘

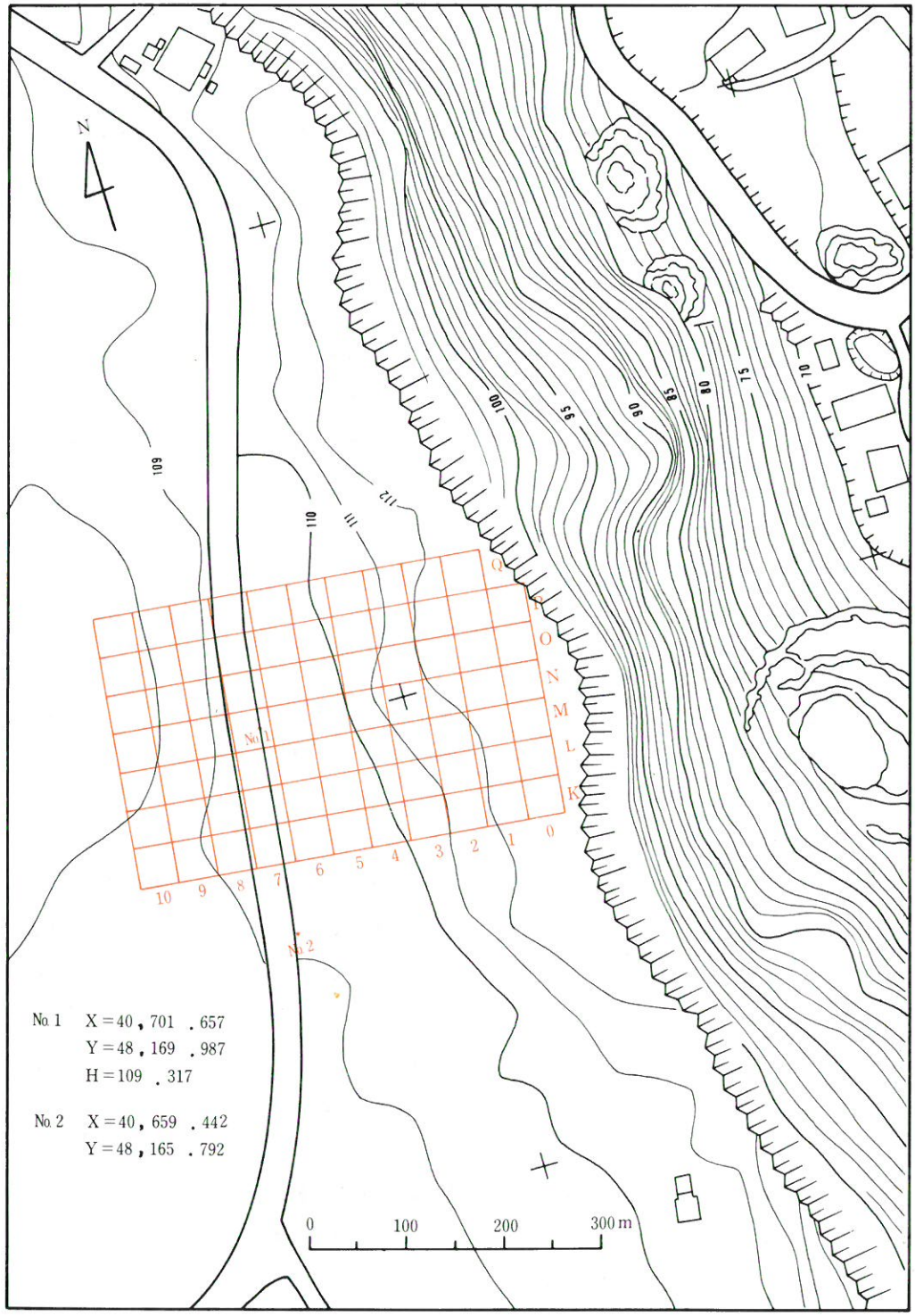


Fig. 3　　地形図とグリッド設定図

し、礫床面を丁寧に検出する。竪穴住居跡は上に礫床住居跡が重複していない７・８・９・12・13・15・18・20・21・22・23・25号などから発掘を始めた。土器、陸産マイマイ、獣魚骨などの遺物が多く、発掘はなかなか進まない。完掘しない状態で第１次発掘調査の期限がきた。２ヵ月後には第２次発掘調査が予定されているので、地主や小作人などの承諾を得、埋め戻さないでビニールシートを覆って第１次発掘調査を完了した。

(2) 第２次発掘調査 （1983年５月31日～８月31日）

第１次発掘調査終了時に覆っていたビニールシートをはぎ取り、礫床住居跡の検出から始める。平行して実測の準備を始める。発掘調査を進めながらの実測であり、遣り方を組むと発掘作業ができなくなる。そこで、遣り方の原理で地表面に水糸を張る。水糸はグリッド（８ｍ×８ｍ）設定のとおりに張り、さらに２ｍ単位の水糸を張って、発掘区域全体を２ｍ×２ｍ方眼に割り付けた。２ｍ単位のライン番号は1_{-1}・1_{-2}・1_{-3}，K_{-a}・K_{-b}・K_{-c}などのように枝番号を付けた。６月15日から実測が開始された。

礫床の実測を進めながら第２・第３段丘の伐採。ススキやサルカケミカンなどが繁茂していたので、それを伐採し、グリッドを設定する。M－2、L-3、M-4を中心に発掘を始める。第２・第３段丘も以前は畑だったので、第Ⅰ層は鍬で発掘。第Ⅱ層はねじり鎌でゆっくり進める。礫床住居跡が検出されたので、礫を丁寧に検出する。礫床の実測を待って発掘は第５段丘へ移動する。第５段丘はさとうきび畑で、さとうきびを切ってからグリッドを設定する。P-9、P-10を中心に発掘を開始する。ここも第Ⅰ層は耕土であり、鍬で発掘する。第Ⅱ層からはねじり鎌でゆっくり掘り進める。

実測の終了した第４段丘の礫床住居跡を発掘。礫床を除去し、下層の竪穴住居跡を掘り進める。竪穴住居跡は重複が多いので、発掘・撮影・実測を繰り返す。２号と33号がＰラインへ延びているので、P-5、P-6の発掘を同時に進める。２号・33号の輪郭が明瞭となると同時に34号礫床住居跡も検出される。この34号は実測後掘り進めて50号・58号竪穴住居跡が検出された。

８月12日には23号竪穴住居跡内で柱穴を検出。８本の柱穴が壁に沿って廻っていることを確認。これを契機に竪穴内の柱穴が次々に検出された。炉跡、階段、柱跡など竪穴住居跡の下部構造が解明され始めた。

８月18日からは第２段丘の56号礫床住居跡、第３段丘の52号礫床住居跡の礫床を発掘。下部を確認する。56号は４分の１を掘って竪穴はなく、56号の柱穴が検出されたので、さらに４分の１を掘り、東壁断面を実測してから全面を発掘した。52号は礫床の下に57号竪穴住居跡が検出された。なお、10号・33号礫床住居跡の下部にも竪穴住居跡がある可能性が強いが、それは掘らずに止めた。

８月31日に調査を完了した。第２次発掘調査では遺構実測に多くの時間と人力を要した。ほぼ毎日調査員４・５人であたった。遺構の多い遺跡の場合、いかに実測者を確保するか、今後

の大きな課題である。

(3) 第３次発掘調査　（1984年11月13日～11月27日）

第２次発掘調査までに確認されてなかった第１段丘の発掘調査を実施した。M-0に６ｍ×７ｍの試掘を入れたら竪穴住居跡と礫床住居跡が検出された。竪穴住居跡は北へ延びているのでN-0に１ｍ広げた。７ｍ×７ｍの中にうまく55号礫床住居跡と61号竪穴住居跡が検出された。実測し、埋め戻してすべて完了した。

第３節　調　査　組　織

第１次発掘調査から第３次発掘調査までの調査組織はつぎのとおりである。なお、発掘人夫は地元の上原・宮城・桃原及び伊計の方々である。

第１次発掘調査

調査責任者	新垣　雄久	（沖縄県教育委員会教育長）
〃	城間　茂松	（沖縄県教育委員会文化課課長）
調　査　員	金武　正紀	（沖縄県教育委員会文化課主任専門員）
〃	大　城　慧	（　〃　専門員）

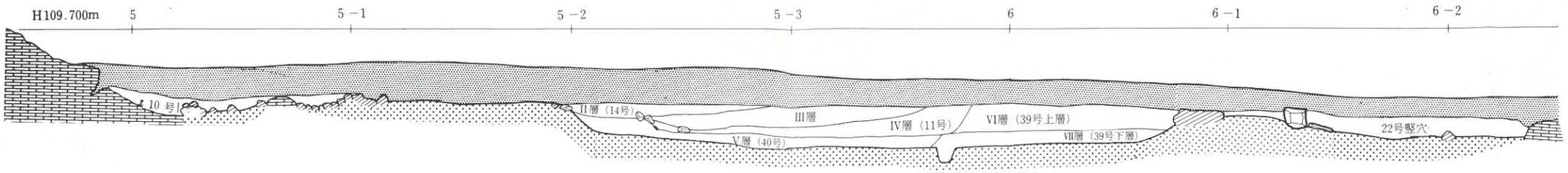
第２次発掘調査

調査責任者	新垣　雄久	（沖縄県教育委員会教育長）
〃	城間　茂松	（沖縄県教育委員会文化課課長）
調　査　員	金武　正紀	（沖縄県教育委員会文化課主任専門員）
〃	玉城　朝健	（　〃　専門員）
〃	比嘉　春美	（　〃　〃）
〃	大城　秀子	（　〃　〃）
〃	花城　潤子	（　〃　〃）
〃	松　川　章	（　〃　〃）
〃	島　　弘	（　〃　〃）
〃	大城　明子	（　〃　嘱　託）
〃	島袋　聖子	（　〃　〃）

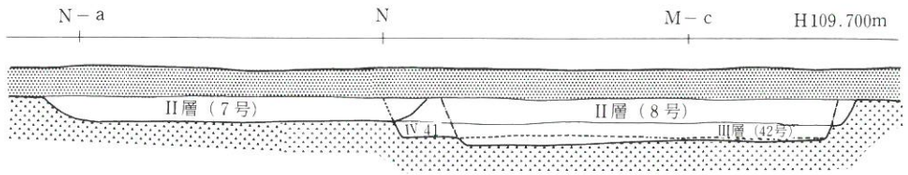
第３次発掘調査

調査責任者	米村　幸政	（沖縄県教育委員会教育長）
〃	比嘉　賀幸	（沖縄県教育委員会文化課課長）
調　査　員	金武　正紀	（沖縄県教育委員会文化課主任専門員）
〃	島　　弘	（　〃　専門員）

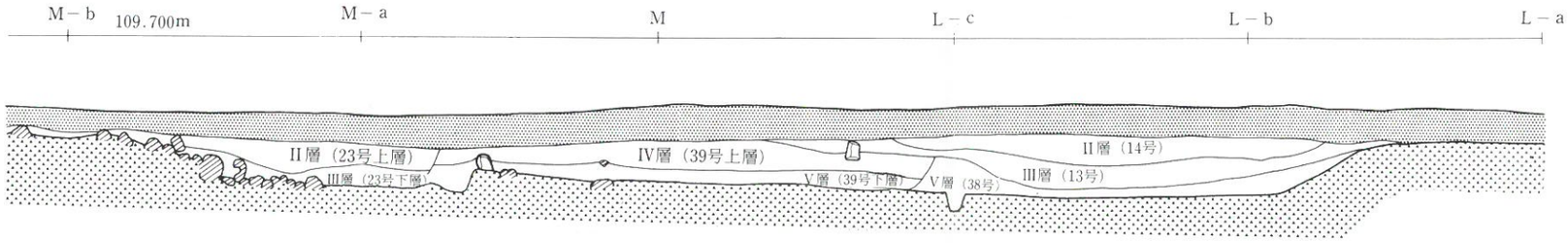
〔a　Mラインの14・11・40・39・22号竪穴住居跡内の内壁断面図〕



〔b　bラインの7　8　41　42号　竪穴住居跡内東壁断面図〕



〔c　bラインの23・12・13・38・39号竪穴住居跡内東壁断面図〕



〔d　P－10グリッド北壁断面図〕

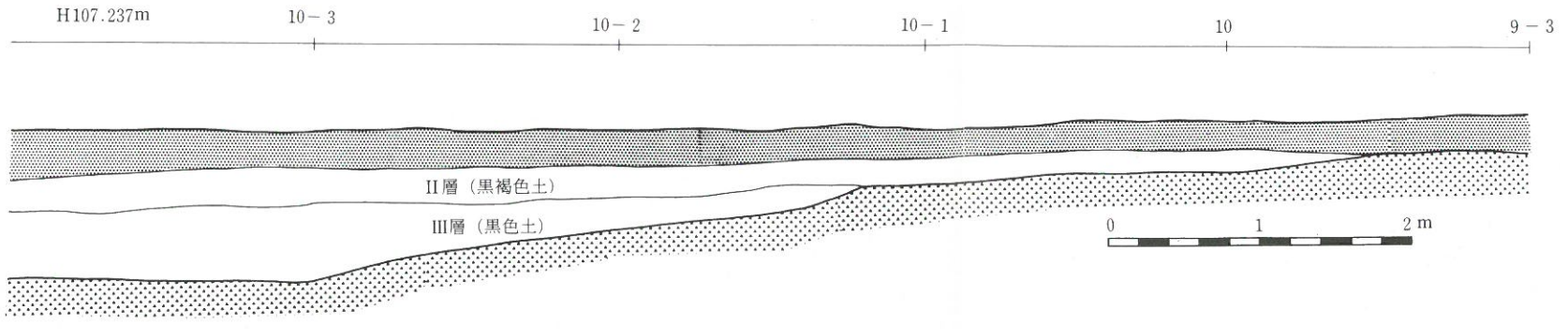


Fig. 4　層序断面図

第III章　遺　　跡

第1節　層　　序

第Ⅰ層は層厚が20～25cmの耕土。暗褐色を呈し、遺物は少ない。遺構のない所では、第Ⅰ層直下は地山（琉球石灰岩風化土で赤褐色）に達する。第II層は黒褐色の遺物包含層。第II層は礫床住居跡と竪穴住居跡に堆積している。礫床住居跡の上は３～10cmの層厚で、竪穴住居跡内は15～30cmの層厚であった。礫床住居跡の上では土器が多いが、竪穴住居跡内では土器のほかに、陸産マイマイ、獣魚骨などの食料残滓も多い。竪穴住居跡内は各遺構ごとに状況が異なるので、遺構観察表の「堆積状況」の項に示した。ここでは主な層序だけを述べる。

Fig. 4 のａはMラインの５～6_{-2}までの南壁断面図である。第Ⅶ層は黒褐色土で約13cm。これは39号竪穴住居跡内の堆積層であり、この層序で最も古い層である。第Ⅵ層は暗褐色土で約30cm。この層は客土（地ならし土）である。第Ⅴ層は黒褐色土で土器が多い。第Ⅴ層は40号竪穴住居跡で、第Ⅵ（間層）・Ⅶ（39号竪穴）を切って掘り込まれている。第Ⅳ層は黒褐色で５～30cm。この第Ⅳ層は11号竪穴住居跡で、39・40号竪穴住居跡を切って掘り込まれている。第III層は赤褐色の無遺物層で約20cm。この第III層は客土（地ならし土）である。第II層は黒褐色土で５～20cm。第III層を切って掘り込まれており、この層序では最も新しい竪穴住居跡である。

Fig. 4 のｂは６ラインのN_{-a}～M_{-c}の東壁断面図である。第Ⅳ層は黒灰褐色土で層厚約10cm。41号竪穴住居跡で、この層序で最も古い竪穴住居跡である。第III層は暗褐色土で層厚が約15cm。第III層は42号竪穴住居跡で、41号竪穴住居跡を切っている。特に床面では、41号竪穴住居跡よりも約５cm深く掘り下げられている。この層序の地点で見るかぎり、42号竪穴住居跡の南壁は41号竪穴住居跡の南壁を利用した状況を呈している。第II層は黒褐色土で層厚約15～20cm。８号竪穴住居跡は42号竪穴住居跡を切っており、７号竪穴住居跡は41号竪穴住居跡を切っている。この層序では７号と８号が最も新しい竪穴住居跡である。

Fig. 4 のｃは６ラインのM_{-b}～L_{-a}までの層序である。第Ⅵ層は黒褐色土で層厚約５～25cm。38号竪穴住居跡で、この層序では最も古い竪穴住居跡である。第Ⅴ層は黒灰褐色土で層厚10～15cm。第Ⅴ層は39号竪穴住居跡で、38号竪穴住居跡を切っている。第Ⅳ層は暗褐色土で層厚10～20cm。この層は客土（地ならし土）であるが、遺物が僅かに混入している。第III層は黒灰褐色土で層厚５～20cm。この第III層は北で23号、南で13号竪穴住居跡である。いずれも第Ⅳ層（間層）を切っている。13号はさらに第Ⅵ層（38号竪穴住居跡）をも切っている。第II層は黒褐色土で層厚５～25cm。第II層は14号竪穴住居跡であり、この層序では最も新しい竪穴住居である。

Fig.14は７ラインのＬ～Ｌ$_{-a}$西壁断面図である。第Ⅶ層は黒灰褐色土で層厚10～20cm。32号竪穴住居跡の最下層である。第Ⅵ層は黄褐色土混入の黒褐色土で部分的な堆積層である。第Ⅴ層は黒褐色土で層厚が５～10cm。第Ⅳ層は黄色土混入黒褐色土で層厚が10～15cm。第Ⅲ層は黒褐色土で層厚が15～20cm。この層は19号竪穴住居跡である。竪穴の積み石壁が南北に見られる。この積み石壁の中は遺物が多く検出されるが、積み石外は暗褐色土で遺物も少ない。

Fig.23はＰ$_{-c}$ラインの６$_{-1}$～５$_{-3}$の北壁断面図である。第Ⅶ層は灰層で層厚１～５cm。58号竪穴住居跡の炉跡の上にレンズ状に堆積している。第Ⅵ層は黒褐色土で層厚10～70cm。58号竪穴住居跡内の堆積層で土器、陸産マイマイ、魚骨などが多い。第Ⅴ層は黄褐色土で層厚が１～10cm。50号竪穴住居跡の床面として敷かれた土である。第Ⅳ層は灰層で層厚１～５cm。50号竪穴住居跡の炉跡の上にレンズ状に堆積している。第Ⅲ層は黒灰褐色土で層厚約50cm。50号竪穴住居跡内の堆積層で、土器、陸産マイマイ、魚骨などが多い。第Ⅱ層は黒褐色土で層厚5～７cm。地山を約10cm掘り凹めて造られた34号礫床住居跡で、礫床上で土器が集中して検出された。

Fig.39は２ラインのＮ$_{-a}$～Ｍ$_{-a}$の東壁断面図で、主に56号礫床住居跡の断面図である。第Ⅲ層は礫床前の堆積層で黒灰褐色土。遺物は少ない。第Ⅱ層は56号礫床住居跡と礫床上に堆積した黒褐色土。遺物は土器を中心に多い。なお、柱穴が２本見られるが、１本は岩盤の凹みに、もう１本は地山に掘られている。

Fig.４のｄはＱラインの11～10$_{-1}$の北壁断面図である。第５段丘（道路の西側）の試掘グリッドの断面である。竪穴状に掘り込まれているが、それが竪穴住居跡かどうかは不明である。第Ⅱ層は黒褐色土、第Ⅲ層は黒色土層である。土器が夥しく出土するが、石器、陸産マイマイ、獣魚骨などは僅かに混入するだけである。

第２節　遺　　構

(1)　竪穴住居跡　　(Fig.５)

竪穴住居跡が40軒（第Ⅰ章第１節で述べた電話線埋設に伴う調査で検出された３軒を含めると43軒）検出された。ほかに、直径１ｍの小型竪穴で、柱穴や炉跡等のない竪穴遺構１基（第30号）が検出された。竪穴は地山（琉球石灰岩の風化土で堅い赤褐色土）を掘り込んで造られているが、岩盤があるところは岩盤を床面に利用したり壁面に利用したりしている。形状も岩盤に左右されて整った方形になっていないのが多い。岩盤が多く、竪穴の掘れる場所が限定されているので、同じ所に何度も竪穴が掘られ、重複しているのが多い。重複が最も多い所では９軒の竪穴住居跡が重複している。

竪穴は１辺が２～３ｍの方形が最も多く、深さは15cmの浅いものから、60cmの深いものまで

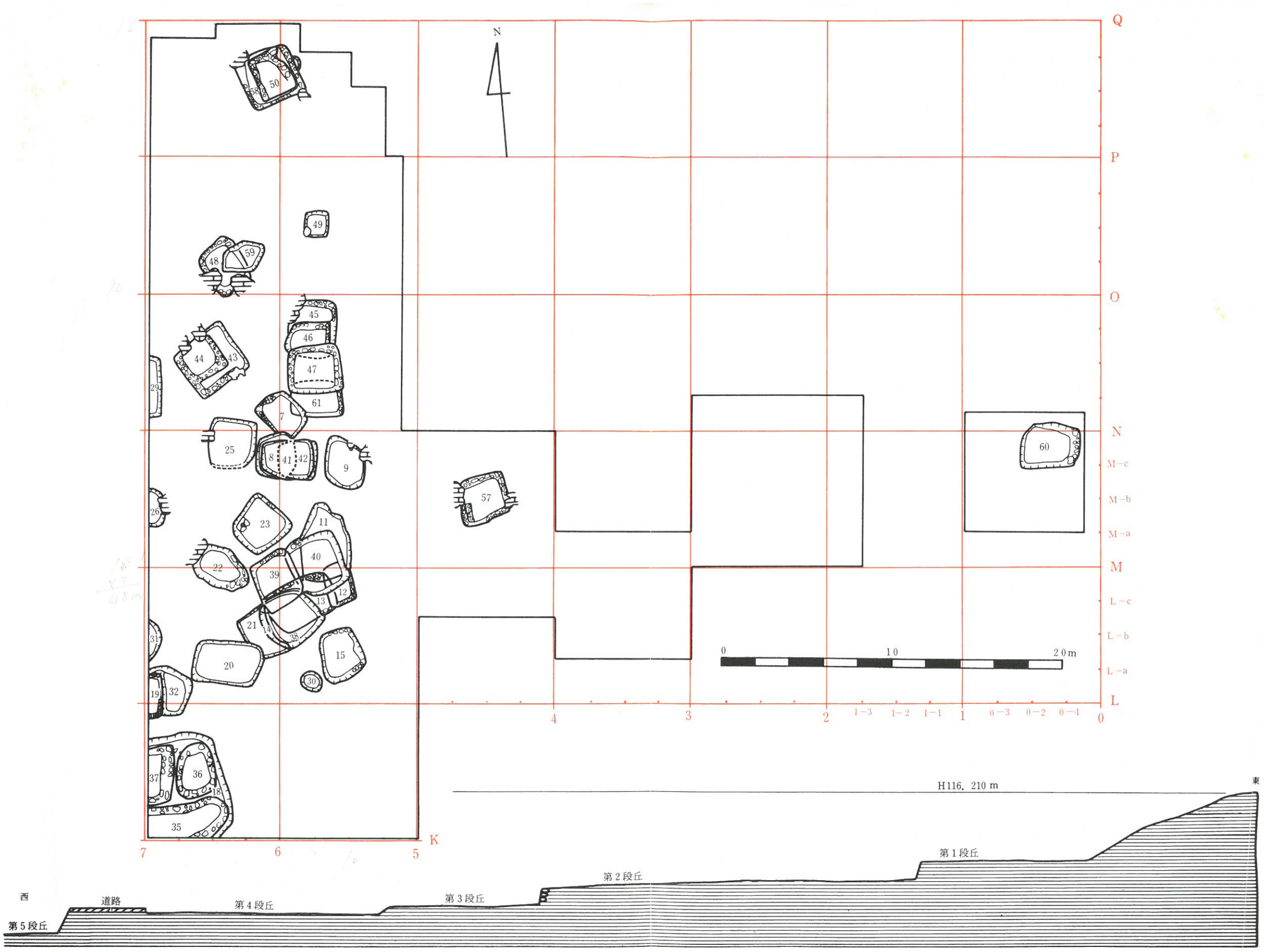


Fig. 5　竪穴住居跡配置図と段丘断面図

あり、平均して30cm前後である。竪穴内には炉跡があり、壁面に沿って柱穴が廻っている。壁面は琉球石灰岩の積み石で壁面化粧しているのが多い。深い竪穴には階段が付くことも解明された。このように、竪穴住居跡の下部構造がかなり明確に解明された。

(2) 礫床遺構 (Fig.28)

礫床遺構とは地山を5～10cm掘り凹め、そこにこぶし大の礫を敷き詰めて床面とした遺構で、そのうち、炉跡や柱穴などの存在するものだけを礫床住居跡とした。礫床住居跡が12軒で、炉跡や柱穴などが見られないもの、及び一部だけ検出されて、全体が不明なものなどが7基である。礫床住居跡は2～3m×4～5mの長方形状のが多い。炉跡は端部にあり、柱穴は礫床内と礫床外にあるのが見られる。

(3) 屋外炉跡 (Fig.27)

屋外炉跡は第2号遺構だけ検出された。長軸1.3m、短軸0.9mのやや楕円形状のもので、鍋底状に約5cm掘り凹められている。焼土の南西と東北に1本ずつの柱穴が見られる。柱穴の深さは東北側のが20cm、南西側のが10cm。柱穴には楔石が見られる。

(4) 土留め石積み (Fig.40)

第2段丘と第3段丘の間の法面に長さ約9mの土留め石積みが検出された。長さ20～50cmの琉球石灰岩を岩盤の上に約50cm積み上げ、その上に第53号礫床遺構が造られている。本遺跡は自然の段丘を利用した段丘上集落であるが、段丘と段丘の間の法面に土留め石積みをして平場造成（宅地造成）が行なわれていたことが解明された。

以下、竪穴住居跡と礫床住居跡について、各遺構ごとに「遺構実測図」と「観察表」を示した。

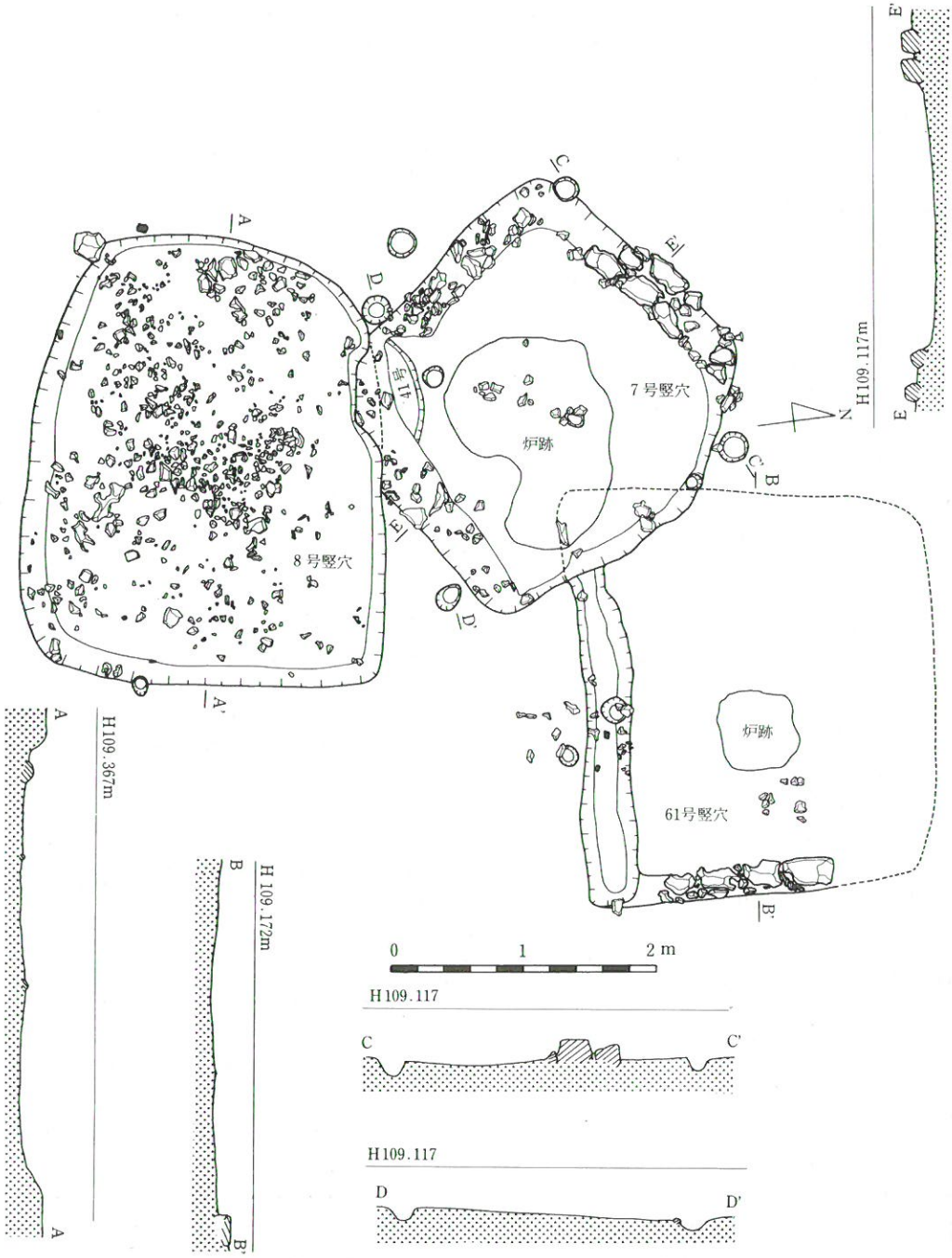


Fig. 6　第7・8・61号竪穴住居跡実測図

Tab. 1　第７号竪穴住居跡

位置	地区	N－5、N－6、M－5、M－6、（第４段丘）
	重複	南西隅で８号・41号竪穴住居跡を切っており、東壁が61号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約2.7m、南北最大長約2.5m
	深さ	10～15cm
	壁	地山をほぼ垂直に掘り込んでいる。北壁と西壁は積み石が壁。なお、南西隅は41号の堆積層。
	壁面化粧	北壁と西壁は長さ10～40cmの琉球石灰岩が並べられている。
	床面	地山を平坦に削っている。
	炉跡	中央に長軸1.6m、短軸1.1mの楕円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約２cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴外に５本の柱穴が廻っている。口径約20cm、深さ９～14cm。楔石は見られない。なお、炉跡の北と南に１本ずつの柱穴。
	階段	なし。
出土遺物	土器	喜念Ⅰ式07098・07099。埋土にはＡⅤ・Ⅵ類などの有文も混入しているが、床面ではＡⅦ類とＢ群土器のみ検出された。
	石器	両刃磨製石斧Ⅰ類07186
	骨製品	な　し
	貝製品	な　し
	食料残滓	ウミガメ、ジュゴン等少量、魚骨少量。
堆積状況		黒褐色土（第Ⅱ層）で、石の混入は少ない。遺物はやや多い。

Tab. 2　第８号竪穴住居跡

位置	地区	M－５、M－６、(第４段丘)
	重複	７号竪穴住居跡に切られている。下部の41号・42号竪穴住居跡を切っいる。
構造	形状	長方形。南壁と西壁は内彎する。
	規模	東西最大長約3.4m、南北最大長約2.7m
	深さ	約18cm
	壁	東壁と南・北壁の東半分までは地山をやや垂直に掘り込んでいるが、その他は41号竪穴住居跡内の堆積層。
	壁面化粧	なし
	床面	こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めている状態。床面の土は41号・42号竪穴住居跡内の堆積層。
	炉跡	なし
	柱穴	不明
	階段	なし
出土遺物	土器	AII類08006、AIV類08028・08036、AV類08064～08067、A群特殊08100、B群喜念I式系有文08169。A類土器の有文が目立つ。
	石器	小型扁平利器08176、両刃磨製石斧IIIA08189、敲石I08223、ほかに磨石、石皿片。
	骨製品	な し
	貝製品	サラサバティ貝輪08377
	食料残滓	貝類少量、イノシシ、魚骨僅少出土、ウミガメ、ジュゴン。
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、石の混入は少なかった。土器が多く検出された。

Tab. 3　第61号竪穴住居跡

位置	地区	N－5（第4段丘）
	重複	47号を切っており、7号に切られている。
構造	形状	方形と考えられる。
	規模	
	深さ	約20cm
	壁	地山をほぼ垂直に掘って壁面化粧の積み石を廻らしている。西と北の壁は不明
	壁面化粧	東側は長さ20～40cmの琉球石灰岩を積んで壁面化粧している。南側は積み石が抜かれて溝状を呈している。
	床面	地山をほぼ平坦に削っているが、炉跡付近が若干凹む。
	炉跡	直径約50cmの円形のやや凹んだ焼土。焼土の上には約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	南側で竪穴内と竪穴外で各1本ずつ検出されているが、全体としては不明。
	階段	なし
出土遺物	土器	AVI類、BIV類a、BIV類bなど、土器は少ない。
	石器	なし
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	陸産マイマイと魚骨が少量。
堆積状況		黒褐色土（第II層）のみで、石の混入は少なかった。遺物は少ない。（埋土）

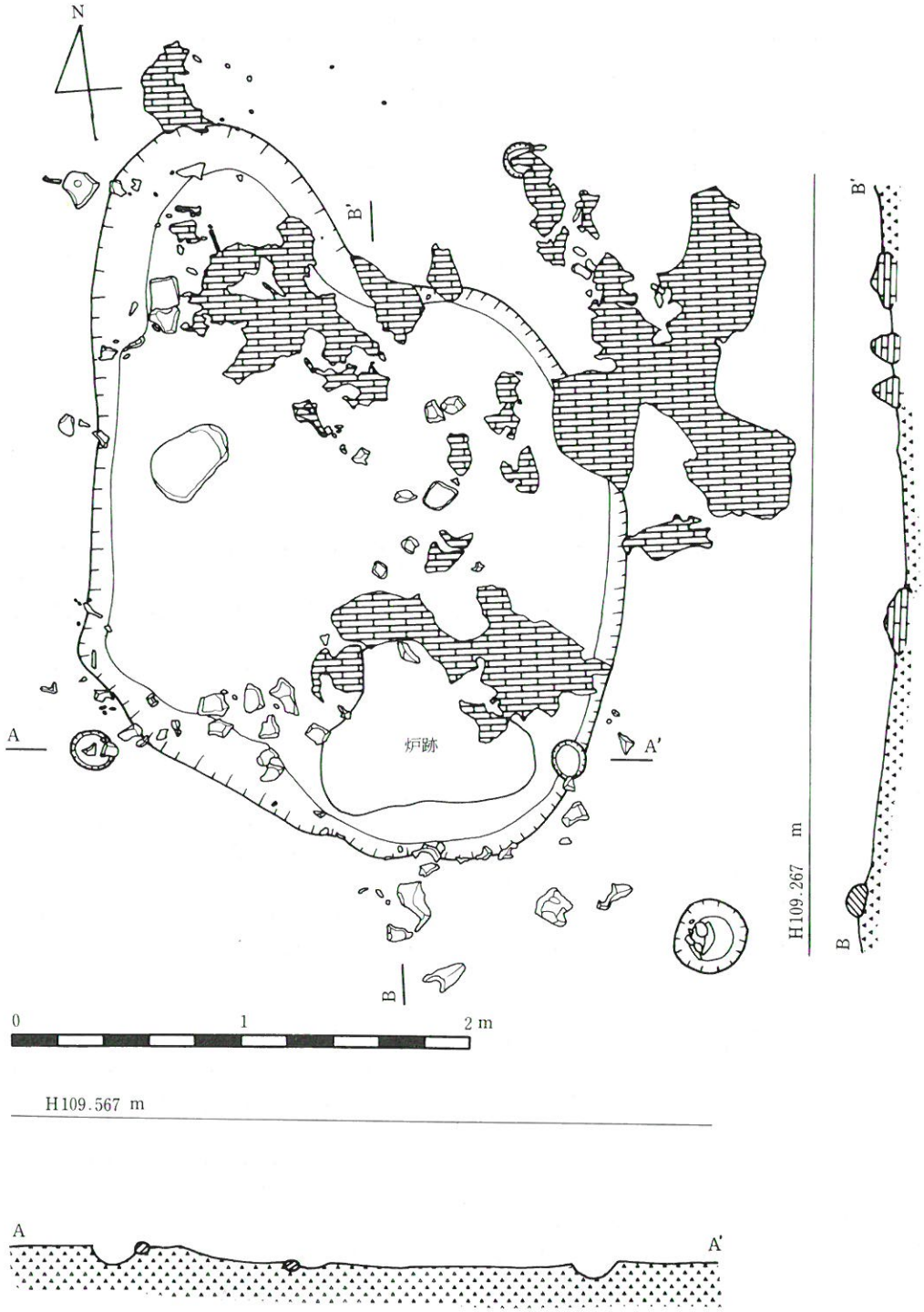


Fig. 7　第 9 号竪穴住居跡実測図

Tab. 4　第９号竪穴住居跡

位置	地区	M－５（第４段丘）
	重複	なし
構造	形状	不規則な隅丸方形
	規模	東西最大長約2.4m、南北最大長約2.5m。北壁の一部が半円形状に突出している。
	深さ	10～14cm。
	壁	地山をやや傾斜を持って掘り込んでいる。
	壁面化粧	なし
	床面	地山を平坦に削っている。床面には岩壁が露頭している所が多い。
	炉跡	東南隅に約90cm×70cmの隅丸三角形状の焼土。焼土の上には約１cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴の法面に１本と竪穴外に２本検出された。口径約20cm、深さ８cm
	階段	なし
出土遺物	土器	AIV類09038。埋土にはＡＩ・IV・Ｖ類土器が混入している。しかし主体はＢ群土器。
	石器	有孔石器09185、両刃磨製石斧IIIＢ09204、敲石Ｉ09224、凹石09236両刃磨製石斧片。
	骨製品	クジラ有孔製品09299、イノシシ製骨錐09272。
	貝製品	ゴホウラ製貝輪09375、ホラガイ有孔製品09362、ヤコウガイ製貝匙製品２コ、未製品１コ。
	食料残滓	陸産マイマイ少量、魚骨僅少。イノシシ僅少。ウミガメ１点。
堆積状況		黒褐色土（第II層）のみで、遺物は少ない方である。石は混入していない。遺物は少ない。

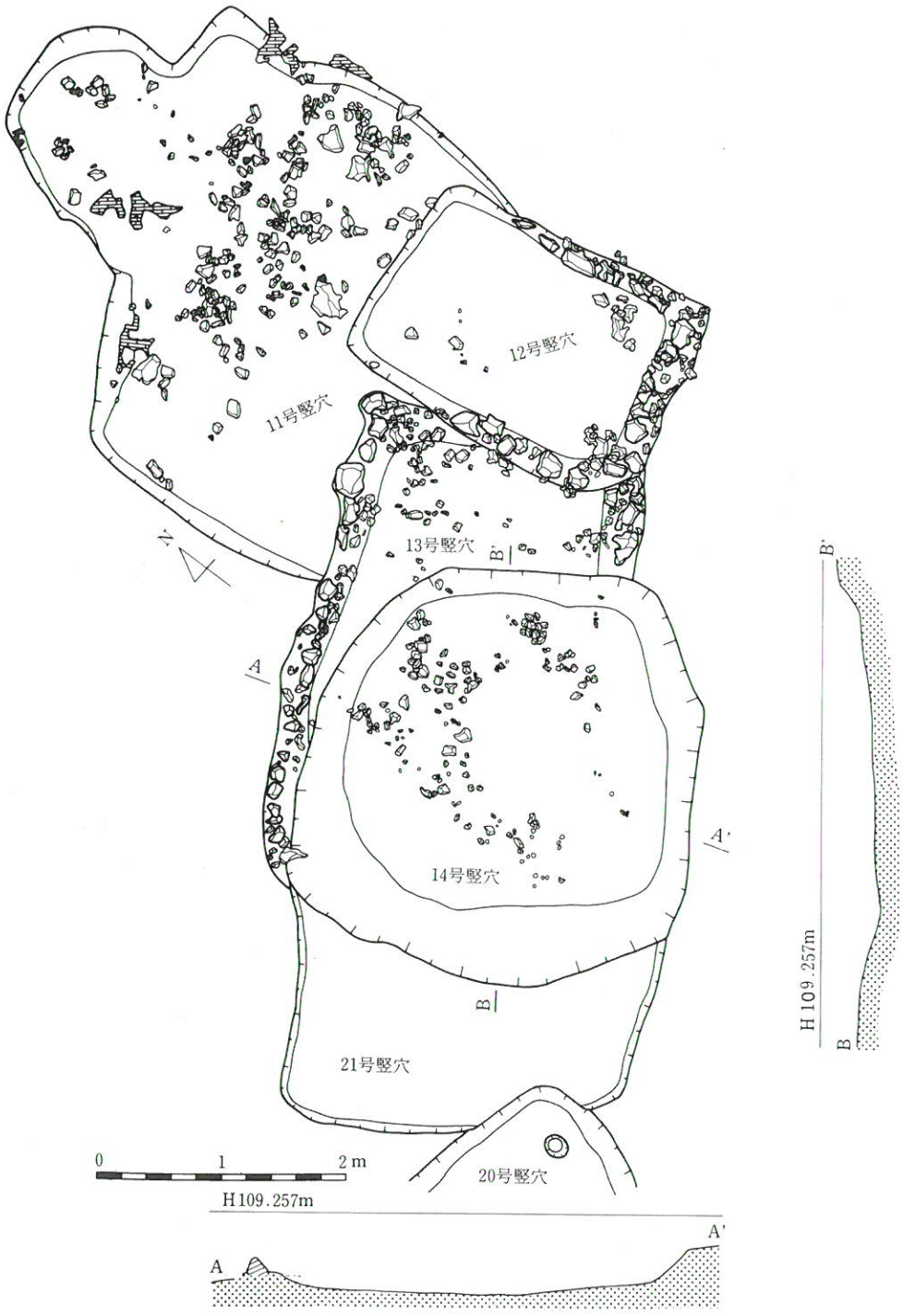


Fig. 8　第11・12・13・14・21号竪穴住居跡実測図

Tab. 5　第11号竪穴住居跡

位置	地区	L－5、M－5（第4段丘）
	重複	12・13号・竪穴住居跡に切られている。40号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	北へ半円状の広がりをもつ方形。
	規模	北辺長が約3.6cm、東・南・西辺長は不明。北辺からさらに北へ半円状に広がる。
	深さ	20～30cm
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	検出された壁には見られない。
	床面	こぶし大の礫が敷かれている部分もあるが、全体としては不明。
	炉跡	不明
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	AIV類11042、AVI類11071、BI類a 11104・11105、BIV類a 11133。埋土ではA群土器が目立つが、床面ではB群土器のみ。
	石器	両刃磨製石斧片2
	骨製品	な し
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類僅少。ブダイ科等の魚骨は割とみられる。イノシシ僅少。
堆積状況		黒褐色土で、こぶし大の石が混入していた。土器が多く検出された。

Tab. 6　第12号竪穴住居跡

位置	地区	L－5、M－5（第4段丘）
	重複	40号竪穴住居跡内に客土された赤褐色土に掘られた竪穴。東壁は11号を切っており、西壁は13号を切っている。下部遺構として40号がある。
構造	形状	長方形
	規模	東西最大長約1.8m、南北最大長約2.6m。
	深さ	約15cm
	壁	やや垂直に、客土された赤褐色土を掘り込んでいる。
	壁面化粧	南・東・西壁は長さ20～40cmの琉球石灰岩を並べている。東西壁の一部と北壁には積み石が見られない。
	床面	客土の赤褐色土面で平坦に仕上げられている。
	炉跡	なし
	柱穴	なし
	階段	なし
出土遺物	土器	AII類12010、AIII類12020・12021、AV類12046・12056、AVII類e12090、BIV類a12134埋土ではAII・III・IV・V類が混入しているが、床面ではAVII類とB群土器が共伴。
	石器	小型扁平利器12178、両刃磨製石斧12211、磨石。
	骨製品	骨針12245。
	貝製品	な　し
	食料残滓	陸産マイマイ少量、魚骨少量みられる。イノシシ僅少、ウミガメ、ジュゴン、鳥骨。
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、こぶし大の石が混入していた。土器が多い。

Tab. 7　第13号竪穴住居跡

位置	地区	L－5、L－6（第4段丘）
	重複	南と西は14号竪穴住居跡に切られ、東は12号竪穴住居跡に切られている。下部遺構として11号竪穴住居跡があり、さらにその下に38・39・40がある。
構造	形状	長方形
	規模	東辺長約2.3m、北辺長約3.7m。南・西辺は不明。
	深さ	約25cm
	壁	下部遺構の堆積層をやや垂直に掘って積み石をしている。
	壁面化粧	北壁には長さ10～30cmの琉球石灰岩が並べられている。東壁にも南壁にも残っており、少なくても三辺は積み石があったと考えられる。
	床面	こぶし大の琉球石灰岩礫が敷かれている所もあるが、全体的には不明
	炉跡	不明
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	AIV類13037、AVI類13075、AVII類a 13077、BIV類g 13153。埋土ではA群土器が目立つが、床面ではAVII類とB群土器が共伴。
	石器	なし
	骨製品	ジュゴン骨錐13276、13284、イノシシ、犬歯有孔製品13292。
	貝製品	螺蓋貝斧13319。
	食料残滓	貝類なし、魚骨僅少。イノシシ僅少。ジュゴン。
堆積状況		黒褐色土で、こぶし大の石が多く混入。土器が多く検出された。

Tab. 8　第14号竪穴住居跡

位置	地区	L－5、L－6（第4段丘）
	重複	38号竪穴住居跡を切っており、21号・13号に切られている。
構造	形状	隅丸方形
	規模	南辺長約2.3m、西辺長約3.1m、北辺長約2.5m、東辺長約1.8m
	深さ	壁沿いで約20cm、中央部で約30cm、鍋底状に凹む。
	壁	南壁は38号竪穴の壁を利用。どの壁もかなり傾斜を持って掘られている。
	壁面化粧	なし
	床面	38号竪穴住居跡の遺物包含層面
	炉跡	なし
	柱穴	なし
	階段	なし
出土遺物	土器	AⅦ類a 14076、BⅣ類g 14154。埋土A群土器も僅かに混入しているが、床面ではB群土器のみ。
	石器	敲石II 14231
	骨製品	イノシシ橈骨製品14304（用途不明）。
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類僅少、ブダイ科、イノシシ僅少、ジュゴン。
堆積状況		黒色褐土で、石の混入は少ない。陸産マイマイは少ないが、土器が多い。

Tab. 9　第21号竪穴住居跡

位置	地区	L－6、L－5（第4段丘）
	重複	西側では20号竪穴住居跡を切っており、東側では14号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	隅丸方形と考えられる。
	規模	西辺長が約2.8m、東・南・北辺長は不明。
	深さ	約10cm
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	西壁には見られないが、全体については不明。
	床面	地山面を平坦に削っている。
	炉跡	不明
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	AII類21008・21009、BIV類e21148。埋土ではAII・AIV・AV類などが混入しているが床面ではB群土器のみ。
	石器	敲石II21227・21228
	骨製品	な し
	貝製品	な し
	食料残滓	ヤコウガイ1点のみ、魚骨少量、イノシシ少量、ウミガメ、ジュゴン、イノシシの肢骨に傷痕21307。
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、石の混入は少なかった。遺物は少ない方である。

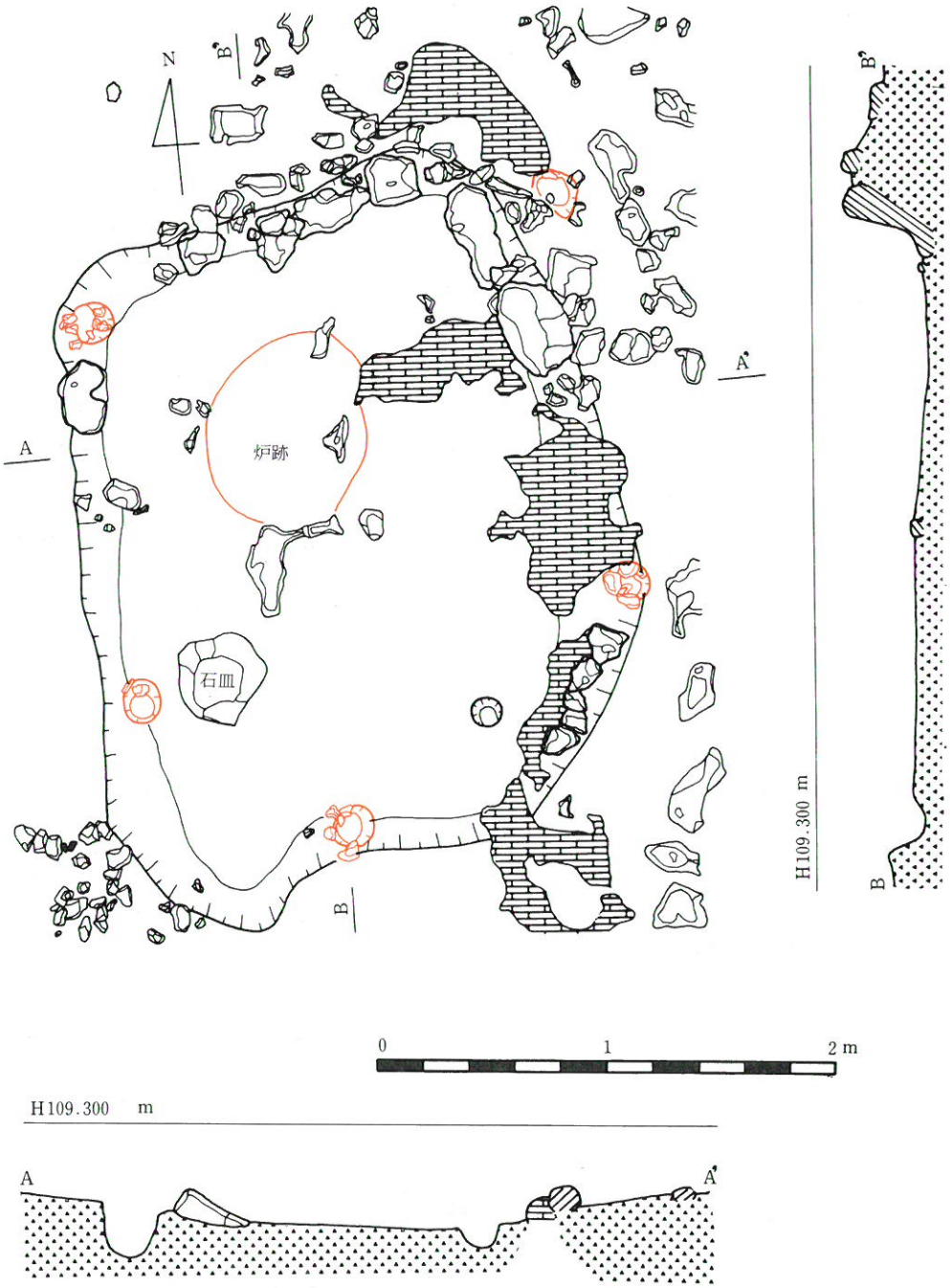


Fig. 9　第15号竪穴住居跡実測図

Tab.10　第15号竪穴住居跡

位置	地区	L－5（第4段丘）
	重複	なし
構造	形状	不規則な隅丸方形
	規模	東西最大長約2.4m、南北最大長約3.0m。南西隅が突出する。
	深さ	北壁沿いで約30cm、南壁沿いで約12cm。
	壁	地山をやや傾斜を持って掘り込んでいる。積み石のある壁もある。東壁で一部岩盤が利用されている。
	壁面化粧	北壁と東壁に長さ10～40の琉球石灰岩が積み石壁として並べられている。西壁にも1個残っている。
	床面	地山をほぼ平坦に削っているが、炉跡付近が若干凹む。岩盤が露頭している所もある。南西隅の近くに砂岩の凹石が置かれていた。
	炉跡	中央よりやや北壁寄りに、直径約70cmの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内に1本、竪穴の法面に4本、竪穴外に1本の柱穴が廻っている。口径15～20cm、深さ12～20cm。
	階段	なし
出遺物	土器	AV類15053・15061、AVI類15073、BI類a 15116、BIV類a 15132。埋土でAIII・IV・V・VIなどが混入しているが、床面ではB群土器のみ。
	石器	石皿15240
	骨製品	な し
	貝製品	な し
	食料残滓	ウミギク科1点のみ、フエフキダイ、ハタ科等が出土する。イノシシ少量、ウミガメ(尺骨)、ジュゴン。
堆積状況		黒褐色土（第II層）のみで、遺物は土器が多い。東壁沿いで土器が2個潰れた状況で検出された。また西壁沿いでは石皿が座ったまま検出された。

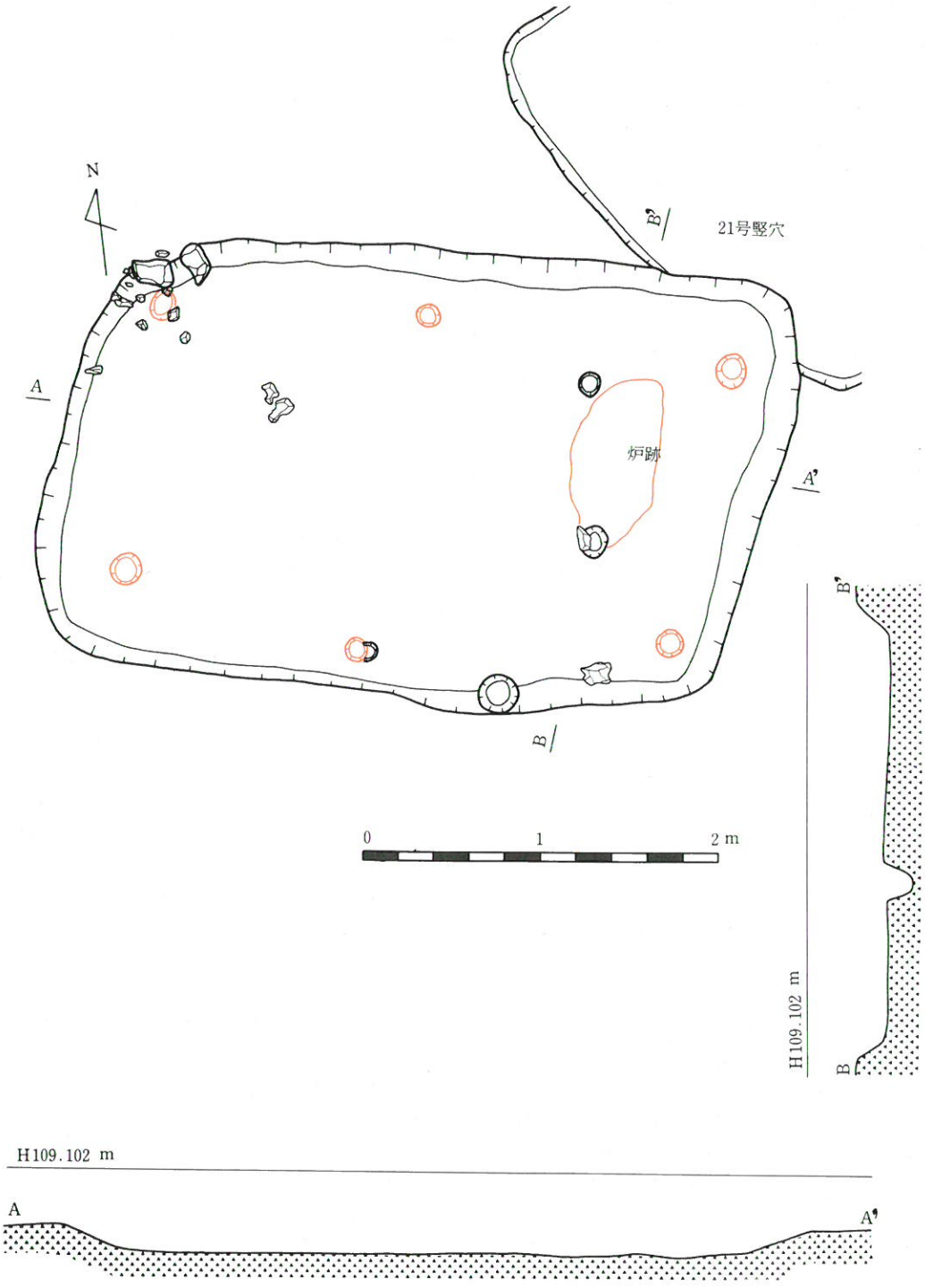


Fig.10　第20号竪穴住居跡実測図

Tab.11　第20号竪穴住居跡

位置	地区	L－6
	重複	21号竪穴住居跡が切られている。
構造	形状	隅丸長方形
	規模	東西最大長約4.0m、南北最大長約2.5m。
	深さ	東側で約20cm、西側で約12cm。
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	北西隅に積み石らしいのが見られるが、全体としては不明
	床面	地山を平坦にしている。
	炉跡	東壁近くに長軸約90cm、短軸約50cmの楕円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には、厚さ約1cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴の壁に沿って6本の柱穴が廻っている。口径10～20cm、深さ12～20cm。楔石は見られない。なお、炉跡の南と北に1本ずつの柱穴。
	階段	なし
出土遺物	土器	埋土でAIV・AV類なども見られるが、床面ではAVII類とB群土器が共伴。
	石器	両刃磨製石斧片
	骨製品	な し
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類なし、魚骨僅少、ジュゴン。
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、石の混入は少なかった。遺物は少ない方である。

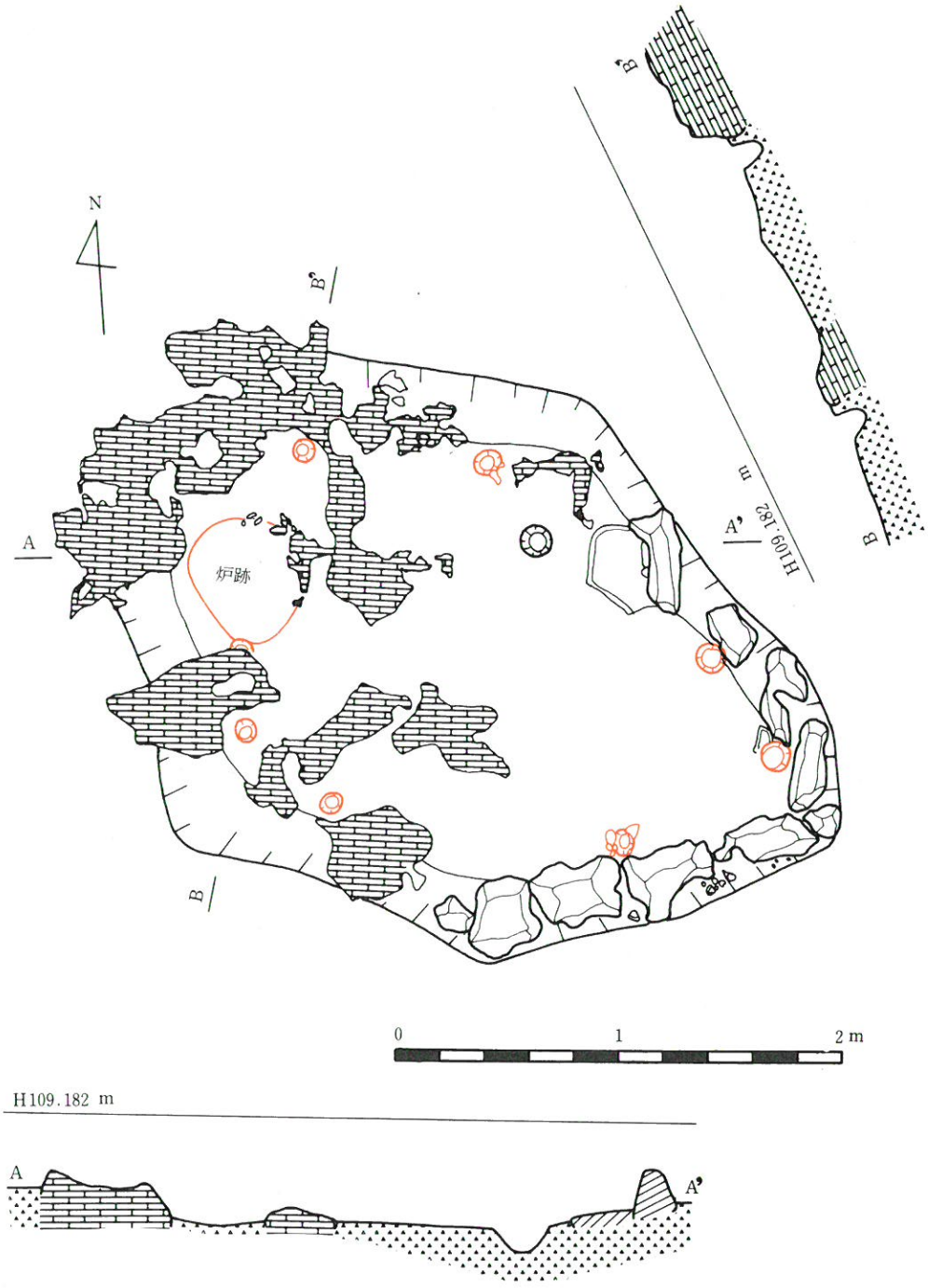


Fig.11　第22号竪穴住居跡実測図

Tab.12　第22号竪穴住居跡

位置	地区	L－6、M－6（第4段丘）
	重複	なし
構造	形状	楕円形に近い6角形
	規模	長軸（東西）約3.4m、短軸（南北）約2.4m。
	深さ	約20cm
	壁	地山をやや傾斜を持って掘り込んでいる。東半分は積み石、西は岩盤を利用。
	壁面化粧	東半分には長さ20～40cmの琉球石灰岩が丁寧に積まれている。
	床面	地山を平坦に削っている。西半分は岩盤が露頭している所が多い。
	炉跡	西壁沿いに直径約60cmの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内の壁沿いに9本の柱穴が廻っている。口径10～15cm、深さ8～15cm。1本だけ楔石が残っている。
	階段	なし
出土遺物	土器	AⅦ類とB群土器が多い。床面でAⅦ類とB群土器が共伴。
	石器	両刃磨製石斧ⅢB22201、片刃磨製石斧Ⅰ22216。
	骨製品	骨針22249、イノシシ長管骨製品22305。
	貝製品	螺蓋貝斧22320。
	食料残滓	陸産貝が多いが未洗浄。ブダイ科、ベラ科がみられる。イノシシ僅少。ウミガメ、ジュゴン
堆積状況		この竪穴の第Ⅱ層は木炭が多く混入する黒褐色土。こぶし大の石が多く混入。土器、陸産マイマイ、魚骨などが多い。

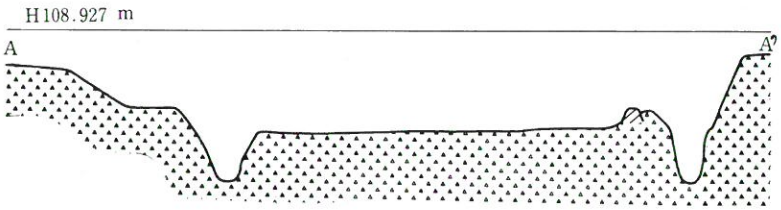


Fig.12　第23号竪穴住居跡実測図

Tab.13　第23号竪穴住居跡

位置	地区	M－6、一部はM－5に延びている。（第4段丘）
	重複	なし
構造	形状	隅丸方形状。北東隅が若干突出している。
	規模	東西最大長約2.8m、南北最大長約2.7m。
	深さ	約30～35cm
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	東壁に長さ15～30cmの琉球石灰岩が積まれている。なお、北壁にも積み石壁の一部と考えられるのが3個見られる。
	床面	地山面をほぼ水平に削っている。なお、所々に岩盤が露頭している。東側及び中央には礫を敷いたような状況が検出された。
	炉跡	中央よりやや東南隅寄りに長径約70cm、短径約50cmの楕円形状の焼土。焼土及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	壁に沿って8本の柱穴が廻っている。一辺に3本の柱穴が並ぶ規格性のある柱穴。口径12～20cm、深さ10～20cm。
	階段	北西隅に琉球石灰岩を敷いて造った階段が1段検出。幅55cm、奥行き約45cm、高さ約14cm。
出土遺物	土器	AIII類23018、AV類23056、BI類a 23112。埋土でA群土器が目立つ。床面ではAVII類とB群土器が共伴。
	石器	両刃磨製石斧IIIA23190、両刃磨製石斧IV23206、片刃磨製石斧II 23217。
	骨製品	な し
	貝製品	ホラガイ有孔製品23365、ヤコウガイ貝匙23349。
	食料残滓	陸産貝が多いが未洗浄。ブダイ科がみられる。イノシシ少量、陸ガメ、ウミガメ、ジュゴン
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、こぶし大の石が混入する。土器、陸産マイマイ、魚骨などが多いが投げ込まれたような出土状況。

Fig.13　第25号竪穴住居跡実測図

Tab.14　第25号竪穴住居跡

位置	地区	M－6、N－6（第4段丘）
	重複	24号礫床住居跡が上にのっている。
構造	形状	隅丸方形状
	規模	東西最大長2.8m、南北最大長2.9m。
	深さ	最深部（東壁沿い）で約25cm、平均して15cm。
	壁	やや垂直に地山を掘り込んでいる。西壁は岩盤を利用、南壁は未発掘で不明。
	壁面化粧	南壁には長さ15～30cmの琉球石灰岩が積まれている。
	床面	床面積のほぼ40％は岩盤が露頭している。しかし、岩盤はほぼ平坦である。西から東へと傾斜しており、東壁沿いが最も深い。
	炉跡	長径約1.2mと約0.8mの円形状の焼土が南半分に広がっている。炉跡とその周辺には約3cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴の壁沿いに6本の柱穴が廻っている。口径15～20cm、深さ10～20cm。2本は楔石が残っていた。
	階段	なし
出土遺物	土器	AIII類25024、AV類25059。床面でAVII類とB群土器が共伴。
	石器	なし
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	陸産貝がみられる。魚骨少量みられる。イノシシ少量。
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、こぶし大の石が混入している。土器が多い。

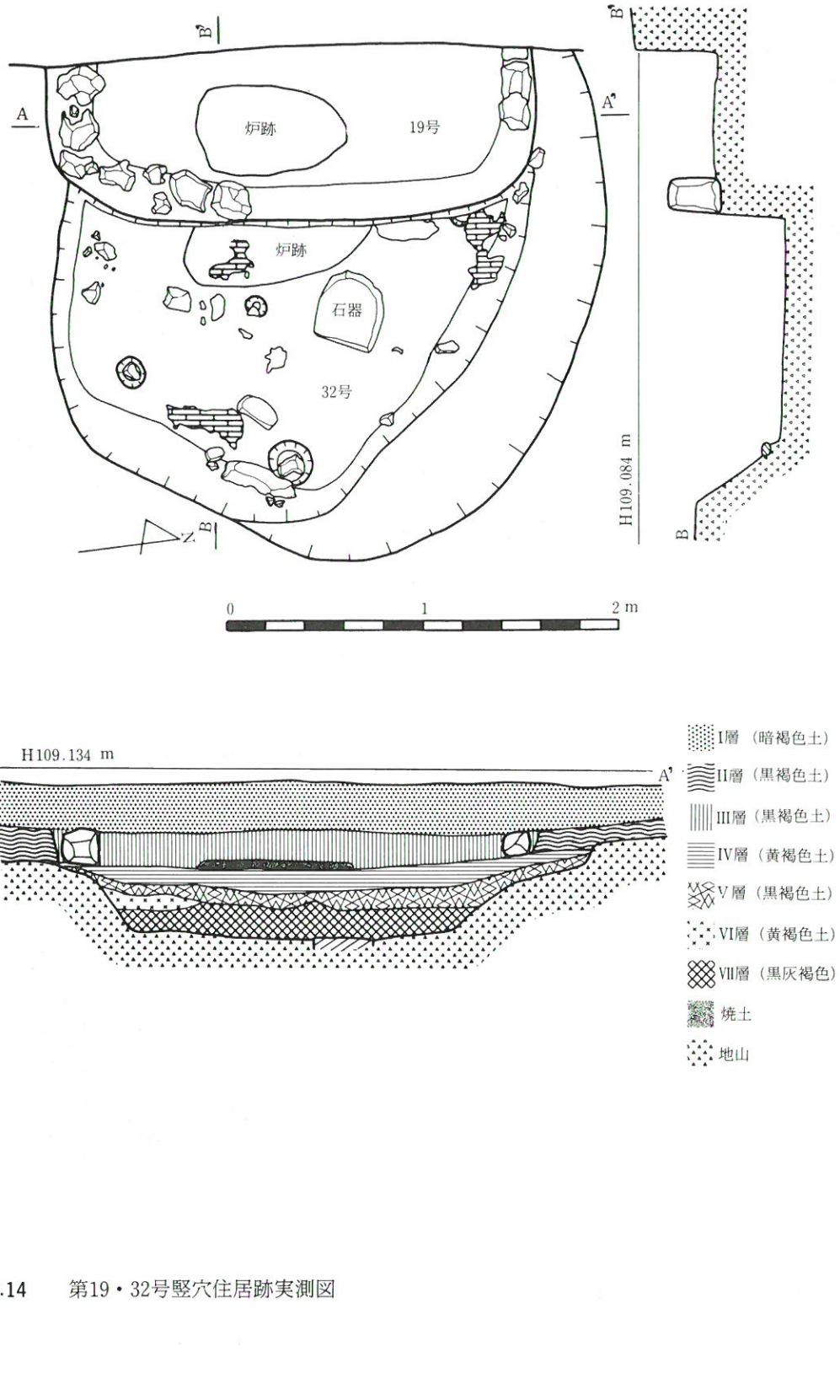
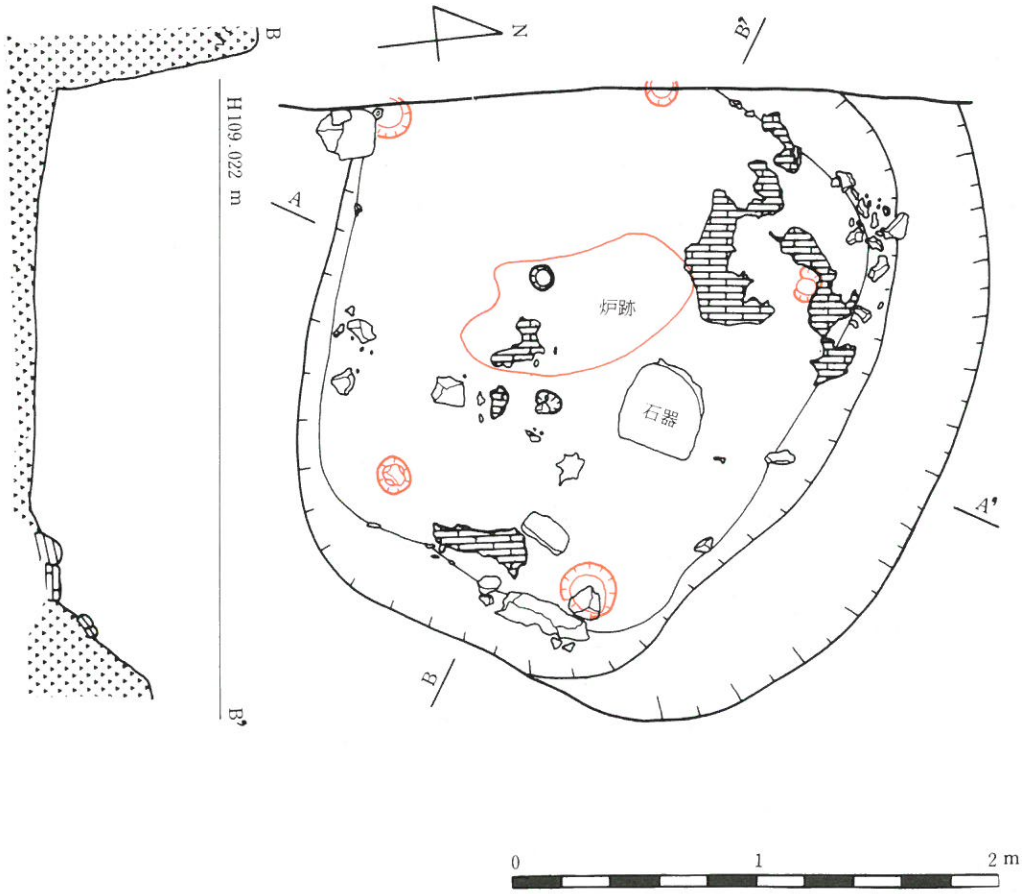


Fig.14　第19・32号竪穴住居跡実測図



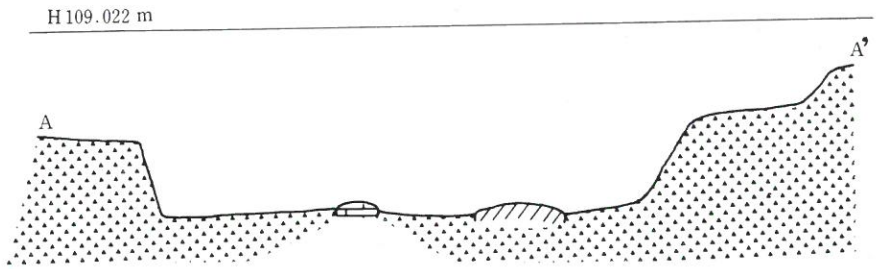


Fig.15　第32号竪穴住居跡実測図

Tab.15　第19号竪穴住居跡

位置	地区	K－6・L－6にまたがる。K－7・L－7（道路下）に延びている。（第4段丘）
	重複	32号竪穴住居跡の上に造られている。
構造	形状	隅丸方形と考えられる。
	規模	東辺長約2.5m、南辺も北辺も約80cm検出。
	深さ	約20cm
	壁	32号竪穴内の埋土をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	長さ約20cm、厚さ約10cmの琉球石灰岩を1列に並べた積み石が東・南・北の三辺に残っている。西側は不明。
	床面	32号の埋土を平坦に削っている。
	炉跡	東積み石沿いに長径約80cm、短径約50cmの楕円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約1cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	床面でAⅦ類とB群土器が共伴。
	石器	なし
	骨製品	な　し
	貝製品	な　し
	食料残滓	陸産貝少量、魚骨僅少、イノシシなし、ジュゴン。
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、石の混入は少なかった。土器が多く検出された。西半分には1972年の発掘完了時のビニールシートが検出された。

Tab.16　第32号竪穴住居跡

位置	地区	K－6、L－6、K－7・L－7（道路下）へ延びている。（第4段丘）
	重複	上に19号竪穴住居跡。
構造	形状	隅丸方形
	規模	南北最大長約2.7m、東西もほぼ同じと考えられる。
	深さ	北壁沿いで約56cm、南壁沿いで約34cm。
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	なし
	床面	ほぼ平坦に地山を削っているが、炉跡付近が若干凹む。炉跡の東北側に約30×30cmの方形状の平坦な粘板岩が置かれている。
	炉跡	直径約80cmの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内の壁沿いに5本の柱穴が廻っている。口径15～20cm。深さ10～13cm。楔石は見られない。
	階段	北壁は2段に掘られているが、上段は階段の機能を持つ。
出土遺物	土器	AIV類32033、BI類a 32101・32102、BI類b 32109。床面でAVII類とB群土器が共伴。
	石器	小型扁平利器32182、片刃磨製石斧II32221、両刃磨製石斧片。
	骨製品	ジュゴン製骨錐32279。
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類僅少、魚骨少量、イノシシ僅少、リクガメ、ウミガメ。
堆積状況		黒色土で、石の混入は少なかった。土器は多く検出された。

Fig.16　第35・36・37・18号竪穴住居跡

Tab.17　第35号竪穴住居跡

位置	地区	K－6、K－7・J－6へ延びている（第4段丘）
	重複	18号竪穴住居跡に切られている。
構造	形状	長方形状。2つの遺構の可能性がある。
	規模	南北最大長約2m、東西5mまで確認。さらに延びているので全体としては不明。
	深さ	東壁沿いで30cm、西壁近くで60cm。
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。ほとんど積み石が壁で一部に岩盤が利用されている。
	壁面化粧	東・南・北壁とも長さ20～50cmの琉球石灰岩が積まれている。積み石の上部は18号に壊されたと考えられる。
	床面	地山面を削っているが、東から西へかなり傾斜している。炉跡周辺はほぼ平坦。
	炉跡	西壁寄りに直径50cmの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には灰層が厚さ約2cm堆積していた。
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	BⅠ類d35114。AⅦ類とB群土器が共伴。
	石器	小型扁平利器35175、片刃磨製石斧Ⅱ35220、両刃磨製石斧Ⅳ。
	骨製品	な　し
	貝製品	な　し
	食料残滓	貝類僅少、ブダイ科、ベラ科僅少、イノシシ少量、イヌ。
堆積状況		黒色土（第Ⅲ層）で、石の混入は少なかった。土器が多い。

Tab.18　第36号竪穴住居跡

位置	地区	K－6（第4段丘）
	重複	18号竪穴住居跡に切られている。
構造	形状	不規則な方形。西壁が大きく内彎する。
	規模	東西最大長約2.6m、南北最大長約3.0m。
	深さ	約46cm。炉跡付近がやや凹む。
	壁	地山をほぼ垂直に掘り込んで、積み石を並べている。南東隅では岩盤を利用している。
	壁面化粧	四辺に長さ20～40cmの琉球石灰岩が並べられている。
	床面	炉跡付近は凹んでいるが、全体としてはほぼ平坦に地山を削っている。床面に岩盤が露頭している部分が見られる。
	炉跡	南西隅寄りに、長軸80cm、短軸50cmの楕円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	不明
	階段	なし
出土遺物	土器	BⅠ類a 36106。床面でAⅦ類とB群土器が共伴。
	石器	なし
	骨製品	骨針36253。
	貝製品	な　し
	食料残滓	陸産貝僅少、ブダイ科、フエフキダイ科破片も含めると多くみられる。イノシシ少量。
堆積状況		黒色土（第Ⅲ層）で、こぶし大の石が混入していた。土器が多い。

Tab.19　第37号竪穴住居跡

位置	地区	K－6。K－7（道路下）へ延びている。（第4段丘）
	重複	18号竪穴住居跡に切られている。
構造	形状	方形と考えられる。
	規模	東辺長約3.1m、ほかは不明。
	深さ	約60cm
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	東・南・北壁に長さ25～40cmの琉球石灰岩を積んでいる。東壁では内面と外面に積み石が見られる。
	床面	地山をほぼ平坦に削っている。
	炉跡	不明
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	AⅦ類が僅かとB群土器。
	石器	なし
	骨製品	な し
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類なし、魚骨は1点のみ、イノシシなし。
堆積状況		黒色土（第Ⅲ層）で、石の混入は少なかった。遺物は少ない方である。

Tab.20　第18号竪穴住居跡

位置	地区	K－6。J－6・K－7へ延びている（第4段丘）
	重複	35号・36号・37号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	方形と考えられる。
	規模	南北最大長約6m、東西長は5m確認したがさらに道路下へ延びている。今回検出された竪穴で最大のもの。
	深さ	20～30cm
	壁	地山をやや傾斜をもって掘りこまれている。南壁と東壁の一部では下部遺構の積み石を利用している。東壁の一部で岩盤も利用している。
	壁面化粧	なし
	床面	下部遺構の堆積層を削ってほぼ平坦にしていた。
	炉跡	不明
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	II類18004・18012、III類18016・18023、IV類18025・18027・18040、V類18047・18060、A群尖底18097。BI類a18103、BI類18107、BII類b18118、BIV類a18126～18131、BIV類e18147、BIV類g18151、B沈線文18170・18171
	石器	小型扁平利器18179・18180・18181、両刃磨製石斧IV18208、両刃磨製石斧VI18214、敲石I18225、両刃磨製石斧片3、片刃磨製石斧、敲石IIなど。
	骨製品	骨針18260、イノシシ製骨錐18270。
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類僅少、ブダイ科を中心に出土する。イノシシ少量、ウミガメ、ジュゴン。
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、石の混入は少なかった。土器が非常に多い竪穴である。

Fig.17　第38・39・40号竪穴住居跡実測図

Tab.21　第38号竪穴住居跡

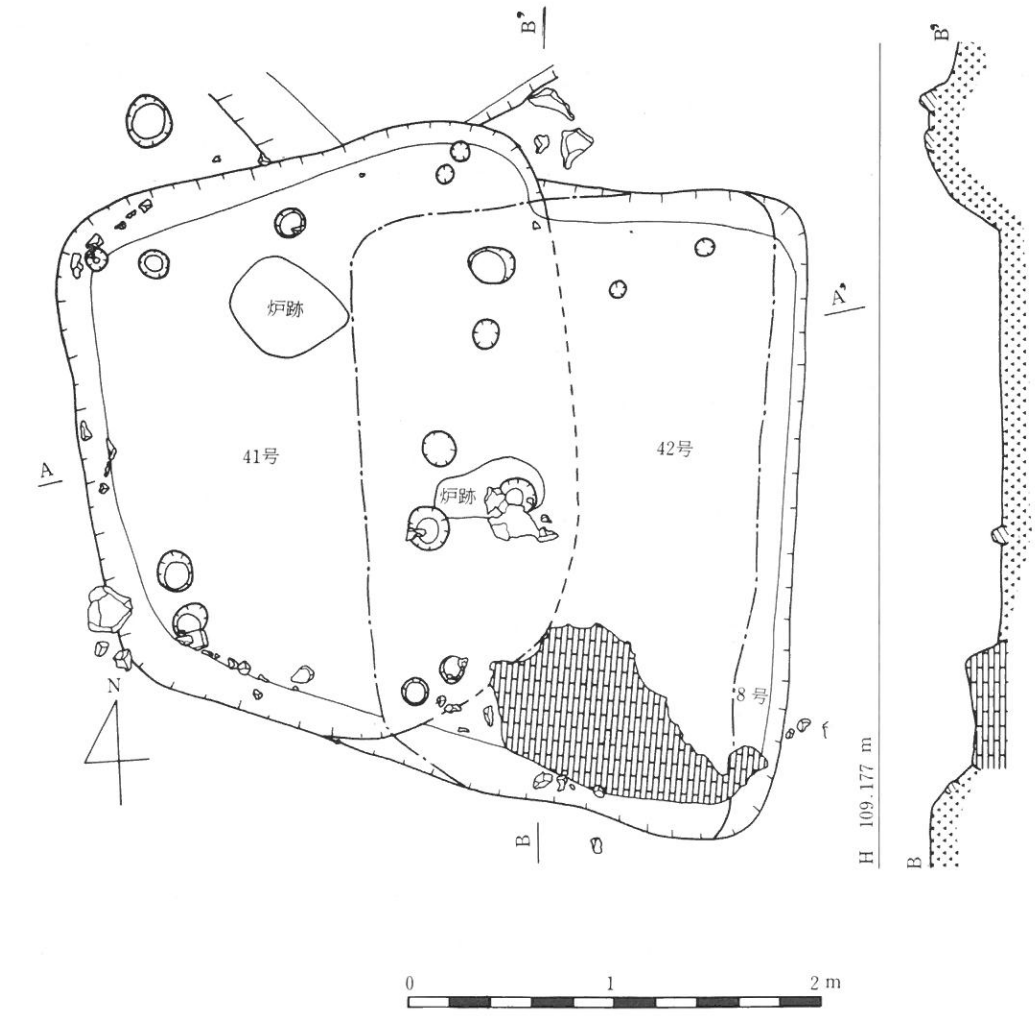
位置	地区	L－5、L－6、(第4段丘)
	重複	21号・14号・39号竪穴住居跡に切られている。なお、さらにその上に13号竪穴住居跡がのっていた。
構造	形状	やや不規則な方形。西壁は外側に、南壁は内側に歪む。
	規模	南辺長約2.9m、西辺長約2.8m、北辺長約2.5m、東辺長約2.0m。
	深さ	約45cm
	壁	地山をほぼ垂直に掘り込んでいる。なお、北壁と東壁は39号・13号によって破壊され、西壁も上の10cmは21号によって破壊されている。
	壁面化粧	なし
	床面	地山を平坦に削っている。床面の約30%は岩盤が露頭している。
	炉跡	中央よりやや東壁寄りに直径約1.1mの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	壁に沿って7本の柱穴が廻っている。口径約20cm、深さ10～20cm。楔石のあるのも見られる。
	階段	南壁に地山を削って造った3段の階段。1段が15cm、2段が5cm、3段が5cmの高さ。幅は1段95cm、2段70cm、3段60cm。奥行きは1段15cm、2段25cm。
出土遺物	土器	AII類38011、床面でA群VII類・B群土器が共伴。
	石器	両刃磨製石斧片
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類なし、ブダイ科他少量、イノシシなし、ジュゴン、ケナガネズミ
堆積状況		黒褐色土で、こぶし大の石が混入していた。遺物は少ない方である。

Tab.22　第39号竪穴住居跡

位置	地区	L－5、L－6、M－5、M－6（第4段丘）
	重複	21号・14号・13号、40号竪穴住居跡に切られ、38号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約2.8m、南北最大長約3.0m。
	深さ	北壁沿いで30cm、炉跡付近で40cm。
	壁	北壁は地山をほぼ垂直に掘り込んでいる。西壁は地山をやや傾斜をもって掘り込んでいる。東・南壁は破壊されていた。
	壁面化粧	北壁に長さ10～40cmの琉球石灰岩を並べてあるが、内壁面がはっきりしない。
	床面	地山を北から南へ傾斜をもって削られている。床面に岩盤が露頭している所が多い。
	炉跡	ほぼ中央に直径1.0mの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内の壁沿いに9本の柱穴が廻っている。口径15～20cm、深さ10～15cm。楔石のあるのも見られる。
	階段	不明
出土遺物	土器	A群土器もB群土器も僅か。
	石器	なし
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類なし、魚類なし、イノシシなし
堆積状況		黒褐色土でこぶし大の石が多く混入していた。遺物は少ない方である。

Tab.23　第40号竪穴住居跡

位置	地区	L－5、M－5（第4段丘）
	重複	11号・12号・13号竪穴住居跡に切られ、39号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約3.2m、南北最大長約3.3m。
	深さ	約40cm
	壁	地山を掘り込んでいるのは北壁と東壁で、南・西壁は堆積層。北壁は地山をやや傾斜をもって掘り、積み石で壁面化粧。東壁はほとんど岩盤を利用。
	壁面化粧	北壁と南壁に10～30cmの琉球石灰岩を並べた積み石壁が僅かに残っている。
	床面	地山を平坦に削っている。床面の約40％は岩壁が露頭している。
	炉跡	直径約50cmの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約0.5cmの灰層が見られた。
	柱穴	竪穴内の壁に沿って7本の柱穴が廻っている。口径15～25cm、深さ8～15cm。楔石のあるのも見られる。
	階段	不明
出土遺物	土器	A III類40014・40015・40017、A V類40044・40045・40048・40068・A平底40092、BIV類g40152、B群台付土器40162、B群把手40163
	石器	石鏃40173、両刃磨製石斧未完成品40205、両刃磨製石斧IV40209、片刃磨製石斧II40218
	骨製品	イヌの犬歯有孔製品40291
	貝製品	ヤコウガイ貝匙未製品40352、ゴホウラ貝未製品40361、螺蓋貝斧40325
	食料残滓	陸産貝少量、ブダイ科、フエフキダイ科等が出土する。イノシシ少量ハブ脊椎出土、ジュゴン
堆積状況		黒褐色土で、こぶし大の石が多く混入していた。



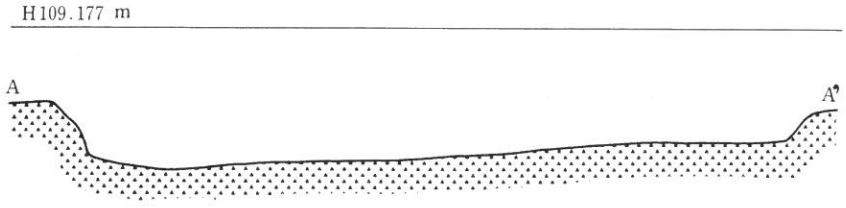


Fig.18　第41・42号竪穴住居跡実測図

Tab.24　第41号竪穴住居跡

位置	地区	M－5、M－6（第4段丘）
	重複	7号、42号竪穴住居跡に切られている。上に8号竪穴住居跡がのっていた。
構造	形状	隅丸方形
	規模	東西最大長約2.4m、南北最大長約2.4m、南辺は内側に歪む。
	深さ	約30cm
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	なし
	床面	地山を平坦に削っているが、西から東へ僅かに傾斜する。
	炉跡	北壁近くに直径約50cmの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約1cmの灰層が堆積。
	柱穴	竪穴内の壁に沿って8本の柱穴が廻っている。口径10～15cm、深さ7～24cm。楔石のあるのも見られる。
	階段	なし
出土遺物	土器	AIII類41013。床面でA群土器が僅か。
	石器	特殊石器41222
	骨製品	な　し
	貝製品	な　し
	食料残滓	貝類なし、魚骨なし、
堆積状況		黒色土で、こぶし大の石が多く混入していた。遺物は少ない。

Tab. 25　第42号竪穴住居跡

位置	地区	M－5。僅かにM－6へ延びている。（第4段丘）
	重複	8号竪穴住居跡に切られ、41号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約2.0m、南北最大長約3.1m
	深さ	約30～40cm
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。西壁は41号竪穴住居跡内の堆積層。
	壁面化粧	なし
	床面	地山を平坦に削っている。南側では岩盤が露頭している。北西隅付近では41号の床面より2cmぐらい深く掘られている。
	炉跡	中央よりやや西壁寄りに、長軸50cm、短軸30cmの楕円形状の焼土。焼土の上及びその周辺にには厚さ約1cmの灰層が堆積。41号の柱穴上に炉跡。
	柱穴	竪穴内の北壁と西壁に沿って5本の柱穴が並んでいる。口径10～20cm、深さ8～16cm。
	階段	なし
出土遺物	土器	床面でAIII類とAVII類が僅か。B群土器も少ない。
	石器	片刃磨製石斧片
	骨製品	ジュゴン肋骨未製品42303。
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類なし、魚骨なし、
堆積状況		黒褐色土で、こぶし大の石が混入していた。土器は少ない。

Fig.19　第43・44号竪穴住居跡実測図

Tab.26　第43号竪穴住居跡

位置	地区	N－6（第4段丘）
	重複	44号竪穴住居跡に切られている。なお、上には27号礫床住居跡がのっていた。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約3.5m、南北最大長約3.3m。
	深さ	東壁沿いで約9cm、その他は18～20cm。
	壁	地山をほぼ垂直に掘り込んでいる。南壁と西壁は積み石、北壁は岩盤を利用している。
	壁面化粧	南壁と西壁は長さ10～30cmの琉球石灰岩が積まれている。粘板岩が2個使用されている。
	床面	地山を東から西へ傾斜をもって削られている。床面に岩盤が露頭している所がいくつか見られる。
	炉跡	東壁寄りに楕円形状の焼土。炉跡の上に44号竪穴の積み石が乗っている。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内の壁に沿って8本の柱穴が廻っている。口径15～25cm、深さ13～21cm。楔石がはいっているのも見られる。
	階段	なし
出土遺物	土器	B群土器が少量
	石器	両刃磨製石斧IV片
	骨製品	な し
	貝製品	貝刃43313。
	食料残滓	貝類なし、魚骨なし、
堆積状況		黒色土（第IV層）で、こぶし大の石が多く混入していた。遺物は少ない。

Tab.27　第44号竪穴住居跡

位置	地区	N－6（第4段丘）
	重複	43号竪穴住居跡を切っている。なお、上には27号礫床住居跡がのっていた。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約2.6m、南北最大長約2.2m。
	深さ	約18cm
	壁	43号の堆積層を垂直に掘り込んで積み石を入れている。なお、西壁は43号の積み石を利用している。北壁は岩盤を利用。
	壁面化粧	南壁と東壁は長さ10～20cmの琉球石灰岩礫を積んでいる。
	床面	43号の床面を利用している。
	炉跡	南壁寄りに楕円形状の焼土。焼土の上には厚さ2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	北西隅と南東隅に1本ずつ検出された。口径約20cm、深さ8cmと10cm。
	階段	なし
出土遺物	土器	AⅦ類とB群土器がやや多く出土。
	石器	両刃磨製石斧ⅢB44197
	骨製品	な し
	貝製品	な し
	食料残滓	未洗浄
堆積状況		黒褐色土（第Ⅲ層）で、こぶし大の石が多く混入していた。土器、陸産マイマイ、魚骨などが多く検出された。

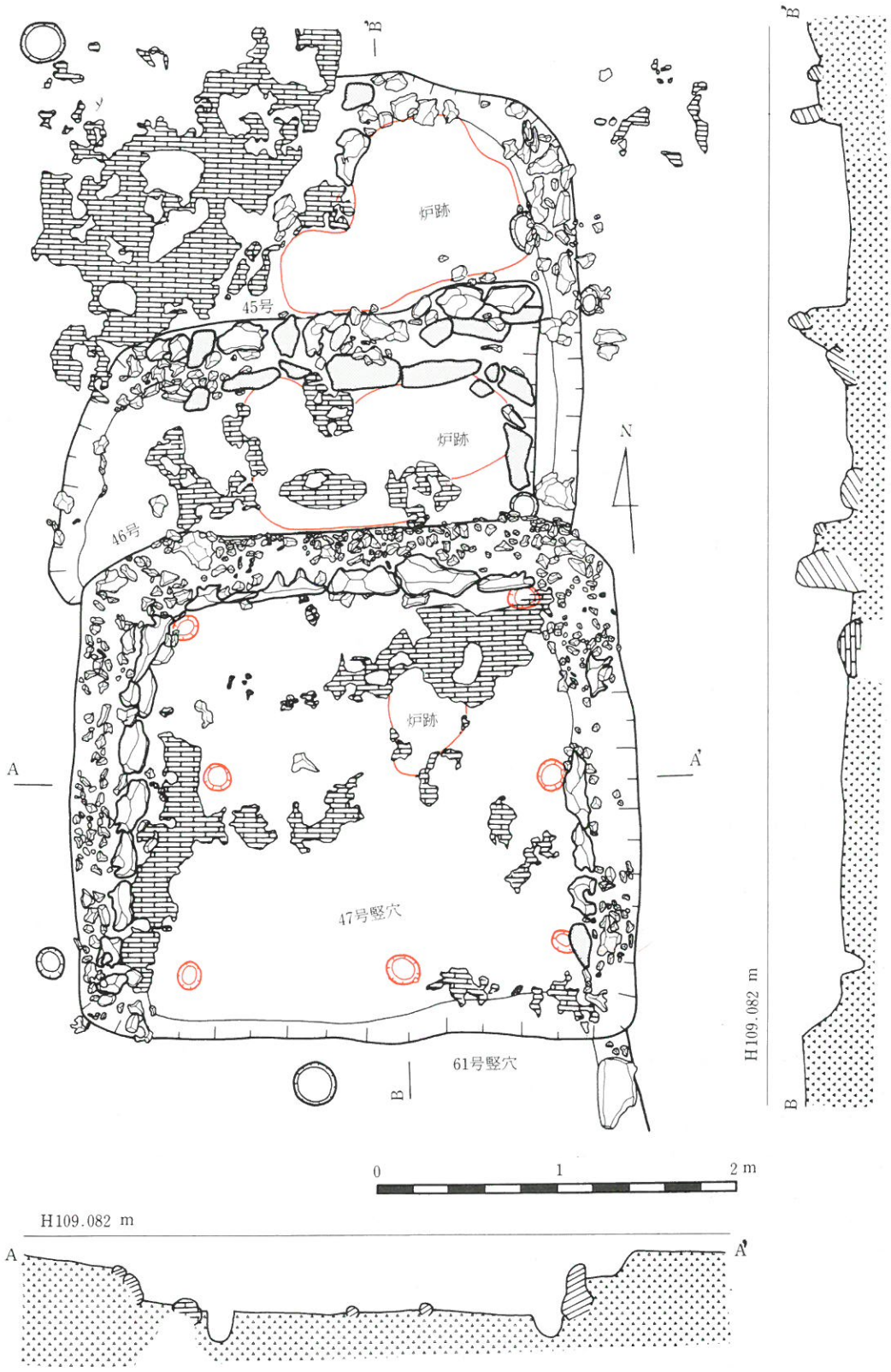


Fig.20　第45・46・47号竪穴住居跡実測図

Tab.28　第45号竪穴住居跡

位置	地区	N－5（第4段丘）
	重複	46・47号竪穴住居跡に切られている。
構造	形状	隅丸方形状と考えられる。
	規模	北辺長が約1.3m、東辺長の残存部が約2.2m。
	深さ	30～35cm、北から南へやや傾斜。
	壁	地山をやや垂直に掘り込んで積み石を並べている。
	壁面化粧	北壁及び東壁の一部には長さ10～20cmの琉球石灰岩が積まれているが雑である。東壁の積み石の一部は46号に壊されたと考えられる。
	床面	地山を北から南へやや傾斜を持って削られている。一部岩盤が露頭。
	炉跡	床面のほぼ全面が焼土。焼土の一部は46号の積み石の下にまで延びている。焼土の上及びその周辺には厚さ約15cmの灰層が堆積。
	柱穴	竪穴内の東壁沿いに2本の柱穴が検出された。口径約15cm、深さ約10cm。
	階段	不明
出土遺物	土器	AIII類45022、AVII類a 45078、BI類d 45113。AVII類とB群土器が多い。
	石器	両刃磨製石斧IIIA45193、両刃磨製石斧IIIB。
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類少量、ベラ科等僅少、イノシシ僅少、ジュゴン
堆積状況		黒褐色土で、こぶし大の石が多く混入していた。土器は多い。

Tab.29　第46号竪穴住居跡

位置	地区	N－5（第4段丘）
	重複	45号竪穴住居跡を切っているが、47号竪穴住居跡には切られている。
構造	形状	方形と考えられる。
	規模	北辺長約2.4m、東・南・西辺長は不明
	深さ	約35cm
	壁	45号竪穴住居跡内の堆積層を垂直に掘り込んで、積み石を並べている。
	壁面化粧	主に粘板岩を使用している。長さ20～50cmの扁平な粘板岩を立てて積んでいる。積み石壁に粘板岩を使用しているのはこの1軒だけ。
	床面	地山を平坦に削っている。岩盤が多く露頭している。
	炉跡	中央に1.5m×0.7mの隅丸長方形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約10cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	BⅠ類c46110。床面でAⅦ類とB群土器が共伴。
	石器	なし
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類僅少、魚骨なし、
堆積状況		黒色土層で、こぶし大の石が多く混入していた。遺物はやや多い。

Tab.30　第47号竪穴住居跡

位置	地区	N－5（第4段丘）
	重複	南側の61号竪穴に切られており、北側の45・46号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約3.1m、南北最大長約2.8m
	深さ	30～40cm
	壁	地山をほぼ垂直に掘り込んでいる。南壁だけ地山壁。南壁の積み石は61号竪穴に壊されたと考えられる。
	壁面化粧	東・北・西壁は長さ20～40cmの琉球石灰岩を丁寧に積んでいる。積み石の裏はこぶし大の石を詰めている。
	床面	地山をほぼ平坦に削っている。岩盤が多く露頭している。
	炉跡	中央よりやや北東隅寄りに直径約50cmの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約1cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内の壁沿いに7本の柱穴が廻っている。口径15～20cm、深さ12～17cm。楔石は見られない。
	階段	なし
出土遺物	土器	BⅠ類a 47115。AⅤ類とAⅦ類が少量。B群土器は多い。床面でB群土器。
	石器	両刃局部磨製石斧Ⅴ47213
	骨製品	骨針47244、47246、47248、クジラ骨製品47300
	貝製品	螺蓋貝斧47324
	食料残滓	貝類僅少、魚骨僅少、
堆積状況		黒色土層で、こぶし大の石が多く混入していた。土器が多く検出された。

Fig.21　第48・59号竪穴住居跡実測図

Tab.31　第48号竪穴住居跡

位置	地区	O－6（第4段丘）
	重複	59号竪穴住居跡に切られている。なお、上には28号礫床住居跡がのっていた。
構造	形状	隅丸方形
	規模	東西最大長約2.4m、南北最大長約2.8m
	深さ	約25cm。炉跡付近で約28cm。
	壁	北壁は地山をやや傾斜を持って掘り込まれている。西と南は岩盤を利用している。東は59号に破壊されて不明。
	壁面化粧	南壁に長さ約15cmの琉球石灰岩が3個並んでいる。北壁はこぶし大の琉球石灰岩が詰められている。壁面化粧の積み石は崩れている。
	床面	地山を削っているが、炉跡付近がやや凹む。床面の約半分は岩盤が露頭している。
	炉跡	やや東北隅よりに1.1m×0.7mの三角形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内では検出できなかった。竪穴外で1本だけ検出。
	階段	なし
出土遺物	土器	A群Ⅶ類土器もB群土器も見られるが、B群が多い。
	石器	磨石48235
	骨製品	な　し
	貝製品	な　し
	食料残滓	貝類なし、魚骨なし、イノシシなし
堆積状況		黒褐色土で、こぶし大、頭大の石が多く投げ込まれた状況。

Tab.32　第59号竪穴住居跡

位置	地区	O－6（第4段丘）
	重複	48号竪穴住居跡を切っている。上には28号礫床住居跡がのっていた。
構造	形状	不規則な方形
	規模	南辺長約2.0m、西辺長約1.2m、北辺長約2.4m、東辺長約1.9m
	深さ	約25cm
	壁	東側は地山をやや垂直に掘り込んでいる。北側の東半分は岩盤。そのほかの壁は48号の堆積層を掘り込んでいる。
	壁面化粧	南壁に長さ10～30cmの琉球石灰岩が5個並べられている。
	床面	地山面をやや平坦に削っている。床面の約30%は岩盤が露頭している。
	炉跡	なし
	柱穴	竪穴内に1本検出。口径約20cm、深さ約10cm。楔石も見られる。
	階段	なし
出土遺物	土器	B群台付土器59161。AⅦ類が僅かで、B群土器が多い。
	石器	なし
	骨製品	な し
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類、魚骨なし
堆積状況		黒色土で、こぶし大、頭大の石が多く投げ込まれた状況。

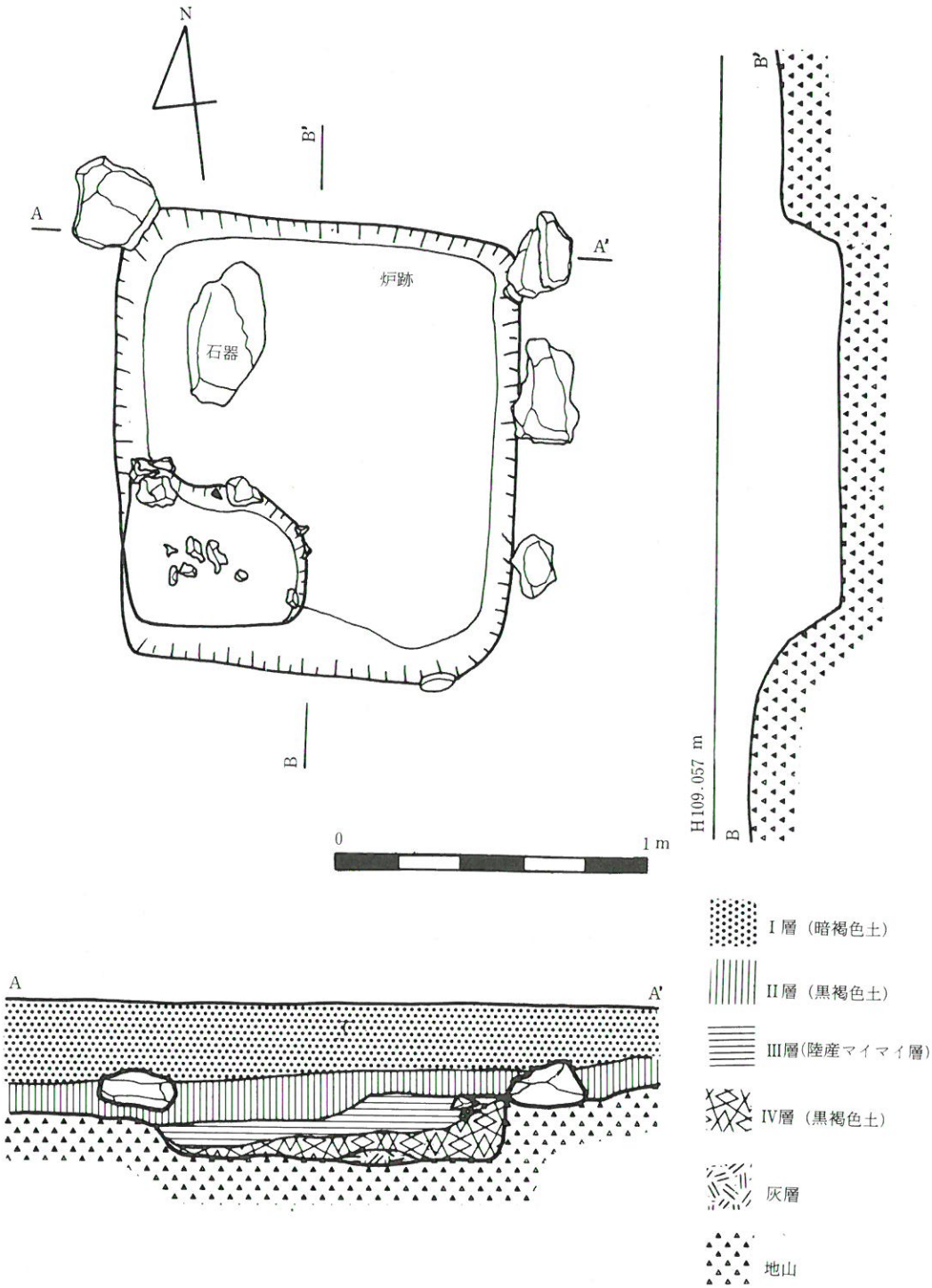


Fig.22　第49号竪穴住居跡実測図

Tab.33　第49号　竪穴住居跡

位置	地区	O－5
	重複	上に3号礫床住居跡。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約1.3m、南北最大長約1.5m。
	深さ	約25cm
	壁	地山をほぼ垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	なし
	床面	地山を平坦に削っている。床面に長軸50cm、短軸25cmの平坦な砂岩が1枚置かれている。
	炉跡	直径30cmの円形の焼土。焼土の上には約5cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	なし
	階段	南西隅に高さ10cm、幅50cm、奥行き40cmの階段。地山を削って造ったもので1段だけ設けられている。
出土遺物	土器	AⅦ類a 49086～49088。床面では遺物なし。
	石器	両刃磨石ⅢB 49202、磨石。
	骨製品	ヘラ状製品（鳥骨）49269
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類、魚骨多量だが未洗浄
堆積状況		黒色土(第Ⅲ層)で、石の混入は少ない。土器、陸産マイマイ、魚骨が多い。特にマイマイは夥しく堆積していた。土器が潰れた状態で2個検出された。

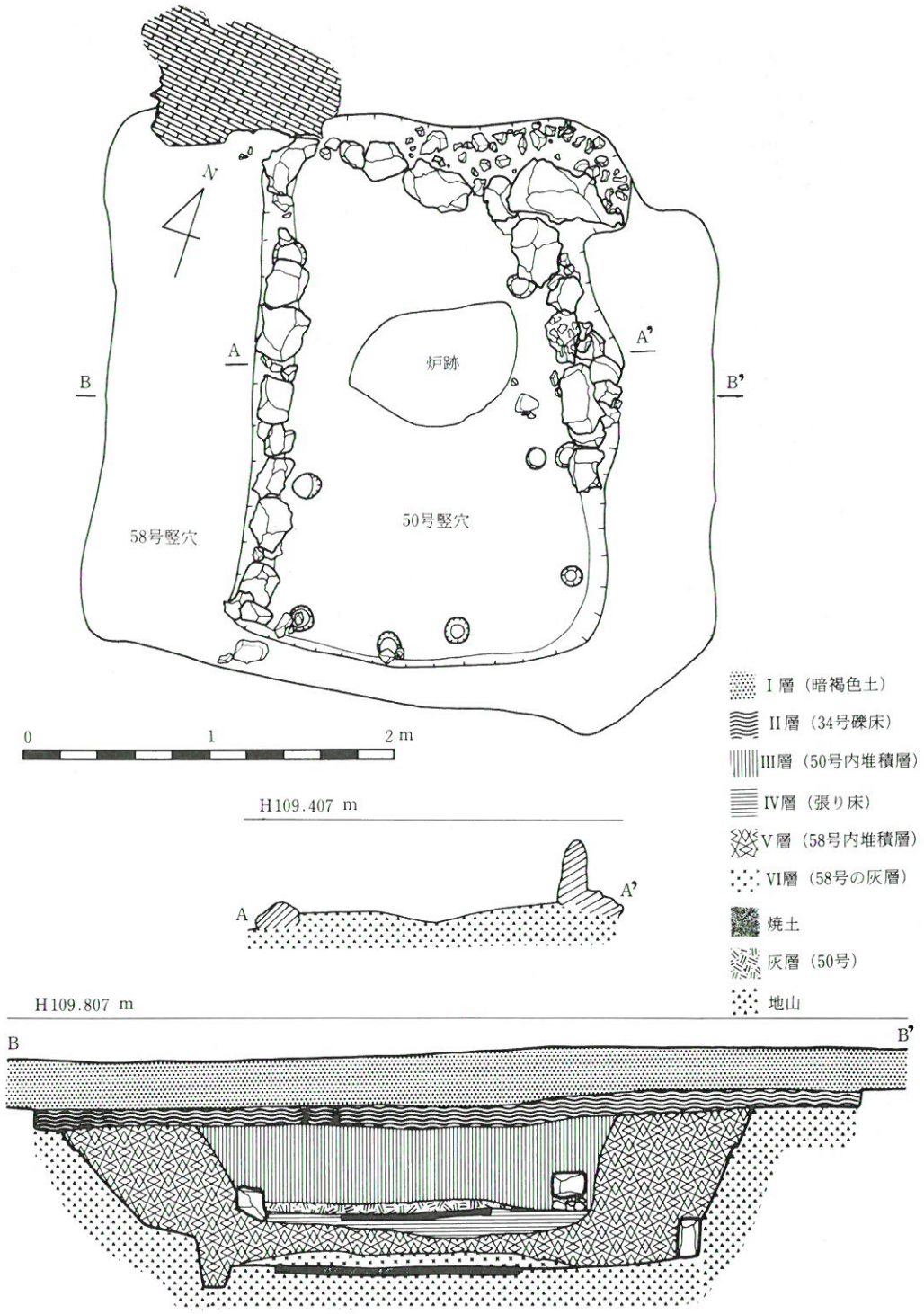


Fig.23　第50号竪穴住居跡実測図

Fig.24　第58号竪穴住居跡実測図

Tab.34　第50号竪穴住居跡

位置	地区	P－5、P－6（第4段丘）
	重複	58号竪穴住居跡を切っている。なお、上には34号礫床住居跡がのっていた。
構造	形状	長方形
	規模	東西最大長約2.0m、南北最大長約2.8m。
	深さ	約40cm
	壁	58号内の堆積層をほぼ垂直に掘り込んで琉球石灰岩を積んでいる。なお、北壁と南壁は58号の積み石を利用している。
	壁面化粧	東壁と西壁は長さ10～50cmの琉球石灰岩を1列に積んでいる。
	床	58号の堆積層をほぼ平坦に削り、その上に厚さ約5cmの黄褐色土を敷いて床面としている。
	炉跡	ほぼ中央に長軸90cm、短軸60cmの楕円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約4cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内の壁に沿って7本の柱穴が廻っている。口径15～20cm、深さ10～15cm。
	階段	不明
出土遺物	土器	AII類50007、AIV類50034、AVII類c 50083、A群土器とB群土器が共伴。BII類a 50117、BIV類f 50157、B群沈線文50172。
	石器	敲石II、磨石
	骨製品	骨針50252、イノシシ骨錐50271、イノシシ犬歯有孔製品50296。
	貝製品	スイジガイ製利器50331、ヤコウガイ製貝匙50346、50350、他1点未製品50354、50355
	食料残滓	貝類、魚骨多いが未洗浄、ウミガメ
堆積状況		黒色土で、こぶし大、頭大の石が多く投げ込まれた状況。土器、陸産マイマイ、魚骨などが多く検出された。

Tab.35　第58号竪穴住居跡

位置	地区	P－5、P－6（第4段丘）
	重複	竪穴内に50号竪穴住居跡が造られていた。上には34号礫床住居跡がのっていた。
構造	形状	方形
	規模	東西最大長約3.3m、南北最大長約3.1m。
	深さ	東壁沿いで約75cm、西壁沿いで約50cm。
	壁	地山をやや垂直に掘り込んで、四壁とも琉球石灰岩を積んでいる。
	壁面化粧	四壁とも長さ10～40cmの琉球石灰岩を積んでいる。竪穴が深いので石は積み重ねられている。
	床面	地山を平坦に削っている。所々に岩盤が露頭している。
	炉跡	中央に南北最大長2.2m、東西最大長1.3mの隅丸長方形状に焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約3cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴内の壁に沿って9本の柱穴が廻っている。主に南壁沿いに見られるように積み石に接して掘られている。口径15～20cm、深さ11～21cm。楔石も見られる。
	階段	東壁外に地山を半円形状に掘り凹めて1段設けている。
出土遺物	土器	AIV類出土。床面でAVII類とB群土器が共伴。
	石器	なし、石製品58385
	骨製品	な し
	貝製品	マクラガイ製品58383
	食料残滓	陸産マイマイが多いが未洗浄
堆積状況		黒色土で、こぶし大、頭大の石が多く投げ込まれた状況。土器、陸産マイマイ、魚骨などが多く検出された。

Fig.25　第57号竪穴住居跡実測図

Tab.36　第57号竪穴住居跡

位置	地区	M－4（第3段丘）
	重複	上に52号礫床住居跡。
構造	形状	方形
	規模	南辺長約2.2m、西辺長約2.5m、北辺長約2.5m、東辺長約2.4m。
	深さ	20～25cm
	壁	地山を垂直に掘り込んでいる。岩盤のところは積み石が見られない。
	壁面化粧	長さ10～40cmの琉球石灰岩を積んでいる。四壁に廻っている。積み石内面はきれいに並んでいる。
	床面	地山を平坦に仕上げている。床面の約半分は岩盤が露頭している。
	炉跡	南壁寄りに上底約60cm、下底約1.1m、高さ約70cmの台形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	積み石沿いに8本の柱穴が廻っている。口径10～15cm、深さ8～12cm。なお、炉跡の東と西に各1本の柱穴。
	階段	西壁側に高さ15cm、幅70cm、奥行き15cmの琉球石灰岩を並べた階段が1段検出された。
出土遺物	土器	AⅠ類57001、A群平底57095、床面でAⅦ類とB群土器共伴。B群丸底57159
	石器	両刃磨製石斧ⅢB57194、敲石Ⅱ57226、両刃磨製石斧片
	骨製品	骨針57255、ジュゴン製骨錐57278
	貝製品	ゴホウラ製貝匙57360、サラサバティ製貝輪57378、ホラガイ有孔製品57362
	食料残滓	貝類、魚骨が多いが未洗浄
堆積状況		黒褐色土（第Ⅱ層）で、こぶし大の石が多く混入していた。土器、陸産マイマイが多い。

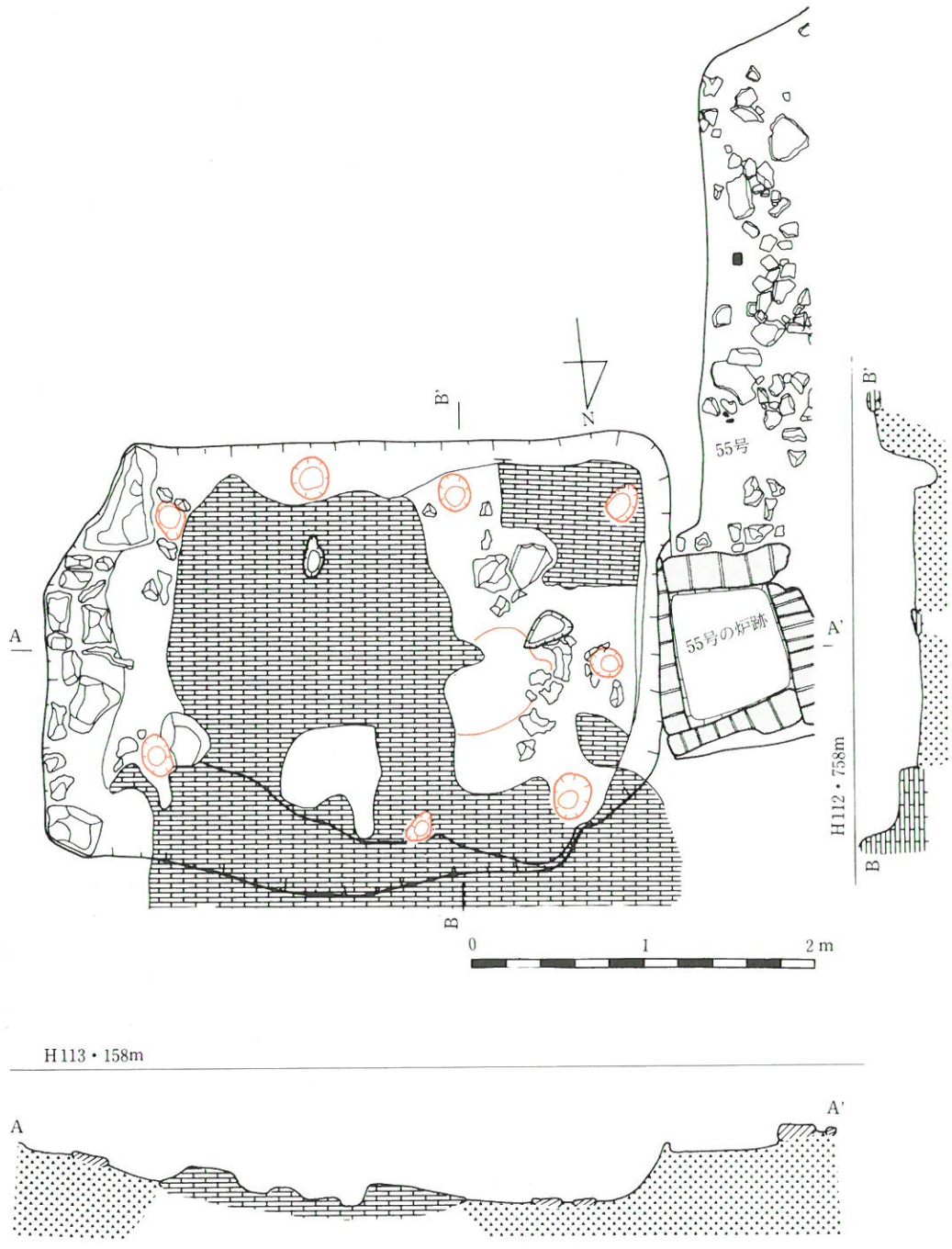


Fig.26　60号竪穴住居跡実測図

Tab.37　第60号竪穴住居跡

位置	地区	M－0、N－0（第1段丘）
	重複	55号礫床住居跡の炉跡に西壁の一部が切られている。
構造	形状	隅丸長方形
	規模	東西最大長約3.6m、南北最大長約2.6m
	深さ	東から西へと傾斜しており、東壁沿いで約20cm、西壁沿いで約40cm。
	壁	東・南・西は地山を掘り込んでいるが、北壁は露頭した岩盤を利用している。
	壁面化粧	東壁は長さ20～40cmの琉球石灰岩が積まれている。
	床面	ほとんど岩盤で、東積み石沿いと、西壁沿いでは地山が床面となっている。
	炉跡	西壁寄りの地山面に1.2m×0.7mのやや方形状の焼土。焼土の上及びその周辺には、厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	竪穴の壁沿いに8本の柱穴が廻っている。口径約20cm、深さ10～25cm。岩盤が露頭しているので柱穴が掘れる部分が限られ、規格性にやや欠ける。
	階段	なし
出土遺物	土器	AⅠ類60002、A群平底60092。床面でAⅦ類とB群土器が共伴。B類ヘラ磨きの尖底60158
	石器	敲石II、磨石
	骨製品	骨針60242、60243、60251、ジュゴン骨錐60275、60282、60283、60285、
	貝製品	貝刃60311、螺蓋貝斧60322、スイジガイ製利器（刃部のみ）60327、ホラガイ系利器60340、60341、サメ歯模造貝製品60366他5点
	食料残滓	貝類、魚骨僅少、イノシシ少量、イノシシの肋骨に傷痕60306、ウミガメ
堆積状況		黒色土（第IV層）が最下層で、こぶし大の石が多く混入していた。土器、陸産マイマイ、魚骨などが多い。第III層は赤暗褐色土の客土（地ならし土）で無遺物層。第II層（55号礫床住居跡の層）がこの竪穴上まで延びていた。

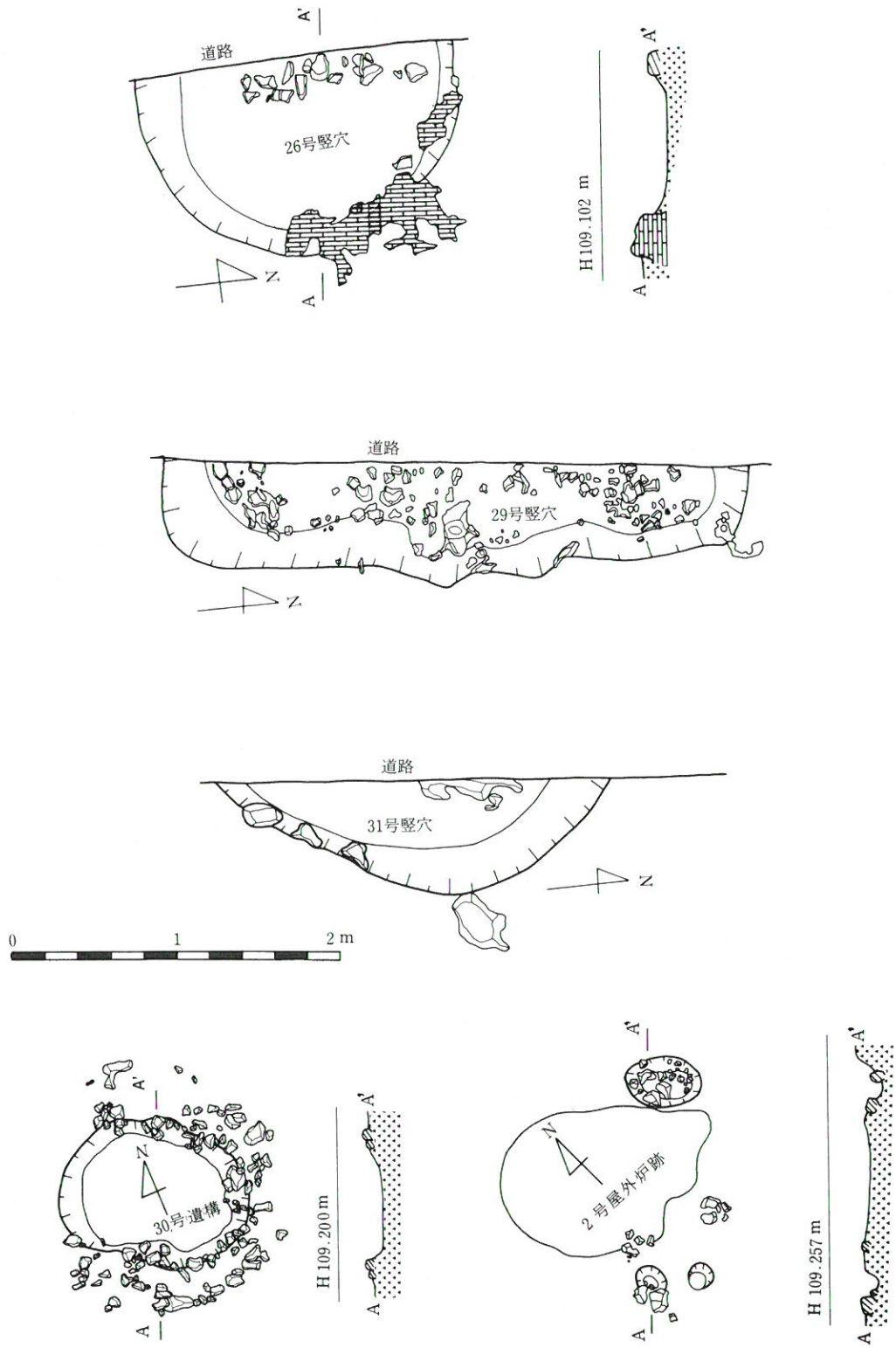


Fig.27　第26・29・31・30号竪穴住居跡と第2号屋外炉跡実測図

Tab.38　第26号竪穴住居跡

位置	地区	M－6。M－7（道路下）へ延びている。（第4段丘）
	重複	不明
構造	形状	円形状かと思われる。
	規模	不明
	深さ	約20cm
	壁	地山をやや傾斜を持って掘り込んでいる。北東壁は岩盤が露頭している。
	壁面化粧	不明
	床面	地山が平坦に削られているが、礫が広がっている所もあり、全体的には不明
	炉跡	不明
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	AⅦ類とB群土器が検出された。
	石器	なし
	骨製品	な し
	貝製品	な し
	食料残滓	貝類なし、魚骨僅少、イノシシなし
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、こぶし大の石が混入している。遺物は少ない方である。

Tab.39　第29号竪穴住居跡

位置	地区	N－6。N－7（道路下）へ延びている。（第4段丘）
	重複	不明
構造	形状	方形と考えられる。
	規模	東辺長約3.4m、南・西・北は不明
	深さ	約10～15cm
	壁	やや傾斜を持って地山を掘り込んでいる。
	壁面化粧	東壁には見られない。南・西・北は不明
	床面	こぶし大の礫が敷かれているように見られるが、全体的に不明
	炉跡	不明
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	AV類29054、B群土器が主体。
	石器	なし
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類なし、魚骨僅少、イノシシなし
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、こぶし大の石が混入している。遺物は少ない方である。

Tab.40　第30号竪穴住居跡

位置	地区	L－5（第4段丘）
	重複	なし
構造	形状	楕円形状
	規模	長軸約1.2m、短軸約90cm。
	深さ	約10cm
	壁	地山をやや垂直に掘り込んでいる。
	壁面化粧	こぶし大の石が東・南・西壁面に並んでいる。しかし内面の積み石がはっきりしない。
	床面	地山をほぼ平坦に削っている。
	炉跡	なし
	柱穴	なし
	階段	なし
出土遺物	土器	AV類30050。AVII類が僅かとB群土器が少量。
	石器	なし
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類なし、魚骨僅少、イノシシ少量
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、こぶし大の石が混入している。遺物は少ない。

Tab.41　第31号竪穴住居跡

位置	地区	L－6。L－7（道路下）へ延びている。（第4段丘）
	重複	不明
構造	形状	隅丸方形と考えられる。
	規模	不明
	深さ	約20cm
	壁	地山をやや傾斜を持って掘り込んでいる。
	壁面化粧	東壁に3個の積み石が見られるが、全体的に不明
	床面	地山面が検出されたが、全体的には不明
	炉跡	不明
	柱穴	不明
	階段	不明
出土遺物	土器	AV類31062。AⅦ類とB群土器が共伴。
	石器	なし
	骨製品	なし
	貝製品	螺蓋貝斧31318
	食料残滓	貝類僅少、魚骨少量、イノシシ少量、ジュゴン
堆積状況		黒褐色土（第II層）で、石の混入は少ない。遺物は少ない方である。

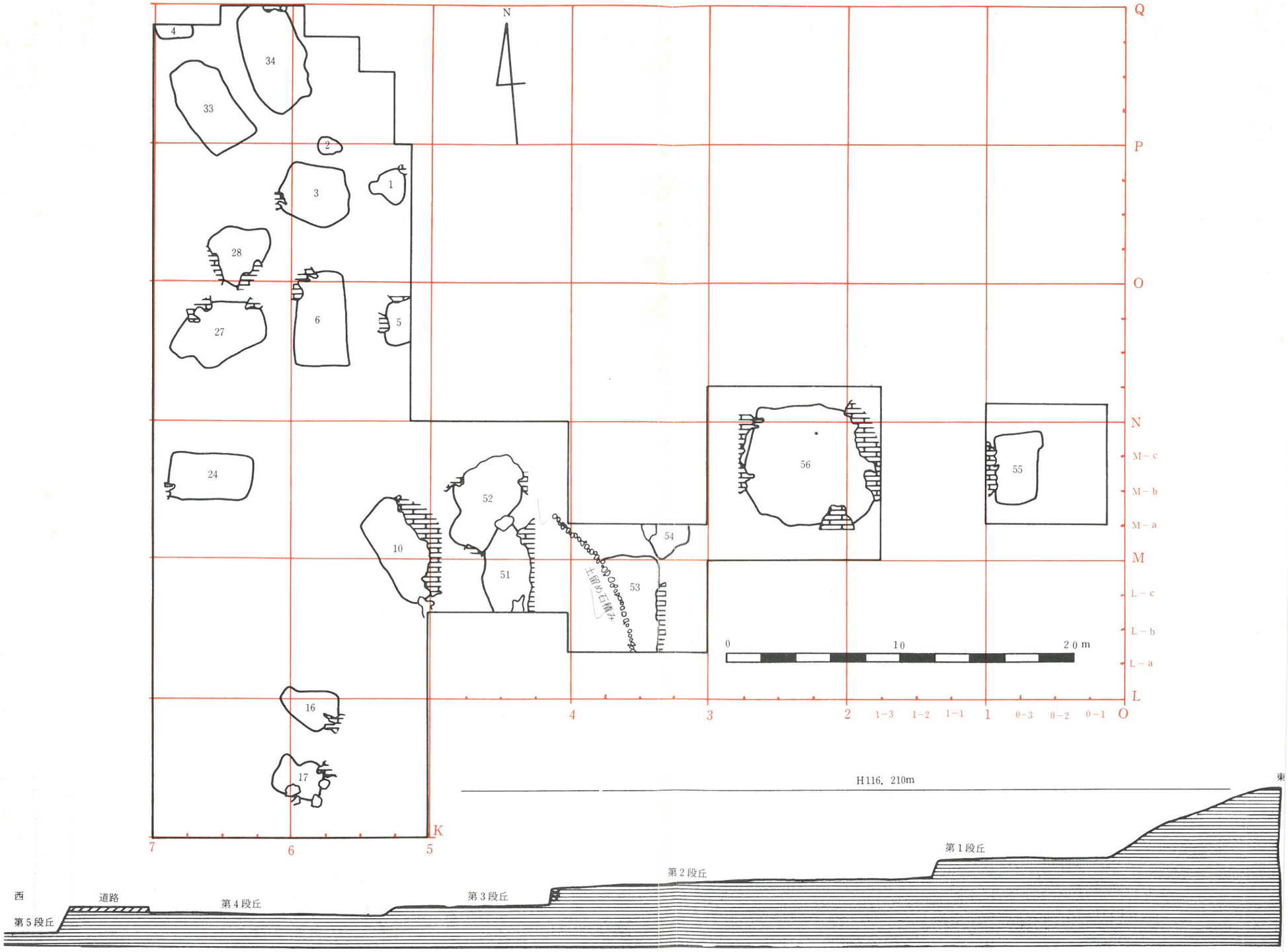


Fig.28　礫床住居跡配置図と段丘断面図

Fig.29　第1・3号礫床住居跡実測図

Tab.42　第１号礫床住居跡

位置	地区	O－５（第４段丘）
	重複	不明
構造	形状	楕円形状の礫床に方形状の炉跡が付く形。
	規模	南北長径約2.1m、東西長径約1.5mの楕円形状の礫床の西側に南北径約60cm、東西径約80cmの方形状石囲い炉跡が付く。
	床面	地山を約５cm掘り凹めてからこぶし大の琉球石灰岩礫を密に敷き詰めてある。石材片も見られる。西東隅は岩盤が露頭している。
	炉跡	凝灰岩をレンガ状に切ってきて縁石に使用した方形状石囲い炉跡で、南側は保存良好。東・西も一部残存するが、北は欠損。石囲い内は約７cmの灰層が堆積し、その下は焼土である。
	柱穴	不明
出土遺物	土器	Ｖ類01043。ＡⅦ類とＢ群土器が共伴。
	石器	両刃磨製石斧片２、磨石
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類僅少、イノシシ僅少

Tab.43　第3号礫床穴住居跡

位置	地区	O－５。一部O－６に延びている。（第4段丘）
	重複	礫床の下に49号竪穴住居跡。
構造	形状	やや円形状
	規模	南北長径約3.7m、東西長径約４m
	床面	地山面を約５cm掘り凹めてから、こぶし大の琉球石灰岩礫が敷き詰められている。石材片も混入している。西端は一部岩盤が露頭している
	炉跡	東側に長径約1.5m、短径約１mの楕円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約５cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	礫床内に４本の柱穴検出。口径約15～35cm、深さは21・24・25・27cm。しっかりした楔石が打ち込まれており、一見して柱穴と解かる。
出土遺物	土器	Ⅳ類03035。ＡⅦ類とＢ群土器が共伴。
	石器	両刃磨製石斧ⅢＢ03203、両刃磨製石斧ⅢＢ・Ⅳ、石皿片
	骨製品	イノシシの犬歯有孔製品03295
	貝製品	夜光貝製貝匙03351、螺蓋貝斧03323
	食料残滓	貝類、魚骨少量、イノシシ僅少、ウミガメ、ジュゴン

Fig.30　第6号礫床住居跡実測図

Fig.31　第10号礫床住居跡実測図

Tab.44　第6号礫床住居跡

位置	地区	N－5。一部O－5まで延びている。(第4段丘)
	重複	礫床の下に45・46・47号竪穴住居跡。
構造	形状	隅丸長方形
	規模	東辺長約5.2m、南辺長約3.1m、西辺長約5.0m、北辺長約2.3m。
	床面	地山を約5cm掘り凹めてから、こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めているが、南側は密でない。石材片がかなり混入している。北西隅は岩盤が露頭している。
	炉跡	やや北側寄りに長径約70cm、短径約50cmの楕円形状の焼土。焼土の上及びその周辺に厚さ約3cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	不明
出土遺物	土器	AII類06005、AIV類06029・06030、AV類06052、AVII類d06085、BI類d06111。A群土器が目立つ遺構である。
	石器	磨石
	骨製品	なし
	貝製品	夜光貝製容器06347、06348、ゴホウラ製貝輪06376
	食料残滓	陸産マイマイを中心に多くみられる。イノシシ少量、ウミガメ、イヌ

Tab.45　第10号礫床住居跡

位置	地区	L－5、M－5、僅かにL－4、M－4に延びている。(第4段丘)
	重複	礫床の下は未発掘のため不明
構造	形状	隅丸長方形
	規模	東辺長約5.5m、南辺長約2.0m、西辺長約5.0m、北辺長約2.6m
	床面	地山を約6cm掘り凹めて、こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めている。石材片も混入している。礫床面に岩盤が露頭している所が数ヵ所。東辺は岩盤露頭。
	炉跡	東側に直径約80cmの円形状焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約1cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	礫床の南外に口径約30cm、深さ約17cmの柱穴、穴の中には楔石が廻っている。
出土遺物	土器	AIV類10031・10032。A群土器とB群土器が共伴しているが、A群土器が目立つ。
	石器	両刃磨製石斧IV10210、両刃磨製石斧IIIB
	骨製品	イノシシ歯製品10294、クジラ骨有孔製品10301
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類、魚骨僅少、イノシシ僅少、ウミガメ。

Fig.32　第24号礫床住居跡実測図

Fig.33　第27号礫床住居跡実測図

Tab.46　第24号礫床住居跡

位置	地区	M－6（第4段丘）
	重複	北辺の東半分は25号竪穴住居跡の上にのっている。
構造	形状	長方形
	規模	東辺長約2.4m、南辺長約4.8m、西辺長約2.4m、北辺長約4.7m。
	床面	地山を約5cm掘り凹めて、こぶし大の琉球石灰岩礫を密に敷き詰めている。石材片も混入している。礫床面に数ヵ所岩盤が露頭している。
	炉跡	南側に直径約40cmの円形状の焼土。焼土の上及び周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	不明
出土遺物	土器	AIV類24039、AVI24074。B群土器が主体であるが、A群土器もやや多い。
	石器	小型扁平利器24177、両刃磨製石斧IIIA24191、両刃磨製石斧IV24212、敲石II24230、両刃磨製石斧片
	骨製品	長管骨製品24298。
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類、魚骨僅少、イノシシ僅少、ウミガメ。

Tab.47　第27号礫床住居跡

位置	地区	N－6（第4段丘）
	重複	礫床の下に43・44号竪穴住居跡。
構造	形状	隅丸長方形状で炉跡部分が西へ張り出す。
	規模	東辺長約1.7m、南辺長約4.1m、西辺長約2.8m、北辺長約4.6mの隅丸長方形。礫床の西側に約1.0m×約1.3mの方形状炉跡
	床面	地山を約5cm掘り凹めてから、こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めている。石材片も混入している。東北隅と北西隅は岩盤が露頭している
	炉跡	東・南・西の三辺は石組みで、石組内は焼土。焼土の上には約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	礫床外に11本の柱穴が廻っている。柱穴は口径約20cm、深さ12cm～20cm。楔石のあるのは見えない。
出土遺物	土器	AVII類c27084。B群土器が主体であるが、A群土器も目立つ。
	石器	両刃磨製石斧IIIB27199、両刃磨製石斧IV27207
	骨製品	ジュゴン骨錐27274。
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類、魚骨僅少、イノシシ僅少、ウミガメ、鳥骨、ジュゴン。

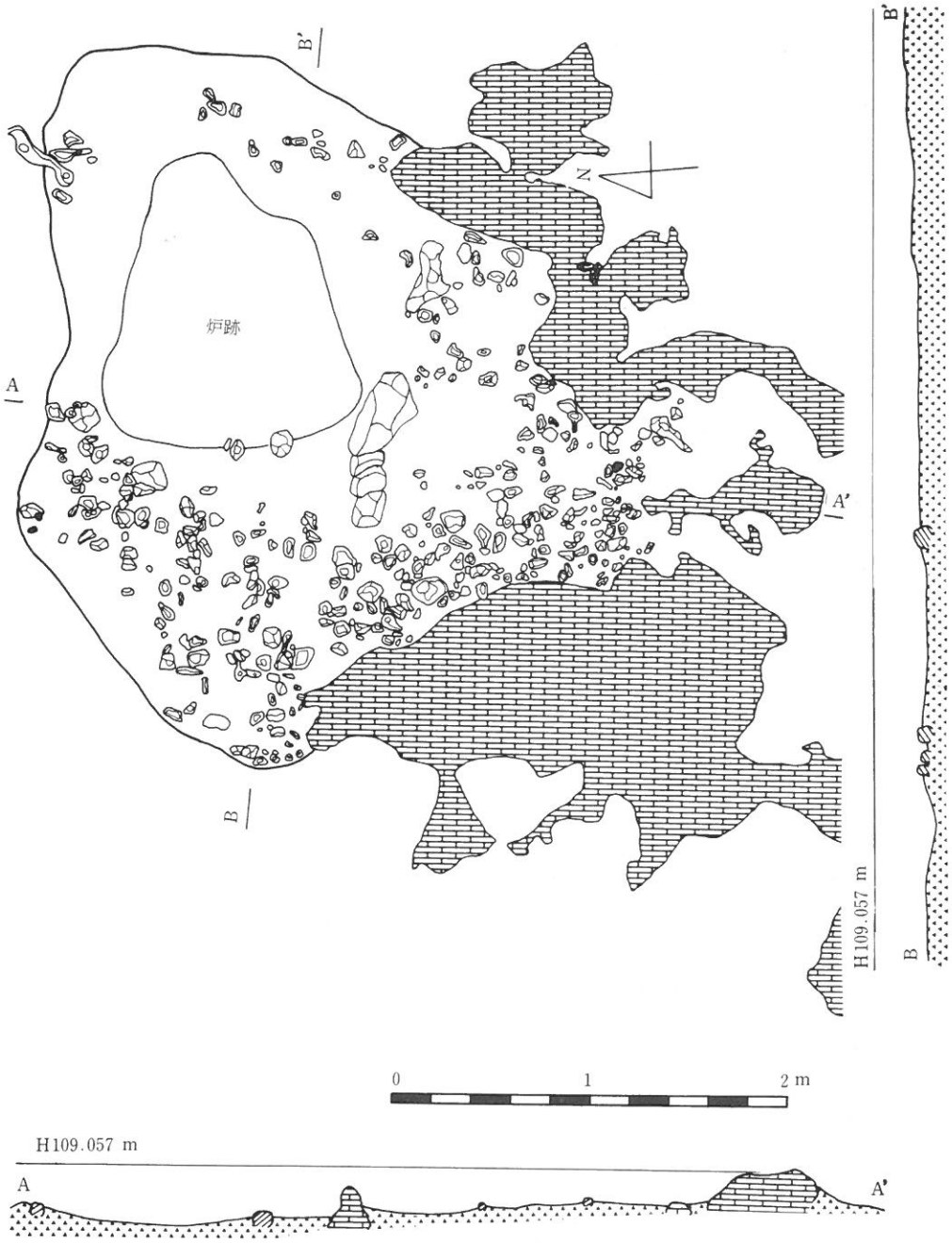


Fig.34　第28号礫床住居跡実測図

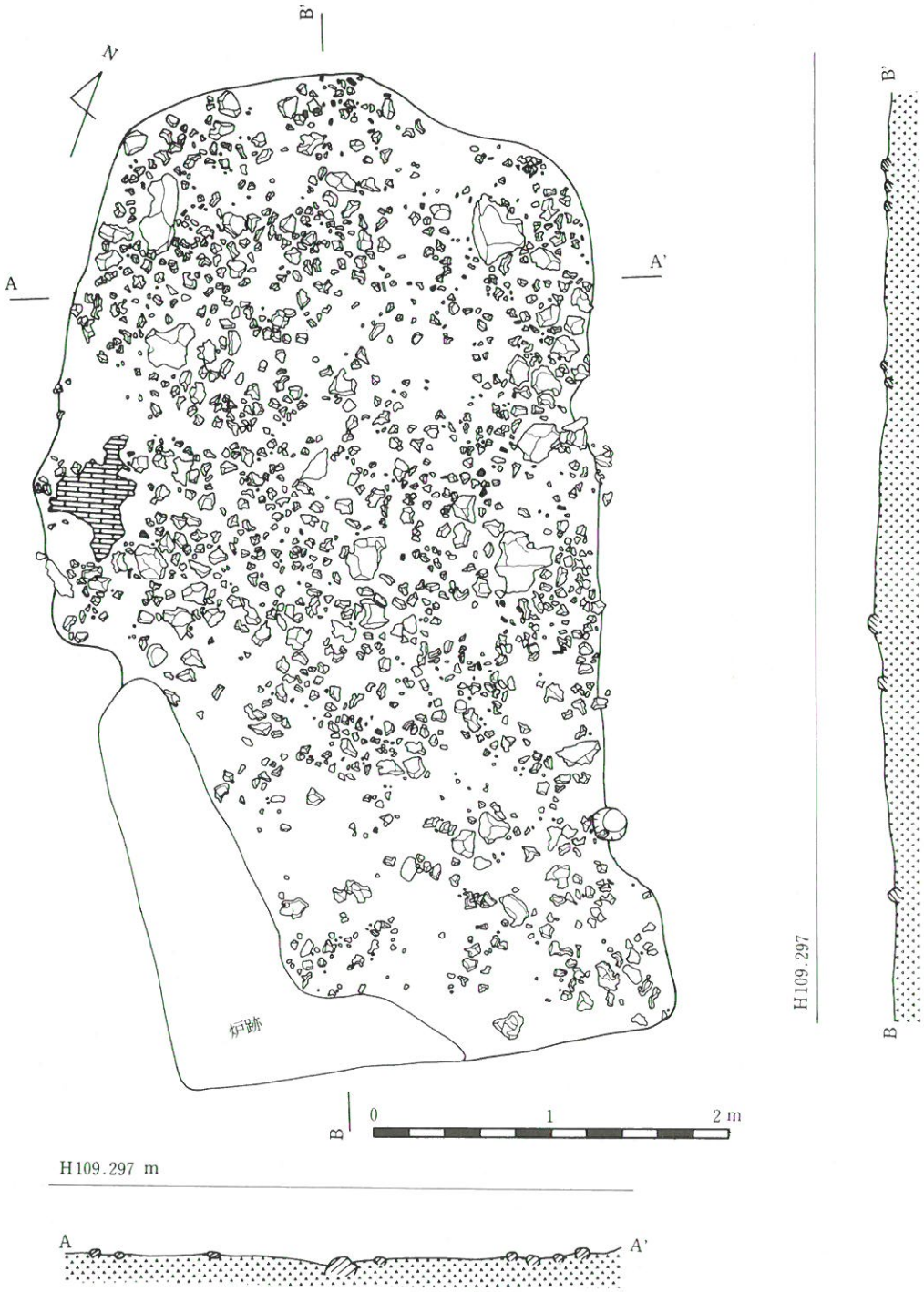


Fig.35　第33号礫床住居跡実測図

Tab.48　第28号礫床住居跡

位置	地区	O－6、僅かにN－6に延びる。(第4段丘)
	重複	礫床の下に48・49号竪穴住居跡。
構造	形状	南東ラインを下底、北西ラインを上底とする台形状。
	規模	下底長約3.7m、上底長約1.8m、高さ約3m
	床面	地山面を約5cm掘り凹めてから、こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めているが、西半分は密で、東半分はまばら。石材片も混入している。南側は岩盤が露頭している。
	炉跡	やや北側寄りに長径約1.5m、短径約1mのやや楕円形状の焼土があり、焼土の上及びその周辺には厚さ約5cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	不明
出土遺物	土器	AVI類28070、AⅦ類c 28081・28082、A群尖底28096、A群土器とB群土器がやや半々。
	石器	両刃磨製石斧II 28187
	骨製品	ジュゴン骨錐28281
	貝製品	貝刃28314、スイジガイ製品28332、ホラガイ有孔製品28339
	食料残滓	陸産マイマイが多くみられる。魚骨少量、イノシシ僅少、リクガメ、ウミガメ、ジュゴン、イヌ

Tab.49　第33号礫床住居跡

位置	地区	P－6、一部O－6に延びている。(第4段丘)
	重複	礫床面下は未発掘であり、下に竪穴が存在するか不明
構造	形状	南北に細長い長方形
	規模	南辺長約2.6m、東辺長約4.8m、西辺長約5.2m、北辺長約2.5m
	床面	地山面を約5cm掘り凹めてから、こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めているが、5ヵ所に岩盤が露頭している。石材片も混入している。
	炉跡	南西隅に三角形状に広がっている。焼土の上及び周辺には、厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	礫床外の東と南に各1本。東のは口径20cm、深さ25cm。南のは口径20cm、深さ28cm、楔石が廻っている。
出土遺物	土器	AⅦ類が僅かとB群土器が少量
	石器	なし
	骨製品	なし
	貝製品	なし
	食料残滓	貝類、魚骨なし、ウミガメ、イノシシなし

Fig.36　第34号礫床住居跡実測図

Fig.37　第52号礫床住居跡実測図

Tab.50　第34号礫床住居跡

位置	地区	P－5、P－6に広がる。(第4段丘)
	重複	礫床の下に50・58竪穴住居跡あり。
構造	形状	南北に長い楕円形状
	規模	南北長径約7m、東西長径約3.5m
	床面	地山面を約5cm掘り凹めてから、こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めているが、東側は密でない。石材片もかなり見られる。岩盤が4ヵ所露頭。北東隅は岩盤。中央部に土器集中。
	炉跡	南端部に30～60cmの楕円形状の焼土面が5つ並んで検出。焼土の上及びその周辺には厚さ約3cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	礫床外に3つの柱穴検出。北と東の柱穴は口径約20cm、深さ約25cm、楔石が廻っている。
出土遺物	土器	AⅦ類b 34079・34080、BⅢ類a 34119～34122、BⅢ類b 34123 BⅣ類a 34135～34139、BⅣ類b 34140～34142、BⅣ類c 34143、BⅣ類a 34144～34146。
	石器	両刃磨製石斧ⅢB 34200、両刃磨製石斧片2、磨石
	骨製品	骨針34258、ジュゴン製ヘラ状製品34286、イノシシ犬歯製品34293。
	貝製品	スイジガイ製利器34328、ホラガイ有孔製品34364、ホラガイ系利器34342、ヤコウガイの貝匙34353他1点、未製品34356。
	食料残滓	陸産マイマイが多くみられる。魚骨少量、イノシシ少量、ウミガメ、ジュゴン。

Tab.51　第52号礫床住居跡

位置	地区	M－4 (第3段丘)
	重複	51号礫床遺構の上にのっている。下に57号竪穴住居跡。
構造	形状	やや隅丸長方形状で炉跡部分が突き出る。
	規模	東西最大長約3.5m、南北最大長5.5m。
	床面	こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めている。石材片も多く混入している。
	炉跡	南側に突き出た部分に長径1.2mの円形状の焼土。焼土の上及びその周辺には厚さ約2cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	東側礫床外に口径約20cm、深さ約20cmの柱穴が1本。あとは不明。
出土遺物	土器	AⅣ類52026、AⅤ類52063。A群土器とB群土器が共伴しているが、A群土器が目立つ。
	石器	両刃磨製石斧ⅢA52188、磨石
	骨製品	イノシシの尺骨加工品52288、ジュゴンの未製品52302。
	貝製品	ホラガイ系利器52343、貝刃52309、スイジガイ製利器52329。
	食料残滓	貝類、魚骨少量、イノシシ僅少、ウミガメ1点。

Fig.38　第55号礫床住居跡実測図

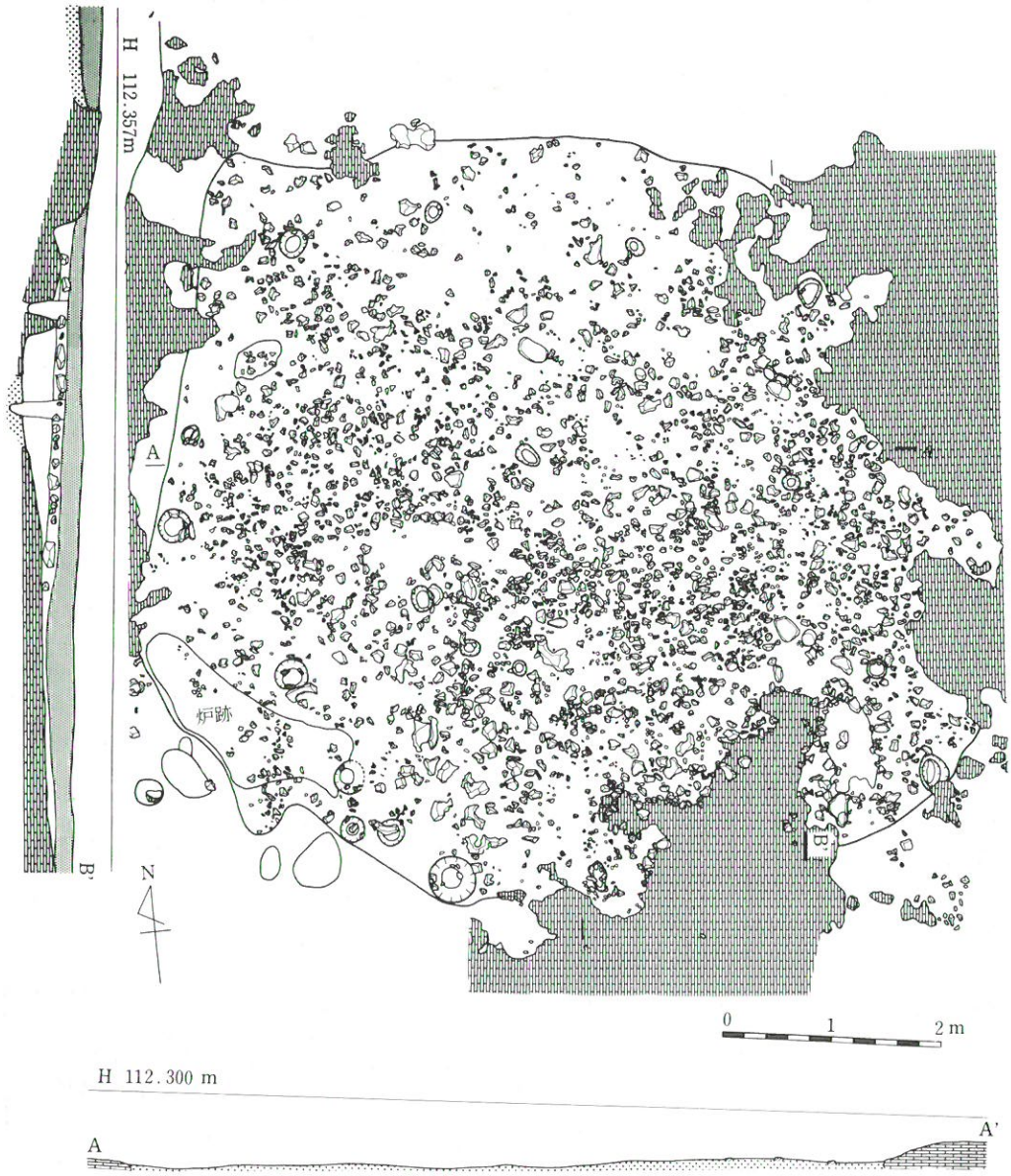


Fig.39　第56号礫床住居跡実測図

Tab.52　第55号礫床住居跡

位置	地区	M－0（第1段丘）
	重複	炉跡部分が60号竪穴住居跡を切っている。
構造	形状	長方形状
	規模	東西最大長約2.7m、南北最大長約4.1m。炉跡が東北隅に突出している。
	床面	客土（赤褐色土）の上にこぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めている。西側は岩盤が露頭している。
	炉跡	南辺長約0.9m、西辺長約1.1m、北辺長約1.0m、東辺長約1.1mの方形。凝灰岩を幅約20cm、高さ約10cmのレンガ状に切って並べている石囲い炉跡。炉内は約15cmの灰層が堆積しており、その下は焼土。
	柱穴	不明
出土遺物	土器	AV類55049、AVI類55072。B群土器が主体であるが、A群土器も多い。B群台付土器55160
	石器	片刃磨製石斧、磨石
	骨製品	骨針55247、55250、55262、55263、ジュゴン製骨錐55277、イノシシ尺骨製品55287。
	貝製品	貝刃55310、55312、その他1点。
	食料残滓	ウミガメ、ジュゴン、イルカ類。

Tab.53　第56号礫床住居跡

位置	地区	M－2、N－2、M－1・N－1にも一部延びている。（第2段丘）
	重複	なし
構造	形状	やや円形状
	規模	東西最大長約7.5m、南北最大長約7.0m
	床面	地山を約5cm掘り凹めてから、こぶし大の琉球石灰岩礫を敷き詰めている。石材片も多く混入している。西・東・南半分は岩盤が露頭している。
	炉跡	南西端に長径約2.1m、短径約50cmの長楕円形状に焼土。焼土の上及びその周囲には、厚さ約1cmの灰層が堆積していた。
	柱穴	礫床の縁沿いに15本の柱穴が廻り、中央附近にも4本見られる。口径15～40cm、深さ15～30cm。8本には楔石が見られた。
出土遺物	土器	AI類56003、AIII類56019、AIV類56041、AVII類e 56089、A群平底56094、BIII類b 56125、BIV類f 56155。B群土器が主体であるが、A群土器も多い。
	石器	両刃磨製石斧IIIA 56192、IIIB 56198、両刃磨製石斧VI56215、両刃磨製石斧片2
	骨製品	魚骨針56241、骨針56254、56256、56257、56259、ヘラ状製品56267。
	貝製品	スイジガイ製品56336、夜光貝製匙56357、リスガイ製品。
	食料残滓	貝類、魚骨がみられる。イノシシ少量、ウミガメ。

Fig.40　第２段丘と第３段丘の間の土留め石積みの平面・断面図と第53号礫床遺構

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器

大量に検出されたが、口縁部だけを分類してTab.54に示した。口縁部破片だけで8,007個あり、これを大きく二群に分類し、さらに各群の中で細分類した。

1　A　群　土　器

厚手で焼成不良で脆弱な暗褐色及び褐色土器。素地はやや荒く、石英などの砂粒が混和されているのと、珊瑚・石灰岩などの荒細片が混和されているのがあるが、後者がやや多い。器形は深鉢形が多く、僅かに壺形が見られる。器面は剝離しているのが多く、器面調整痕が残っているのは少ない。

(1)　第Ⅰ類（Fig.41の57001～56003）

萩堂式土器である。僅かに5点検出された。5点とも山形口縁で、素地に石英などの砂粒が多く混和されている。焼成不良で脆弱な深鉢形土器である。57001は口縁部に2組の二叉連点文が廻り、頸部に二叉による鋸歯文が描かれている。60002・56003はいずれも二叉沈線が見られる。

(2)　第Ⅱ類（Fig.41の18004～18012）

二叉列点文が描かれている土器で、口縁部が三角形状に肥厚する。素地には石英などの砂粒が多く混和されており、ザラザラしている。器面調整痕は見られない。18004は口径約8.3cmの壺形土器と考えられる。口縁部に二叉沈線が廻り、頸部には縦の二叉列点が描かれている。06005は口縁部に縦と横の二叉列点が描かれている。縦の二叉列点が二組並んで描かれており、横位に廻る二叉列点を区画する文様になると考えられる。08006・50007は口縁及び頸部に二叉列点が描かれているタイプで、21008～18012は口縁だけに描かれているタイプである。

(3)　第Ⅲ類（Fig.41の41013～23018、Fig.42の56019～25024）

縦長方形状肥厚口縁で、5～8㎜幅の箆で横捺刻文が描かれている土器。口唇部は平坦に仕上げられている。素地に石英などの砂粒を混和しているものと、珊瑚・石灰岩などの荒細片を混和しているものが見られるが、いずれも厚手で脆弱な土器である。横捺刻文は口縁外面と口縁直下に描かれているのが多いが、口唇部に描かれているのも見られる。器形は深鉢形と考えられる。

41013は口径約12cmで、口縁及び口縁直下に幅広の横捺刻文が描かれている。口縁の横捺刻文は押引手法で描かれているので横捺刻文が連続している。内面には貝殻条痕が横走している。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。18016は口径約12.8cmの壺形に近い小型の深鉢形土器である。頸部でくの字状に折れ、胴部がやや脹む器形である。口縁と口縁直下に横捺刻文が描かれている。器面調整痕は残っていない。珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。25024は口縁と口唇に横捺刻文が描かれている。口縁の横捺刻文は押引き手法で描かれ、文様が連続している。素地には石英などの砂粒が混和されている。

(4) 第IV類（Fig.42の18025～03035、Fig.43の08036～11042）

横長方形状肥厚口縁土器で、3～5㎜幅の篦で横捺刻文が描かれている。III類と区別しにくいのもあるが、基本的には逆L字状に横に延びる肥厚口縁である。口唇部は平坦に仕上げられている。素地、焼成、器形等はIII類とほとんど同じである。文様は口縁外面に横捺刻文を廻らすのが基本文様であるが、横捺刻文のほかに斜沈線が登場する。18025～03035までは横捺刻文だけで、08036～11042は横捺刻文と斜沈線が組み合わされた文様が描かれている。

18025は口径約15.6cmの深鉢形土器である。外面はヘラ削りの器面調整でやや滑らかにされ、内面には貝殻条痕が見られる。口縁外面には押引手法による深い横捺刻文が施文されている。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が多く混和されている。18027～06029は口縁と口縁直下に横捺刻文を廻らすもので、06030～32033は口唇にも施文されるものである。32033は刺突の状態で止まって横捺へ移行していない。50034は縦位の横捺刻文が加わるタイプである。

08036は口径約25.5cmの深鉢形土器である。口縁部は若干外反するが、胴部の張りのない器形である。口縁には横捺刻文、頸部には細沈線による綾杉状文が施文されている。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。内面には貝殻条痕が僅かに残っているが、外面は混和材が脱落してアバタ状を呈しており、調整痕は残っていない。13037～18040は口縁部に横捺刻文、頸部に斜沈線を施文したものである。56041～11042の頸部には鋸歯文を2つ組み合わせて網目文を表現している。

(5) 第V類（Fig.43の01043～40048、Fig.44、Fig.45の08065～54069）

口縁部が三角形状に肥厚する土器で、文様は横捺刻文だけのと、横捺刻文と沈線文の組み合わせで表現されているものがある。素地はIII・IV類と同じで、石英などの砂粒が混和されているのと、珊瑚・石灰岩などき荒細片が混和されているのが見られるが、後者が多い。

01043～40048は口縁と口縁直下に横捺刻文が施文されている。いずれも深鉢形土器と考えられる。55049～15053は口縁だけに横捺刻文が施文されている。29054～12058は横捺刻文が押引手法で描かれ、文様が連続している。やや薄手で、山形口縁を示す土器と考えられる。

29054は口径約11.5cmで、山形が4つ付く壺形土器と考えられる。山形は瘤状に粘土を貼付

Tab. 54　土器（口縁部）出土一覧

遺構	層	型式	A群土器									B群土器				計
			I	II	III	IV	V	VI	VII a	VII b	VII c	I	II	III	IV	
1号	II						6		2	1	1	2	9		13	34
2号	II					1				5		1			3	10
3号	II					3				7	6	8	2		7	33
4号	II								2	1			3		2	8
5号	II		1			1			7			3	5		9	26
6号	II			1	2	4	1	1	7	5	1	23	17		21	83
7号	II						2	1		4	2	18	22	1	20	70
〃	〃（床面）									1		1	2			4
8号	II			1	3	4	7		4	9	2	7	10	3	28	78
〃	〃（床面）											1				1
9号	II		1			1	3		3			1			4	13
10号	II					4	3		1	6	1	4	3	3	15	40
11号	IV			1	4	2	6		5	6	2	40	38	3	31	138
〃	〃（床面）											3		1		4
12号	II			2	3	2	5		2	24	1	34	49	12	108	242
〃	〃（床面）								1	2	2	2	10	1	2	20
13号	II			2		1	3	3	8	12	3	35	18	7	85	177
〃	〃（床面）									2			3	3	8	16
14号	III						1		1	4	1	11	7	4	46	75
〃	〃（床面）											1			4	5
15号	II				1	2	1	1	5	2	4	2	11	5	3	37
〃	〃（床面）											1		2	2	5
16号	II								2			4	3	1	15	25
17号	II								3					1		4

遺構	層＼型式	A群土器									B群土器				計
		I	II	III	IV	V	VI	VII a	VII b	VII c	I	II	III	IV	
18号	II		1	6	10	11	3	32	65	23	252	214	23	693	1,333
〃	〃(床面)							9	7		5		4	27	52
19号	II								1		5	4		5	15
〃	〃(床面)							1	1	2	5	6		1	16
20号	II				1	2		1	3	1	8	27	2	47	92
〃	〃(床面)										4		1	16	21
21号	II		2		1	2		8	3	1	16	21	6	87	147
〃	〃(床面)										2	3		4	9
22号	II					1		3	10		19	19	4	109	165
〃	〃(床面)									1				5	6
23号	II			3		3	1	14	22	10	60	55	6	290	464
〃	〃(床面)								3	1	8	4		13	29
24号	II		1		1	1		5	7	3	23	19	1	42	103
25号	II			1		1		4	6	4	23	22		91	152
〃	〃(床面)								1					10	11
26号	II									6				10	16
27号	II			1	1	2	1	8	6		30	26	2	45	122
28号	II			2	1	1		3	6	3	4	2		18	40
29号	II					1					2	4		2	9
30号	II					1		1	1	1	4	2	1	21	32
31号	II					2		2	5		10	4		51	74
32号	III				1			3	14		19	15	1	28	81
〃	IV							1		4	13	4		9	31
〃	V(床面)							5			1	3		13	22

遺構	層	型式	A群土器									B群土器				計
			I	II	III	IV	V	VI	VII a	VII b	VII c	I	II	III	IV	
33号	II								1	1		3	3		14	22
34号	II			1	1	1	2	1	2	8		20	34	2	129	201
35号	III								10	22	13	42	26		71	184
〃	〃(床面)									1	2	15	8		39	65
36号	III							1	5	18	2	33	34	1	28	122
〃	〃(床面)									4	1	5	2		14	26
37号	III									9	2	13	8		47	79
〃	〃(床面)									2		2			4	8
38号	VII														2	2
〃	〃(床面)				1	1	1			3	1	6	8		10	31
39号	VI					1			1	3		7	16		26	54
40号	V					3	4		22	38	7	60	46	4	117	301
〃	〃(床面)					3	4		1			4	8		3	23
41号	III					1										1
〃	〃(床面)					1			1						1	3
42号	III					1								1		2
〃	〃(床面)				1				3	5	2	5			10	26
43号	III												3		5	8
〃	〃(床面)											3			2	5
44号	III								4	10	4	11	7		33	69
〃	〃(床面)									1	1					2
45号	III					1				9		6	14		6	36
〃	〃(床面)									1		1	2		2	6
46号	III						1		2	1	1	8	10		5	28
〃	〃(床面)								1	1	1	1				4

遺構	型式 / 層	A群土器									B群土器				計
		I	II	III	IV	V	VI	VII a	VII b	VII c	I	II	III	IV	
47号	III					3		1	4	2	28	26		54	118
〃	〃(床面)												3	7	10
48号	III					1			1	1		2		26	31
49号	III				1	1			4		1	1		3	11
50号	III				1	2	1	1	4	1	14	38	3	50	115
51号	II			1		2					6	5		29	43
52号	II	1			4	3			2	2	3	1	4	15	35
53号	II					2		2	2	8	2	4		34	54
54号	II										2	1		3	6
55号	II				2	3	2	9	14	2	32	24	5	77	170
56号	II.	1		4	5	3	1	9	30	11	53	28	5	201	351
57号	III			1	1				1	1	1	4	1	16	26
〃	〃(床面)								1			1		8	10
58	VI				1				2		3			4	10
〃	〃(床面)								3					4	7
59	III(床面)									1	3	5		3	12
60	IV	1		1	1	4		4	21		12	8	1	80	133
〃	〃(床面)							1	2		1	2		3	9
61	II						1	1	1	2	1	1	7	1	15
P－4	II					1			1	3	1	32	10	1	49
P－10	II・III			2	4	10		16	49	11	132	131	42	897	1,294
合計		5	12	38	74	113	18	250	531	168	1,255	1,209	187	4,147	8,007

したものである。素地には珊瑚・石灰岩などの細片が多量に混和されている。12058は口径約10cmで、二つ一組の山形が4つ付く壺形土器と考えられる。山形は口縁に瘤状の粘土を貼付して表現したものである。素地には石英などの砂粒が混和されている。

25059～54069は沈線文の登場するタイプである。25059～08064は口縁に横撚刻文、頸部に沈線文が施文されている。25059は口径約13cmの深鉢形土器と考えられる。頸部は縦位と横位の横撚刻文で区画し、その中に斜沈線を描いたものである。横撚刻文は先端の丸い篦を使い、押引手法で描かれている。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が混和されている。15061は口縁と口縁直下に横撚刻文、頸部に複数沈線による鋸歯文が施文されている。文様はシャープで、器面調整もよく滑らかである。素地には石英などの砂粒のほかに雲母が見られる。31062～08064も頸部に数本の沈線による鋸歯文が施文されているが、沈線がやや幅広の施文具で描かれている。

08065は口径14cm、胴径21cm、高さ約30cmの壺形土器である。口縁部には斜沈線が廻り、頸部には3列の逆方向の斜沈線を廻らして綾杉状の文様を表現している。綾杉文の下には2列の横撚刻文が廻っている。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。器面調整痕は残っていない。08066・08067は08065とほぼ同じタイプの壺形土器と考えられる。幅約2㎜の幅広沈線で口縁部に斜沈線、頸部に綾杉文を廻らしている。綾杉文の下には1列の短沈線が描かれ、08067にはさらにその下に縦の沈線が見られる。素地も08065と同じである。54069は頸部に縦の貼付凸帯がある土器で、凸帯上とその両横に横撚刻文が描かれている。頸部は数個の縦の貼付凸帯で区画され、凸帯と凸帯間は横撚刻文と斜沈線で埋められているものと考えられる。

(6) 第VI類（Fig.45の28070～13075）

口縁部が丸く肥厚する土器で、文様は横撚刻文が描かれている。28070は口径8cmの壺形土器と考えられる。頸部に横撚刻文が施文されている。珊瑚・石灰岩などの荒細片が混和さている。11071～13075は深鉢形土器と考えられる。11071は頸部に3列の横撚刻文が廻っている土器で、大山式土器に近い。素地には石英などの砂粒が混和されている。50074は口径10cm、胴径12cm。口縁と頸部に横撚刻文が施文されている。頸部の横撚刻文は押引手法で文様が連続している。器面調整痕は外面には見られないが、13075は内面に貝殻条痕が横走している。

(7) 第VII類（Fig.46、Fig.47の56089、12090）

A群土器の中で、無文土器を第VII類土器とした。この土器を口縁部の形態によってつぎのようにa～eに細分した。なお、集計表ではa、b→a、c・d→b、e→cとなっている。

a 縦長方形肥厚口縁（Fig.46の14076、13077）

いわゆるカヤウチバンタ式口縁の土器である。14076は口径21.5cmの深鉢土器である。肥厚

部は粘土帯を貼付したもので、有段部分が不整形のままになっている。素地には石英などの砂粒が混和されている。器面調整痕は外面には見えないが、内面には貝殻条痕が横走している。13077は口径約22cmの深鉢形土器で、有段部分が丁寧に仕上げられている。石英などの砂粒が多量に混和されている。

b　**横長方形肥厚口縁**（Fig.46の45078・34079）

口縁部が逆Ｌ字状に肥厚するもので、口唇部は平坦に仕上げられている。45078は口径24cmの深鉢形土器で、胴部が僅かに張る。口縁直下に直径７㎜の孔が穿かれている。孔の大きさから補修孔とは考えられないので、口縁直下に何個が廻っているものと考えられる。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。34079は口径15.8cmの小型の深鉢形土器である。内外面とも凹凸が多く器面調整は悪い。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片のほかに雲母が見られる。

c　**三角状肥厚口縁**（Fig.46の34080～27084）

いわゆる字佐浜式口縁の土器である。34080は口径21cmの深鉢形土器で、有段部の稜が明瞭である。素地には珊瑚、石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。28081は口径18cmで口が開く深鉢形土器である。珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。

28082～27084は山形口縁土器で、いずれも石英などの砂粒が多量に混和されている。28082は口径28.5cmで口唇部に山形が貼付されている。50083は口縁外面から口唇まで粘土を貼付して大きな山形を表現している。27084は口縁外面と口唇上まで小さな山形が貼付されている。

d　**丸形状肥厚口縁**（Fig.46の06085～49088）

口縁部が丸形に肥厚するタイプで、ｃタイプの肥厚に近い。06085は口径10cmの小型深鉢形土器である。頸部がしまり、胴部が張る器形で、壺形に近い。内面には貝殻条痕が横走している。素地には石英などの砂粒が多く混和されている。49086～49088は最大径が口縁にある同タイプの深鉢形土器で、49号竪穴からの一括遺物である。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。49086は口径22.8cm。49087・49088は復元した資料である。底部は欠損しているが、素地や焼成等から小型の平底と考えられる。49087は口径22.3cm、同径20cm、高さ約20cm。49088は口径22.2cm、同径21.4cm、高さ約25cm。いずれも器面調整痕は剝離して残っていない。

e　**無肥厚口縁**（Fig.47の56089・12090）

口縁部が肥厚しない土器である。Ａ群土器は肥厚口縁が多く、このタイプは非常に少ない56089は口径約29cmの深鉢形土器である。素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。12090は口径３～４cmのミニチュア土器の破片と考えられる。珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。

(8) 把　手（Fig.47の B091）

小型の横長把手が１点検出された。平面で見ると長軸４～５cm短軸１cmの楕円形で、断面で見ると高さ７㎜の三角形を呈している。素地には石英などの砂粒が多量に混和されている。

(9) 底　部（Fig.47の40092～18097）

平底が50点、尖底が３個検出された。検出された平底はすべてＡ群土器であるが、Ａ群土器には尖底も僅かに見られる。40092は底径５cmで、60093は底径3.5cmである。底径が５cm前後のが多い。56094・57095は上げ底状の平底である。40092～57095とも素地には珊瑚・石灰岩などの荒細片が多量に混和されている。

28096・18097は尖底である。18097は器壁が薄いことから小型の深鉢か壺の底部と考えられる。素地には石英などの砂粒が多量に混和されている。

(10) その他の土器（Fig.47の07098～08100）

07098・07099はみみずばれ文のあるいわゆる喜念Ｉ式土器と考えられる。07098は三角状に肥厚する口縁で、頸部に不規則な斜沈線が描かれ、頸部直下に細隆線文と刺突文が組み合わされるいわゆるみみずばれ文が見られる。07099は横位のみみずばれ文２本と縦位のみみずばれ文１本があり、その中を斜沈線で埋めている。07098・07099とも素地に長石・雲母などの鉱物が多量に混和されており、手で触れるだけで鉱物が脱落する。同一個体の破片と考えられる。

18100は特殊土器である。片口状に面取りされた口縁で、おそらく楕円形状の口縁をもつ土器と考えてられる。楕円形の長軸両端が面取りされて縦稜をもつものと考えられる。口縁外面には横位の横捺刻文が２～３列描かれ、口唇部にも１列描かれている。また、縦稜には縦位の横捺刻文が描かれている。

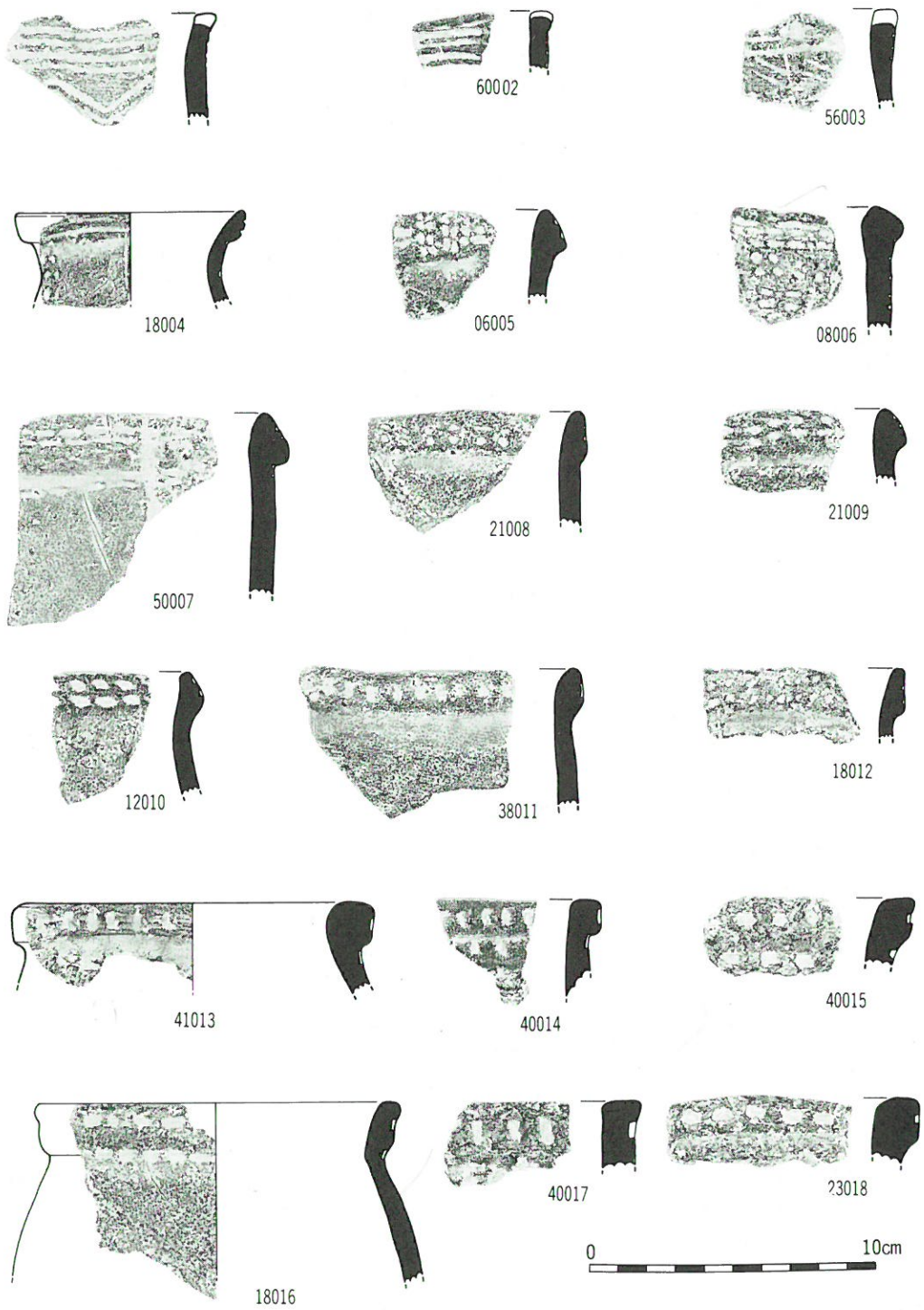


Fig.41（PL.30）　A群土器　第Ⅰ類（57001～56003）　第Ⅱ類（18004～18012）　第Ⅲ類（41013～13018）

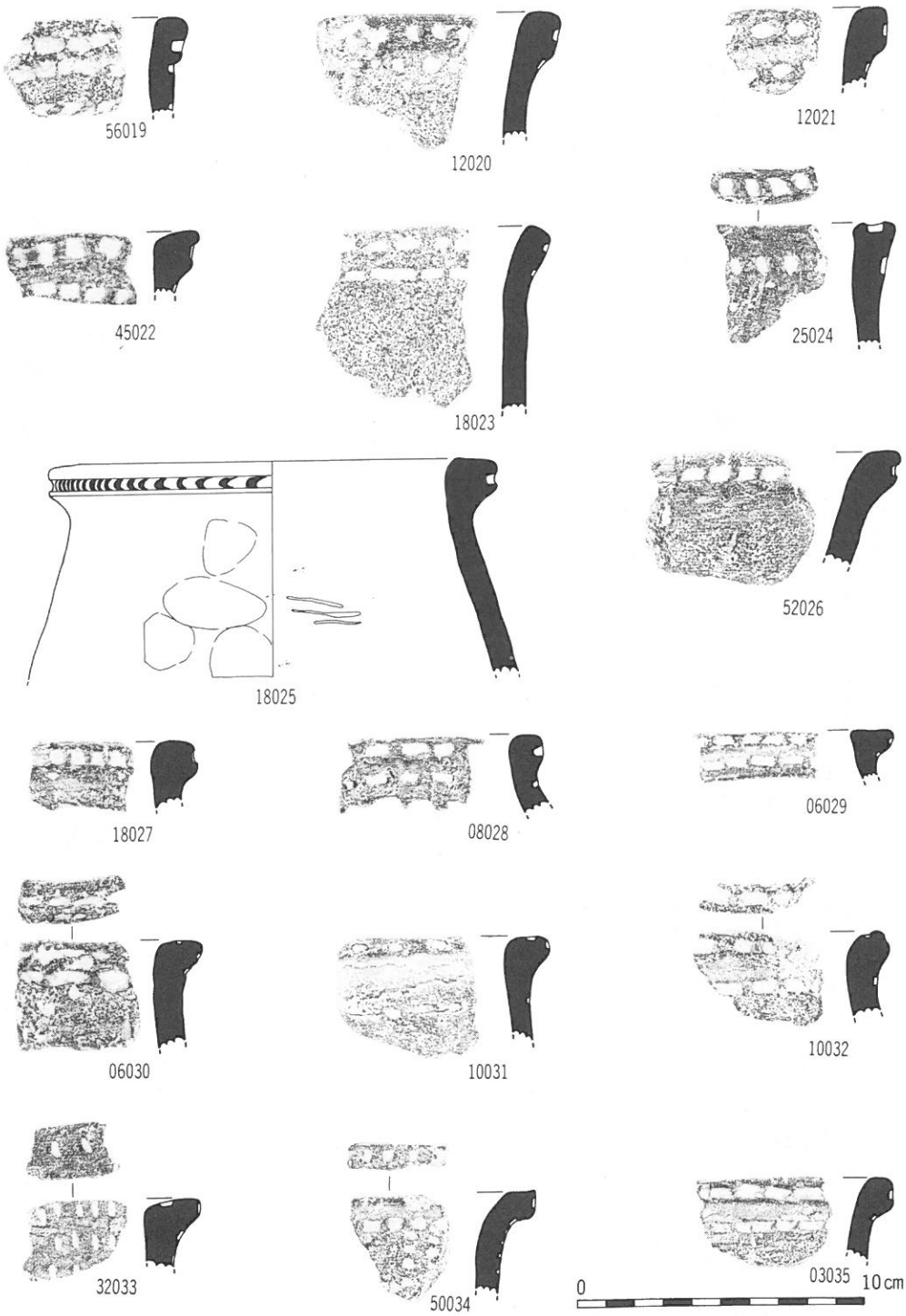


Fig.42（PL.31）　A群土器　第III類（56019～25024）　第IV類（18025～03035）

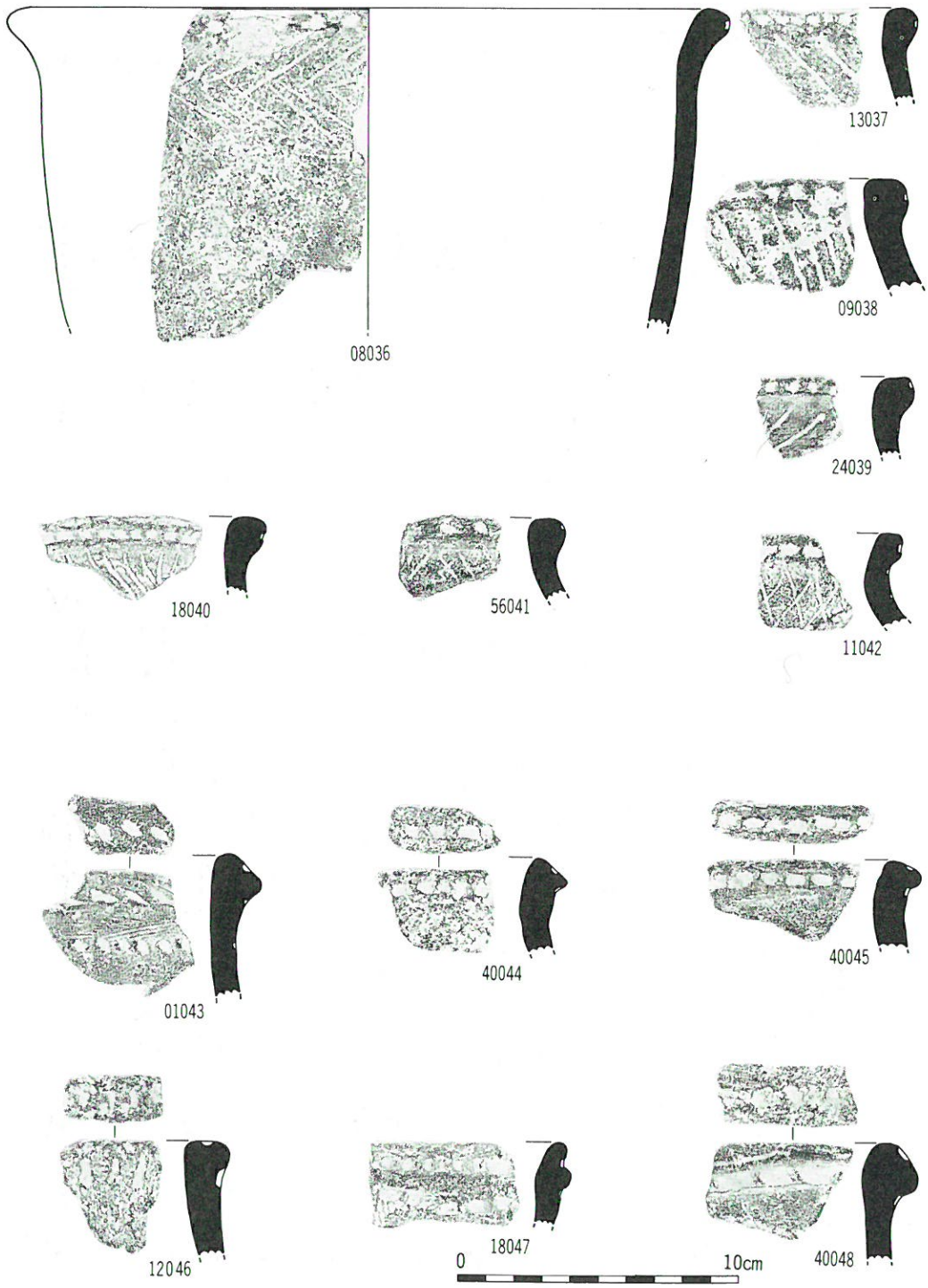


Fig.43 (PL.32)　　A群土器　第Ⅳ類（08036～11042）　第Ⅴ類（01043～40048）

Fig.44（PL.33）　A群土器　第Ⅴ類（55049～08064）

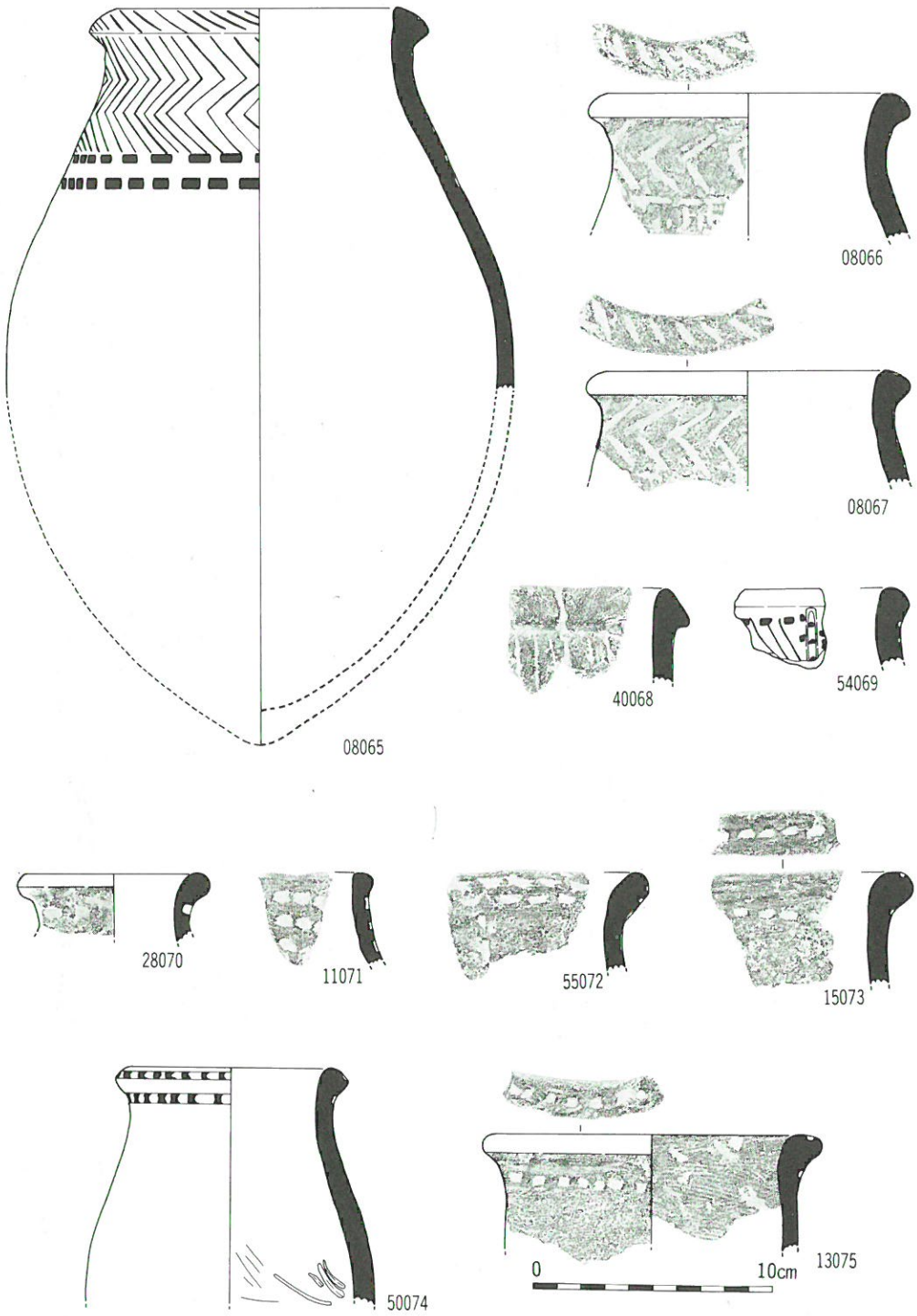


Fig.45（PL.34）　A群土器　第Ⅴ類（08065～54069）　第Ⅵ類（28070～13075）

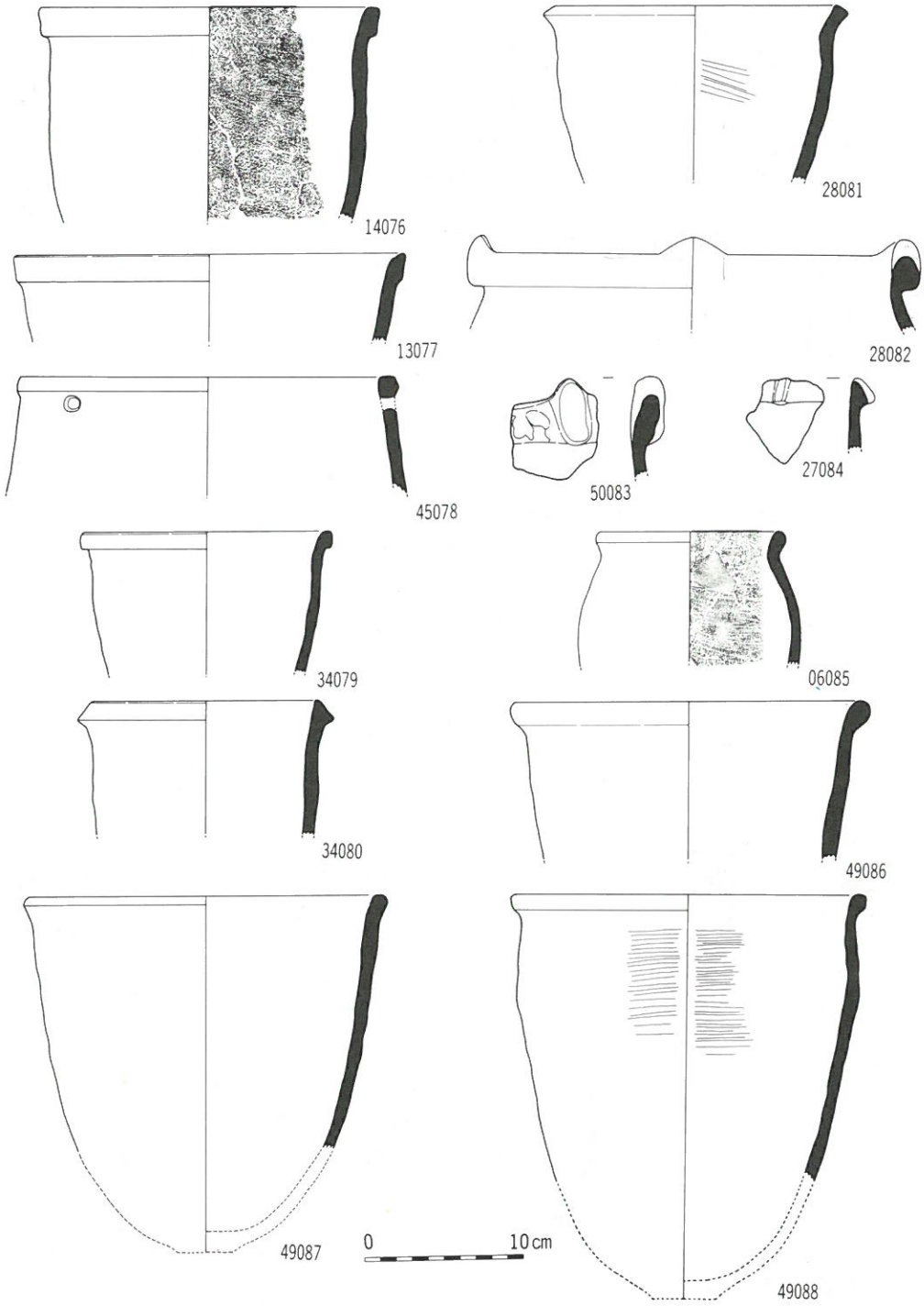


Fig.46 (PL.35)　A群土器　第VII類a (14076、13077) 06085～49088) 第VII類b (45078、34079)　第VII類c (34080～27084) 第VII類d (06085～49088)

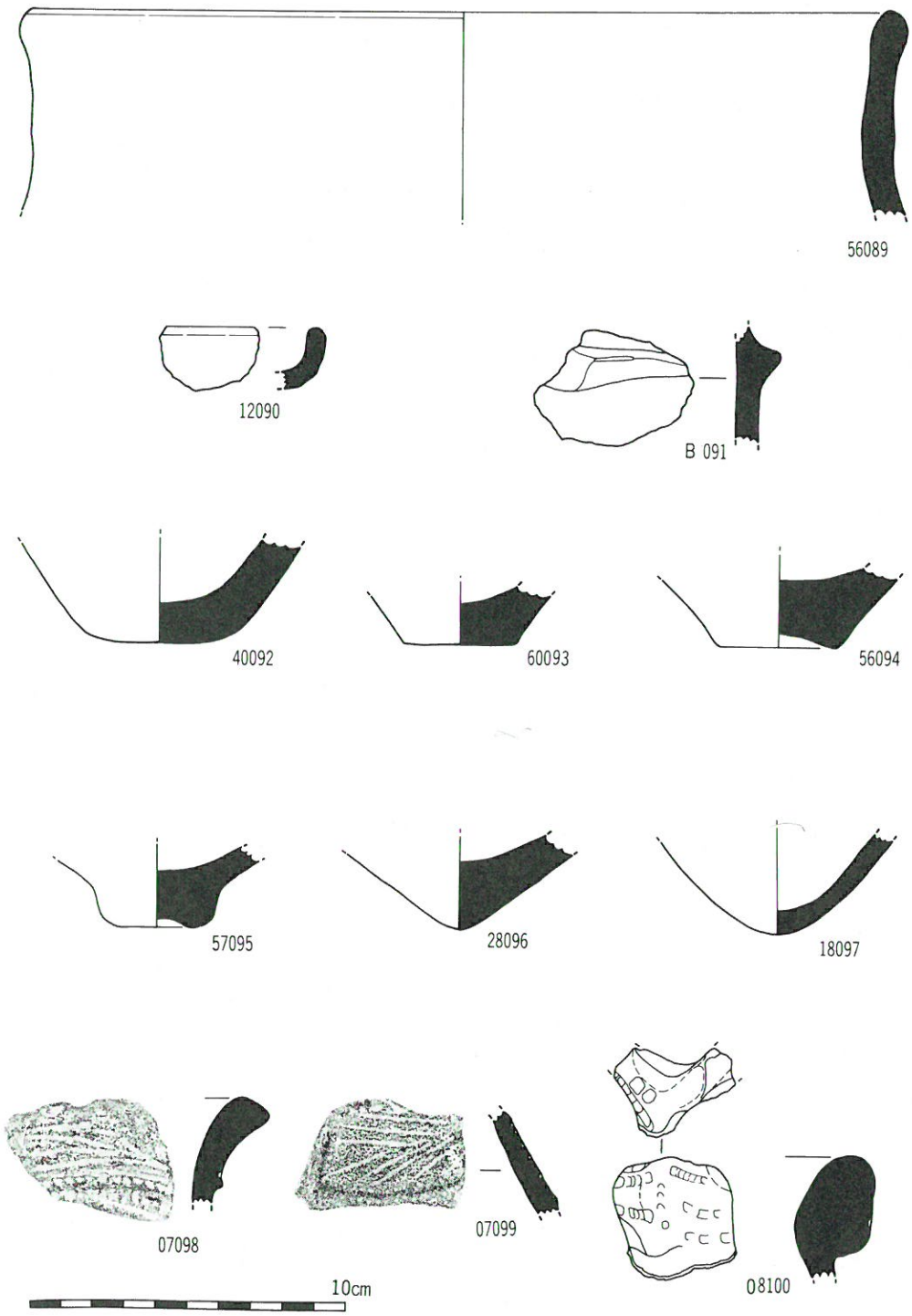


Fig.47（PL.36）　A群土器　第Ⅶ類e（56089、12090）　把手（B091）　底部（40092～18097）
喜念Ⅰ式（07098、08099）　特殊土器（08100）

2　B　群　土　器

出土土器の約82%はこのB群土器であり、本遺跡を代表する土器である。このB群土器は薄手で焼成良好な赤褐色土器及び黄褐色土器である。素地は微粒子で、珊瑚・貝殻などの白色微細片が混和されているのも見られるが、多くは混和材が見られない。珊瑚・貝殻などの白色細片はA群土器に比して細かく量も少ない。器形は口縁部は外反し、頸部で締り、胴部が張る尖底深鉢形土器が主体で、壺形土器や浅鉢形土器が僅かに共伴している。文様は細沈線文、横捺刻文等が僅かに見られるが、殆どは無文である。器面調整は外面にはヘラ削りやヘラ磨き（磨研）があり、内面には貝殻条痕が見られる。しかし、土壌（酸性で硬い土壌）の関係で器面が剝離し、調整痕の残っていないのが多い。ヘラ磨き痕の残っている胴部破片は452片である。

口縁部を肥厚させる器形は、A群土器の手法が存続している部分だと考えられるので、口縁部の形態により、つぎの4類に分け、各類をさらに細分した。

(1)　第Ⅰ類

口縁が三角状に肥厚する、いわゆる宇佐浜式口縁である。このⅠ類はA群土器の宇佐浜式口縁（AⅦ類b）と比べてあまりくずれていない。深鉢形土器の器形は胴部の張りが弱く、A群土器とB群Ⅳ類土器の中間的様相を呈している。深鉢形土器のほかに壺形土器が共伴している。このⅠ類土器を器形によりa～dに細分した。

a　平口縁の深鉢形土器（Fig.48の32101～36106、Fig.49の15116）

口縁部は外反し、頸部が締るが、胴部の張りがやや弱い。口径は17～25cm。

b　山形口縁の深鉢形土器（Fig.48の18107～32109）

口唇部に2つ1組の山形が4組ぐらい付くものと考えられる。これは九州縄文晩期の土器に見られるリボン状突起の系統(注1)と考えられる。リボン状突起には1つの山形をV字状に抉って2つの山形（リボン状）に表現したのも見られる。

c　山形口縁の壺形土器（Fig.48の46110）

口唇部に2つの山形（リボン状）突起が2～3組付くものと考えられる壺形土器。

d　平口縁の壺形土器（Fig.48の06111～47115）

口径9cm前後の壺形土器。47115で見ると胴部がかなり脹らむタイプである。口縁部から頸部に縦位の隆線文が貼付されそのが見られるが、喜念Ⅰ式土器の系統と考えられる。

(2)　第Ⅱ類

口縁部縦長方形状に肥厚する、いわゆるカヤウチバンタ式口縁である。このカヤウチバンタ式口縁はA群土器のカヤウチバンタ式口縁（AⅦ類a）に比べてかなりくずれており、つぎのⅢ類土器へと変化していくと考えられる。よって、くずれていない宇佐浜式口縁をⅠ類とし、く

ずれたカヤウチバンタ式口縁をII類とした。器形は深鉢形土器で、これをａ、ｂに細分した。

ａ　口径が胴径より小さい深鉢形土器（Fig.49の50117）

ｂ　口径が胴径より大きい深鉢形土器（Fig.49の18118）

(3)　第III類

II類土器のくずれたものと考えられる。口縁部を輪積みするときに、継ぎ目の粘土を少し盛り上げて有段にしたり、継ぎ目を調整しないで有段状に見せたりしている程度である。継ぎ目をナデ調整すればまったくIV類である。器形は深鉢形土器で、これをａ、ｂに細分した。

ａ　口径が胴径より小さい深鉢形土器（Fig.49の34119～34121、Fig.50の34122・P124）

口縁部は外反し、頸部で締り、胴部で張る尖底深鉢形土器である。

ｂ　口径が胴径より大きい深鉢形土器（Fig.50の34124・56125）

頸部の締りも胴部の張りも弱い深鉢形器で、口が開くタイプ。

(4)　第IV類

口縁部がナデ調整されて有段を持たない無肥厚口縁土器である。検出された土器の約55％はこのIV類土器である。器種は深鉢形土器のほかに、壺形土器、浅鉢形土器が僅かに共伴している。このIV類土器を器形によってａ～ｇまでに細分した。

ａ　口径が胴径より小さい深鉢形土器（Fig.50の18126・18127、Fig.51、Fig.52）

最も多いタイプである。口縁部は外反し、頸部が締り、胴部で張る尖底の深鉢形土器である。口径が16～22cmぐらいのが多いが、口径28cm以上の大型も見られる。

ｂ　口径が胴径より大きい深鉢形土器（Fig.53の34140～34142）

口縁部は若干外反するが、頸部の締りも胴体の張りもほとんどない広口の尖底深鉢形土器である。

ｃ　口径が胴径より小さい小型深鉢形土器（Fig.53の34143）

口径約10cmの小型品である。壺形土器の範疇とも考えられるが、ａタイプの小型品として考えておきたい。

ｄ　口径と胴径がほぼ同じ小型深鉢形土器（Fig.53の34143～34146）

口径約10cmの小型品である。口縁部は若干外反し、頸部の締りも胴部の張りも弱いタイプである。縦のヘラ削りが明瞭に見られる。復元土器３点は34号礫床住居跡からの一括遺物である。

ｅ　山形口縁の深鉢形土器（Fig.54の18147～18149）

口唇部に山形突起を４つぐらい廻らす山形口縁土器である。山形突起をＶ字状に抉入してリボン状突起を表現したと考えられるのも見られる。

f　浅鉢形土器（Fig.54の56150～50152）

口径約15cmの小型浅鉢から口径約30cmの大型浅鉢まで見られる。口縁部はやや内彎する。

g　壺形土器（Fig.54の B153～14157）

長頸壺と短頸壺が見られる。頸部に縦稜をもつ有文長頸壺や、丹塗りと考えられる壺などもある。長頸壺は仲原遺跡の復元資料(注2)で見ると丸底になっており、本遺跡のも丸底の可能性が強い。

(5)　底　部（Fig.55の 1 ～ 5 ）

B群土器の底部は730点検出されており、B群土器が少なくても730個はあったことになる。B群土器の底部は平底はなく、尖底687点、丸底40点、台付 3 点である。丸底は主に壺形土器に付くと考えられるが、台付土器がどのような器形か明らかでない。尖底土器はほとんど深鉢形土器の底部と考えられる。尖底には丸味のある尖底と尖りの明瞭ないわゆる乳房状尖底があり、後者は前者に比して硬質で薄手土器が多い。

(6)　把　手（Fig.55の 6 ・ 7 ）

弧状把手と直線状把手が数点検出された。いずれも横の把手である。弧状把手は仲原遺跡の復元土器(注3)で見ると、第III類の深鉢形土器の頸部に 2 個付いており、本遺跡の把手も深鉢形土器に付くものと考えられる。

(7)　有文土器（Fig.55の 8 ～16）

B群土器の有文は非常に少なく、口縁部、胴部合わせて20片である。肥厚口縁の有文土器はA群土器の系統の土器と考えられる。文様は横捺刻や刺突文なども見られるが、細沈線文が多い。

注 1　「黒丸遺跡」　長崎県大村市黒丸遺跡調査会　1980

2　上原　静　「仲原式土器の提唱について」紀要第 1 号　沖縄県教育委員会文化課
　当真　嗣一　1984

3　同　上

Tab. 55　B類土器観察表

遺物番号	挿図No. PL.No.	層	型式	器種	法量 口径	頸径	胴径	器高	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
32101	Fig.48 PL.37	V 床面	Ⅰa	深鉢	20.0	18.1	19.3	−	口縁部は明瞭な宇佐浜式で強い外反。頸部で締り、胴部で張る。胴径より口径が広い。	外面　剝離 内面　僅かにヘラ削り痕	やや軟質	赤褐色	多石灰岩砂粒い
32102	〃 〃	Ⅲ	〃	〃	25.7	25.0	−	−	口縁部は明瞭な宇佐浜式でやや強い外反。頸部で締り、胴部で張る。口径より胴径が広い。	外面　剝離、頸部に指頭痕 内面　頸部に縦の指圧痕、頸部を内外面から指で挟んで整形	〃	黄褐色	砂粒少量
18103	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	26.1	26.4	−	−	口縁部は明瞭な宇佐浜式でやや強い外反。頸部で締る。	外面　剝離、アバタ状 内面　剝離、アバタ状	やや硬質	赤褐色	なし
11104	〃 〃	Ⅳ	〃	〃	18.7	18.6	23.3	−	口縁部は丸味のある宇佐浜式で弱い外反。胴部でくの字状に大きく張る。	外面　剝離 内面　口縁から頸部までヨコナデ	〃	〃	〃
11105	〃 〃	Ⅳ	〃	〃	21.6	21.3	−	−	口縁部は明瞭な宇佐浜式で、強い外反。頸部で締る。	外面　口縁部ヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ、頸部に指圧痕	〃	灰褐色	〃
36106	〃 〃	Ⅲ	〃	〃	21.4	19.9	−	−	口縁部は縦長の宇佐浜式で貼付が明瞭。外反もせず、張りもない。	外面　口縁部ヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ、頸部に指圧痕、胴部に貝殻条痕	〃	黄褐色	〃
18107	〃 〃	Ⅱ	Ⅰb	山形の深鉢	−	−	−	−	口縁部は僅かに宇佐浜式。口唇に山形突起。山形突起にV字状の抉入をしたリボン状突起の破片。	外面　口縁部ヨコナデ 内面　〃	〃	赤褐色	〃
P 108	〃 〃	Ⅲ	〃	〃	−	−	−	−	山形突起を半乾きのときにV字状に切ってリボン状突起に表現。	外面　口縁部ヨコナデ 内面　剝離	〃	〃	〃
32109	〃 〃	V 床面	〃	〃	−	−	−	−	口縁はややくずれた宇佐浜式で、口唇部に2つ1組のリボン状突起。	外面　口縁部ヨコナデ 内面　貝殻条痕の上をヨコナデ	〃	黄褐色	貝少殻細片量
46110	〃 〃	Ⅲ	Ⅰc	山形の壷	10.2	12.1	−	−	〃	外面　剝離 内面　頸部に指圧痕	〃	赤褐色	なし
06111	〃 〃	Ⅱ	Ⅰd	壷	9.1	8.2	−	−	口縁部は宇佐浜式で強い外反。頸部で締る。頸部に縦位の細隆線文貼付	外面　不明 内面　口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃
23112	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	9.6	8.3	−	−	口縁部は肥厚の弱い宇佐浜式でやや強い外反。	外面　頸部に指圧痕、その上をヨコナデ 内面　剝離	〃	〃	貝少殻細片量
45113	〃 〃	Ⅲ	〃	〃	9.4	7.7	−	−	口縁部は肥厚の弱い宇佐浜式で強い外反。	外面　口縁部ヨコナデ 内面　〃	〃	〃	〃
35114	〃 〃	Ⅲ	〃	〃	8.1	8.6	−	−	口縁部は肥厚の弱い宇佐浜式で外反しない。	外面　頸部に指圧痕 アバタ状 内面　アバタ状、ヨコナデ	〃	黄褐色	なし

遺物番号	挿図No. PL.No.	層	型式	器種	法量 口径	頸部	胴径	器高	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
47115	Fig.48 PL. 37	Ⅲ	Ⅰd	壷	8.9	8.8	25.0 (現存)	−	口縁部は弱い肥厚の宇佐浜式で弱い外反。胴部で大きく脹む。	外面 口縁部ヨコナデ 内面 調整痕なし	やや軟質	暗褐色	貝殻細片多量
15116	Fig.49 PL. 38	Ⅱ	Ⅰa	深鉢	17.0	17.3	18.5	24.0	口縁部は弱い肥厚の宇佐浜式で弱い外反。頸部の締りも弱く、肩部の張りも弱い尖底。	外面 剝離、アバタ状 内面 剝離、アバタ状	〃	黄褐色	なし
50117	〃 〃	Ⅲ	Ⅱa	〃	15.6	15.1	20.4		カヤウチバンタ式口縁で弱い外反。胴部の張りも弱い。	輪積み、内面に痕跡明瞭。 外面 口縁部ヨコナデ 内面 貝殻条痕が僅かに残る	やや硬質	赤褐色	〃
18118	〃 〃	Ⅱ	Ⅱb	〃	21.1	18.8	20.0	約22.5	弱い肥厚のカヤウチバンタ式でやや強い外反。頸部の締りも胴部の張りもやや弱い。	外面 剝離 内面 剝離	やや軟質	〃	〃
34119	〃 〃	Ⅱ	Ⅲa	〃	20.0	19.0	20.7	24.8	口縁部輪積みの継ぎ目が有段。外反はやや強く、胴部の張りもやや強い尖底。胴径が僅かに広い。	外面 斜めに上から下へヘラ削り 内面 横位の貝殻条痕	やや硬質	〃	〃
34120	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	18.1	15.7	−	−	口縁部輪積みの継ぎ目が有段。強い外反で胴部下部で張ると考えられる。	外面 ヘラ削り、口縁に指圧痕 内面 ヘラ削り	〃	〃	〃
34121	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	18.0	17.6	21.0	約25	口縁部輪積みの継ぎ目が有段。外反は弱いが、胴部の張りがやや強い。胴径が広い。	輪積み（内面に5段） 外面 ヘラ削りで滑らか 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	〃
34122	Fig.50 PL. 39	Ⅱ	〃	〃	15.2	14.7	18.8	約25.5	輪積みの継ぎ目有段が頸部の下にある。外反はやや弱いが、肩部でやや強い張り。胴径が広い。	外面 ヘラ削り、胴部に煤付着 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	貝殻細片少量
P 123	〃 〃	Ⅱ	Ⅲb	〃	17.2	16.8	−	−	輪積みの継ぎめ有段が頸部の下にある。やや強い外反で、胴部の張りは弱い。胴径が広い。	外面 剝離 内面 剝離、僅かに貝殻条痕	〃	〃	なし
34124	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	18.4	17.6	18.8	約22.0	口縁部輪積みの継ぎ目が有段。外反はやや強いが、胴部が張らない。口径が広い。	輪積み（内面に4段） 外面 斜めに上から下へヘラ削り 内面 横位の貝殻条痕	〃	黄褐色	貝殻細片少量
56125	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	18.8	17.6	−	−	口縁部輪積みの継ぎ目が有段。外反も胴部の張りも弱い。口径・胴径ほぼ同じ。	外面 不明 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	なし
18126	〃 〃	Ⅱ	Ⅳa	〃	20.0	19.2	23.7	約26.4	口縁はやや強い外反で、頸部が締り、胴部上部が強く張る。胴径が広い。	外面 ヘラ削り 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	〃
18127	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	18.2	17.0	20.4	24.5	口縁部は強い外反で、頸部は締り、胴部で強く張る。胴径が広い。	外面 ヘラ削り、胴部に煤付着 内面 剝離	〃	〃	〃
18128	Fig.51 PL. 40	Ⅱ	〃	〃	23.8	22.8	27.0	−	口縁部が僅かに肥厚し外反。頸部の締りも胴部の張りもやや弱い。胴径が広い。	外面 剝離、頸部に指圧痕 内面 剝離、内外面ともアバタ状	〃	〃	〃

遺物番号	挿図No. PL. No.	層	型式	器種	法量 口径	頸径	胴径	器高	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和剤
18129	Fig.51 PL. 40	II	IVa	深鉢	15.7	15.6	19.0	約23.0	口縁部の外反は弱く、頸部の締りも弱い。胴部の張りはやや強い。胴径が広い。	外面 剝離、僅かにヘラ削り 内面 横位の貝殻条痕	やや硬質	赤褐色	なし
18130	〃 〃	II	〃	〃	17.8	17.0	18.6	22.6	口唇部は尖る。口縁部はやや強い外反で、頸部は締り、胴部はやや強く張る。胴部径が広い。	外面 斜めのヘラ削り、胴部に煤付着 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	〃
18131	〃 〃	II	〃	〃	15.3	13.4	−	−	口唇部は尖る。口縁部は大きく外反し、頸部で締り、胴部で強く張る。胴径がかなり広い。	外面 剝離、口縁部ヨコナデ 内面 剝離、僅かに貝殻条痕	〃	〃	〃
15132	〃 〃	II (床面)	〃	〃	17.8	17.0	19.5	約22.4	口縁部は僅かに肥厚。外反も頸部の締りも弱い。胴部の張りはやや強い。胴径が広い。	外面 剝離 内面 ヨコナデ、口縁に指圧痕	やや軟質	黄褐色	白多色細片い
11133	〃 〃	IV	〃	〃	20.0	19.8	23.2	約28.0	口縁部が短い。外反も弱い。胴部は上部で強く張る。胴径が広い。	外面 剝離、僅かにヘラ削り 内面 剝離、僅かに貝殻条痕	やや硬質	赤褐色	なし
12134	Fig.52 PL. 41	II	〃	〃	19.0	17.7	21.4	約24.0	口縁部は大きく外反し、頸部は締り、胴部はくの字状に強く張る。胴径が広い。	外面 頸部にヘラ削り、胴部に煤付着 内面 剝離	〃	〃	〃 〃
34135	〃 〃	II	〃	〃	−	−	−	−	口縁部は外反が強く、頸部で締り、胴部がくの字状に強く張る。最大径は胴径。	外面 剝離、頸部にヘラ削り胴部上部は黒く焦げている 内面 口縁ヨコナデ	〃	黄褐色	〃
34136	〃 〃	II	〃	〃	23.0	20.5	24.6	−	口唇部は丸い。外反は強く、頸部で締り、胴部の張りはやや強い。最大径は胴部。	外面 頸部に横位の貝殻条痕その上にヘラ削り痕 内面 横位の貝殻条痕	〃	赤褐色	〃
34137	〃 〃	II	〃	〃	16.4	15.6	18.8	−	口縁部は外反し、頸部で締り、肩部から胴部が張る。	外面 右斜めのヘラ削り 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	〃
34138	〃 〃	II	〃	〃	19.4	18.5	20.0	24.0	左右相称にならない歪んだ器形。口縁部の外反はやや強く、胴部は張る。最大径は胴部。	外面 左斜めのヘラ削り 内面 横位の貝殻条痕、口縁ヨコナデ	〃	黄褐色	〃
34139	〃 〃	II	〃	〃	15.8	14.2	16.8	−	口縁部は大きく外反し、頸部は強く締り、胴部が強く張る。尖りの強い尖底。最大径は胴部。	外面 左斜めのヘラ削り、胴部は焦げている。 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	〃
34140	Fig.53 PL. 42	II	IVb	〃	18.5	17.7	17.8	約24.0	口縁部は外反せず、胴部も張らない器形。最大径は口径	外面 口縁に貝殻条痕。胴部剝離 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	〃
34141	〃 〃	II	〃	〃	20.2	18.7	18.9	約23.2	口唇は平担。口縁部は外反するが、胴部の張らない器形。最大径は口径。	外面 ヘラ削りが僅かに見られるがあと不明 内面 貝殻条痕の上をヘラ削り	〃	〃	白少色細片量
34142	〃 〃	II	〃	〃	21.5	19.8	19.5	約20.0	口縁部は僅かに外反し、胴部も僅かに張る。最大径は口径。	外面 口縁部直下に指圧痕、胴部上部にヘラ削り 内面 横位の貝殻条痕	〃	赤褐色	なし
34143	〃 〃	II	IVc	小型深鉢	10.3	10.0	14.6	−	胴部で大きく脹らむ壺形的形態	外面 剝離 内面 剝離	〃	〃	〃

遺物番号	挿図No. PL.No.	層	型式	器種	法量 口径	頸径	胴径	器高	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和剤
34144	Fig.53 PL.42	Ⅱ	Ⅳd	小型深鉢	12.8	11.8	12.7	16.8	頸部が僅かに締る小型深鉢土器。口径・胴径ほぼ同じ。左右相称にならない歪んだ器形。	外面 左斜めのヘラ削り 内面 横位の貝殻条痕			
34145	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	13.1	13.0	14.0	19.9	左右相称にならない歪んだ器形。頸部は僅かに締り，胴部は僅かに張る。口径・同径ほぼ同じ。	外面 縦のヘラ削り、口縁ヨコナデ。肩部で焦げている。 内面 斜めの貝殻条痕	やや硬質	赤褐色	白少色細片量
34146	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	13.3	13.0	14.0	20.0	口縁部の外反，頸部の締り，胴部の張りが弱い器形。歪んだ器形。口径・同径ほぼ同じ。	外面 縦のヘラ削り、口縁ヨコナデ。肩部で焦げている。 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	〃
18147	Fig.54 PL.43	Ⅱ	Ⅳe	山形深鉢	34.5	30.0	32.5	34.5	口縁に山形突起。大きく外反し頸部で締り、胴部は円形状に張る。最大径は口径。	外面 口縁は横のヘラ削り、頸部から下は縦のヘラ削り 内面 剥離、僅かに貝殻条痕	〃	〃	なし
21148	〃 〃	Ⅱ (床面)	〃	〃	17.2	16.2	−	−	口縁に山形突起。口縁部はやや強く外反。	外面 剥離 内面 剥離	〃	〃	〃
18149	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	21.2	−	−	−	口縁部の山形を半乾きのときにV字状に挟入してリボン状突起に表現。	外面 剥離 内面 剥離	〃	〃	〃
56150	〃 〃	Ⅱ	Ⅳf	浅鉢	−	−	−	−	直口平口縁	外面 口縁部ヨコナデ 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	白多色細片い
B 151	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	−	−	−	−	直口平口縁	外面 不明 内面 貝殻条痕が僅かに残っている。	〃	黄褐色	白多色細片い
50152	〃 〃	Ⅲ (床面)	〃	〃	−	−	−	−	やや内彎する皿状の器形	外面 口縁にヨコナデ 内面 横位の貝殻条痕	〃	〃	〃
B 153	〃 〃	Ⅱ	Ⅳg	壷	−	−	−	−	面取りされて頸部水平断面が柳葉状を呈する長頸壷	外面 滑らかに調整。2本沈線による曲線文。 内面 滑らかに調整	〃	赤褐色	〃
18154	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	−	−	−	−	口縁部が楕円形状長頸壷の破片	外面 滑らかに調整。表面は丹塗りと思われる。 内面 滑らかに調整	〃	朱色	雲母その他鉱物
40155	〃 〃	Ⅳ (床面)	〃	〃	6.4	6.2	−	−	口縁は外反しない。	外面 滑らかに調整、丹塗りと思われる。 内面 剥離	〃	朱色	なし
13156	〃 〃	Ⅱ	〃	〃	7.4	6.0	−	−	口縁部は外反、頸部がやや長い。	外面 剥離 内面 剥離	〃	赤褐色	白少色細片量
14157	〃 〃	Ⅲ	〃	〃	10.7	8.2	−	−	口縁部は外反、頸部がやや長い。	外面 剥離、アバタ状 内面 剥離、アバタ状	〃	黄褐色	なし
60158	Fig.55 PL.44	Ⅳ	〃	尖底	−	−	−	−	丸味のある尖底。	外面 明瞭なヘラ磨き痕が全面。滑らか。 内面 調整痕見られず。	〃	〃	〃

遺物番号	挿図No. PL.No.	層	型式	器種	法量 口径	頸径	胴径	器高	形態の特徴	手法の特徴	備考 焼成	色調	混和材
57159	Fig.55 PL.44	Ⅲ		丸底 －	－	－	－	－	検出された土器で最も明瞭な丸底。	外面　剝離 内面　横位の刷毛目	やや硬質	黄褐色	白少色細片量
55160	〃 〃	Ⅱ		台付 －	－	－	－	－	丸底に台の部分を貼付。 台径6㎝。	外面　貼付するときの指圧痕 内面　剝離	〃	〃	なし
59161	〃 〃	Ⅲ		〃	－	－	－	－	丸底に台の部分を貼付。 台径8.5㎝	外面　剝離 内面　剝離	〃	赤褐色	白少色細片量
40162	〃 〃	Ⅴ		〃 －	－	－	－	－	丸底に台の部分貼付 台径1.1.8㎝。	外面　剝離 内面　剝離	〃	〃	〃
40163	〃 〃	Ⅴ		把手 －	－	－	－	－	深鉢の口縁部近くの破片。 直線状の把手。	外面　貼付時の指圧痕 内面　剝離	〃	黒褐色	なし
P 164	〃 〃	Ⅲ		〃 －	－	－	－	－	深鉢に付くと考えられる。横の弧状把手。	外面　貼付時の指圧痕 内面　僅かに貝殻条痕	〃	赤褐色	〃
P 165	〃 〃	Ⅱ		深鉢 (有文) －	－	－	－	－	カヤウチバンタ式口縁で、口縁外面に斜めの横擦刻文が4列見られる。頸部にも横擦刻文あり。	外面　ヨコナデ 内面　剝離	〃	黄褐色	〃
P 166	〃 〃	Ⅱ		〃 －	－	－	－	－	カヤウチバンタ式口縁で、口縁外面と頸部に押引の横擦刻文	外面　ヨコナデ 内面　剝離	〃	〃	〃
P 167	〃 〃	Ⅱ		深鉢 (有文) －	8.8	7.6	－	－	小型の深鉢形。口縁部は宇佐浜式口縁。口縁は外反し、頸部で締り、胴部で張る。口縁に横擦刻文。	外面　ヨコナデ 内面　剝離	〃	〃	白少色細片量
P 168	〃 〃	Ⅱ		不明 (有文) －	－	－	－	－	小破片のため形態不明。頸部に縦の沈線2本と口縁部にも横沈線。	外面　剝離 内面　剝離	〃	〃	なし
08169	〃 〃	Ⅱ		深鉢 (有文) －	10.5	9.3	－	－	口縁部は逆L字状に肥厚。頸部に縦の細隆帯が2本貼付。その両側に刺突文。喜念Ⅰ式系。	外面　剝離、アバタ状 内面　剝離、アバタ状	〃	〃	〃
18170	〃 〃	Ⅱ		不明 (有文) －	－	－	－	－	口縁部近くの破片。有段部を挟んで上下に斜沈線。縦沈線で区画される文様構成。	外面　ヨコナデ 内面　剝離	〃	黒褐色	〃
18171	〃 〃	Ⅱ		不明 (有文) －	－	－	－	－	頸部破片と考えられる。斜沈線で網目文。	外面　剝離 内面　剝離	〃	赤褐色	白少色細片量
50172	〃 〃	Ⅲ		不明 (有文) －	－	－	－	－	胴部破片。横に3本の沈線があり、その上と下に斜沈線を描いた羽状文。縦の羽状文と組み合わされるものと考えられる。	外面　剝離 内面　貝殻条痕	〃	黄褐色	なし

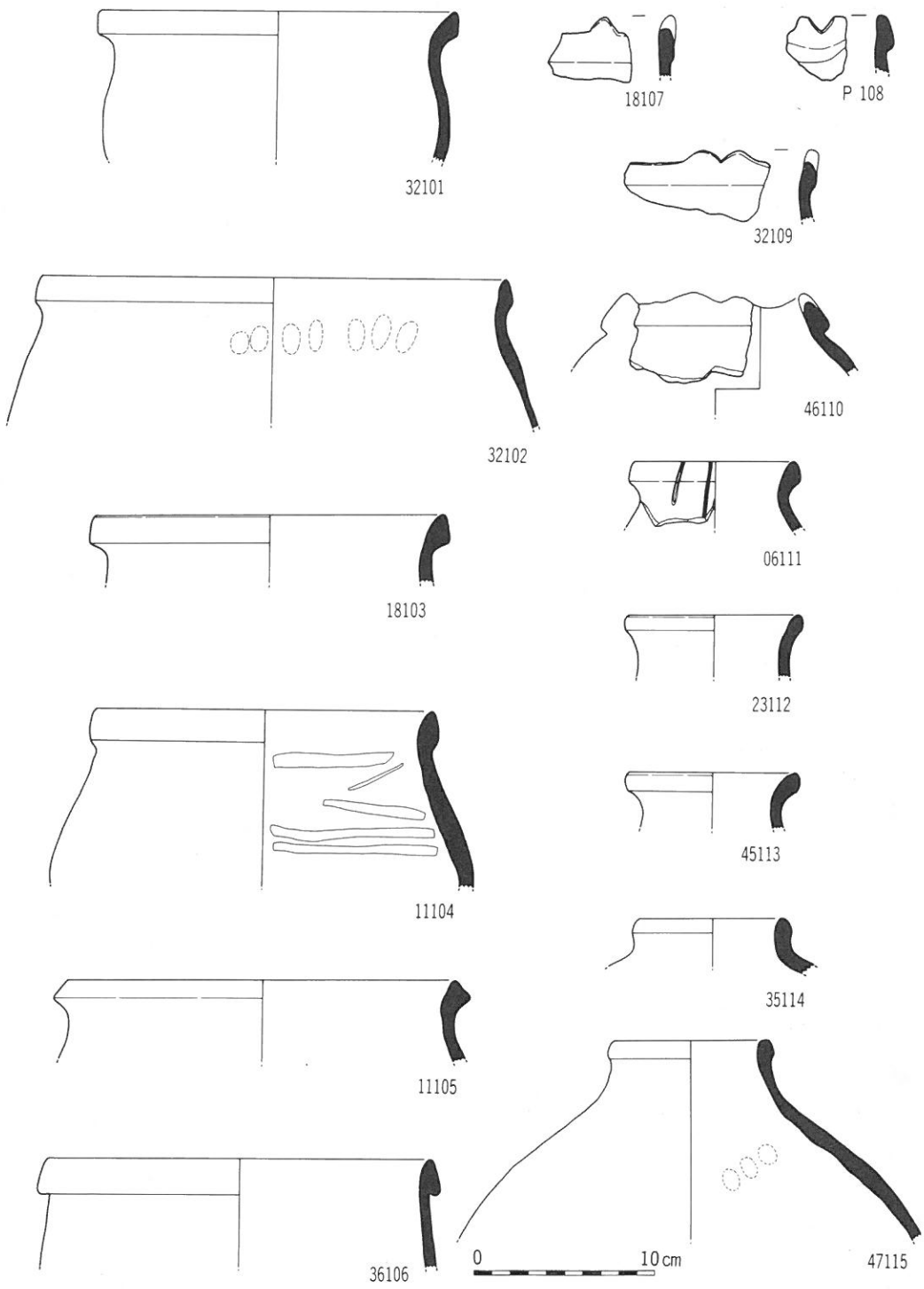


Fig.48（PL.37）　B群土器　第Ⅰ類a（32101～36106）　第Ⅰ類b（18107～32109）　第Ⅰ類c（46110）　第Ⅰ類d（06111～47115）

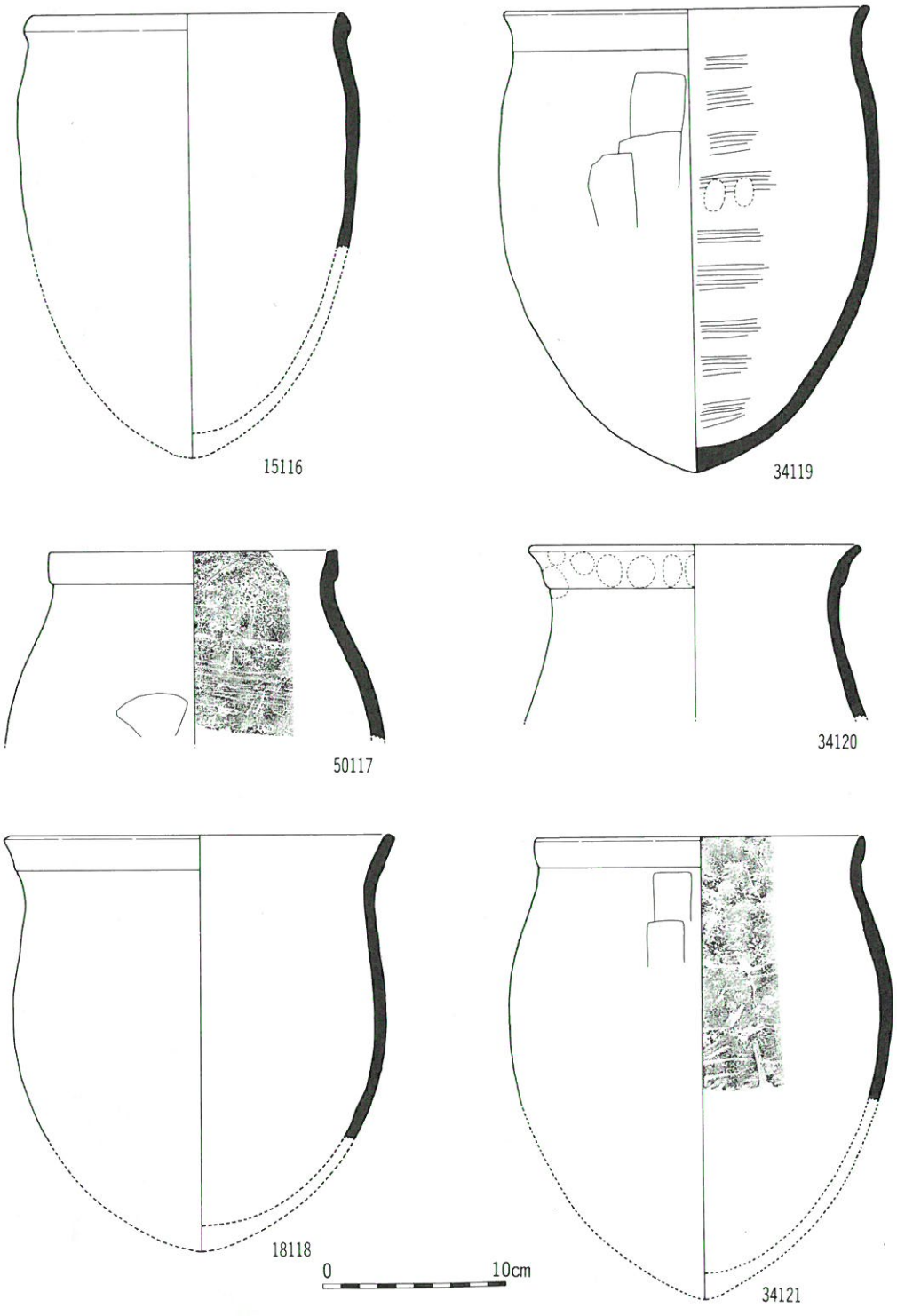


Fig.49 (PL.38)　B群土器　第Ⅰ類a (15116)　第Ⅱ類a (50117)　第Ⅱ類b (18118)　第Ⅲ類a (34119～34121)

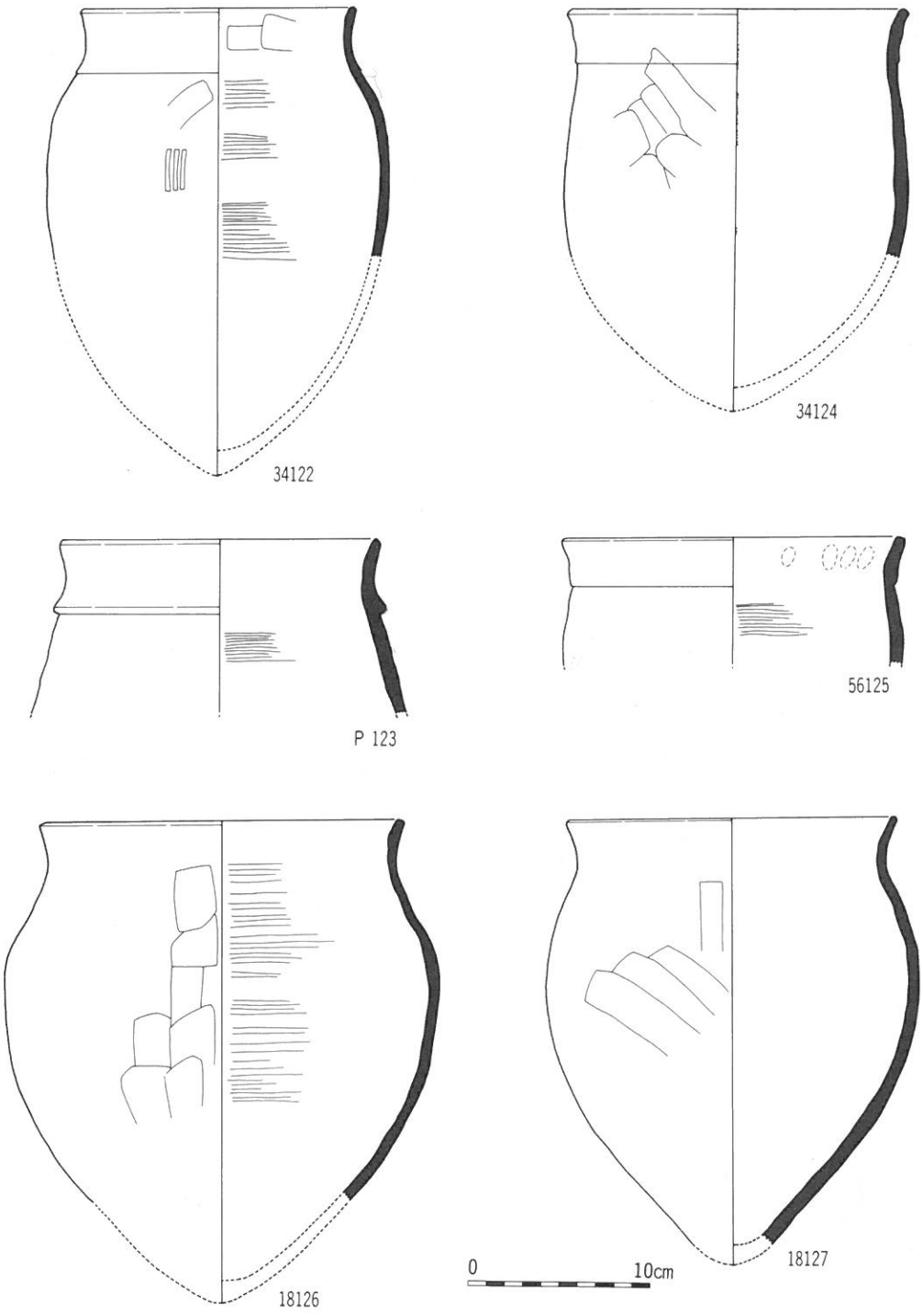


Fig.50（PL.39）　B群土器　第III類a（34122、P123）　第III類b（34124、56125）　第IV類a（18126、18127）

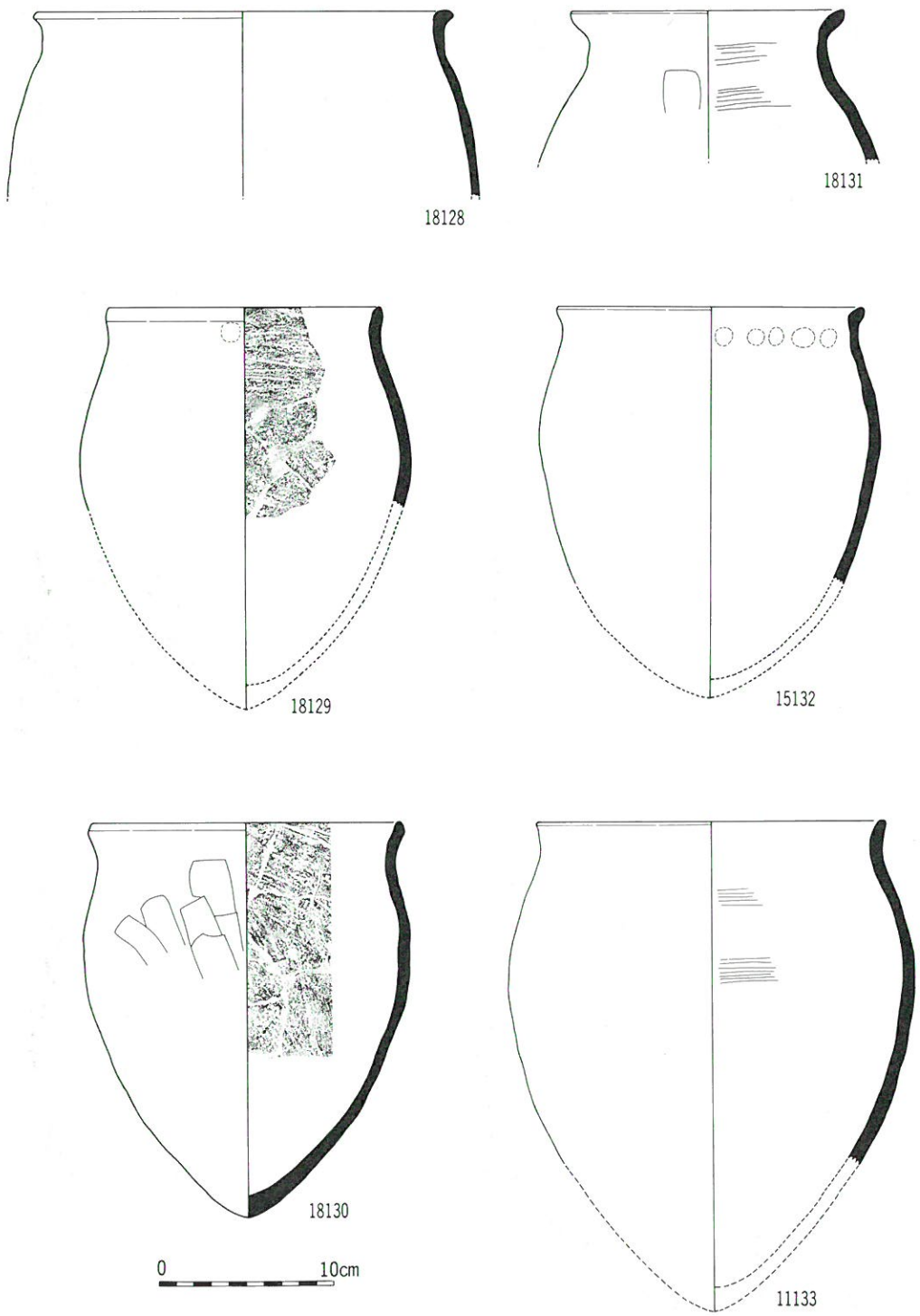


Fig.51 (PL.40)　　B群土器　第IV類a (18128～11133)

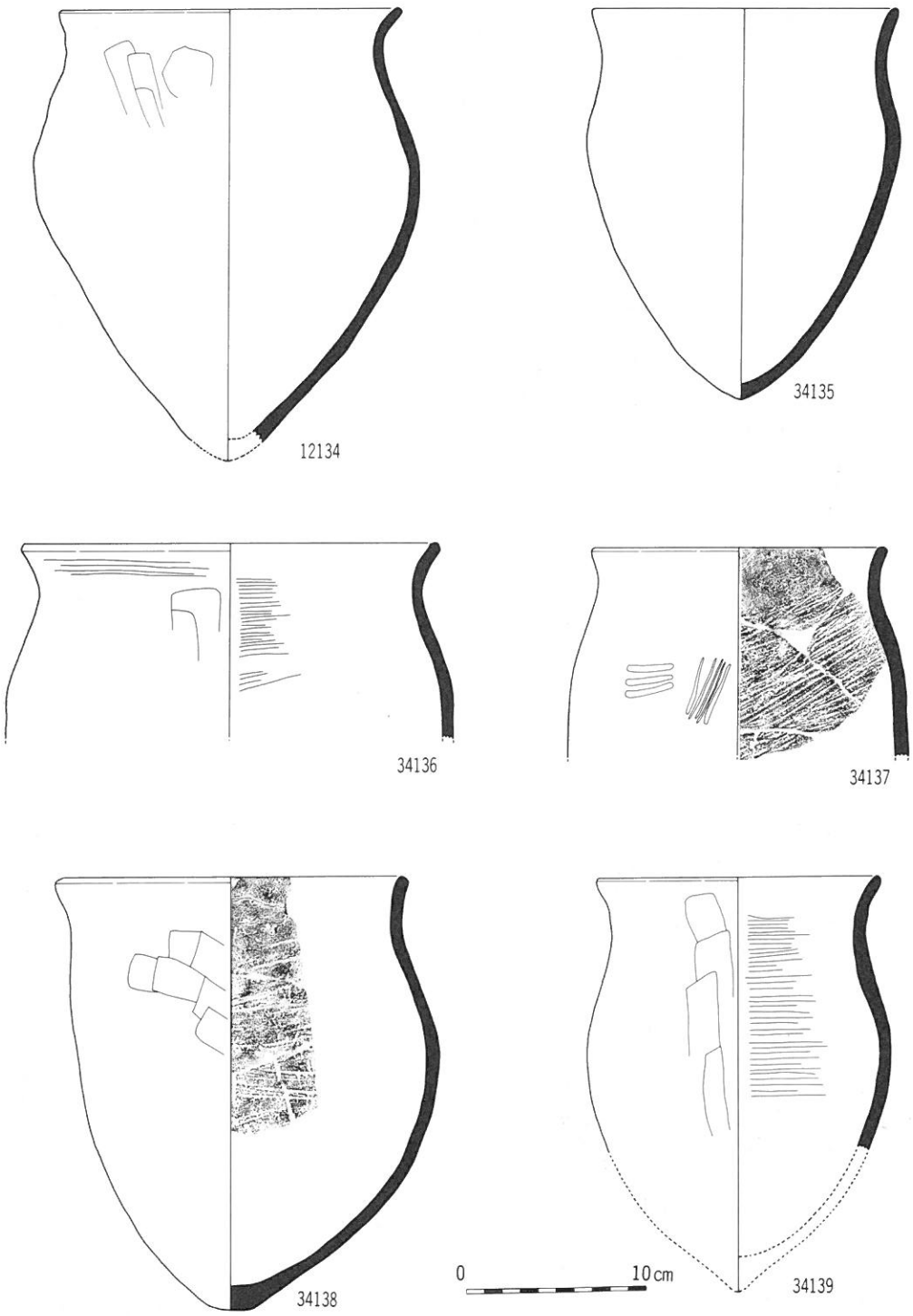


Fig.52（PL.41）　B群土器　第IV類a（12134～34139）

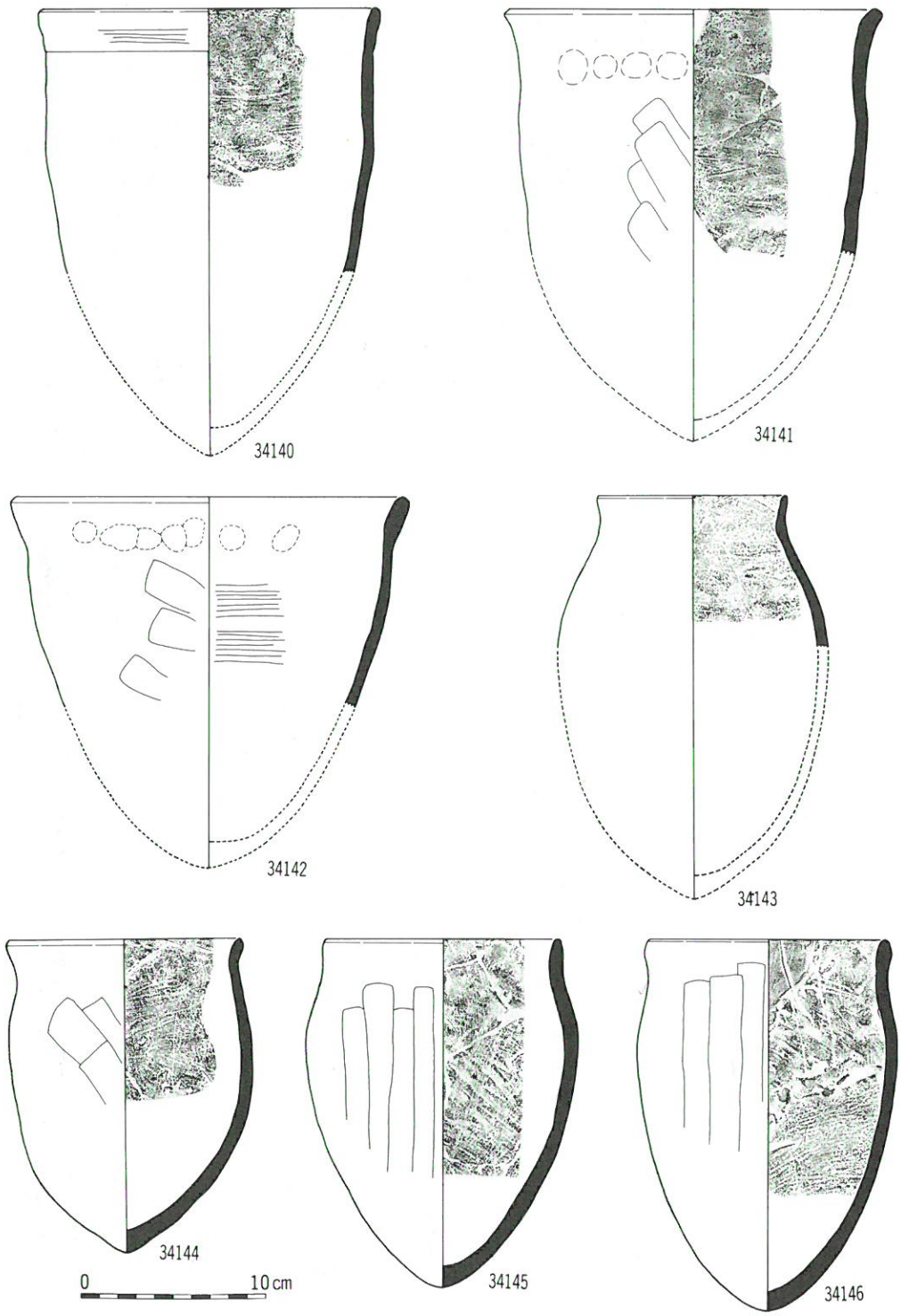


Fig.53（PL.42）　B群土器　第IV類b（34140～34142）　第IV類c（34143）　第IV類d（34144～34146）

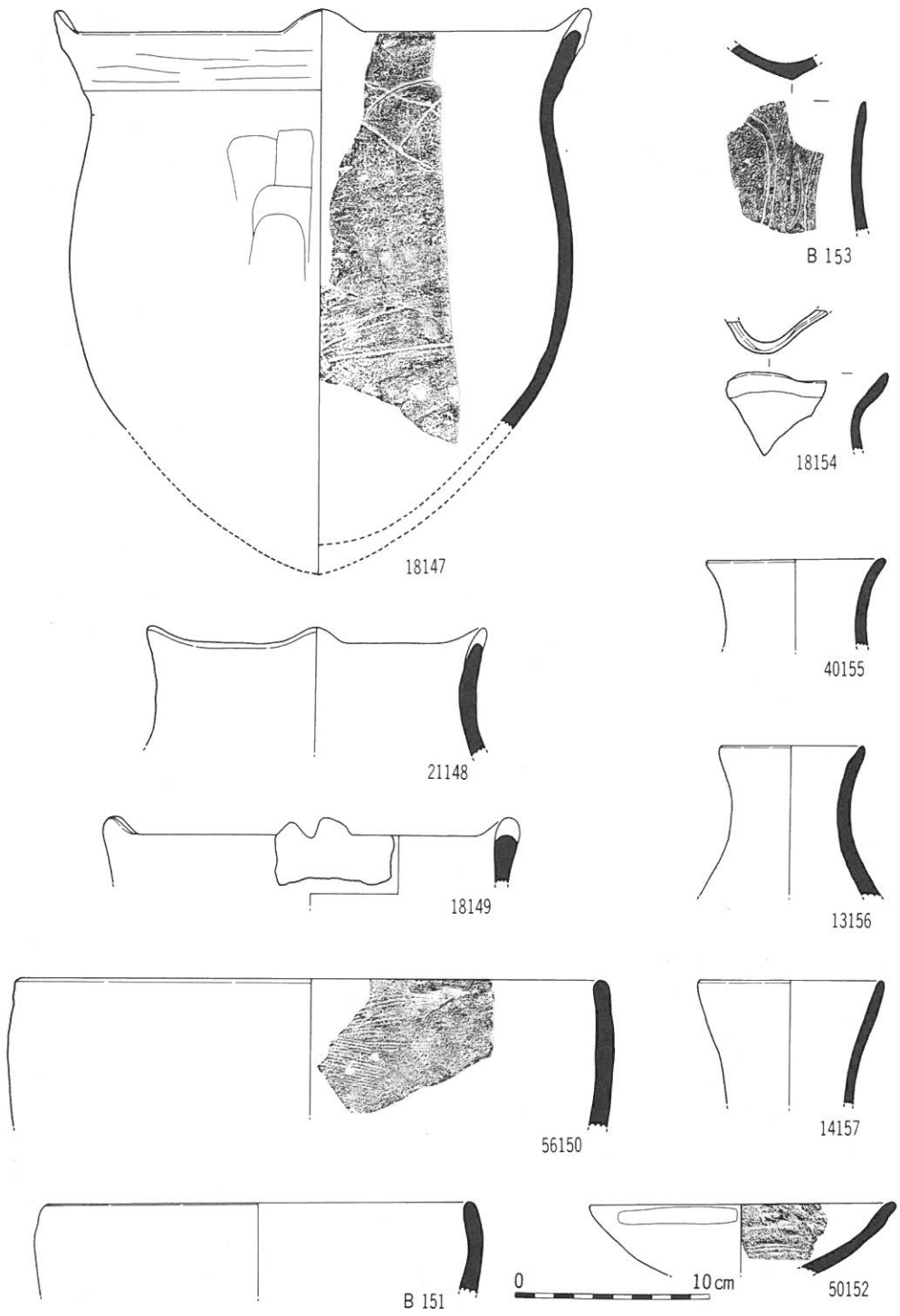


Fig.54 (PL.43)　　B群土器　第VI類 e （18147～18149）　　第IV類 f （56150～50152）　第IV類 g （B153～14157）

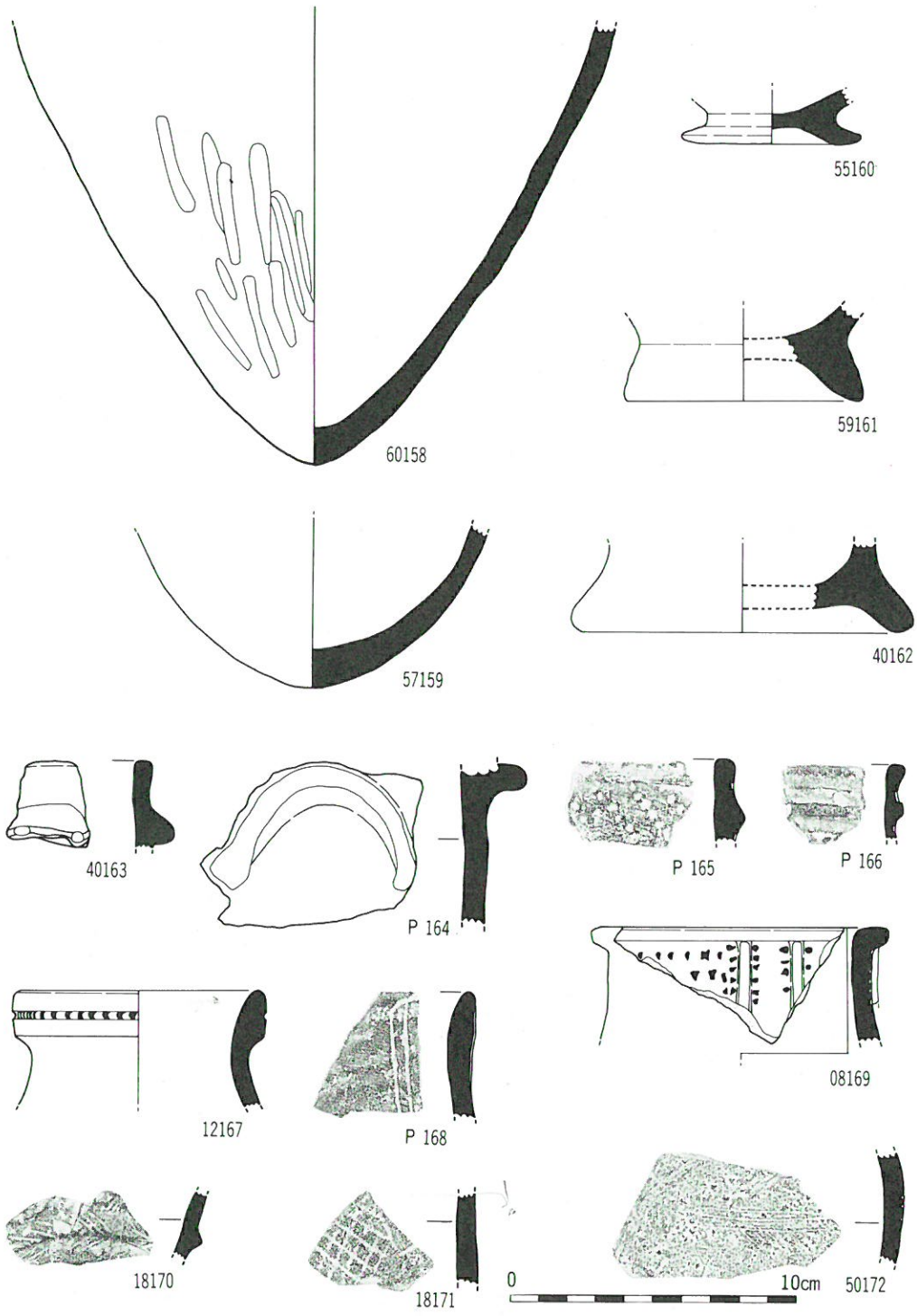


Fig.55（PL.44）　B群土器　尖底（60158）　丸底（57159）　台付土器（55160～40162）　把手（40163、P164）　有文土器（P165～50172）

第2節　石　　器

石器は小破片も含めると131点（Tab.56）検出されたが、完形品や破損の小さいものだけ68点をFig.56～Fig.65に示した。これらの石器をつぎのように分類した。なお、個々の石器についての出土地点、法量、石質、特徴等は観察表に記述した。

(1)　石鏃（Fig.56の40173・B174）

2点だけ検出された。40173はほぼ完形のチャート製無茎石鏃である。横断面は柳葉型で、側縁は鋸歯状を呈する。なお、実測図に示した番号や矢印は剝離の順序である。チャート製無茎石鏃は地荒原遺跡(注1)、隅原遺跡(注2)などでも検出されている。また、1972年の発掘調査で、本遺跡の東崖下貝塚からチャート製の無茎石鏃が検出された。

(2)　小型扁平利器

非常に薄手で刃をもつ小型石器である。つぎの3つに細分した。

(a)第Ⅰ類　（Fig.56の35175）

長さが7.4cmあり、小型扁平利器では大型のもので、刃部も基端も両刃につくられている。

(b)第Ⅱ類　（Fig.56の08176～32182）

長さが3～5cmの短冊型で、刃部も基端も両刃につくられている。

(c)第Ⅲ類　（Fig.56のP183）

磨製石斧の剝片を剝離面から研磨して刃をつくっている。

(3)　有孔石器　（Fig.56のB184・09185）

完形品がなく、どのような形をしているか不明だが、小孔のある扁平な石器である。今後の資料を俟ちたい。

(4)　両刃石斧

(a)第Ⅰ類　（Fig.56の07186）

刃部を立面で見ると、刃縁が孤状を呈する丸のみ状の両刃石斧。細長で厚い。

(b)第Ⅱ類　（Fig.56の28187）

扁平で幅広の全面磨製両刃石斧。

(c)第Ⅲ類　（Fig.57～Fig.59）

長さが約10～12cm、幅約5～6cmの長方形状で、厚みのある石斧。刃部は蛤刃。Ⅲ－Aは、刃部の一端が多く減耗しているタイプで、これは使用方法による減耗と考えられる。おそら

く、縦斧として使用されたと思われる。III－Bは、減耗がほとんどないものである。

(d)第IV類　(Fig.60の23206～24212)

長さが約7～10cmの中型の両刃石斧。基端幅に比して刃部幅が広いタイプ。

(e)第V類　(Fig.60の47213)

刃部だけ研磨した局部磨製の両刃石斧。大きさはIV類の範疇

(f)第VI類　(Fig.61の18214・56215)

長さが7cm以下の小型の両刃石斧。

(5)　片刃石斧

第I類　(Fig.61の22216)

横断面が鏑のある蒲鉾状を呈する片刃石斧。刃縁は直線。

第II類　(Fig.61の23217～32221)

横断面が短冊形を呈する片刃石斧。刃縁は直線。

(6)　特殊石器　(Fig.62の41222)

やや十字形を呈し、両枝の根元には抉りがはいり、両手で握りやすいようにできている。このような石器は沖縄では出土例がなく、今後の資料を俟ちたい。

(7)　敲石

第I類　(Fig.62の08223～18225)

石斧や磨石などの破片を加工して敲石に再利用したものである。

第II類　(Fig.62の57226・21227、Fig.63)

川や海の水で面が摩耗した原石をそのまま敲石として使用したものである。これらには大型と小型が見られる。

(8)　磨石　(Fig.64のB233～48284)

原石を加工せず、表裏面だけ磨石として使用したものである。石鹸状磨石と呼ばれている楕円形のものである

(9)　凹石　(Fig.64の09236)

原石を利用した磨石を再利用したものである。表裏面に直径2cmの円形の凹みが残っている。深さは約2mmで浅い。

⑽ 石皿　(Fig.64のB237・B238、Fig.65)

細粒砂岩を使用した石皿である。15240は完形品で、15号竪穴住居跡の床面に座ったままの状態で検出された好資料である。

注1　「堀り出された沖縄の歴史」　沖縄県教育委員会　1982

2　高宮廣衛・比嘉春美・岸本義彦・宮城利旭・中村愿・山田正・吉本直子・上原静「具志川市隅原遺跡発掘調査概報」　沖国大考古創刊号　1976

Tab. 56　石器遺構別出土一覧

遺構＼器種	層	石鏃	小型扁平利器			有孔石器	両刃石斧								片刃石斧		特殊石器	敲石		磨石	凹石	石皿	計
			I	II	III		I	II	IIIA	IIIB	IV	V	VI	破片	I	II		I	II				
1号礫床	II													2						1			3
2号炉跡	II																						0
3号礫床	II									2	1											1	4
4号〃	II																						0
5号〃	II																						0
6号〃	II																			1			1
7号竪穴	II						1																1
8号〃	II			1					1									1		1		1	5
9号〃	II					1				1				1				1			1		5
10号礫床	II									1	1												2
11号竪穴	V													2									2
12号〃	II			1							1									1			3
13号〃	II																						0
14号〃	III																		1				1
15号〃	II													1									1
	床面																					1	1
16号礫床	II																						0
17号〃	II								1														1
18号竪穴	II			3							1		1	3		1		2	1				12
19号〃	II																						0
20号〃	II													1									1
21号〃	II																		2				2
22号〃	床面									1					1								2
23号〃	II								1		1												2
	床面															1							1
24号礫床	II			1					1		1			1					1				5
25号竪穴	II																						0
26号〃	II																						0
27号礫床	II									1	1												2
28号〃	II							1															1
29号竪穴	II																						0

遺構	層	器種	石鏃	小型扁平利器			有孔石器	両刃石斧								片刃石斧		特殊石器	敲石		磨石	凹石	石皿	計
				I	II	III		I	II	III A	III B	IV	V	VI	破片	I	II		I	II				
30 号竪穴	II																							0
31 号 〃	II																							0
32 号 〃	III			1											1		1							3
33 号礫床	II																							0
34 号 〃	II										2				2						1			5
35 号竪穴	床面		1									1					1							3
36 号 〃	III																							0
37 号 〃	III																							0
38 号 〃	VII														1									1
39 号 〃	VI																							0
40 号 〃	V										1				1									2
	床面		1									1												2
41 号竪穴	柱穴																	1						1
42 号 〃	III																1							1
43 号 〃	III											1												1
44 号 〃	III										1													1
45 号 〃	III									1	1													2
46 号 〃	III																							0
47 号 〃	III												1											1
48 号 〃	III																				2			2
49 号 〃	III										1										1			2
50 号 〃	III																			1	1			2
51 号礫床	II									1		1			1		1							4
52 号 〃	II									1											1			2
53 号 〃	II																							0
54 号 〃	II																							0
55 号 〃	II																1				1			2
56 号 〃	II									1	1			1	2									5
57 号竪穴	III										1				1					1				3
58 号 〃	V																							0
59 号 〃	III																							0
60 号 〃	IV																			1	1			2
61 号 〃	II																							0
P10グリッド	II														2					1				3
	III				1																			1
P4グリッド	II											1								1				2
表土	I	1				1			1	1	1		1			1		1	1	3	1	7	20	
合計		2	1	7	1	2	1	1	9	15	13	1	3	22	1	8	1	5	11	15	2	10	131	

Tab. 57 石 器 観 察 表

※ 法量の（ ）は現存値

器種	挿図番号 PL. NO	出土地点 層	法量 長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質	群類	特徴
石鏃	Fig. 56 PL. 45 40173	40号竪穴V（床 面）	(3.7)	2.5	0.6	3.6	チャート		鏃先僅かに欠損。両面から丁寧に剝離されて形成が良い。鏃先端部は約30°の鋭角。石鏃では大型品。図の矢印と番号は剝離順序。
	〃 〃 B 174		(1.7)	(2.0)	(0.4)	1.2	チャート		鏃の先端部だけ。丁寧な形成ではない。鏃先端部は約70°の鋭角。図の矢印は剝離順序。
小型扁平利器	〃 〃 35175	35号竪穴Ⅲ（床 面）	7.4	3.8	0.4	28	結晶片岩（黒色片岩）	I	基端の一部が欠損。全面研磨の石器。刃部も基端も両刃状に研磨したあと、刃を平坦に摩っている。
	〃 〃 08176	8号竪穴Ⅱ	3.8	2.9	0.2	2.5	結晶片岩（砂質片岩）	Ⅱ	刃部と側面だけ研磨の完形品。両端とも両刃の刃をもつ。
	〃 〃 24177	24号礫床Ⅱ	—	—	0.3	3.3	〃	〃	全面研磨の石器だが、縦に割れており、しかも基端も欠損。刃は両刃。
	〃 〃 12178	12号竪穴Ⅱ	3.7	1.8	0.2	2.5	結晶片岩（黒色片岩）	〃	全面研磨。両端部は両刃状に研磨されているが、刃先端が欠損。
	〃 〃 18179	18号竪穴Ⅱ	—	—	0.2	3.6	〃	〃	全面研磨だが両端欠損。縦にも割れて、一方の側面だけが残っている。
	〃 〃 18180	18号竪穴Ⅱ	4.8	—	0.5	13.7	〃	〃	両側面欠損。全面研磨。一端は両刃、他端も両刃状に研磨されているが先端が欠損。
	〃 〃 18181	18号竪穴Ⅱ	—	—	0.2	2	結晶片岩	〃	刃部と側面のみ研磨。一端に両刃が残っているが、もう一端及び側面が欠損。
	〃 〃 32182	32号竪穴Ⅱ	—	—	0.2	3.4	結晶片岩（黒色片岩）	〃	ほぼ全面研磨。刃は両刃だが、刃先端が平坦に摩られている。
	〃 〃 P 183	P 10 Ⅲ	—	4.3	0.6	6.7	〃	Ⅲ	磨製石斧の破片を割れた面から研磨して刃をつくっている。なお、先端部は側面からも磨いて尖頭状を呈する。

器種	挿図番号 PL. NO	出土地点 層	法量 長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質	群類	特徴
有孔石器	Fig. 56 PL. 45 B 184	3段丘 I	4.9	—	1.3	30	粘板岩	—	両面と側面には研磨が残っている。欠損して全形は不明だが方形の有孔石器。
	〃 〃 09185	9号竪穴II	—	—	0.5	12.9	結晶片岩（黒色片岩）	—	両面に研磨が残っている。4辺とも欠損。小孔の半分が残っている。
両刃石斧	〃 〃 07186	7号竪穴II	10.2	4.3	2.6	210	角閃岩(?)	I	細長の全面磨製。立面刃縁が弧状を呈し、縦断面で見ると表面が弧状を呈する。
	〃 〃 28187	28号竪穴II	11.5	7.8	2.7	425	輝緑斑岩	II	扁平で幅広の全面磨製両刃石斧。刃部と基部の界線が明瞭。側面は平担に研磨され、界線の稜が明瞭。
	Fig. 57 PL. 46 52188	52号礫床II	11.3	6.1	2.8	360	〃	III－A	刃部と表裏面が研磨されている。刃の一端が多く減耗している。
	〃 〃 08189	8号竪穴II	11.5	5.7	2.9	335	斑レイ岩	〃	基端以外は全面磨製。側面は平担に研磨され、稜線がやや明瞭。刃の一端が多く減耗。
	〃 〃 23190	23号竪穴II	12.3	5.2	2.9	340	輝緑岩	〃	基端以外は全面磨製。側面は丸く研磨。刃部幅に比して基端幅が狭い。
	〃 〃 24191	24号礫床II	10.4	4.9	3.8	240	斑レイ岩	〃	両側面以外は研磨されている。刃の一端が多く減耗。
	〃 〃 53192	53号礫床II	10.3	5.2	2.3	220	輝緑岩	〃	基端欠損。それ以外は全面磨製の扁平石斧。側面は平担に研磨され、稜線が明瞭。刃の一端が多く減耗。
	〃 〃 45193	45号竪穴III	10.4	5.1	3.1	305	〃	〃	基端以外は全面磨製。側面は平担に研磨され、稜線が明瞭。刃部欠損後にも研磨。刃の一端が多く減耗。
	Fig. 58 PL. 47 57194	57号竪穴III	11.7	5.9	2.9	340	〃	III－B	全面磨製。側面は平担に研磨されて稜が明瞭。刃部と基部の界線は明瞭でない。

器種	挿図番号 PL. NO	出土地点 層	法量 cm 長さ	cm 幅	cm 厚さ	g 重量	石質	群類	特徴
両刃石斧	Fig. 58 PL. 47 17195	17号礫床Ⅱ	12.4	5.7	2.6	310	輝緑岩	Ⅲ－B	基端以外は全面磨製。側面は表裏面から研磨されて刃状を呈する。刃部と基部との界線が明瞭。
	〃 〃 51196	51号礫床Ⅱ	11.7	6.0	2.8	350	斑レイ岩	〃	左側面と裏面及び刃部は研磨されている。側面は平担に研磨され、稜線が明瞭。刃部は欠損後再研磨して再利用。
	〃 〃 44197	44号礫床Ⅲ	－	5.3	3.5	240	〃	〃	基部のほぼ中央から欠損、残存部では全面磨製。側面は丸く研磨されて稜線がない。厚手のタイプ。
	〃 〃 56198	56号礫床Ⅱ	－	6.4	2.7	165	輝緑岩	〃	基部のほぼ中央から欠損。側面も打欠。刃部と基部の界線が明瞭でない。
	〃 〃 27199	27号礫床Ⅱ	－	5.4	2.4	105	斑レイ岩	〃	基部中央から欠損。残存部は全面研磨だが、凹凸が多く、凸部のみ研磨されている。側面は平担に研磨。
	Fig. 59 PL. 48 34200	34号礫床Ⅱ	－	－	－	110	輝緑岩	〃	基部のほとんどと左側面が欠損。残存部は全面研磨。右側面は平担に研磨され稜線が明瞭。
	〃 〃 22201	22号竪穴 （床　面）	－	5.0	2.3	140	〃	〃	基部中央から欠損。残存部は全面研磨。側面は丸く研磨され、稜線が見られない。刃部は打欠されている。敲石へ転用。
	〃 〃 49202	44号竪穴Ⅲ	－	5.0	2.8	215	〃	〃	刃部欠損。両側面と表裏面は研磨されているが、凹凸が多く、凸面だけ研磨されている。
	〃 〃 03203	3号礫穴Ⅱ	－	5.6	3.2	295	〃	〃	刃部欠損。両側面と表裏面は研磨されている。側面は丸く研磨。
	〃 〃 09204	9号竪穴Ⅱ	－	6.0	2.9	195	斑レイ岩	〃	刃部欠損。両側面と表裏面は研磨されているが、凹凸が多く、凸面だけ研磨されている。
	〃 〃 40205	40号竪穴Ⅴ	10.9	5.3	2.6	275	輝緑斑岩	〃	打欠して石斧の形だけできた未製品。表面に弱い研磨が見られる。

器種	挿図番号 PL. NO	出土地点 層	法量 長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質	群類	特徴
両刃石斧	Fig. 60 PL. 49 23206	23号竪穴Ⅱ	9.9	6.4	3.0	295	輝緑岩	Ⅳ	刃部幅に比して基端幅の狭いタイプ。刃部は丁寧に研磨されているが、表裏面は凸面のみ弱い研磨。側面、基端研磨なし。
	〃 〃 27207	27号礫床Ⅱ	9.3	6.1	2.9	255	〃	〃	刃部幅に比して基端幅の狭いタイプ。刃部は研磨が丁寧。表裏面は凸面のみ弱い研磨。側面、基端研磨なし。側面に抉入。
	〃 〃 18208	18号竪穴Ⅱ	6.8	5.5	1.9	118	〃	〃	基端以外は全面研磨。刃部に比して基端の狭いタイプ。扁平で、基端にはV字状に打痕が認められる。
	〃 〃 40209	40号竪穴V （床　面）	8.1	5.3	2.8	242	〃	〃	厚手。刃部と表裏面は研磨。刃縁は敲石として二次使用されたと考えられる。
	〃 〃 10210	10号礫床Ⅱ	—	4.7	2.3	148	斑レイ岩	〃	基端以外は全面研磨。側面はやや平担に研磨され、稜線もやや明瞭。刃部と表面半分欠損。
	〃 〃 12211	12号竪穴Ⅱ	8.5	4.4	2.3	132	輝緑岩	〃	基端以外は全面研磨。側面は丸く研磨。刃部に比して基端の狭いタイプ。刃部欠損後再研磨して再使用。
	〃 〃 24212	24号礫床Ⅱ	—	4.3	2.1	132	斑レイ岩	〃	基端及び裏面の両側面欠損。全面丁寧な研磨。側面は平担に研磨され稜線が明瞭。
	〃 〃 47213	47号竪穴Ⅲ	—	3.6	1.2	65	結晶片岩	V	刃部のみ研磨の局部磨製石斧。平面刃縁が強い弧状を呈する。基端欠損。
	Fig. 61 PL. 50 18214	18号竪穴Ⅱ	6.9	3.8	1.5	57	輝緑岩	Ⅵ	欠損部が多いが、基端、側面にも研磨部分が残っていることから全面研磨の小型石斧。
	〃 〃 56215	56号礫床Ⅱ	—	2.8	1.5	24.3	石英安山岩	〃	基部中央から欠損。残存部は全面研磨。側面も丸く、横断面が楕円形。
片刃石斧	〃 〃 22216	22号竪穴Ⅱ （床　面）	—	4.2	1.7	77.7	角閃岩(?)	Ⅰ	全面磨製。両側面と裏面は平担に研磨。表面は三面取りの研磨。横断面が鎬をもつ蒲鉾状。裏刃縁に細かい刃こぼれが並ぶ。

器種	挿図番号 PL. NO	出土地点 層	法量 長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石質	群類	特徴
片刃石斧	Fig. 61 PL. 50 23217	23号竪穴Ⅱ （床　面）	9.1	5.3	1.8	168	斑レイ岩	Ⅱ	全面磨製。両側面、裏面、基端は平担に研磨され、稜が明瞭。表面は若干丸味をもつ。横断面はほぼ短冊型。裏刃縁に細かい刃こぼれが並ぶ。
	〃 〃 40218	40号竪穴Ⅴ	－	6.8	2.1	181	〃	〃	基部中央から欠損。刃部は丁寧に研磨されているが、表裏面、両側面は研磨が弱く、凸面だけ研磨。横断面はほぼ短冊型。裏刃縁に刃こぼれが並ぶ。
	〃 〃 51219	51号礫床Ⅱ	－	5.2	1.8	86.6	輝緑岩	〃	刃部は丁寧に研磨されているが、ほかは凸面だけが研磨。刃縁は摩られて平担になっている。
	〃 〃 35220	35号竪穴Ⅲ （床　面）	－	4.8	1.8	97.8	輝緑斑岩	〃	基端欠損。残存部は全面研磨。両側面に弱い抉入。刃縁は平担に摩られている。横断面は楕円形。
	〃 〃 32221	32号竪穴Ⅲ	－	4.2	1.5	65.2	角閃岩(?)	〃	刃部欠損。残存部は全面研磨。横断面はほぼ短冊型。
特殊石器	Fig. 62 PL. 51 41222	41号竪内の柱穴(床面)	15.2	6.5	4.8	555	斑レイ岩		全面研磨されているが、研磨が弱い。やや十字形の石器で両枝の根元には抉りがあり、両手で握りやすいようになっている。
敲石	〃 〃 08223	8号竪穴Ⅱ	6.4	5.8	3.2	220	輝緑岩	Ⅰ	磨製石斧の基部破片を加工して、両端を敲石として使用。
	〃 〃 09224	9号竪穴Ⅱ	6.9	7.0	2.9	262	〃	〃	磨製石斧の基部破片を加工して、3側面を敲石として使用。一側面は弱い研磨。
	〃 〃 18225	18号竪穴Ⅱ	6.1	6.6	4.3	270	砂岩	〃	磨石の破片を円盤状に加工して、側面を敲石として使用。
	〃 〃 57226	57号竪穴Ⅲ	9.1	－	4.6	220	礫質砂岩	Ⅱ	原石を加工せずに敲石として使用。縦に半分欠損。
	〃 〃 21227	21号竪穴Ⅱ	8.9	7.2	－	495	砂岩	〃	原石使用。上端と下端に敲き痕。

器種	挿図番号 PL. NO	出土地点 層	法量 cm 長さ	法量 cm 幅	法量 cm 厚さ	法量 g 重量	石質	群類	特徴
敲石	Fig. 63 PL. 52 21228	21号竪穴Ⅱ	9.7	7.2	5.8	608	砂岩	Ⅱ	原石使用。上端と下端に敲き痕。
〃	〃 B 229	P 4 Ⅱ	6.2	5.6	4.3	218	〃	〃	原石使用。上端と下端に敲き痕。 小型の敲石。
〃	〃 24230	24号礫床Ⅱ	9.1	6.6	4.9	440	〃	〃	原石使用。上端と下端に敲き痕。
〃	〃 14231	14号竪穴Ⅲ	12.1	6.6	4.5	536	礫質砂岩	〃	原石使用。上端に敲き痕。下端は欠損。左側面は弱い研磨。
〃	〃 B 232	第4段丘Ⅰ	16.8	10.0	5.6	1650	砂岩	〃	原石使用。下端に敲き痕。
磨石	Fig. 64 PL. 53 B 233	第4段丘Ⅰ	13.2	9.9	5.2	932	結晶片岩		原石使用。表裏面を磨石として使用している。
〃	〃 B 234	〃	13.3	8.6	4.5	743	砂岩		〃
〃	〃 48235	48号竪穴Ⅲ	12.1	8.2	4.4	560	〃		〃
凹石	〃 09236	9号竪穴Ⅱ	—	8.2	5.2	607	〃		3分の1欠損。原石を使用した磨石を再利用。表裏面に直径約2㎝の円形凹み。
石皿	〃 B 237	第4段丘Ⅰ	—	—	—	1285	細粒砂岩		大きな石皿の破片。石皿の凹みが約3㎝と深い。凹み面は滑らか。
〃	〃 B 238	〃	—	—	—	550	〃		大きな石皿の破片。石皿の凹みが約2㎝。凹み面は滑らか。
〃	Fig. 65 PL. 54 B 239	〃	—	25.3	7.0	3900	砂岩		半分欠損。石皿の凹みは約1㎝。 凹み面は滑らか。
〃	〃 15240	15号竪穴 （床 面）	38.0	35.5	14.8	29kg	細粒砂岩		完形品。直径23㎝の円形状の凹み。 凹みの最深部は3.5㎝。 凹み面は滑らか。

Fig.56（PL.45）　石器　石鏃（40173、13174）　小型扁平利器（37175～P 183）　有孔石器（B 184、09185）　両刃磨製石斧（67186、28187）

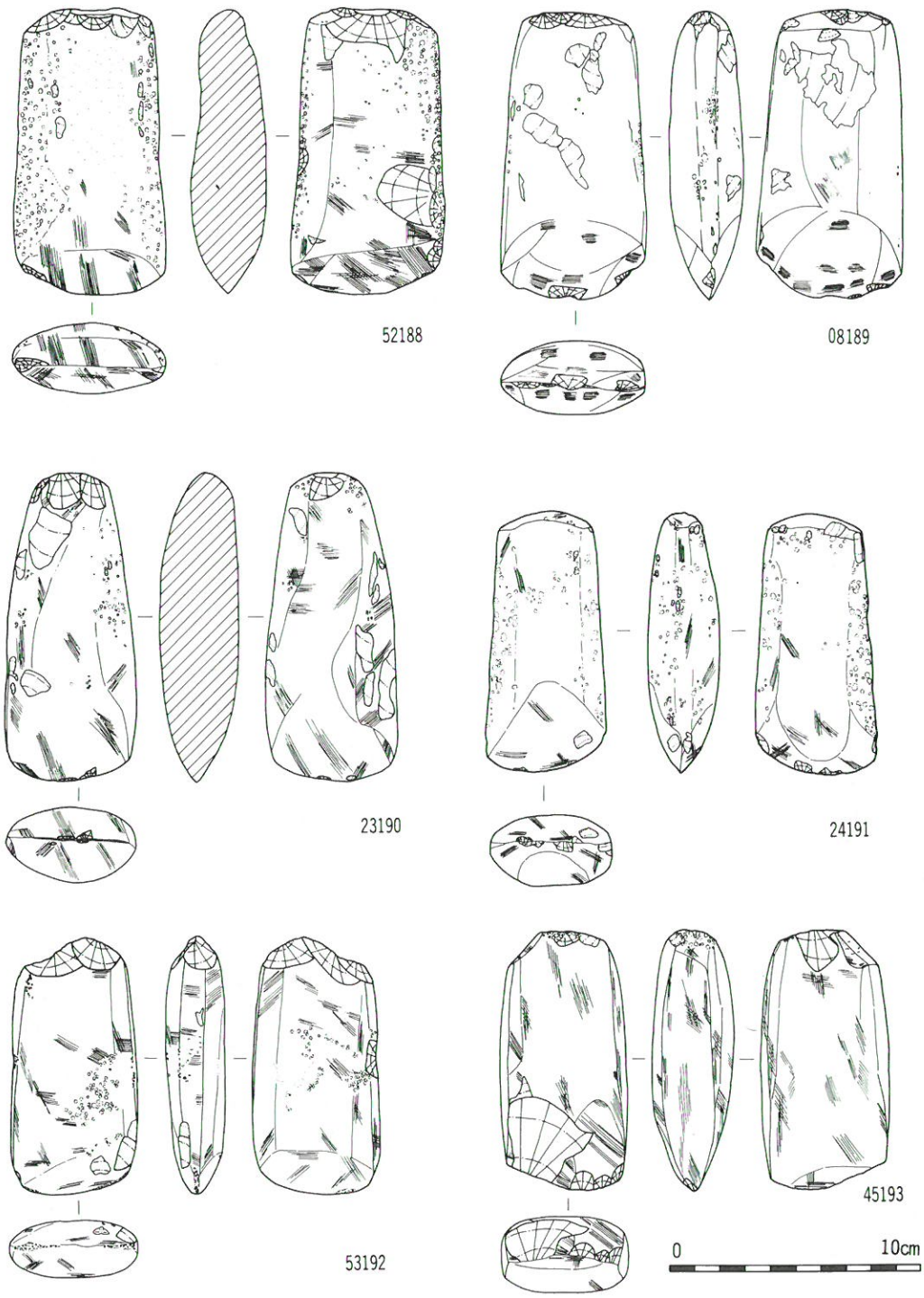


Fig.57 (PL.46)　石器　両刃磨製石斧（52188～45193）

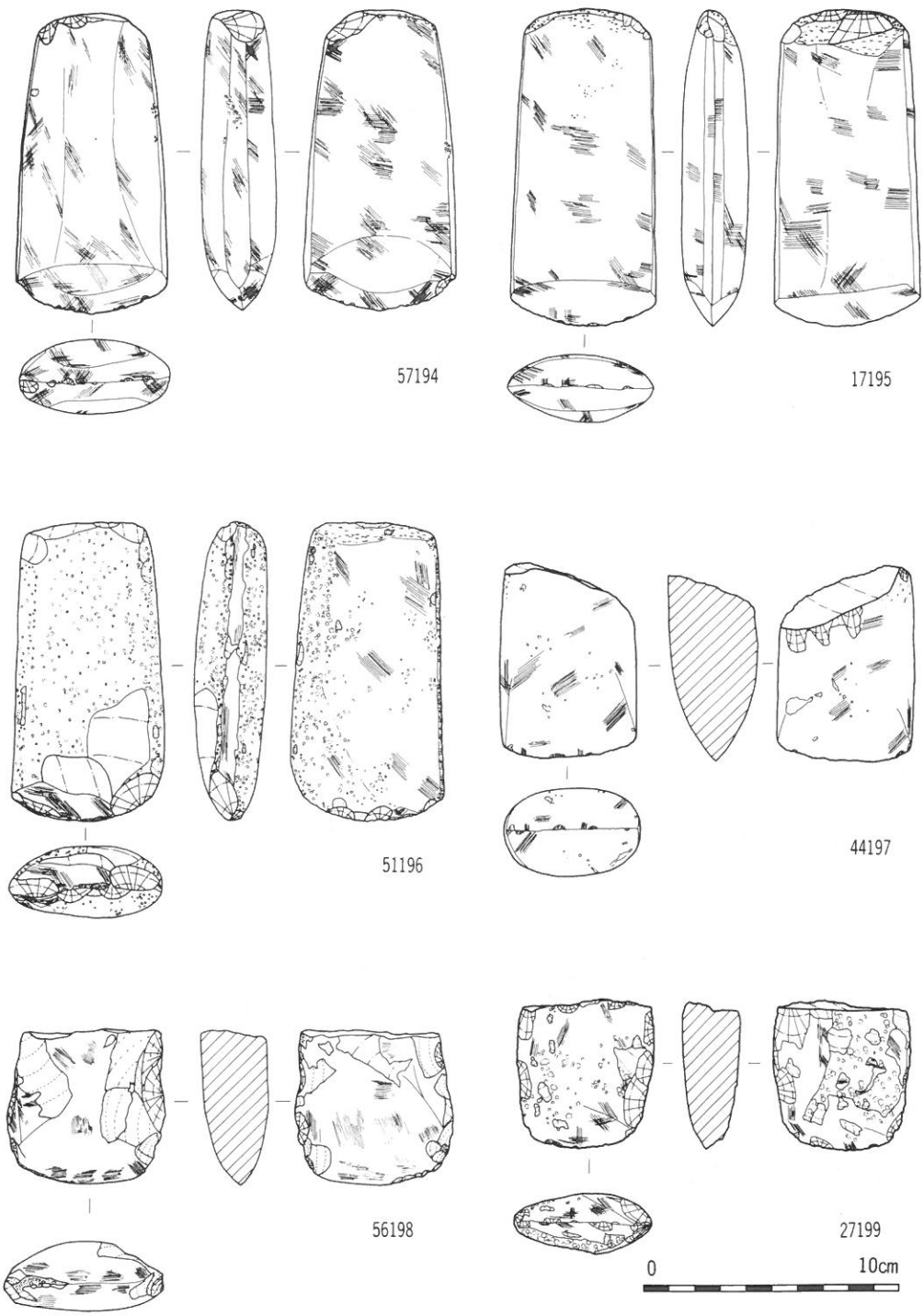


Fig.58 (PL.47)　石器　両刃磨製石斧（57194～27199）

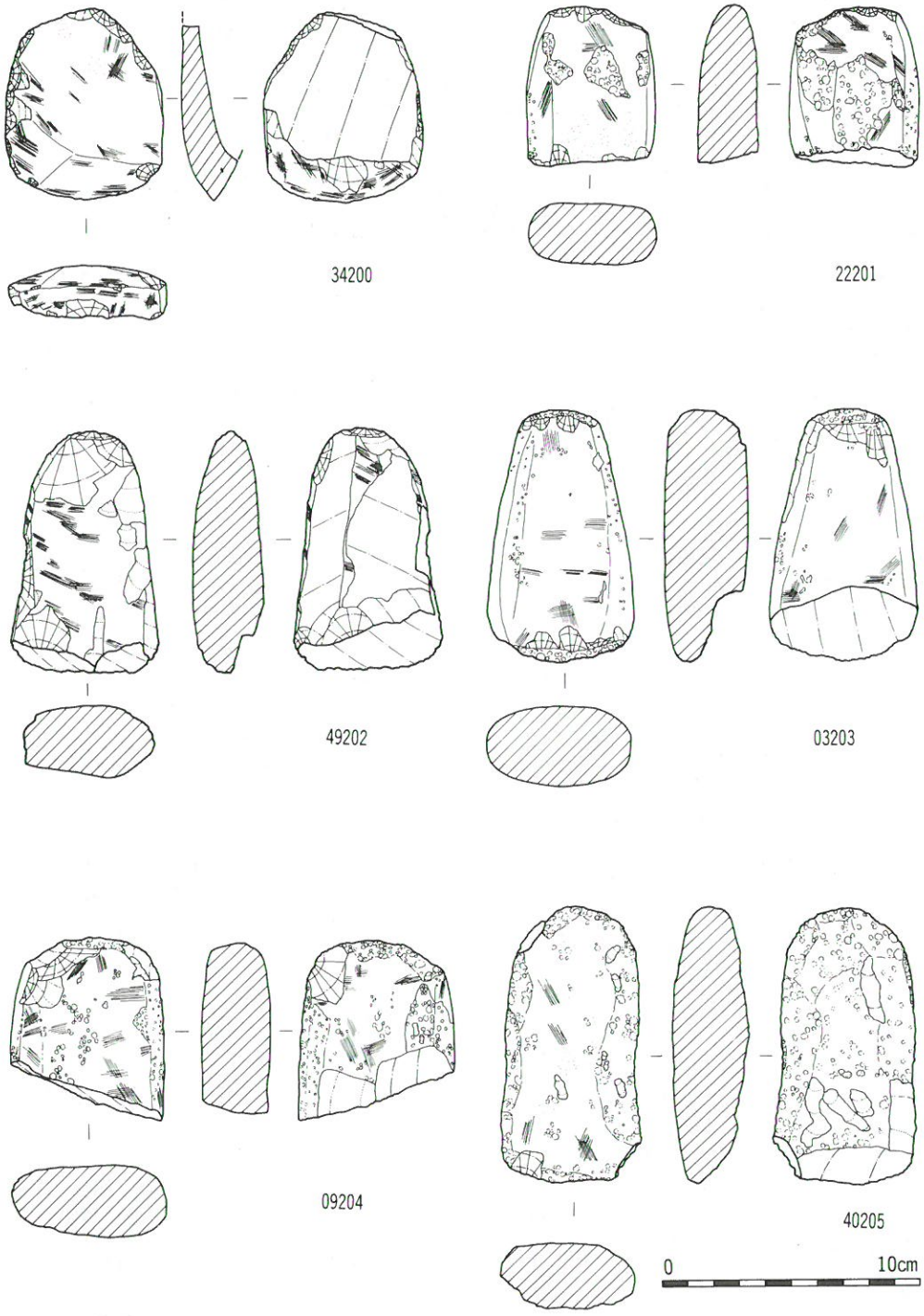


Fig.59 (PL.48)　　石器　両刃磨製石斧（34200～09204）　未製品（40205）

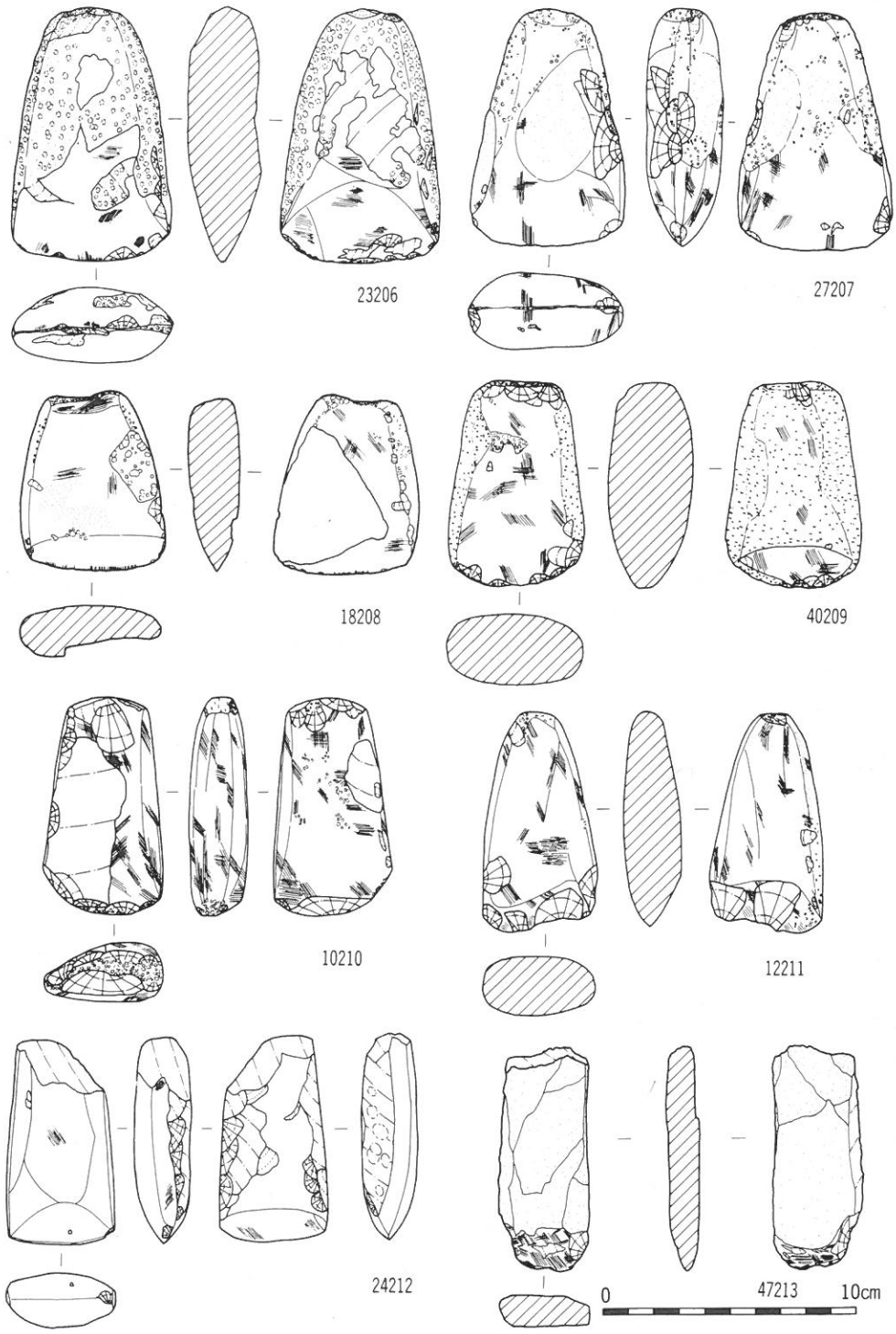


Fig.60 (PL.49)　石器　両刃磨製石斧（23206～24212）　両刃局部磨製石斧（47213）

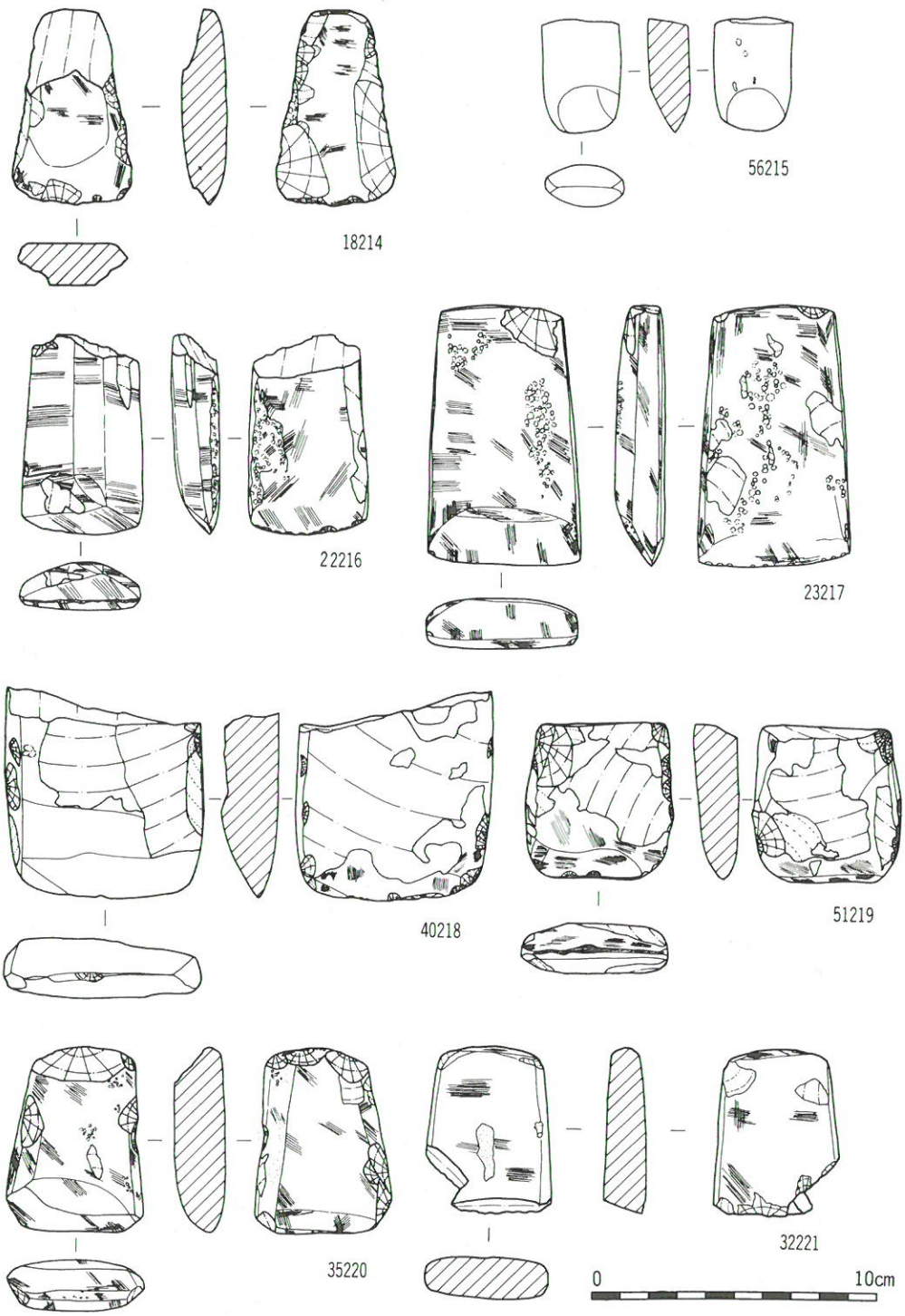


Fig.61（PL.50）　石器　両刃磨製石斧（18214、56215）　片刃磨製石斧（22216～32221）

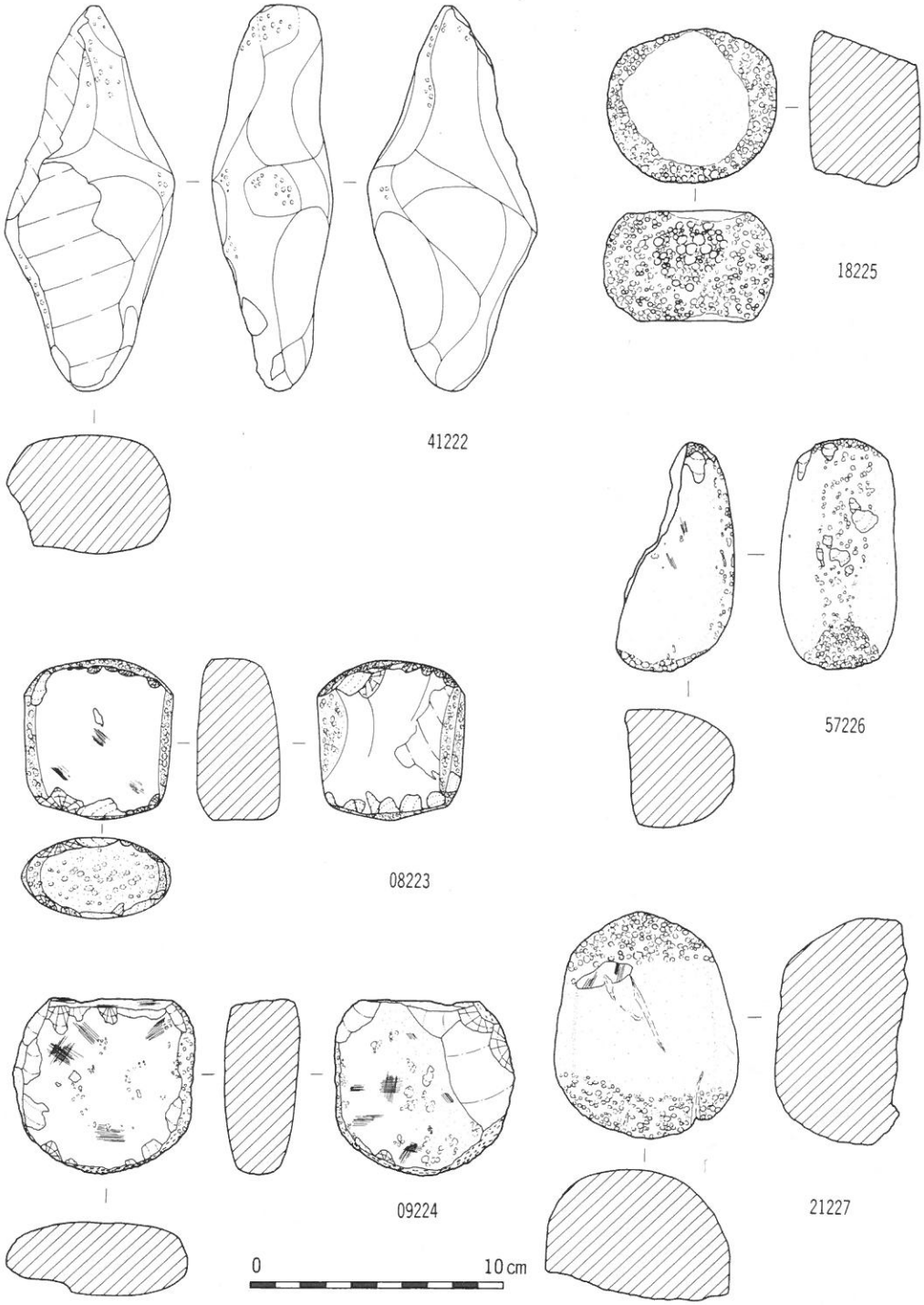


Fig.62（PL.51）　石器　特殊石器（41222）　敲石（08223～21227）

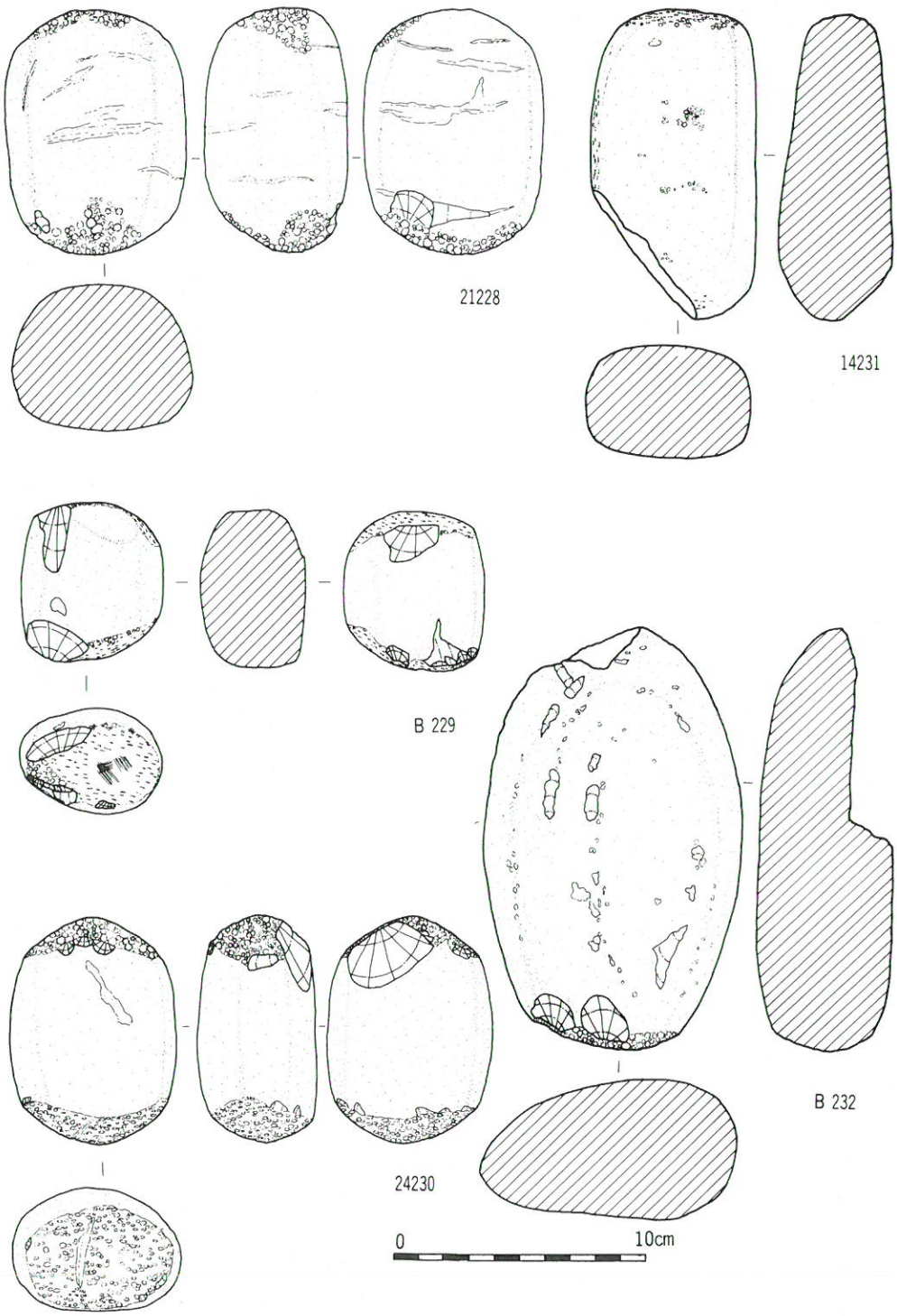


Fig.63 (PL.52)　　石器　敲石（21228～B232）

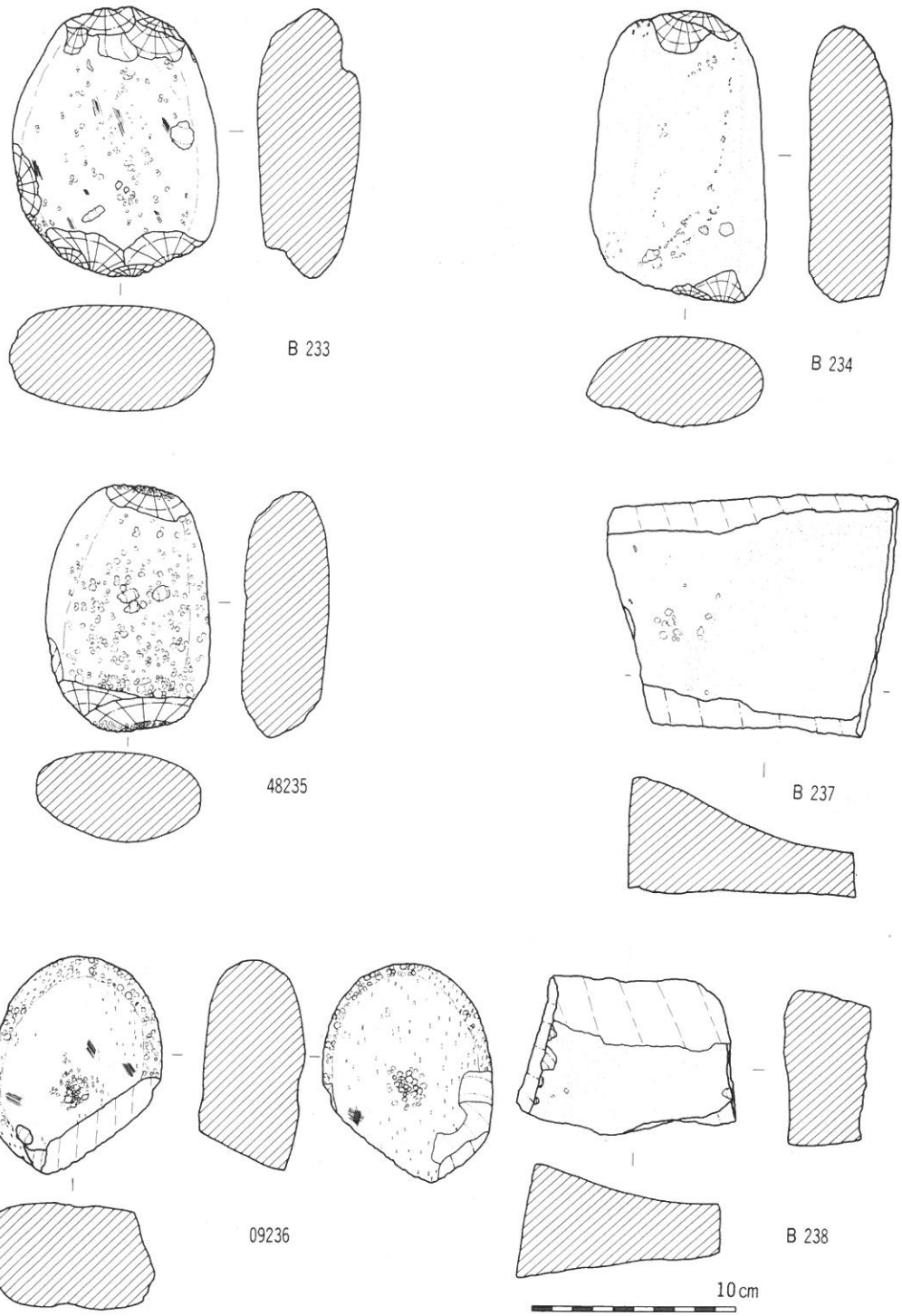


Fig.64 (PL.53)　石器　磨石（B233～48235）　凹石（09236）　石皿（B237、B238）

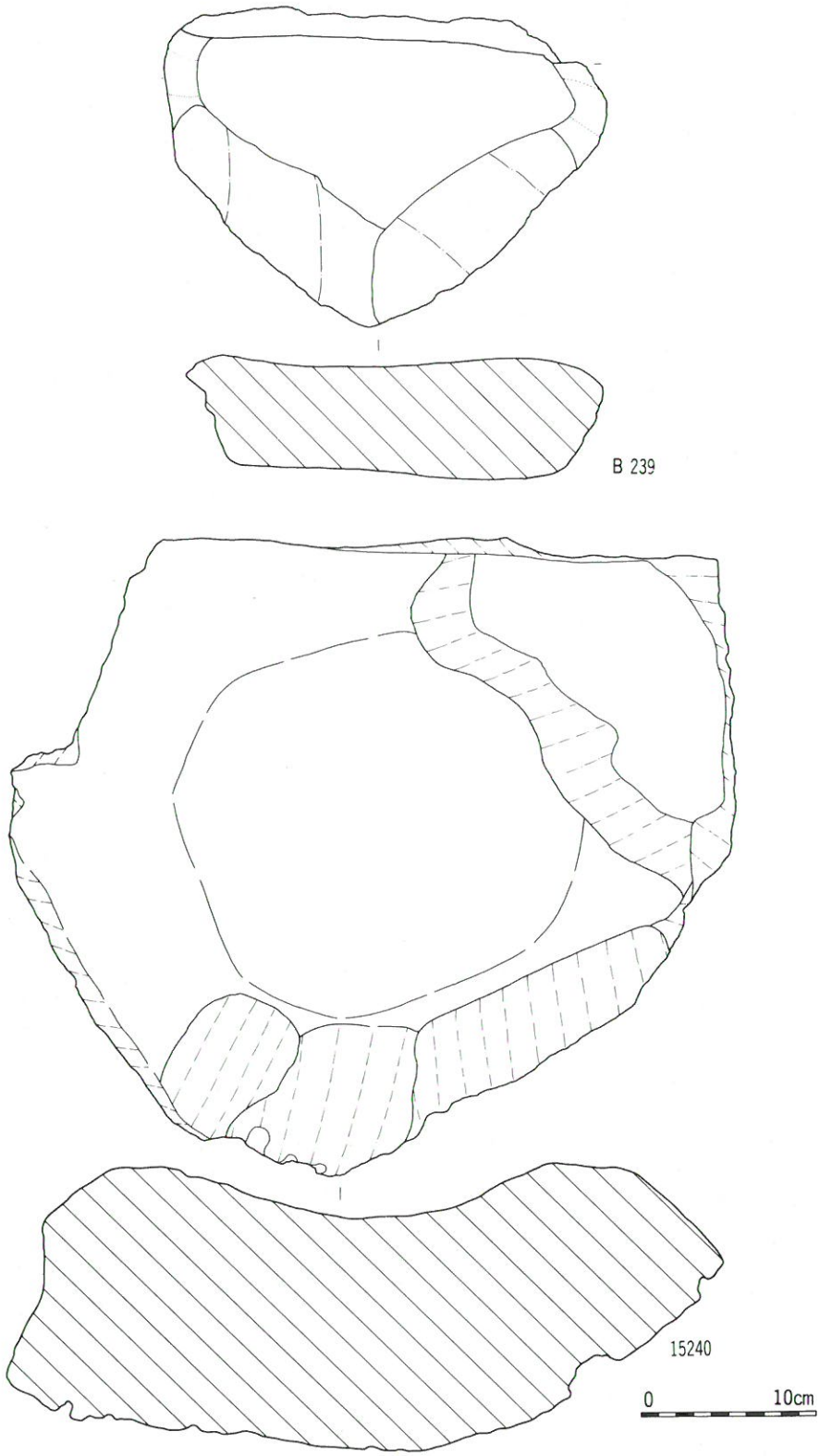


Fig.65 (PL.54)　　石器　石皿（B239、15240）

第3節　骨　製　品

本遺跡出土の骨製品は69点である。これらは用途があきらかでないものも少なくないが、記述の都合上、下記の分類を用いたが一応まとめのためのものであることをことわっておきたい（後述の貝製品も同様である）。

出土状況をみると第2層から主に出土した。遺構別には、60号遺構が8点で最も多く、次に55号・56号遺構がそれぞれ7点づつと続く。製品では骨針が24点（35%）と多く得られた。

以下、各製品について記述する。

Tab. 58　骨製品遺構別出土状況

遺構＼製品		実用品																			装飾品									用途不明	傷痕		合計
		骨針							ヘラ状製品				骨錐							ジュゴン（ヘラ）	イヌ・犬歯	イノシシ・犬歯	イノシシ長骨		クジラ			未製品		イノシシ	ジュゴン	
		魚骨	不明	イノシシ腓骨 完形	イノシシ腓骨 頭のみ	イノシシ腓骨 頭欠	イノシシ腓骨 尖のみ	イノシシ腓骨 幹のみ	イノシシ肢骨 頭のみ	イノシシ肢骨 幹のみ	イノシシ肢骨 尖端のみ	大形鳥類	イノシシ	ジュゴン 完形	ジュゴン 頭欠	ジュゴン 尖のみ	ジュゴン 幹のみ	ジュゴン 頭のみ				かんざし？	不明	方形	かんざし						
3号	Ⅱ																				1											1
9号	Ⅱ												1												1							2
10号	Ⅱ																				1			1								2
12号	Ⅱ					1																										1
13号	Ⅱ														1			1			1											3
14号	Ⅲ																													1			1
15号	Ⅱ															1																	1
18号	Ⅱ						1						1																				2
21号	Ⅱ																														1		1
22号	Ⅱ					1																									1		2
24号	Ⅱ																													1			1
27号	Ⅱ													1									1										2
28号	Ⅱ															1																	1
32号	Ⅱ													1																			1
34号	Ⅱ						1													1		1											3
36号	Ⅱ							1																									1
40号	Ⅳ																				1												1
42号	Ⅱ																															1	1
47号	Ⅱ			1	1	1																						1					4
49号	Ⅱ											1																					1
50号	Ⅱ					1							1									1											3
51号	Ⅱ								1	1																							2
52号	Ⅱ																													1		1	2
53号	Ⅱ																														1		1
55号	Ⅱ						2	2								1														1			7
56号	Ⅱ	1			1		2	2	1																								7
57号	Ⅱ							1									1		1														2
60号	Ⅳ	1	1				1								1		1	2													1		8
表採								1				1																					2
不明																					1												1
その他										1						1						1											3
合計		2	1	1	2	4	7	7	1	2	1	2	3	2	2	4	2	3	1	2	5	1	1	1	1	1	4	4	2	69

A　実用品

a．骨針（Fig.69）

骨針は、魚の棘、イノシシの腓骨、不明の３種の材料が用いられている。主にイノシシの腓骨、とくに遠位端をカットしたものが主体となる。かんざし等の装飾品も含まれると思われるがここでは一つにまとめた。以下、Tab.59に記述する。

Tab. 59　　骨　針　出　土　一　覧　　単位：mm

図版番号	遺構グリッド	層	素材	残部状況	最大長	最大幅	加工状況
56241	56号	Ⅱ	魚棘	尖端のみ	40.0	5.5	先端部に明瞭な加工痕は認められない。人工品かどうか決定しがたい。類例は①津堅島キが浜貝塚にある。
60242	60号	Ⅳ	〃	〃	46.0	5.0	上に同じ
60243	60号	〃	獣骨と思われるが不明	〃	80.7	5.0	断面は直径 5.1 mmの円形をなす。ていねいに加工され、光沢がある。 先端部は尖頭状になる。
47244	47号	Ⅱ	イノシシ左腓骨近位端。	完形	128.0	18.2	近位端の薄い部分に 5.0 ×3.5 mmにたて長の楕円形の孔を有する。 刃先は片刃的である。
12245	12号	Ⅱ	イノシシ右腓骨近位端～。骨端欠損	頭部欠損	103.0	9.2	先端は両端から切削し、両刃状になる。 加工痕が顕著にみられる。
47246	47号	Ⅱ	イノシシ左腓骨近位端～。	頭部欠損	85.5	7.5	刃先は風化し、アバタ状になる。両側から削りとって、研磨する。
55247	55号	Ⅱ	イノシシ左腓骨（遠位端から近位端か不明）	頭部欠損	57.0	5.5	刃先は６～８面の研磨面が認められる。研磨の方向は横・縦位にみられる。

図版番号	遺構 グリッド	層	素材	残部状況	最大長	最大幅	加工状況
47248	47号	Ⅱ	イノシシ右腓骨～遠位端。	尖端欠損	18.0	11.5 5.5	中間部は若干、研磨痕が認められる。中間の断面は楕円形（3.5×6㎜）を呈する。
22249	22号	Ⅱ	イノシシ腓骨	頭部欠損	60.0	6.0	断面形4.1×6.0㎜の楕円をなす。尖端部は研磨痕が顕著である。偏平の円錐形を呈する。
55250	55号	Ⅱ	イノシシ腓骨	頭部欠損	37.0	3.5 × 2.5	骨針の中で最も細い。 横断面は巾3.5×2.5㎜ほぼ円形をなす。尖端は研磨痕が横位、斜位に顕著に認められる。
60251	60号	Ⅳ	イノシシ左腓骨	頭部欠損	57.0	6.0	近位端を尖らしたもので、断面は6×4㎜の楕円形。尖端部は、偏平状を呈する。刃部は両側面を横位面に研磨痕が顕著に認められる。
50252	50号	Ⅱ	イノシシ腓骨	〃	59.0	6.0	尖端の研磨は顕著である。頭部が欠損しているため、左右不明
36253	36号	Ⅱ	イノシシ右腓骨中間のみ	尖端頭部欠損（中間）	64	7.0	遠位端を切削し、尖らしたものである。断面形は巾7×4㎜のひし形をなすが、刃部は偏平になる。また尖端部は、研磨痕が顕著に認められる。頭部側は、自然のままである。
56254	56号	Ⅱ	イノシシ腓骨幹のみ	中間	51.0	9.0	横断面は7×4.5㎜の長方形を呈する。 遠位端側を削りとり、尖らす。
57255	57号	Ⅱ	イノシシ腓骨（中間のみ）	上に同じ	59.0	9.0	頭部、尖端部が欠損しているため左右不明。両側面に研磨痕が顕著に認められる。中間部の断面形は9×3㎜の楕円形を呈する。

図版番号	遺構グリッド	層	素材	残部状況	最大長	最大幅	加工状況
56256	56号	Ⅱ	イノシシ右腓骨中間部	中間	41.0	6.0	断面は頭部に近い方が2.5×5㎜の偏平の楕円形を呈する。先端に近いところは直径3.5㎜の円形である。尖端に近い部分は加工が著しく原形をとどめない。
56257	56号	Ⅱ	イノシシ	頭部のみ	21.0	7.0	孔径2.1㎜を両面から穿孔する。頭部の断面は方形をなす。加工痕は全面に認められる。
34258	34号	Ⅱ	イノシシ腓骨	針先のみ	26.0	5.5	小片のために左右不明である。横断面が5.5×3㎜で片面が若干ふくらむ。側面はゆるやかに湾曲する。底面は若干、風化する。
56259	56号	Ⅱ	イノシシ腓骨	針先のみ	27.0	3.5	先端の加工が著しい。小片のため、左右不明髄空が確認できる。
18260	18号	Ⅱ	イノシシ腓骨	針先のみ	22.0	6.0	断面形は6×3㎜の楕円で尖端の加工は顕著で片刃的である。
B−261	表採	—	イノシシ腓骨中間部	中間のみ	20.0	7.0	使用時のものと思われる。光沢が顕著にみられる。
55262	55号	Ⅱ	同上	同上	14.0	4.5	光沢が顕著である。
55263	55号	Ⅱ	〃	〃	20.0	4.0	光沢が顕著である。

b．ヘラ状製品（Fig.69）

イノシシの肢骨、大形鳥の管骨を約8㎜程の板状に加工したもので破片の状況から先端を尖らすものと思われる。素材別にはイノシシの肢骨（4点）、大形鳥の管骨（2点）の計6点が得られた。大形鳥の管骨は、前者のイノシシの肢骨よりは薄手で、同じ用途かどうか、若干、疑問が残るが形状が類似することから1つにまとめた。以下、Tab.60に記述する。

Tab. 60　　ヘラ状製品出土一覧　　単位：㎜

図版番号	遺構グリット	層	素材	残部状況	最大長	最大幅	最大厚	加工状況
B−264	M−2	I	イノシシ肢骨半截	破損	28.0	6.0	2.0	表面と両側面はていねいに研磨調整される。
51265	51号	II	イノシシ肢骨半截	先端のみ	45.7	8.5	3.8	No.51266同一個体と思われる。イノシシの肢骨をたてに裂いて研磨調整を加えたもので本品はさらに先端を尖がらしてポイント状したものである。素材の関係で若干湾曲する。
51266	51号	II	イノシシ肢骨半截	中間	37.0	9.8	2.0〜5.0	上記と同様イノシシの肢骨を縦に裂いて研磨、調整を加えたもので、本品はさらに骨表面にも研磨が施される。
56267	56号	II	〃半截	〃	41.5	8.0〜6.0		骨端部に近い。上記と同様縦割りにしている表面と両側面の研磨痕は、顕著である。裏面上部は自然面をそのままのこすが、下半分は研磨が顕著にみられる。
B−268	表採	−	大形島管骨半截	頭部	37.0	10.0	1.8	表面及び切削面を研磨調整する。頭部も調整する。全体的に光沢がある。
49269	49号	II	〃半截	中間	44.2	10.5	1.0	管骨を縦に裂き、加工したものである。表、裏面、及び切削面とも研磨が著しく、光沢がある。薄手の製品で、用途は不明である。

c．骨錐（Fig.70）

骨の一端を尖らしたもので、素材はイノシシの肢骨とジュゴンの肋骨を利用したものに分けられる。これらは別の用途をもつものと思われる。

・イノシシ

肢骨を利用した骨錐は、従来、主に尺骨を用いたものがほとんどであるが、本遺跡のようにそれ以外の脛骨・橈骨を用いたものも、報告例がふえてきた。宮古島長間底遺跡[注2]、沖縄市室川[注3]遺跡等に報告例がある。以下Tab.61に示す。

Tab. 61　　イノシシ骨錐出土一覧　　単位：㎜

図版番号	遺構グリッド	層	素材	残部状況	最大長	最大幅	加工状況
18270	18号	Ⅱ	イノシシ右尺骨近位端～。	完形（ほぼ）	83.0	24.0	右尺骨の近位端から⅔程を用いたもので、滑車切痕の下位までを斜位にカットして尖らす。先端部は、2面に調整痕が認められる。
50271	50号	Ⅱ	イノシシ左脛骨近位端～。	完形	100.0	29.0	遠位端をカットしたもので先端から33.0㎜程を斜めにカットし、研磨調整したもので、尖端部の調整は顕著である。
09272	9号	Ⅱ	イノシシ左脛骨～遠位端	完形	88.0	23.5	遠位端と骨端部直下から、近位端にむけて半截しさらに先端をポイント状に加工し尖端部のみを研磨する。全体として、湾曲する。
15273	15号	Ⅱ	イノシシ脛骨か尺骨が不明	尖端のみ	21.4	6.8	イノシシの腓骨あるいは尺骨と思われるが、尖端部に髄空が認められる。尖端の研磨が顕著である。

・ジュゴン（Fig.70）

ジュゴンの肋骨を用い、先端を尖頭状に加工したもので、本遺跡では、12点出土した。出土したものは大部分は頭部を欠失し、尖端のみを残すものがほとんどである。破片の状況から復元すると82.4㎜の大きいタイプと125.0 ㎜の小さいタイプに大別され、さらに穿孔するものとしないものがある。穿孔するものは、頭部に溝状の加工を有するもの（32279、61283）と有しないもの（13284、61285）がある。32279のような短いタイプは大原貝塚A地点[注4]に報告例がある。

Tab. 62　　ジュゴン製骨錐出土一覧　　単位：㎜

図版番号	遺構グリッド	層	素材	残部状況	最大長	最大幅	最大厚	加工状況
27274	27号	Ⅱ	ジュゴン肋骨	完形	125.0	15.0	13.0	若いジュゴンの肋骨を利用したものでほぼ、自然の湾曲をそのままいかす。頭部に5ヶ所の切削痕が認められる。尖端部は若干、丸味をおびる。
60275	60号	Ⅳ	ジュゴン肋骨	頭部欠損	121.0	17.3	13.7	大形のジュゴンの肋骨を利用したもので全面に調整痕が縦位に認められる。火を受けたためか黒化し、尖端部は灰褐色化する。光沢がある。断面形は、楕円を呈する。
13276	13号	Ⅱ	ジュゴン肋骨	頭部欠損	90.5	13.2	10.0	他の骨針に比べて細身である。火を受けたため灰白色化する。上部は、黒化する。№13284と同一個体である。
55277	55号	Ⅱ	ジュゴン肋骨	頭部欠損	67.0	11.5	9.8	若いジュゴンの肋骨の遠位端を利用したものである。調整痕は明瞭で両面とも斜位に認められ、断面形は楕円である。尖端部を若干欠損する。
57278	57号	Ⅱ	ジュゴン肋骨	中間部のみ	33.5	11.0	10.0	断面はほぼ円形を呈する。全面研磨している。上、下とも破損しているが、骨錐の破片と思われる。
32279	32号	Ⅱ	ジュゴン肋骨	半截	82.4	9.0		頭部から尖端まである好資料である。頭部に直径4㎜の孔を有し、巾1.5㎜の溝を等間隔で3条、施こすが囲続しない。軸頂部に3㎜程、突出するが未完成と思われる。

図版番号	遺構グリッド	層	素材	残部状況	最大長	最大幅	最大厚	加工状況
B-280	P-9	Ⅱ	ジュゴン肋骨	尖端のみ	40.9	15.0	10.5	断面は楕円形を呈する。大形の骨錐の尖端と思われる。尖端部は使用のためかつぶれている。
28281	28号内	Ⅱ	〃	尖端のみ	48.0	9.4	7.5	断面は楕円形を呈する。光沢がある。
60282	60号	Ⅳ	〃	中間部のみ	37.3	16.6	13.6	断面は楕円形を呈する。側面に調整のための陵が認められる。骨全体の上部の破片と思われる。No.57278と同じ錐の破片と思われる。
60283	60号	Ⅳ	〃	頭部	19.6	16.0	9.0	骨錐の頭部で上、下に各2条の溝が囲繞する。下方は、間に直径5.0㎜の孔を有する。孔は両面から穿孔する。研磨は両面とも顕著であるが、表、裏、中央に自然面を若干残こす。断面は、長楕円形を呈する。
13284	13号	Ⅱ	〃	頭部	20.0	16.5	11.5	頭部の断面は、長方形で中間部では楕円形である。直径3.7㎜の孔を有し、両面から穿孔する。全面の研磨が顕著である。他に加工痕はない。
60285	60号	Ⅳ	〃	23.5	13.5	9.5 (3.0)	13.6	断面は、軸頂部が3.0㎜と薄くなり台形状を呈する。直径5㎜の孔を有し、両面から穿孔する。研磨痕は全面に顕著にみられる。

d．ヘラ状製品（Fig.70の34286）

ジュゴンの肋骨を利用したものであるが、先端部が扁平に加工され、ヘラ状を呈することから前述の骨錐と別の用途のものと思われる。破損部で残存部の最大長81.0㎜、最大幅34.0㎜、厚さ12.3㎜、刃部の幅は3.5㎜を計る。片面は自然面をそのまま利用し、裏面は半截し、割れ面を若干研磨する。刃先の平面観は丸みをもち、断面は両刃的である。34号遺構II層10～15cmの出土である。

B　装飾品（着装品）

装飾品と思われるものは、サメ歯有孔製品（1点）イヌの犬歯有孔製品（2点）、イノシシの犬歯加工品（5点）、イノシシの肢骨の加工品（2点）、クジラ骨の加工品（3点）の計13点で、出土量は全体の3分の1程度の出土である。

a．サメ歯有孔製品（Fig.71）

メジロザメ科の歯の歯根骨に近い歯骨側、製品のほぼ中央に直径2.2㎜の孔を穿ったものである。先端部は欠落する。裏面の基段部は研磨調整され、基端部はゆるやかに弧状を呈する。穿孔後、研磨調整が施される。残存部の最大長13.1㎜、最大幅18.8㎜、重さ0.7ｇで、36号遺構II層50～60cmの出土である。後出の貝製品「サメ歯模造製品」との関連を考える上で貴重な資料である。本品の出土は、キガ浜貝塚(注1)、謝名貝塚(注5)、浦添貝塚(注6)、室川貝塚(注7)の沖縄貝塚時代前V期の遺跡にみられる。

b．イヌの犬歯有孔製品（Fig.71）

イヌの犬歯のほぼ中央にあたる歯根部に直径2.0㎜の孔を有するもので、垂飾品の一部と思われるものである。出土例は室川貝塚(注7)にある。

Tab.63　　イヌ犬歯有孔製品出土一覧

単位：㎜

図版番号	グリッド	層	部　位	破損状況	法量 最大長	法量 最大幅	孔 たて	孔 よこ	加工状況
B 29I 07	出土地不明	II	イヌ 左下顎犬歯	完形	30.0	7.00	3.3	3.1	他に加工痕は認められない。
40292	40号	IV	イヌ 右上顎犬歯	完形	35.0	8.5	2.3	2.1	孔は両面から穿孔する

c．イノシシ犬歯加工品（Fig.71）

イノシシの犬歯を半截、穿孔したもので5点出土した。4タイプの加工のしかたがある。以下、それぞれについて記述した。

イ．エナメル質のみを利用したもの（13292）

イノシシのオスの左下顎犬歯のエナメル質部分を板状に加工したものである。破損部で基部に近い部分を残こす。外縁に1㎜程の抉りを入れ、内縁は角をとり丸みをだす。中央部は、基部とそれより20㎜はなれたところに内面より穿孔する。孔径はそれぞれ2.0㎜、2.0㎜である。研磨痕は裏面及び側面に横位にみられる。残存長は28.0㎜、よこ15㎜、厚さ3㎜である。13号遺

構II層の出土である。

イノシシの犬歯を縦に裂き、板状にしたものは、大原貝塚(注4)A地点、キガ浜(注1)貝塚に報告例がある。

ロ、半截して研磨したもの

34293はオスの左下顎犬歯を半截し、内縁側を利用したものでほど完形品である。先端部は欠損しているが、形状から尖がると考えられる。エナメル面は先端部から18㎜程削り取られる。横断面は直径6㎜の楕円形をなす。本品は類例がなく用途は不明である。34号遺構II層5～10cmの出土である。

ハ．孔を有するもの

10294、03295は孔を有するものである。2個とも加工形態は若干異なる。10294はオスの右下顎犬歯を利用したもので先端部に約2㎜の孔をエナメル面に穿孔する。さらに外縁に抉り痕が認められる。基部には数条の溝状痕と数回の剝離痕が認められる。これらの状況から未製品と思われる。10号遺構II層の出土である。

03295はオスの左下顎犬歯を利用したもので、基部及び先端を垂直に切削し研磨するものである。穿孔は、基部側が端より4㎜のところに外縁と内縁に4㎜を抉りその結果、穿孔される。先端側は、象牙質面とエナメル面の両面から穿孔する。ここは断面が三角形を呈するために穿孔が難しいために孔の位置が若干ずれる。外縁を幅2㎜程削り取り丸みだすが、中央の15㎜を残こす。さらに先端部は22㎜削ったために骨質部が露出する。研磨痕は横位が主体である。3号遺構II層5～10㎜の出土である。垂飾品と思われる。

ニ．牙を半切し穿孔したもの

50296はイノシシのオスの左下顎犬歯の基部側半分を利用したものである。孔は基部側が骨質面とエナメル面の裏面に直径2.5㎜の孔を外側から穿孔する。先端部は同様の面の他に横断面の3方からそれぞれ5.2㎜3.5㎜4.0㎜の外面から穿孔し、その3ヶ所を約1㎜程で貫通する。前述した製品と同様、装飾品と思われる。34号遺構II層20～25cmの出土である。

d．イノシシの肢骨加工品

B297は頭部の平面が台形をなし、その底辺から下に棒状に延びる。その幅6.8㎜を計るが下部は破損している。頭部は底辺側に2条の細沈線が施される。頂部も文様部分から欠落する。残存部は最大長40.2㎜、最大幅（頭頂部）7.9㎜、最大厚3.4㎜を計る。断面がL字状になることからイノシシの肢骨を利用したものと思われる。M－2グリッドI層の出土である。

24298は、イノシシの長管骨を利用したもので、先端部に1㎜の間隔で2条、中間部に3条の沈線がみられるが両者とも囲繞しない。先端部はていねいに研磨される。用途は不明であるが、装飾的様相が強いと思われる。24号遺構II層10～15cmの出土である。

e．クジラ骨加工品（Fig.71）

3個出土したが、3個とも形状の異なる製品である。

09295は頭部の形状が47㎜×55㎜の隅丸の方形を呈するもので、下辺の中央から約18㎜の軸がのびるが先端部は不明である。頭部は約３分の１下方に大きく抉り入れ、平面はひょうたん形のようなカーブを描く。さらにこの部分から幅4.5㎜の溝をめぐらし、中央部に直径７㎜の孔を両面から穿孔する。最大厚は15㎜で椎体のような骨を用い、表面は若干湾曲し、なめらかである。裏面は一応調整されているが面はザラザラする。９号遺構II層５～10cmの出土である。大型のかんざしのようなものと思われる。

10301 は長方形に加工した、有孔製品で完形品である。孔は製品のほぼ中央に穿孔する。加工面は全面とも海綿組織が露出する。大きさは長さ27.4㎜、幅18.9㎜、厚さ6.8㎜を計る。10号遺構II層０～５cmの出土である。

06300 はクジラの骨を板状に加工したもので破損品である。残存長は長さ45.1㎜、幅24.2㎜、厚さ7.0㎜である。側面は両端部と上部に8.0㎜程の研磨面が認められる。上部の断面は厚さ11.8㎜とＬ字状に厚くなる。これらの形状から彫刻骨器の未製品の可能性もある。６号遺構II層の出土である。

以上、これらと同じクジラの骨を用いた製品の出土する遺跡は、渡喜仁(注8)浜原貝塚、古宇(注9)原遺跡である。

C　用途不明（Fig.71）

55287は、イノシシの右尺骨を利用したもので、近位端部を切除、加工し、肘突起から滑車切痕にかけて加工し、丸みをおびる。全体として光沢がある。頭部にあたる遠位端は欠損し、不明である。残存部は最大長80.3㎜、最大厚14㎜を計る。55号遺構II層の出土である。

52288は、イノシシの右尺骨の遠位端を使用したものである。遠位端より26㎜のところに、直径５㎜の孔を有す。孔は片面は完形であるが、他は欠損する。一部は墨化する。残存部は最大長31㎜、幅14㎜を計る。現在のところ類例品がなく、用途は不明である。前述の製品の破損部とも考えられるが明確でない。52号遺構II層の出土である。

14304は、イノシシの右橈骨の遠位端部の骨端を水平にカットし、研磨したものである。海綿部が露出するが、遠位端に近い中間部に幅４㎜の溝状痕が２状有する。他に加工痕は認められない。残存部は最大長56.0㎜、幅29.2㎜を計る。14号遺構III層10～20cmの出土である。

22305もイノシシの肢骨を縦位に裂き、その面を研磨したもので、他に加工痕は認められない。残存部の最大長は49.8㎜、幅17.0㎜を計る。22号遺構II層10～15cmの出土である。

D　その他

a．イノシシの傷痕（Fig.71）

60316は、イノシシの肋骨で、中間部に２条の鋭い傷痕が認められる。60号遺構IV層０～５cmの出土である。

21307、53308は、イノシシの肢骨片で、前者は骨端部に2ヶ所、後者は、中間部に数ヶ所の打割痕が認められる。それぞれ21号遺構II層0～10cm、53号遺構II層の出土である。3点とも製品の未完成か食用の傷痕のためのものと思われる。

b．ジュゴン（Fig.71）

52302、42303はジュゴンの肋骨片で、溝状の刃痕と数回の抉り痕が認められる。これらは前述の製品をつくるため未製品と思われる。それぞれ、52号遺構II層10～20cm、42号遺構II層20～30cmの出土である。

第4節　貝製品

貝製品は、79点出土したが、そのうち利器や容器等の実用品と考えられるもの60点、装飾品と考えられるもの19点で、前者の方が76%を占める。遺構別にみると60号遺構が14個（17.7%）が最も多く、次に、34号遺構、50号遺構が6個づつでそれにつづく。製品別にも夜光貝製匙状製品が17点で最も多いが、これは材質上、破損率が高いためともいえる。Tab.64に遺構別に出土状況を示す。

Tab. 64　貝製品出土状況

遺構		実用品											装飾品												合計	石製品
		利器						容器					サメ歯模造品				貝輪		符状製品	貝						
		貝刃	螺蓋貝斧	スイジガイ製 完形	スイジガイ製 破片	ホラガイ系	ゴホウラポイント	貝匙 夜光貝製品	貝匙 夜光貝未製品	貝匙 巻貝製品	貝匙 巻貝未製品	ホラガイ有孔	aタイプ	bタイプ イ	bタイプ ロ	bタイプ ハ	ゴホウラ製	サラサバテイ製		マクラガイ製	タカラガイ製	トミガイ製	ゴホウラ製		
2号	II		1																					1	
3号	II		1					1																2	
6号	II							2									1							3	
8号	II																	1						1	
9号	II							2	1			1					1							5	
13号	II		1																					1	
22号	II		1																					1	
23号	II							1				1												2	
28号	II	1		1	1	1																		4	
31号	II		1																					1	
32号				1																				1	
34号					1	1		2	1			1												6	
40号			1	2				1															1	5	
43号		1																						1	
44号										1														1	
47号			1																					1	
48号				1																				1	
50号					1			3	2															6	
51号	II					1														1				2	
52号	II	1		1	1	1																		4	
55号		2																	1					3	
56号					1				1												1			3	
57号										1		1						1						3	
58号																				1				1	1
60号	IV	1	1		1	2					1		1		5	1		1						14	
Mグリッド	I	1				1	1							1										4	
Pグリッド	I		1																					1	
不明														1										1	
合計		7	9	6	6	7	1	12	5	2	1	4	1	1	1	5	3	2	2	1	1	1	1	79	1

A　実用品

a．利器

貝刃（7点）、貝斧（9点）、スイジガイ製利器（12点）、ホラガイ系利器（7点）、尖頭状製品（1点）が出土した。

イ．貝刃（Fig.72）

二枚貝の腹縁を押圧剝離によって力をつけたもので、貝種はチョウセンハマグリ—6点、スダレハマグリ—1点、の計7点出土した。刃の分布範囲をみるため、右図に記号で示すことにした。なお、分類の基準については、後藤勝彦(注20)氏の分類を基準とし、記号をかえた。Tab.65に観察を示した。また、60316,60317腹縁を欠損し、摩耗しているが、製品としがたいが参考資料として掲げた。

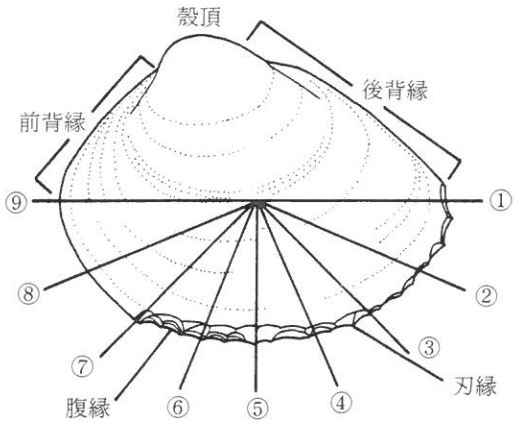


Fig-66　貝刃模式図

貝刃は、シレナシジミ、チョウセンハマグリ、リュウキュウマスオ等が報告されている。本遺跡の主体である、チョウセンハマグリの出土した遺跡は仲宗根貝塚(注10)、百名第2貝塚(注11)、ヤブチ洞穴遺跡(注12)、室川貝塚(注7)などの比較的古い遺跡に多い。なお、スダレハマグリについては、今のところ報告例がない。

Tab. 65　貝　刃　出　土　一　覧

単位：mm、g

図版番号	遺構	層	レベル	貝種	左右殻	法量 殻長	殻高	重量	刃先	附刃の範囲	備考
52309	52号	II	10～15	チョウセンハマグリ	右	61.9	52.2	14	荒	2—9 内2～9 (7)	内部に剝離がみられる。
55310	55号	II	—	チョウセンハマグリ	左	55.0	43.0	21	とくに荒	1～9 内部までくいこむ (8)	貝殻は風化する。内部は2ケ所に剝離がみられる。
60311	60号	IV	5～10	チョウセンハマグリ	右	53.0	45.2	16	荒	1～3*	腹縁部が欠損し、不明。内面にも剝離が2ケ所にみられる。打割は深く、明瞭である。
55312	55号	II	—	チョウセンハマグリ	左	56.0	52.6	36	荒	1～9 内(6—9) (8)	刃縁は深く入る。
43313	43号	II	20～30	不明(マルスダレガイ科)	右	43.2	41.0	6	荒	0～4*	附刃が前背縁までおよぶ。№4～8は欠損のため不明。
28314	28号	II	0～5	不明(マルスダレガイ科)	左	58.5	48.6	19	荒	*1—6 6—9* (5)	附刃は後背縁までおよぶと思われる。
B315	M—0	I	—	スダレハマグリ	左	54.0	41.5	11	荒	4—8 (4)	剝離は明瞭である。
60316	60号	IV	—	シレナシジミ	左	46.0	51.5	—	—	—	腹縁が欠落し、摩耗する。刃器ではない。参考資料として掲げた。
60317	60号	IV	—	シレナシジミ	左	63.5	58.5	—	—	—	同上

注：「附刃」の項（　）内は段階を示す。　*印→破損する。

ロ．螺蓋製貝斧

夜光貝の蓋の薄い部分を打ちかき刃をつけたもので、9点出土した。本品も前記と同様、刃縁の幅をみるためFig.67に模式図を示し、刃の分布範囲をTab,66に示した。附刃は③～⑭に及び、とくに④～⑭に附刃率が高い。附刃の範囲にみると4段階－2個、6段階－4個、7段階－1個、9段階－1個、10段階－1個、本遺跡では6段階のものが主体を示す。

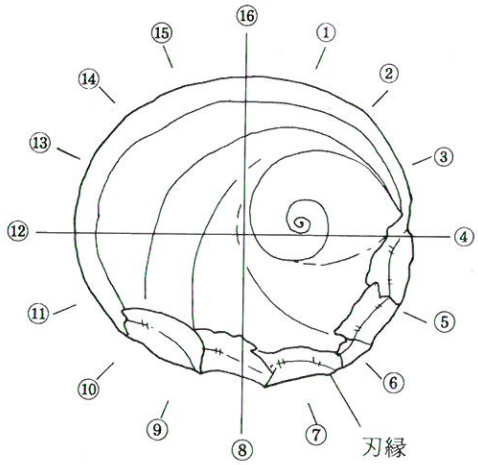


Fig.67　螺蓋貝斧模式図

Tab. 66　螺　蓋　製　貝　斧　出　土

単位：㎜、g

図版番号	遺構	層	法量			附刃の範囲	加工状況及び備考
			たて	よこ	重量		
31318	31 号	Ⅱ	5.3	6.0	64	4～8（4）	内面は摩耗が著しく、外面も剥離する。
13319	13 号	Ⅱ	5.7	6.0	70	5～9*　9－15破損（4）	風化が著しい。
22320	22 号	Ⅱ	6.0	6.1	85	7～14（7）	風化が著しい。
02321	2 号	Ⅱ	5.8	7.3	110	4～10*（6）	刃縁は自然に割れた感を受ける。
60322	60 号	Ⅳ	7.1	8.1	170	4～10（6）	
03323	3 号	Ⅱ	8.0	8.5	210	3～13（10）	
47324	47 号	Ⅱ	6.3	8.4	135	3～12（9）	フタはわりとしっかりしている。
40325	40 号	Ⅳ	7.5	8.1	135	3～9（6）	刃縁の中央は欠損している。
B-326	P—3	Ⅰ	7.4	5.3	110	3～9*（6）	破損しているため、刃の全形は不明。

注：「附刃」の項（　）内は段階を示す。＊印→破損する。

ハ．スイジガイ製利器（Fig.73）

本品は体層を有するもの９点、突起のみ６点の15点が出土した。そのうち、第32号遺構、48号遺構では炉の直上の灰層から出土した。２点（32333,48335）とも火を受けたためか、風化が著しい。とくに32333はPL.29－2のように炉の直上からふせて出土した。破損品の中にも火を受けたために墨化したものが、４点みられた。本品の用途を考えるうえで重要な手がかりとなるものである。Tab.67に観察を示した。分類・計測についてはFig.68に示すごとく上原[注13]氏の分類を引用した。本遺跡から出土したものは体層の有するものは明瞭な附刃は認められず、また、破損品はNo.１突起に附刃が認められる。以上のことから前者は未製品かあるいはNo.１突起が欠損しているとみるか、それとも利器以外の用途を考えるべきか。今後の資料の追加を俟ちたい。

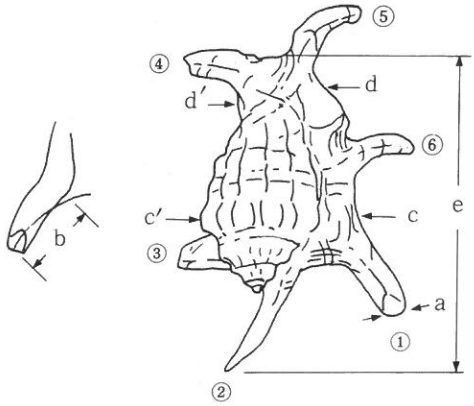


Fig.68　スイジイ製利器突起番号及び各部の計測
（上原　静氏による。）

Tab. 67　スイジガイ製利器出土一覧

単位：㎜、g

図版番号	遺構	層	レベル	管状突起の保存状況 ①	②	③	④	⑤	⑥	刃部の形態 平面形	側面形	体部	体部の位置と刃部の関係	体部の孔 位置	形状	たて	よこ	各部の計測 a	b	c	d	e	重	備考
60327	60号	Ⅳ	10～20	▲	－	－	－	－	－	平刃	両刃	無	横刃	－	－	－	－	9.6	42.5	－	－	－	40	火を受けたため墨水する。
34328	34号	Ⅱ	5～10	▲	－	－	－	－	－	平刃	両刃	無	横刃	－	－	－	－	11.0	38.4	－	－	－	40	火を受けている。
52329	52号	Ⅱ	5～10	▲	－	－	－	－	－	平刃	両刃	無	横刃	－	－	－	－	8.0	－	－	－	－	4	突起は薄手でNo.１の突起かうたがわしい。
56330	56号	Ⅱ	5～10	▲	－	－	－	－	－	平刃	両刃	無	横刃	－	－	－	－	7.2	40.0	－	－	－	30	火を受けたためか、もろい。
50331	50号	Ⅱ	20～25	▲	－	－	－	－	－	不	不	無	不	－	－	－	－	8.0	36.4	－	－	－	30	刃部が破損しているため形状不明。火を受けて、灰褐色化する。
28332	28号	Ⅱ	10～20	▲	－	－	－	－	－	平刃	両刃	無	横刃	－	－	－	－	3.5	3.9	－	－	－	4	小型のスイジガイと思われる。溝がひらいている。
52333	52号	Ⅱ	10～15	△	×	×	×	△	△	－	－	有	－	C版	円	2.5	2.9	1.75	57.5	97.2	61.8	－	330	No.1の突起は附刃したとも考えるが、風化しているため決定しがたい。体層の背面はとくに風化が著しい。炉の直上から出土。
48334	48号	Ⅱ	20～30	△	×	×	△	△	△	－	－	有	－	C版	円	40.0	2.1	14.0	40.6	92.8	67.8	－	460	孔はたて長の楕円、体層の背面は火を受けたために灰色化する炉の直上から出土する
32335	32号	Ⅱ	40～50	△	×	×	×	×	×	－	－	有	－	C版	円	3.07	2.85	11.7	37.5	86.0	57.6	－	570	孔のみ加工、他に加工痕は認められない
28336	28号	Ⅱ	10～15	×	×	×	×	×	×	－	－	有	－	C版	円	2.68	1.96	13.5	20.5	88.0	49.2	－	455	No.4.5.6の突起はていねいに調整され丸味をおびる。炉の直上から出土する
40337	40号	Ⅳ	5～10	△↓附刃不明	×	×	×	△	△	－	－	有	－	破損のみ不明				39.8	6.9	－	－	－	140	穴があった感もうけられる。風化が著しい。背面部もかける。
40338	40号	Ⅳ	－	×	×	×	△	△	△	－	－	有	－	C版	方形（隅円）	31.0	－	×	8.2	－	－	－	300	孔→33.0×31.0の風化が著しく他は不明

注　▲－半欠突起、○－完全に保存、×－全欠損突起（１cm前後のも含めた。）

ニ．ホラガイ系利器（Fig.74）

本品は、チトセボラ（3点）、ヒメイトマキボラ（2点）、イトマキボラ（1点）、不明（1点）の計7点、出土した。殻軸の先端部を加工研磨し、附刃したもので、さらに殻口をある程度、打割によって切り取り、そこから殻軸にかけて、ほぼ垂直に殻を加工する。そのうえで体層部に1～3の孔を穿する。本遺跡では1孔のものが主体を示すが、大[注4]原貝塚では4孔の例もみられる。用途については不明である。これらの製品は、殻口が平均76㎜切除され、そこから殻軸近くまで垂直に打割調整する。殻軸では元にもどり、先端は両面から研磨調整して附刃する。孔は殻口直上、附刃面の表面に穿孔する。以上の点が共通する。さらに孔については一孔のものが主であるが、他に2，3，4孔の例が報告されている。出土例は、大[注4]原第1貝塚、熱[注14]田第2貝塚、犬[注15]田布貝塚にみられる。

Tab. 68　ホラガイ系利器出土一覧　　単位：㎜、g

図版番号	遺構	層	貝種	残存状況	法量 殻長	殻径	重量	刃先 刃幅	形状	孔径 たて	よこ	加工状況
28339	28号	Ⅱ	イトマキボラ	完形	147.6	62.4	129	11.0	両刃	①15.7 ②13.0 ③14.0	13.0 13.0 15.1	体層に3つの孔を有する。最初の孔は殻口の直上に位置する。等間隔の3つの孔を有する。 殻口から10.6㎜まで割り、そこからさらに垂直に殻軸に向って打割し、殻軸軸では除々にもとにもどり附刃する。
60340	60号	Ⅳ	ヒメイトマキボラ	完形	157.4	54.0	110	7.9	両刃	2.5	24.0	殻口から9.9㎜まで打割。前者同様の殻軸を調整する。 孔は殻口の直上
60341	60号	Ⅱ	チトセボラ	刃部欠損	—	—	39	10.2	打割のみで不明	14.7	19.3	殻口から8.0を切除する。体層は前者と同様の加工。未製品か
34342	34号	Ⅱ	ヒメイトマキボラ	刃部欠損	112.4	46	69	破損	刃の状況不明風化のため附	①28.8 ②20.5	34.2 25.0	殻頂部欠損。殻口から6.3㎜まで加工。 体層の切除、前者と同様
52343	52号	Ⅱ	チトセボラ	刃部欠損	120.5	46.5	34	9.7	破損	21.0	21.5	殻口から7.6㎜切除する。 体層の切除は前者と同様。
51344	51号	Ⅱ	チトセボラ	ほぼ完形	112.0	37.4	40	6.2	風化のため不明	16	14	殻口から6.3㎜を打割。
B-345	M-3	Ⅰ	イトマキボラ	刃部のみ	9.48		30	9.7	片刃的	—	—	殻軸のみで殻軸の先端を加工し、附刃する。上部に他の製品と同様の打割調整が認められる。体層は他とほぼ同様の加工が施されるであろう。貝殻は若干風化する。

ホ．尖頭状製品

B379は、ゴホウラの殻口の最も厚い部分を棒状に切りとったもの、殻頂の反対方向を、尖らした製品である。内唇面は研磨が著しいが、他には認められない。先端はジュゴン製骨錐と同様にゆるやかに尖る。残存部の最大長10.2㎜を計る。M－5・7グリッドⅠ層の出土である。大原第1貝塚(注4)にイモガイの体層を利用されたものが報告されている。

b．容器

容器と考えられるものは、匙状製品（20個）、ホラガイ有孔製品（4個）が出土した。

イ．夜光貝製匙状製品（Fig.75）

本品は、製品と明瞭にわかるものは（5点）、未製品（12点）が得られた。製品の保存自体が悪く、すべて破損品で全形をうかがえるものは、得られなかった。以下、Tab.69に示す。

Tab. 69　夜光貝製匙の出土一覧

単位：㎜、g

番号	遺構	層	残存状況	法量 最大長	最大幅	重量	加工状況	図版番号
1	50号	Ⅱ	破損	68.0	32.0	24	小型の夜光貝を使用、外殻の突起を研磨調整する。	50346
2	6号	Ⅱ	〃			30	小型の夜光貝を使用、周縁は打割調整が認められる。のこりはよい。	06347
3	6号	Ⅱ	〃	43.2	33.0	6	貝の外層を除き真珠層のみが残り、研磨痕は周縁、外面に非常に顕著である。	06348
4	50号	Ⅱ	〃	46.0	33.6	6	貝の殻口の部分で匙の柄の部分にあたる。突起部の加工が顕著である。	50350
5	3号	Ⅱ	〃	50.5	14.0	7	外殻の突起部に研磨痕が認められる。火を受けたためか、灰色を呈する。	03351
6	34号	Ⅱ	〃	44.0	49.0	26	匙の身の部分、外殻の突起、外表層及び周縁に研磨が認められる。	34353
7	50号	Ⅱ	〃	39.0	31.5	15	縁の部分の加工痕が顕著で外殻方向に斜位に研磨する。他に3片破片有	
8	23号	Ⅱ	〃	39.5	32.3	9	周縁及び外殻に研磨が顕著にみられる。	23349
9	9号	Ⅱ	〃	33.2	55.0	15	周縁に研磨がある。突起部は打割調整される。	
10	34号	Ⅱ	〃	34.0	46.0	14	ふちの部分、外殻に研磨痕が顕著にみられる。	
11	9号	Ⅱ	〃	58.8	39.8	16	周縁の一部は打割調整が認められる。	
12	40号	Ⅳ	〃	69.4	30.6	29	突起部が研磨され、周縁に打割調整がみられる。	40352
13	50号	Ⅱ	〃	78.5	52.4	58	貝の殻軸の加工がみられる。未製品	50354
14	50号	Ⅱ	〃	83.3	37.3	26	突起の切削が顕著にみられる。未製品	50355
15	34号	Ⅱ	〃	103.9	61.0	62	周縁は荒く調整されるが、他に加工痕はない。未製品	34356
16	56号	Ⅱ	〃	91.8	37.3	30	外殻の突起部分を半分程度、打割調整する。その殻口側に研磨がわずかにみられる。	56357
17	9号	Ⅱ	〃	123.0	51.0	55	突起部に打割調整が認められる。未製品	

ロ．巻貝匙状製品（Fig.75）

44358は、巻貝の体層を利用したもので、破損品で残存部の最大長64.5㎜、最大幅31.0㎜を計る。厚さは3.5㎜の薄手で周縁及び外面ともていねいに研磨されている。研磨が著しいため、貝種は不明である。44号遺構II層10～20cmの出土である。

57360は、ゴホウラの体層を縦位に切り取り、周縁部をていねいに研磨調整したもので、ほぼ完形に近い。たて80.0㎜、横49.0㎜、厚さ49㎜やや厚手である。外殻と周縁に研磨痕が認められる。浅い容器で、形状は(注1)キガ浜貝塚の夜光貝の「クツベラ状製品」に酷似する。57号遺構II層の出土である。

60359は、前述と同様ゴホウラを用いたもので、螺塔から体層に縦位に切り取り、碗状にしたものである。殻頂部付近は打割痕が明瞭に認められ、貝輪の未製品とも考えられるが、側面の状況から容器としての可能性が高い。60号遺構IV層10～20cmの出土である。

ハ．ホラガイ有孔製品（Fig.76）

ホラガイの内唇近くに１～２個の孔を有するもので、(注16)民具事例にヤカンと報告例がある。本遺跡では、２孔のもの３例、１孔のもの１例が得られた。これらは、孔と反対側の体層が風化している（火を受けた？）点で共通し、民具事例を裏付けるものと思われる。

以下、Tab.70に観察を示す。

Tab. 70　ホラガイ有孔製品

単位：㎜、g

図版番号	遺構	層	レベル	殻長	殻径	重量	①孔		②孔		加工状況
							たて	よこ	たて	よこ	
09362	9号	II	5～10	25.0	85.0	18.0	13.4	21.0	16.0	20.6	孔は２孔とも複孔で横楕円である。体層は大きく、破損する。殻頂近くは、火を受けたためか、風化する。
57363	57号	II	10～20	25.8	13.5	635	20.0	27.2	18.0	21.9	体層部が大きく欠落する。殻口反対側のら塔に火を受けた感を受ける。殻頂は欠落し、丸味をおびる。
34364	34号	II	10～20	28.9	16.0	690	50.3	55.4	—	—	孔は他に比して大きい。突孔の失敗によるものかと思われる。殻頂は09362と同様、丸味をおびる。外殻に風化が認められる。（火を受けた?）
23365	23号	II	30～35	19.0	86.0	80.0	12.5	24.0	—	—	破損品である。孔が内唇よりのことから、２孔タイプと思われる。

注：孔の位置　①→内唇に近い方を示す。
②→それ以外を示す。

B　装飾品（着装品）

装飾品と考えられるものは、サメ歯模造製品－8個、貝輪－5個、符状製品－2個の15点である。以下、各項に述べる。

a．サメ歯状模造製品（Fig.77）

サメの歯を模した製品で8点出土した。本品については三島[注17]氏は、これらを大きいのをaタイプ、小さいのをbタイプと分類している。本遺跡の場合、aタイプに相当するものは613671の1個で、他はbタイプに属する。この中で60369～60373の4点は大きさをみるとaタイプとも思えるが、3辺の長さが異なることからbタイプの範疇に含まれる。従って、bタイプは、同13367→B367→60369、60370、60372、60373に簡素化するものと思われる。骨製品の有孔製品もこのタイプである。以下、Tab.71に示す。

Tab. 71　サ　メ　歯　模　造　製　品

単位：mm、g

図版番号	遺構	層	レベル	分類	法量 ① 辺	② 辺	③ 辺	厚さ	孔 外径	内径	加工状況
60366	60号	Ⅳ	0/5	a	31.4	42.2	43.3	5.0	3.0	1.5	長辺に10～11のきざみ痕が認められる。表面にアバタを呈し、貝の自然をそのまま残す。裏面にも貝の成長線が有り、両者の状況から、ゴホウラと思われる。基部は横位、他は斜位に研磨が顕著である。孔は裏面から穿孔する。6.5 g
B 367	不明	Ⅱ	—	b	29.8 抉り有 あまり明瞭でない。	27.0 抉り有	29.3	4.5	7.0 (3.1)	2.9	表面に貝の自然面が認められ、ほぼ中央にゆるやかに湾曲した突起がある。裏面に同じく成長線が顕著にみられるが、貝種はわからない。孔は両面から穿孔するが、主に裏面からである。2.3 g、イタイプ。
B 368	M—3	Ⅰ	—	b	22.7 抉りらしきもあり、ゆるやか	21.0 抉り有	27.7 シャープ	5.2	6.5	3.8	表面は貝の成長線が顕著で、シャコガイ科のものと思われる。鏃と同様に表面に陵をもつ、裏面には貝の自然面が若干認められる。主に表面から穿孔する。3.2 g、ロタイプ。
60369	60号	Ⅳ	—	b′	31.8 除々に細くなるカドをもつ	34.0 断面はシャープに刃状をなす。	39.0 断面はシャープに刃状をなす。	3.0	5.5	2.9	尖端欠損する。貝の成長線が認められる。貝種不明。表面は基部以外の他2辺に陵線が明瞭である。裏面も同様である。孔は表面が大きい。3.6 g、ハタイプ。
60370	〃	〃	—	〃	30.4 厚さ0.5	33.6 1.0の厚みがある。	39.1 シャープ	2.8	4.5	3.0	成長線は60373と類似する。陵線は裏面の方が明瞭である。孔は裏面→表面へ穿孔する。3.5 g、ハタイプ。
60371	〃	〃	—	〃	31.0 厚さ0.5	35.2 1.1の厚みがある。	38.4 最もシャープ	2.8	5.6	4.0	貝の成長線が認められる。表面は裏面に比べて陵は明瞭でない。孔は両面からあける。表面に穿孔痕が認められる。3.7 g、ハタイプ。
60372	〃	〃	—	〃	30.2 カドをもつ	33.0 若干細くなる。	39.2 最もシャープ 若干湾曲	3.2	5.1	4.5	陵線は表・裏面ともゆるやかである。孔は両面から穿孔するが若干ずれる。裏面一部に自然面がみとめられる。4.1 g、ハタイプ
60373	〃	〃	—	〃	28.5 カドをもつ	31.6 1.2の厚みがある。	36.6 シャープ 若干湾曲	3.2	5.1	4.5	表裏面－2長辺はゆるやかな陵線がみられる。孔は両面から穿孔する。裏面の先端に成長線が認められる。3.4 g、ハタイプ。

注：計測の場所は①→基　部
②→その次
③→最も長いところ

b．貝輪（Fig.78）

貝輪は、ゴホウラ製－3点、サラサバティ製－2点が出土した。

イ　ゴホウラ製貝輪（Fig.78）

ゴホウラの背面を利用したものは60374、06376の2例、腹面を利用した07375の1例である。以下、Tab.72に示す。

Tab. 72　ゴ　ホ　ウ　ラ　製　貝　輪　　単位：mm、g

図版番号	遺構	層	最大長	最大幅	最大厚	重量	使用部位	加工状況
60374	60号	Ⅳ	71.4	21.5	2.3	6	背面	内、外縁とも研磨が顕著に認められる。さらに外面も研磨調整が顕著に認められる。
06376	6号	Ⅱ	71.5	17.8	7.3	22	腹面	上記は比して厚い。外面は全面に研磨痕が認められる。内縁の断面は丸味をおびるが外縁は若干角をもつ。
09375	9号	Ⅱ	60.0	13.0	5.4	4	背面	風化が著しい。内外縁とも加工痕が明瞭に認められる。

ロ　サラサバティ製貝輪（Fig.78）

サラサバティの殻底部のコーナーにあたる部分を利用してつくったもので、ほぼ半円の状態で残存する。57378は端部が有り、半円状の形をなすと思われる。Tab.73に示す。類例は、古座間味貝塚[注18]、古宇利遺跡[注19]にみられる。

Tab. 73　サ　ラ　サ　バ　テ　ィ　製　貝　輪　　単位：mm、g

図版番号	遺構	層	最大長	最大幅	最大厚	重量	加工状況
08377	8号	Ⅱ	49.0	7.4	5.5	6	外殻は全面研磨する。とくに殻底とコーナーの部分は顕著で、コーナーは丸味をだす。内縁部も研磨し、丸味をおびる。
57378	57号	Ⅱ	62.3	16.0	6.3	26	外径6.0、内径3.8の孔を体層側に有し、両面から穿孔する。切削面は殻底側は丸味を出し、体層側は内面に傾斜する。外殻は全面研磨する。端部が明瞭られ、半円状になると思われる。

c．符状製品（Fig.77）

巻貝を縦位に切りとり加工したもので、2点出土した。

60380は、小型の巻貝の外唇のひだ状の部分を長さ20.5mm×幅5.5mm、厚さ2.5mmの長方形に切り取ったものである。外殻及び切削面は顕著に研磨される。類例はない。60号遺構Ⅳ層の出土である。

55381は、ゴホウラの外唇近くを利用したもので若干破損する。最大長さ43.5mmで、最大幅13.3mm、厚さ4.3mmで隅丸の方形を呈する。片側の側壁に研磨痕らしきものが認められる。類例は古宇利原遺跡[注9]、浦添貝塚[注6]、キガ浜貝塚[注1]に報告例がある。55号遺構Ⅱ層の出土である。

C．その他（Fig.78）

56382は、トミガイの滑層の部分に研磨が認められるもので他に加工痕はない。最大長39.5mm、最大幅26.0mm、最大厚21.5mmを計る。56号遺跡Ⅱ層5～10cmの出土がある類例は古宇利原遺跡[注19]にある。孔を有する点で異なる。

58383はマクラガイ科の貝を用いたもので、殻頂及び殻口が磨滅する。人工品かどうかに最大径12.5mmを計る。58号遺跡Ⅱ層35～40cmの出土である。

51384は、ホシダカラの殻口の一方を、44.0㎜程、打割し、殻軸を除去したものである。

背部は風化が著しく、他に加工痕はない。最大長85.0㎜、最大幅59.2㎜、高さ47.5㎜を計る。51号遺跡II層５～15cmの出土である。

40361は、ゴホウラの体層を除去し、背面を残したもので、殻頂の打割調整は顕著である。外殻面は風化が著しく、もろい。最大長142.2㎜、最大幅129.6㎜、重量375g を計る。前出の貝輪の未製品とも思われる。40号遺跡IV層の出土である。

第５節　石製品

34386は、石灰岩を加工したもので、平面形は長さ38.0㎜×幅29.0㎜、中央部が若干ふくらみを持つ方形状を呈し、断面はカマボコ状を呈する。ほぼ中央に、幅9.0㎜の溝をめぐらす。内部は空洞をなし裏面は離れる。類例は(注1)キガ浜貝塚のC地区第３層に出土する。但し、中央に溝状痕がない点が異なるが、中央に空洞を有する。素材が同一である点で酷似する。

参考文献

①沖縄県教育委員会「津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書第17集』1978年３月

②沖縄県教育委員会「宮古城辺町長間底遺跡発掘調査報告」『沖縄県文化財調査報告書第56集』1984年３月

③高宮廣衛・山内勝美・下地安広「室川貝塚第３～５次発掘調査概報」『沖国大考古』第５号沖縄国際大学考古学研究室 1981年３月

④沖縄県教育委員会「久米島大原貝塚発掘調査報告」『沖縄県文化財調査報告書第32集』1980年３月

⑤那覇市教育委員会『那覇の考古資料』1968年

⑥新田重清「浦添貝塚第一次発掘調査概報」『南島考古』創刊号1972年12月

⑦高宮廣衛他「室川貝塚第３～５次発掘調査概報」「室川貝塚第４次発掘調査概報」それぞれ『沖国大考古』第５号（1981年３月）、第６号（1982年３月）

⑧今帰仁村教育委員会「渡喜仁浜原貝塚」『今帰仁村文化財調査報告第１集』1977年３月

⑨今帰仁村教育委員会「古宇利原遺跡発掘調査報告書」『今帰仁村文化材調査報告書第８集』1983年３月

⑩沖縄県教育委員会「仲宗根貝塚第一・二次発掘調査概報」『沖縄県文化財調査報告書第33集』1980年３月

⑪沖縄県教育委員会「沖縄県玉城村百名第二貝塚の試掘調査」『沖縄県文化財調査報告書第38集』1980年３月

⑫国分直一・三島格「ヤブチ式土器」『水産大学校研究報告人文科学篇』第10号1965年

⑬上原静「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古』第７号1981年２月

⑭日本電信電話公社・沖縄県教育委員会「恩納村熱田第２貝塚発掘調査報告書」1980年３月

⑮大島郡伊仙町教育委員会「犬田布貝塚」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』1984年３月

⑯上江洲均『沖縄の民具』慶友社　1973年

⑰三島格　「九州および南島出土の鮫歯製垂飾について」『日本民俗文化とその周辺考古篇』国分直一博士古稀記念論集編纂委員会 新日本教育図書1977年

⑱沖縄県教育委員会「古座間味貝塚範囲確認調査報告」『沖縄県文化財調査報告書第33集』1982年３月

⑲那覇市教育委員会「ガジャンビラ丘陵遺跡発掘調査報告書」『那覇市文化財報告書第７集』1983年２月

⑳後藤勝彦「仙台湾沿岸諸貝塚出土の貝刃」『東北歴史資料館紀要』第６巻　東北歴史資料館　1983年３月

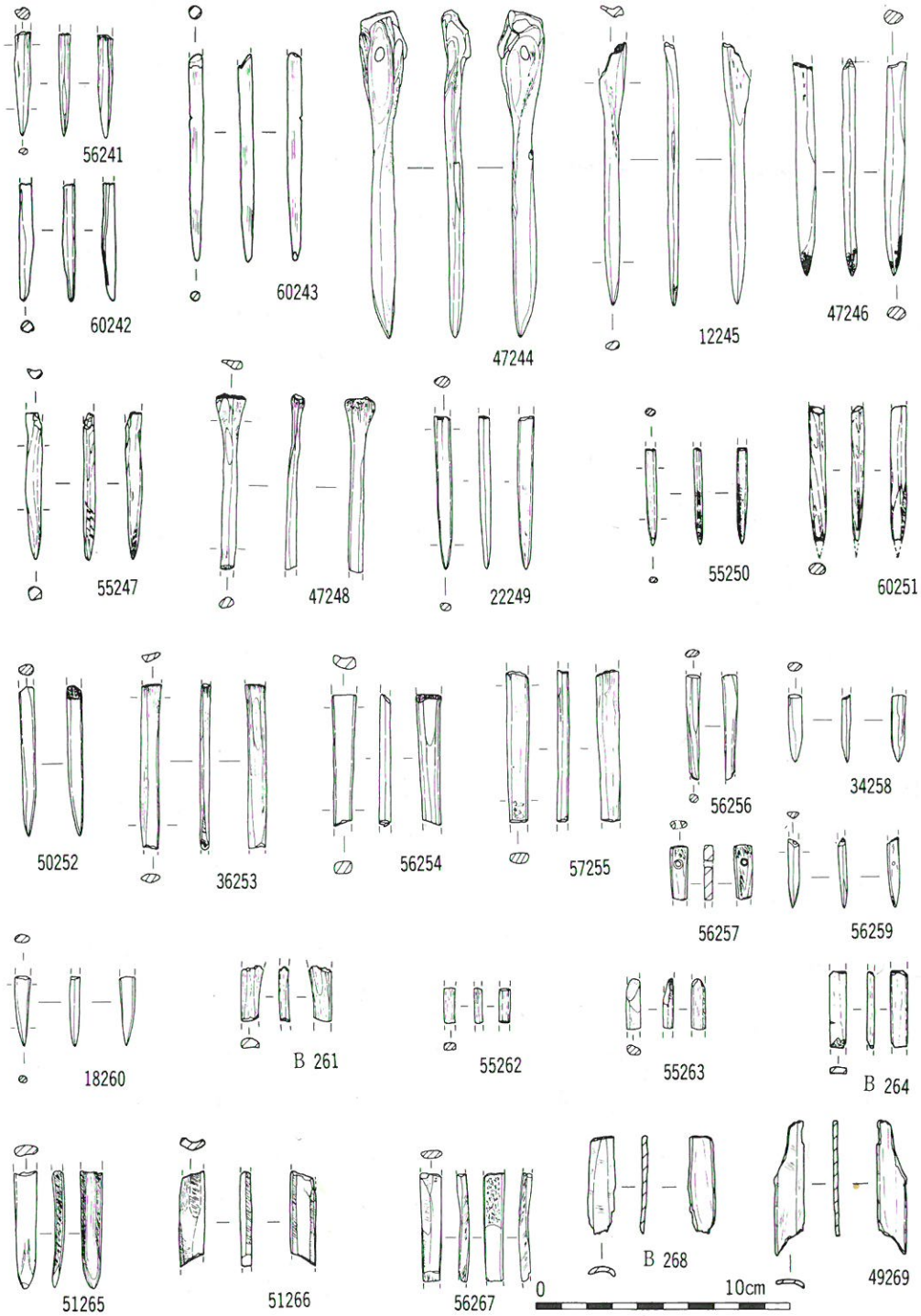


Fig.69 (PL.55)　　骨製品（骨針）

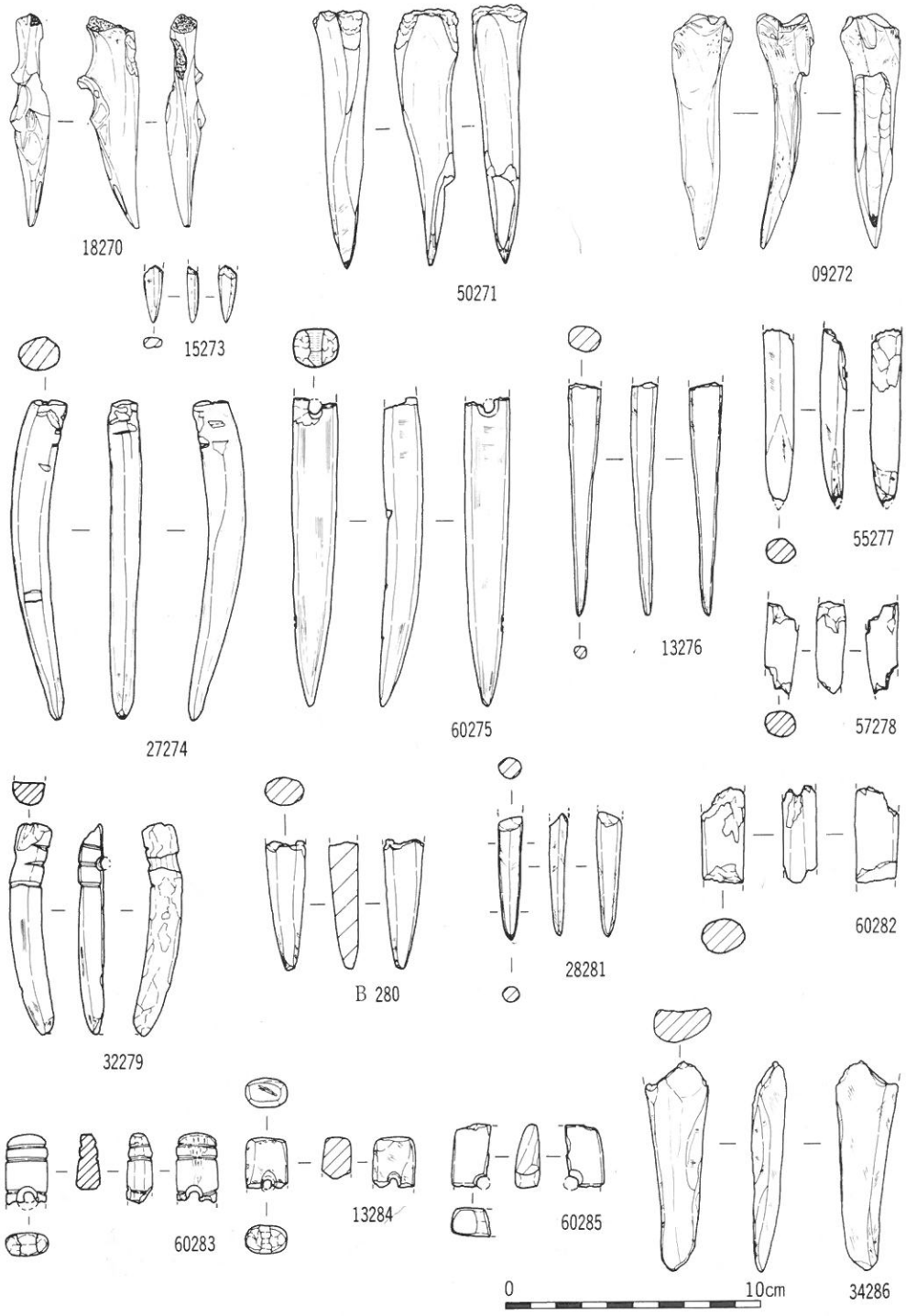


Fig.70 (PL.56)　　骨製品（骨錐－イノシシ、ジュゴン）

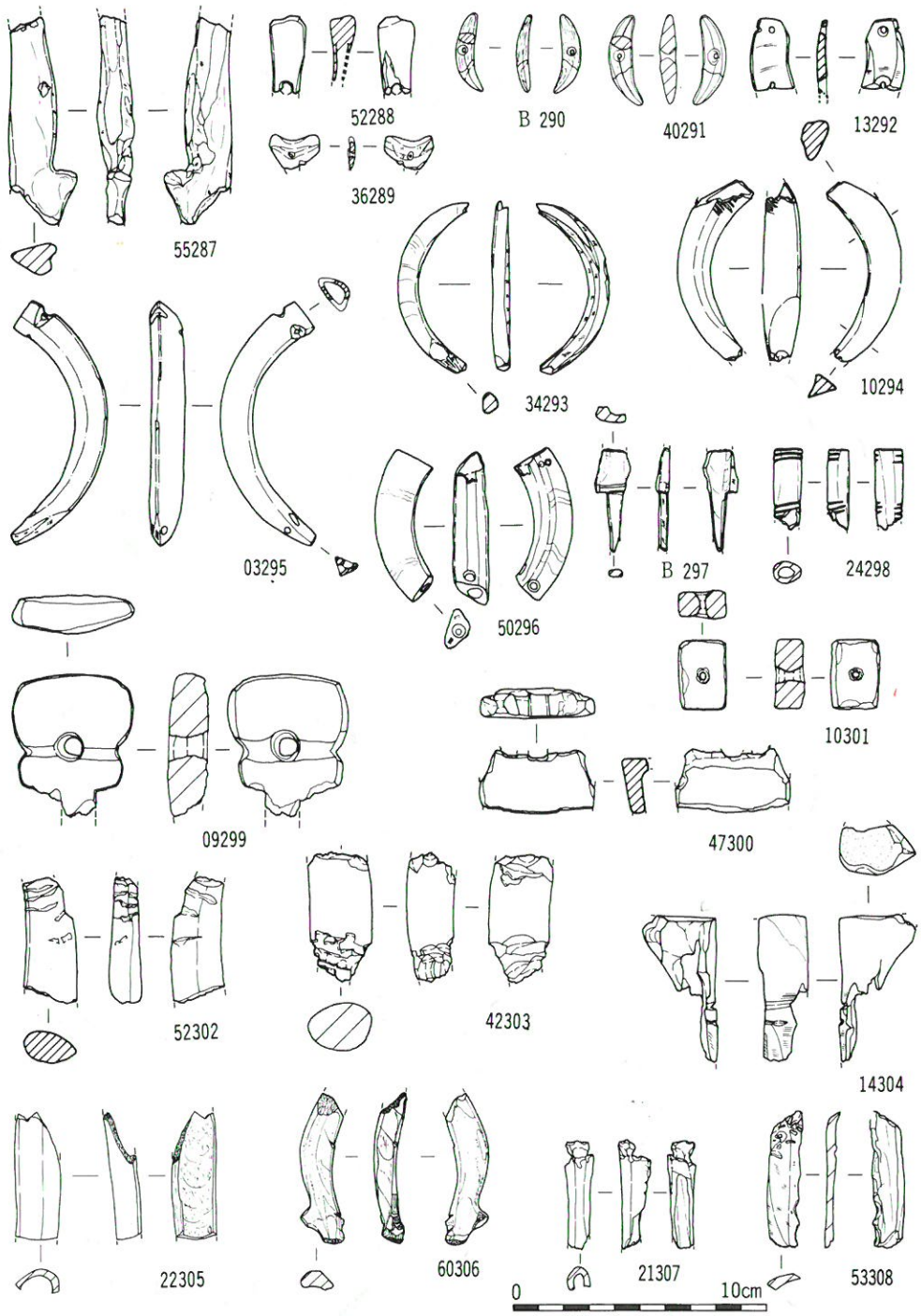


Fig.71 (PL.57)　　骨製品（装飾品、他）

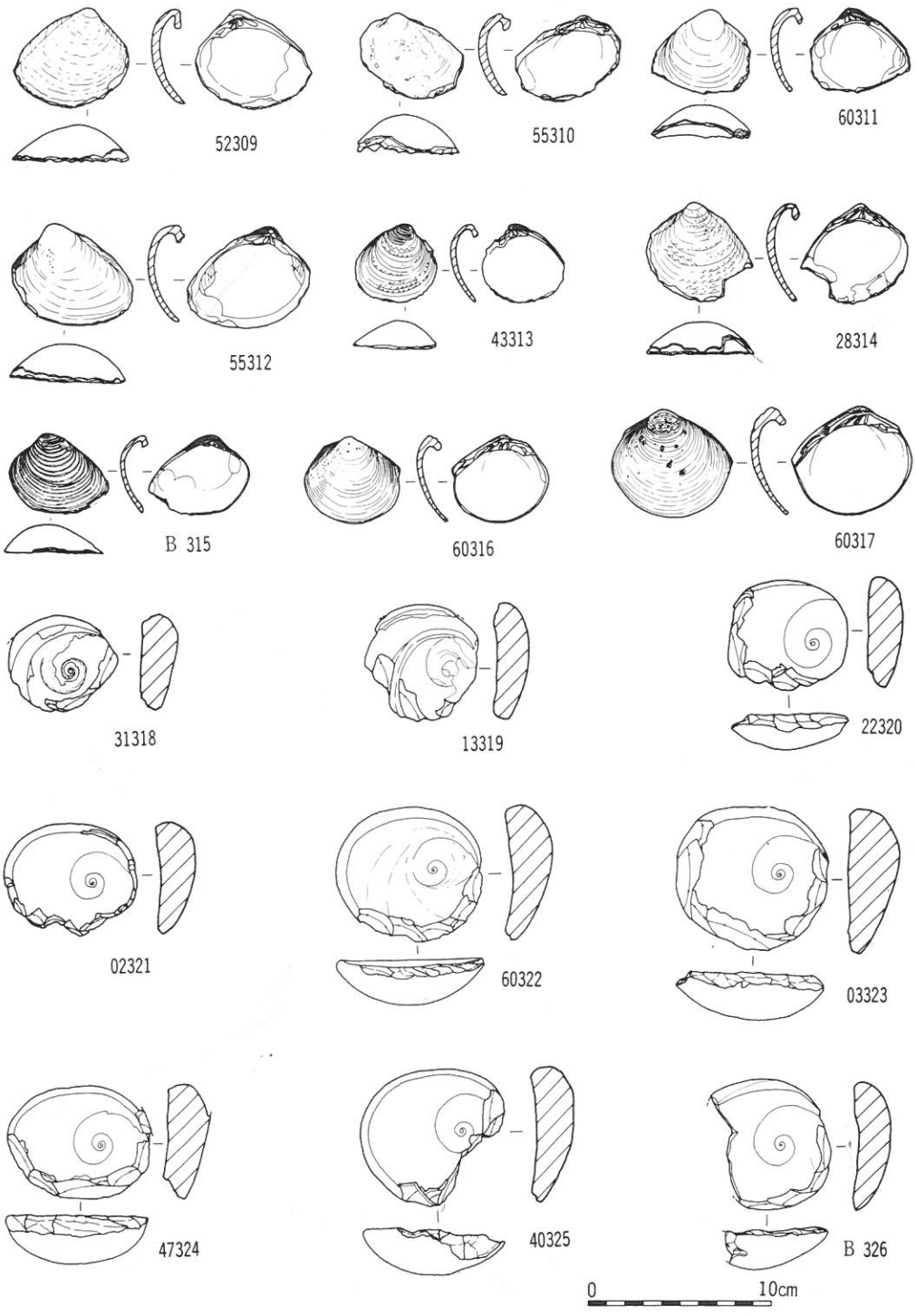


Fig.72 (PL.58)　　貝製品（貝刃、螺蓋製貝斧）

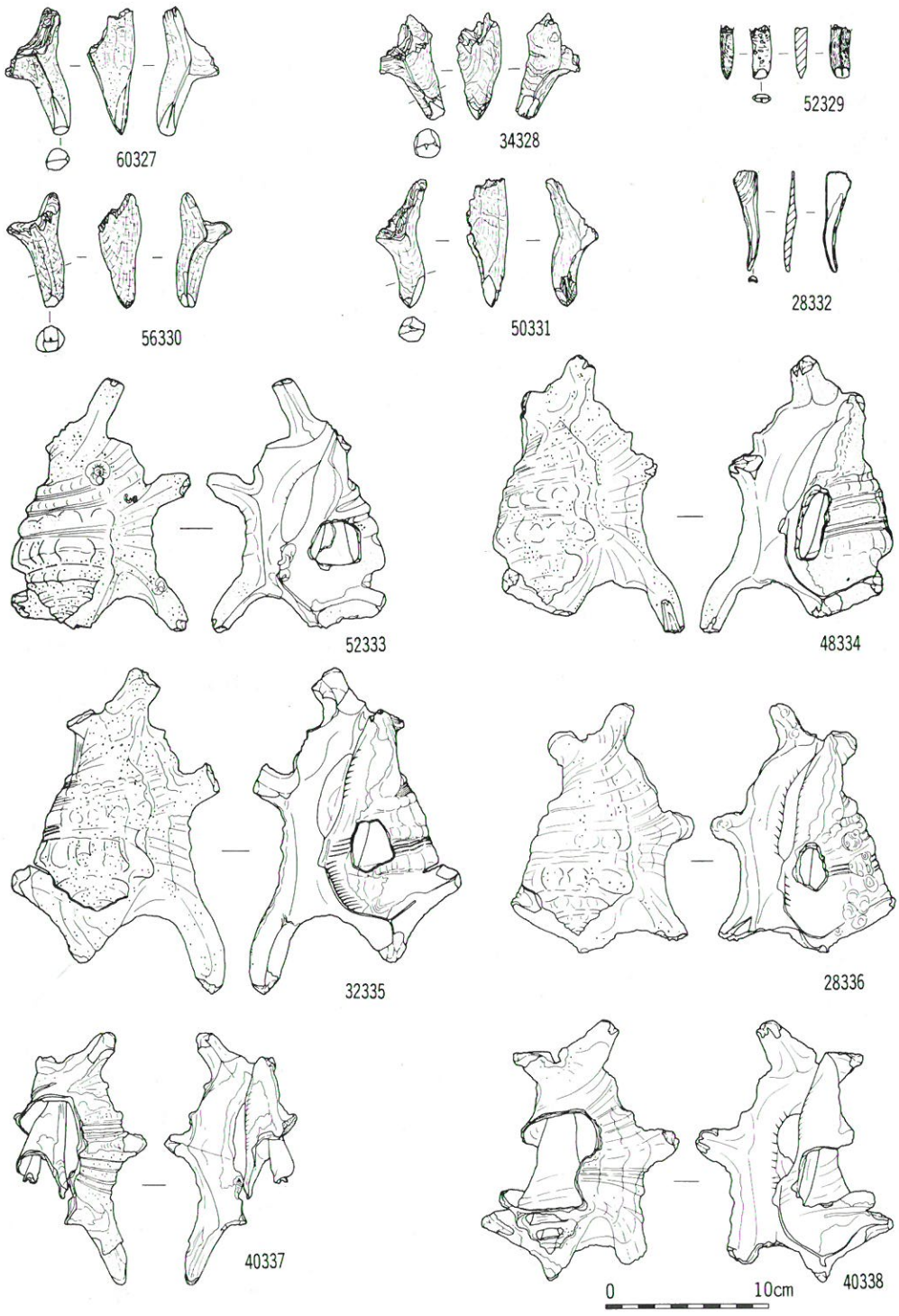


Fig.73 (PL.59)　　貝製品（スイジガイ製利器）

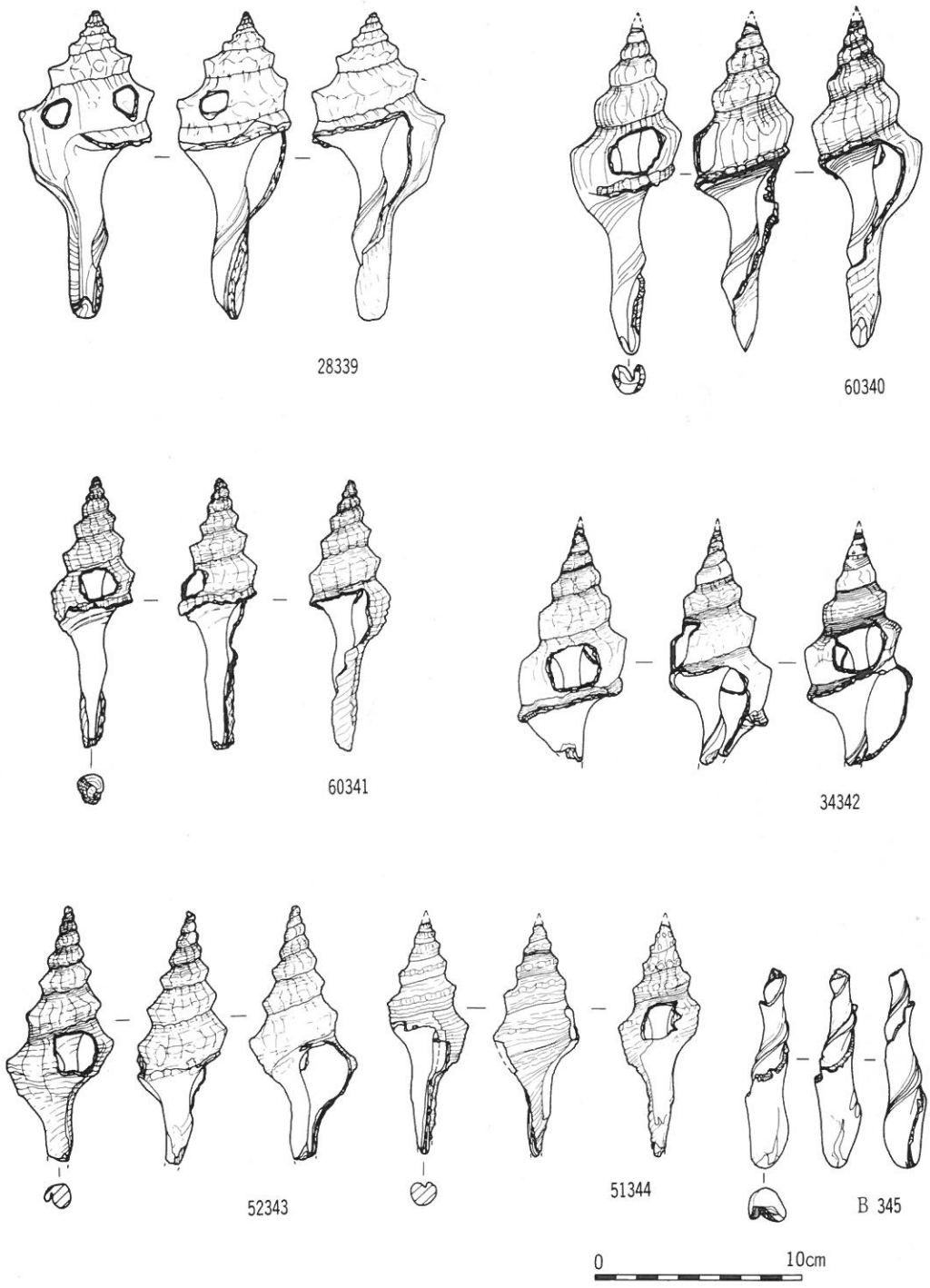


Fig.74 (PL.60)　　貝製品（ホラガイ系利器）

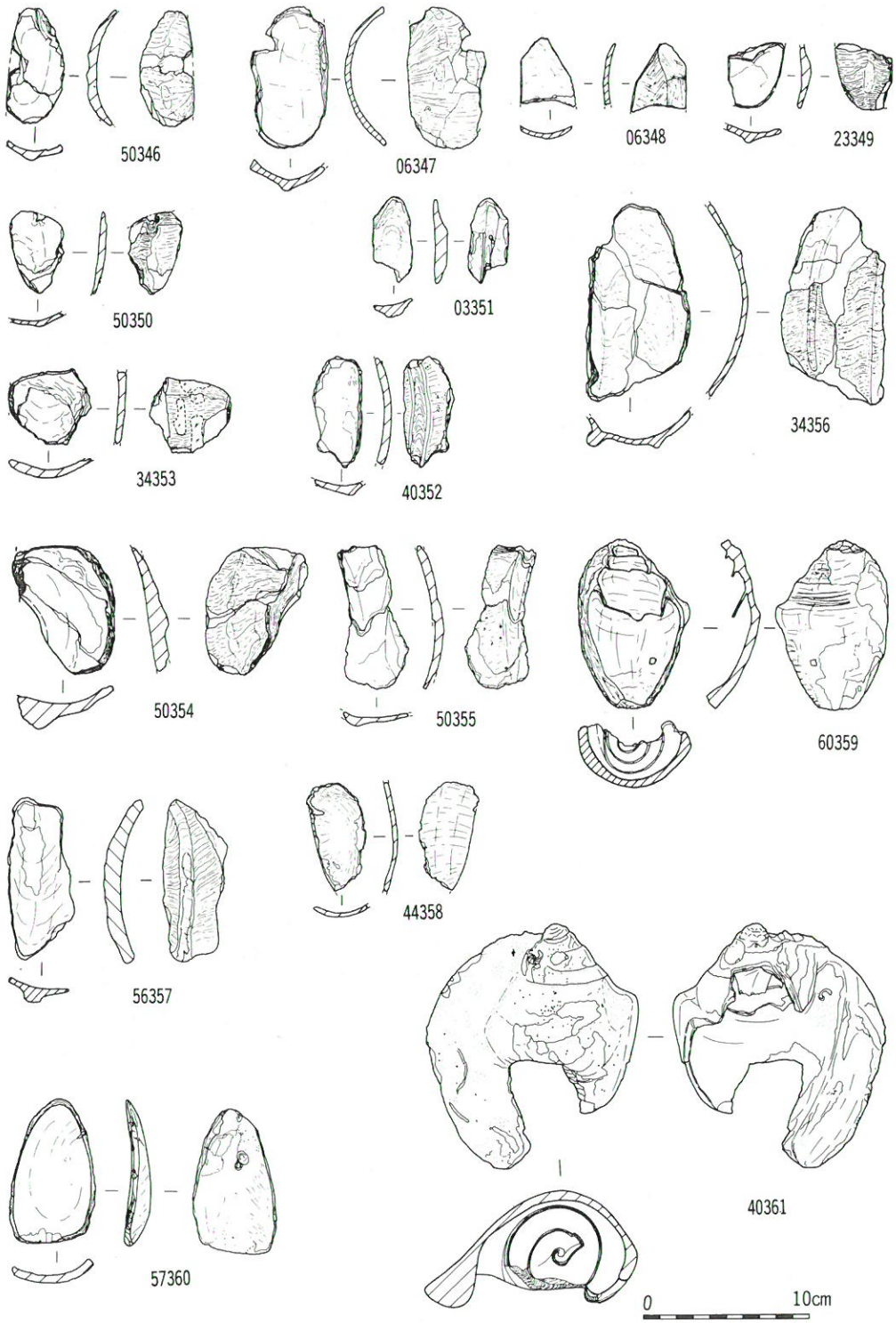


Fig.75（PL.61）　貝製品（夜光貝製匙、巻貝匙状製品、その他）

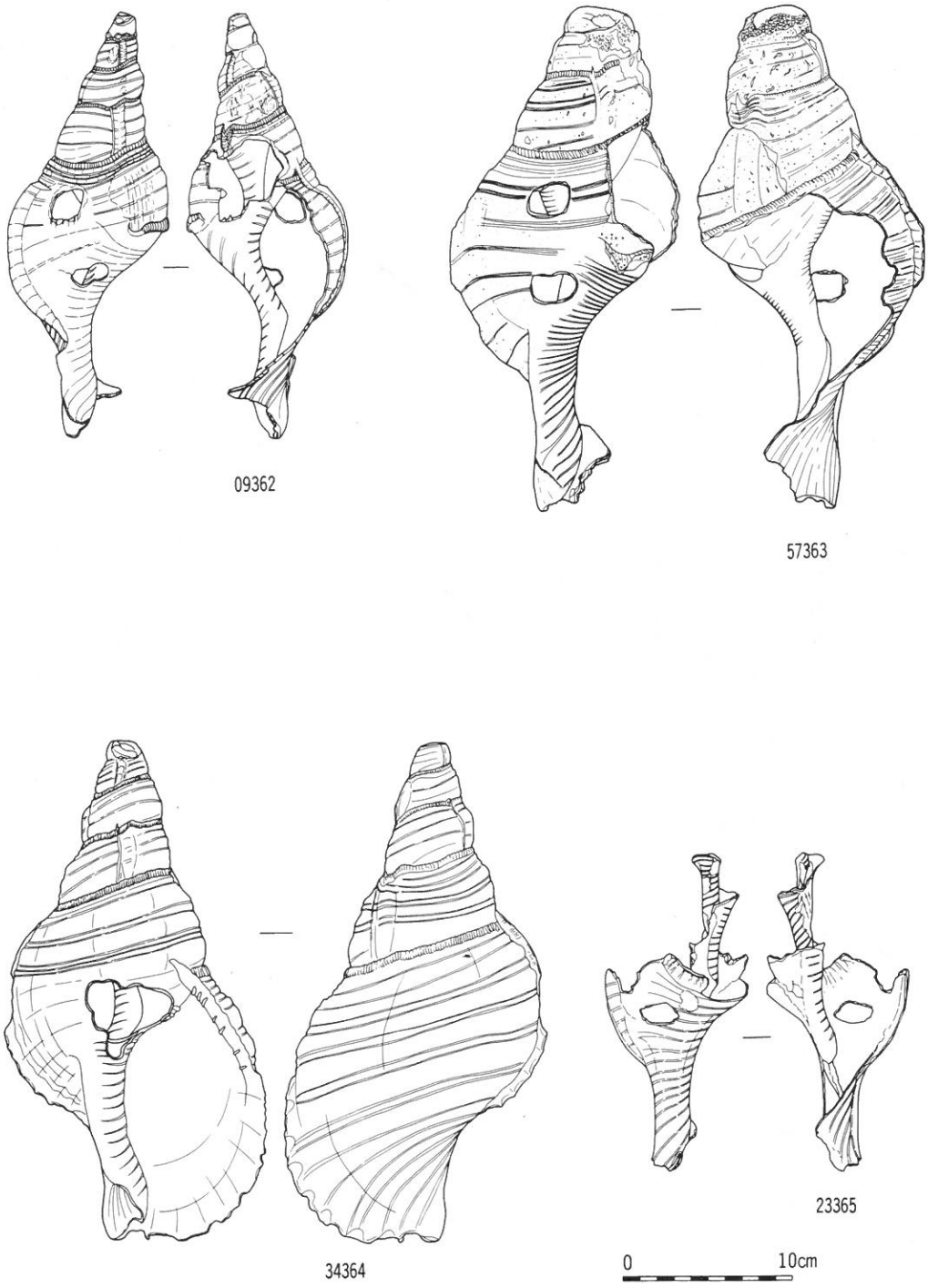


Fig.76 (PL.62)　　貝製品（ホラガイ有孔製品）

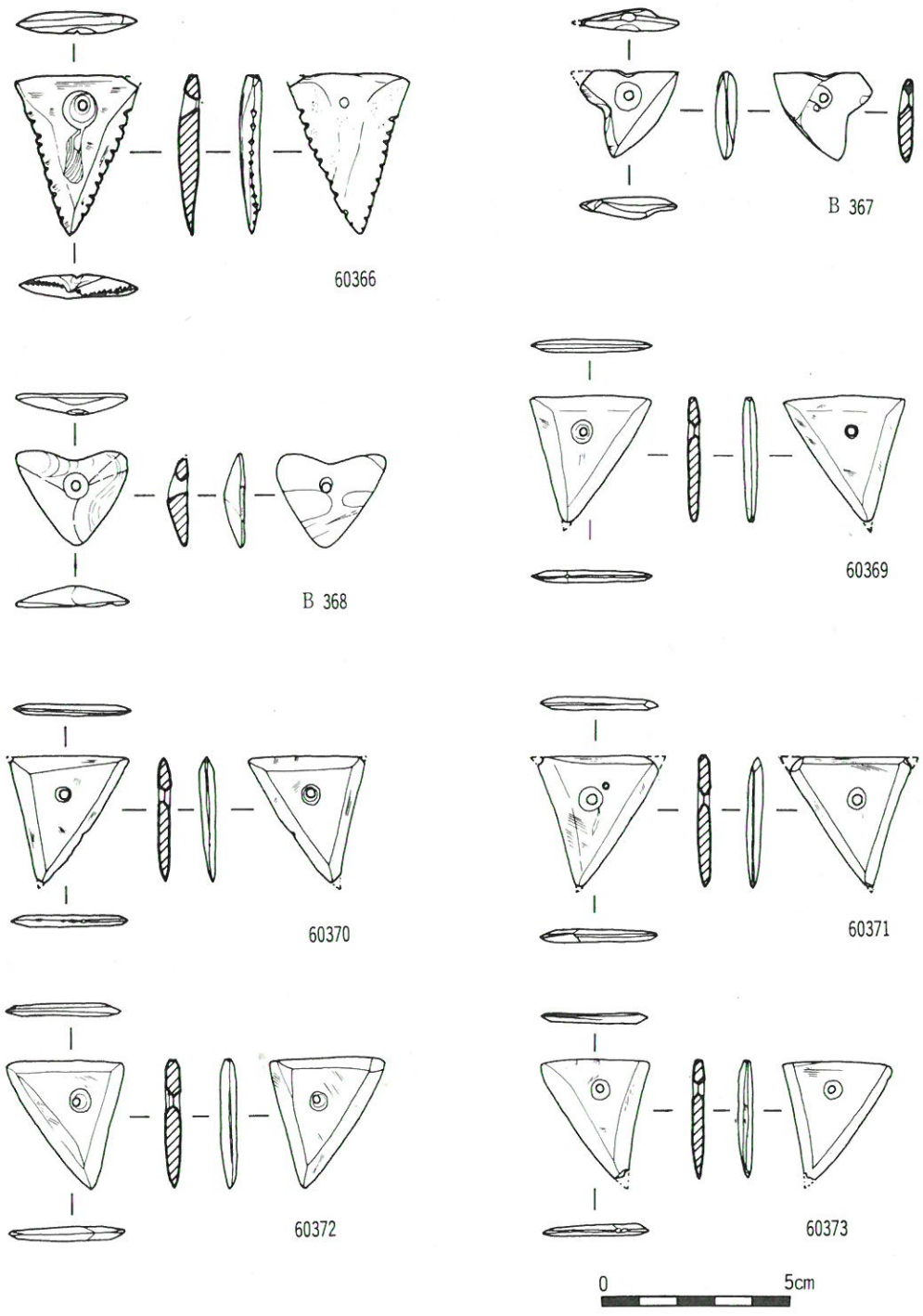


Fig.77 (PL.63)　　貝製品（サメ歯模造製品）

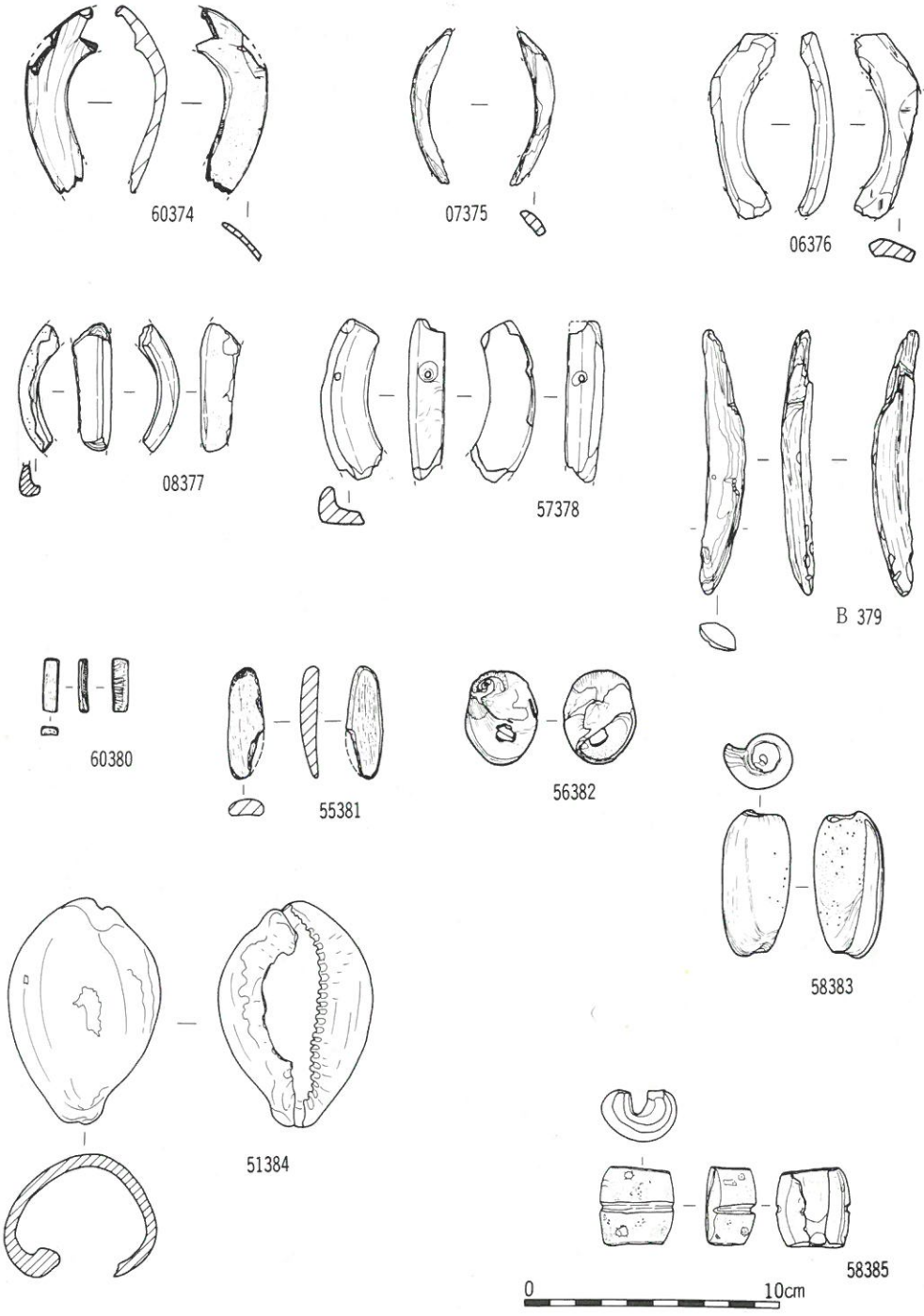


Fig.78 (PL.64)　　貝製品（貝輪、その他）石製品

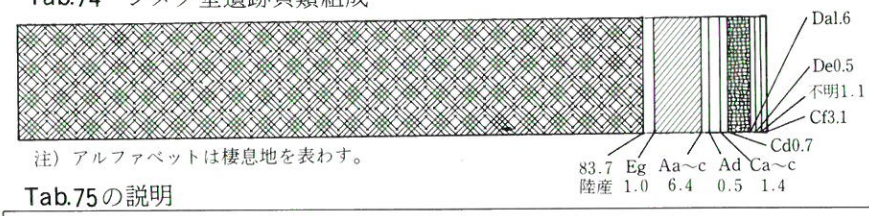
第6節　貝　　類

本遺跡では、発掘時に肉眼で観察できるものについてはそのまま採集したが、22・23・40・44・49・50・58・57・60号遺構では土ごと採集し、水洗い選別を行うことにした。しかしながら、後者については水洗いを完全に終ることができず、ここでは前者についてのみ報告する。なお、後者については、後日、機会を得て報告したい。

出土した貝種は27科67種、不明1種である出土総数は2996個で自然遺物全体の63.2%にあたる。層別には、第II層が248個（84.1%）と最も多い。各遺構別にみると28号遺構（10.0%）、6号遺構（9.0%）、34号遺構（7.8%）、12号遺構（6.4%）の順になる。

棲息地別の出土状況はFig.69に示した。これによると陸産貝が83.7%と圧倒的に多く、次に潮間帯砂底6.4%と続くが他は僅少である。陸産貝については食用にしたかどうか、今後検討を要するが、出土量が多いこと、集中して出土しないこと（自然死の場合は凝集する場合が多い。）から、本遺跡の場合、食用の可能性もありえる。いずれにしても、今後の資料の追加を俟ちたい。また、チョウセンサザエ・夜光貝の蓋も殻より多く出土している。これらの貝の調理方法を知る一つの手がかりと考えられる。このような遺跡は(注19)ガジャンビラ遺跡、(注18)古座間味貝塚などにみられる

Tab.74　シヌグ堂遺跡貝類組成



注）アルファベットは棲息地を表わす。

Tab.75の説明

1．棲息地の記号は下記のとおりである。（棲息地については主に、白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』を参考にして他から補充した。）

A．潮間帯	a．砂底
B．潮間帯付近	b．細砂底
C．潮間帯下	c．砂礫底
D．浅海	d．岩礫
E．淡水・河川	e．岩礁
	f．サンゴ礁
	g．泥底

2．最少個体数の算出は下記のように行なった。

① 二枚貝は左殻と右殻に分け多い方を最少個体数とした。
② 巻貝は殻頂有するものを最少個体数とした。
③ 巻貝の中で、チョウセンサザエ、ヤコウガイ、カンギクについては殻と蓋に分け、多い方を最少個体数とした。

3．貝の種の同定は、当教育委員会報告の各遺跡のサンプルを比較しながら下記の図鑑を参考にした。

① 白井祥平著『原色沖縄海中動物生態図鑑』1977年新生図書
② 波部忠重・小管貞男共著　標準原色図鑑全集3『貝』1977年保育社
③ 吉良哲明著　増補改定版『原色日本貝類図鑑』1964年保育社
④ 波部忠重著　『続原色日本貝類図鑑』1962年保育社

Tab. 75　　貝類出土一覧

	貝種	発掘地	I	II層																																											III層	IV層						その他	合計	棲息地
			層	1号	2号	3号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号	13号	15号	18号	19号外	21号	22号	23号	24号	25号	27号	28号	31号	32号	34号	35号	36号	38号	39号	45号	46号	47号	50号	52号	53号	55号	56号	57号	P-9	P-10	小計	P-10	38号	39号	40号	58号	60号	小計			
1	ツタノハ科	オオベッコウガサガイ						2																				2											1	1				6									6	A d
2		ムラサキウズ	1																																									0									1	C f
3		サラサバテイ	2					2												1					3			2						1										9								1	12	C f
4	リュウテン科	ヤコウガイ	1																1							1																		2									3	C f
5		〃 のふた	1		1	1		1												1																								4								1	6	
6		チョウセンサザエ	5					6			1		1							4	2	1	2	1		2		5						2						1	2				30								1	36	C f
7		〃 のふた	9	1	1	2		3	1	1	2	2	1	1				6		2	2			1	5			5	2	1			1			1	1	2	3	2		10		59	1						1	1	70	
8	アマオブネ科	アマオブネ						1			1																						1											3									3	A d
9		オオアマオブネ																																										0									0	A d
10		ニシキアマオブネ																																								1		1									1	A
11		コシダカアマガイ																										1																1									1	
12	ゴマフニナ科	コゲニナ	1					1			1			1									2		5														1	1	1				13								2	16	A
13		ウミニナ科	1																																									0									1	
14	オニノツノガイ科	クワノミカニモリ								1																																1		2									2	A d
15		ミッカドカニモリ	1																																									0									1	
16	ソデガイ科	オハグロガイ	1	1		1												1										2	1										2					1		9								1	11	C a
17		マガキガイ	11	1		6		3		2	3			1			2			6	1	1	2	1	8			8	2	5			4		2	1	1	7	4	6		8	2	87				1			1	2	101	A c
18		クモガイ				1																			1														2					4									4	C a
19		ゴホウラ																																										0								1	1	C a
20		スイジガイ																																										0								1	1	C a
21	タマガイ科	トミガイ								1																														1	1				3									3	a
22		ロウイロトミガイ																																										0									0	a
23	タカラガイ科	ハナマルユキ	1																																									0									1	C d e
24		フジダカキイロダカラ																		1															1									2									2	C
25		ヤクジマダカラ								1																	1																	2									2	C f
26	フジツガイ科	ホラガイ								1	1																											1	1				4								1	5	C f
27	アツキガイ科	シラクモガイ				2		3										1						2				1										1								10									10	D e
28		ガンゼキボラ						1																																				1									1	C f e
29		レイシ																									1																1									1	
30		ツノレイシ	1																																									0									1	
31	イトマキボラ科	チトセボラ				1																																						1									1	C f
32		ナガイトマキボラ																																		1								1									1	C d
33		リュウキュウツノマタ	1																1																		1						2									3	D e
34		ヒメイトマキボラ																																										0									0	C e
35	オニコブシ科	コオニコブシ	2			1																																						1									3	C d e
36		オニコブシ																																										0									0	C e
37	イモガイ科	サヤガタイモ																							1																		1									1	A d
38		イボシマイモ																										1																1									1	C d
39		マダライモ											1																															1									1	A e
40		コマダライモ								1								1												1			1							1						5									5	C d
41		アンボンクロザメ	1			1																	1																						2									3	C a
42		イモガイ不明	2																										1								1		2					4								1	7	
43	タケノコガイ科	キバタケ																																				2						2									2	D a
44	オニノツノガイ科	コオロギガイ																																			1							1									1	A d
45		陸産貝	79	71	18	125	36	239		8	108	1		183			1	46		30	105		98	5	264	2	7	277	34	54			82			15	70	56	127	28	2	2	1	2,095		75	92	32	10	49	258	46	2,478	
46	フネガイ科	エガイ					1				1													1					1 1												1 1					5									5	C d e
47		リュウキュウサルボウ	2											1											1						1												1		4									6	C a
48	ウミギク科	ウミギク														1																												1									1	C d
49		メンガイ												1																								1						2									2	C d
50	ツキガイ科	ウラキッキガイ																									1																1									1	C c
51	シャコガイ科	ヒレジャコ																																				1				1									1	C f
52	ザルガイ科	リュウキュウザルガイ																																			1						1									1	C a
53	マルスダレ科	チョウセンハマグリ	1			1 1		2										1							2			2		1			2					1	3					15		1 1		1		1 1	3	1	20	D a
54		サラサガイ																																										0									0	D c
55		ケマンガイ									1																																	1									1	A c
56		ホソスジイナミガイ	1			1	1													1																						1		5									6	D a
57		スダレハマグリ																																										0					1	1 1	2		2	D d
58		ソメワケグリ	1																																							1		1									2	D a
59		アラスジケマンガイ	1	1 1	1			1		1	1							1					1					2 2	1								2		1				1		14				1 1			1		16	D d
60	チドリマスオ科	イノハマグリ	2	1 6	1 2	2 1	1	4 2			3 2		1 2	1 1				2			1			1	5 2		2	2	1				1	1		1	1	1	1	1				42		1 1	1	1		2	5		49	A a
61	バカガイ科	リュウキュウバカガイ	2																																									0									2	C a
62		ベニハマグリ																						1																				1									1	
63	リュウキュウマスオ科	マスオガイ																									1																1					1	6 4	7		8	C a
64		リュウキュウマスオガイ				1	1				1												3 2		4 3			1	1				1						5 4	1				19								1	20	A c
65	ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	1																														1											1									2	C a
66	シジミガイ科	シレナシジミ		2	1	1 1		1		1										1						1		1	3 4		1			1 1					1	2 5	1		1 1		23				1 1		2 4	5	2	30	E g
67		ツヤギセル																															1											1									1	
68		不明				1				1			1				1							1			1					1											7			1				1		8	
	合	計	132	83	24	148	40	270	1	18	125	3	4	191	0	1	3	60	1	47	112	2	109	12	301	5	11	320	43	65	0	0	97	4	2	19	77	77	160	48	2	28	3	2,516	1	77	94	37	12	63	284	63	2,995	

第７節　脊椎動物遺骸

脊椎動物門	Phylum VERTEBRATE
I　軟骨魚綱	I　Class Chondrichthyes
1．サメ目	1．Order Lamniformes
科・属不明	Fam.et gen. indet.
II　硬骨魚綱	II　Class Osteichlhyes
1．ウナギ目	1．Order Anguilliformes
ウツボ科	Family Muraenidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
2．スズキ目	2．Order Perciformes
フエダイ科	Family Lutjanidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
タイ科	Family Sparidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
フエフキダイ科	Family Lethrinidae
属・種不明	Ge. et sp. indet
ベラ科	Family Labrdae
属・種不明	Ge. et sp. indet
ブダイ科	Family Scaridae
ナガブダイ	*Scarops rubrouiolaceus*
イロブダイ	*Bolbometopon bicolor*
ナンヨウブイ	*Scarus gibbus*
ニザダイ科	Family Acanthuridae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
3．フグ目	Order Tetraodontiformes
ハリセンボン科	Family Diodontiae
イシガキフグ	*Chilomy cterus affinis*
4．カサゴ目	Order Scorpaeniformes
カサゴ科	Family Scorpaenidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.

III　爬虫綱

1．カメ目

リクガメ科

属・種不明

ウミガメ科

アオウミガメ

2．有鱗目（ヘビ亜目）

クサリヘビ科

ハ　ブ

III　Class Reptilia

1．Order Chelonia

Family Testudinidae

Ge. et sp. indet.

Family Chelonidae

Chelonia mydas

2．Order Ophidia

Family Viperidae

Trimeresurus Flavoviridis

IV　鳥　綱

1．ミズナギドリ目

アホウドリ科

アホウドリ属

IV　Class Aves

1．Order Procellariformes

Family Diomedeidae

Diomedea sp.

V　哺乳綱

1．齧歯目

ネズミ科

ケナガネズミ

2．クジラ目

科・属不明

イルカ科

属・種不明

3．食肉目

イヌ科

イ　ヌ

4．海牛目

ジュゴン科

ジュゴン

5．偶蹄目

イノシシ科

リュウキュウイノシシ

V　Class Mammalia

1．Order Rodentia

Family Murida

Diplothrix legatus

2．Order Cetacea

Fam. et gen. indet.

Family Delphinidae

Ge. et sp. indet.

3．Order Canidae

Family Canidae

Canis familiaris

4．Order Sirennia

Family Dugongidae

Dugong dugong

5．Order Artiodactyla

Family Suidae

Sus leucomystax riukiuanus

魚　類

軟骨魚類

サメ目：椎体が出土している。沿岸性のホシザメ科のものか、あるいは牙製品となるメジロザメ科のものであろう。

Tab. 76　サ　メ　目

層　位	遺　構	部　位	個　数	図　版　番　号
Ⅱ　層	—	脊　椎	1	PL. 66—上—1

軟骨魚類

ウナギ目・ウツボ科：数は少ない。かなり大形になるものから、歯骨長35.0㎜程度のやや小さいものまでを含む。大形のはこわれている標本が多い。

スズキ目・タイ科：極めて少ないらしい。

フエダイ科・出土量は少ない。

フエフキダイ科・やや量的に増加する。しかし主要な魚骨の10%を占める程度である。

ヨコシマクロダイ：フエフキダイ科の魚であるが、ごく僅かを占めるだけである。

ハタ科：主要種の６%程であるから少ない出土である。

ブダイ科各種：全体の33%を占める魚で、本遺跡での主体種ということになる。イロブダイナガブダイ、ナンヨウブダイその他が含まれ、イロブダイ、ナンヨウブダイが圧倒的に多い。

ベラ科：前上顎、歯骨、咽頭骨などの目立つ種類であるが、最少個体数は13%である。

ハリセンボン科：3.5%である。

以上の他にニザダイ科の尾部棘状の鱗が３点出土している。いずれも大形のもので、おそらく体長50～60cmあるいはそれ以上に達するものの鱗である。この鱗のみで個体数を推測するのは難しいが、大形の魚であるだけに食料の資源としての価値はあったであろう。

Tab. 77　ニ　ザ　ダ　イ　科

層　位	遺　構	部　位	個　数	図　版　番　号
表　採	—	尾部棘状の鱗	1	PL. 66—上、２～４
Ⅱ　層	32　号	〃	1	〃
〃	36　号	〃	1	〃
〃	44　号	〃	1	〃

本遺跡からの魚骨は、遺跡の全面にわたって構築された遺構のそれぞれにかなりの量が検出されている。その出土量は遺構別に量差もあり、その規模による違いがあったのであろう。その量差が検討され、それに構築の年代差が現われるとしたら、遺跡の歴史的な変遷を語る貴重な資料となろう。こうした分析が将来望まれるものである。

Tab. 78 魚 骨 出 土 状 況

凡例：左前上顎骨 | 右前上顎骨 / 左歯骨 | 右歯骨　　左上咽頭骨 | 右上咽頭骨 / 下 咽 頭 骨

層序	部位 / 科名 / 遺構	前上顎骨・歯骨													上・下咽頭骨					椎骨		棘類	遊離歯	その他	最小個体数
		ウツボ科	タイ科	ミナミクロダイ	フエダイ科	フエフキダイ科	ヨゴシマクロダイ	ハタ科	ブダイ科	イロブダイ	ベラ科	ハリセンボン科	不明	ベラ科	ブダイ科	イロブダイ	ナガブダイ	ナンヨウブダイ	脊椎骨	尾部棒状骨				
I	層				1	1 2 / 2		2 1	5 4 / 7	1 1 / 1	3 4			7	6 5 / 4	1 / 2		4 2 / 6	7	5			42	38
II	2 号								1 / 1										6					1
	3 号					1 /		1 1	3 1 2 / 1 4				1 (1)	1 / 1	2 4 / 1				86	3	6		134	12
	4 号								1 /	1 / 1										1	2			2
	5 号														2 /								2	2
	6 号					1 2 /		1 1 1	1 1 /	1 /	1 / 1	1	1 (1)	1 / 1		1 / 1	1 /	1 / 2	3		6		20	13
	7 号					1 /		1 / 1	1 1 / 1					1 / 1				1 /	2				13	5
	8 号					1 /			1 /		2 1 / 1			2 /				1 / 1	6	4	9		24	7
	9 号										1 1 /			1 / 1		1 / 1		1 / 1					1	4
	10 号									1 /		1							1				5	2
	11 号					1 1 /		1 (1)	4 6 / 5	1 1 / 1	1 / 1			6 /	4 /	1 /		1 2 / 3	20	8	21	1	149	25
	12 号					1 1 / 2		1 / 1	4 2 / 1	1 1 / 1	1 1 / 1		1 (1)	1 / 3	2 /	1 1 /		1 2 / 4	13	2	7		61	20
	13 号							1 1 / 1	1 1 / 1	1 /		1		1 / 1	1 /				2	3	7		2	6
	14 号																		1					
	15 号				1 /	1 3 / 3		1 /	3 1 / 1 2		2 1 /			1 / 1				1 /	15	10	15		86	12
	16 号					1 /		1 /			1 /												3	3
	17 号								1 /	1 / 1	1 /							1 / 1					4	4
	18 号	1 1 / 1				2 5 / 2 1	1 1 / 1	3 3 / 2 1	16 20 / 11 13	2 1 / 2 1	2 3 / 2 1	4	1 (5)	1 / 10	8 3 / 10	2 1 / 3	1 1	1 3 / 13	65	35	171	3	122	81
	19 号					1 /			1 /															2
	19号の外					2 /										1 / 1		1 /					1	4
	20 号																		1	1				△
	21 号						1 /	1 1 / 2		1 / 1		1	1 (1)					1 / 1		3	14		14	7
	22 号					2 1 / 1			10 8 / 6 12	2 /	2 1 /			1 / 1	4 4 / 6		1 /	2 4 / 3	17	6			79	30
	23 号	1 / 1				1 1 / 1 2		1 /	5 5 / 3 8	1 1 / 1	1 /				5 3 / 6	2 2 /		5 / 5	9	5	20	3	85	27
	24 号					1 /			1 / 2					1 / 1	1 /	1 /			6			1	6	6
	25 号								2 /					1 / 1	1 / 1			1 / 2	2		1		6	6
	26 号																	1 / 1						1
	27 号	1 / 1			1 /	2 1 / 1		1 (1)	2 4 / 4 2					1 / 2	1 / 1	1 / 1		1 1 / 3	13	1	13		37	16
	28 号					1 1 / 1			2 1 / 1	1 /	1 /	1	1 (2)	1 / 1	1 / 2			1 / 1	14	2	18	1	56	12
	29 号															1 /								1
	30 号															1 /					1			1
	31 号								5 2 / 1	2 /					1 / 3			2 / 1	5	3	3		26	12
	32 号	1 /				1 /		1 /	1 1 / 1 2	1 /	1 /			1 / 1	1 2 / 2	1 /		1 /	5	2	6		59	12

層序	部位 / 科名 / 遺構	前上顎骨・歯骨													上・下咽頭骨					椎骨		棘類	遊離歯	その他	最少個体数
		ウツボ科	タイ科	ミナミクロダイ	フエダイ科	フエフキダイ科	ヨコシマクロダイ	ハタ科	ブダイ科	イロブダイ	ベラ科	ハリセンボン科	不明	ベラ科	ブダイ科	イロブダイ	ナガブダイ	ナンヨウブダイ	脊椎骨	尾部棒状骨				
Ⅱ層	34 号					1/1 1/2		1	1/2 2/4		1		(1)	1/3	2/2 6	1/2		2/2 3	10	2	5		37	23
	35 号								3/1 1/1	1	1			1/1		1/1		1	2		3		9	8
	36 号					4/6 1		1/1 1/5	9/5 10/4	1/2	2/2 1/1		(2)		4/2 4	1/1		3/1 1	1			2	438	35
	37 号																				1			
	45 号										1/2							1					2	3
	47 号														1								1	1
	50 号																		1					
	52 号					1			3/2 1/2	1	1	1	1						8	1			5	8
	53 号							1	1/1							1			1			1	2	3
	55 号					1			5/3 1/2	2 1/1	1/1	3		1/4	1/4	1		2/1 2	1	9			17	23
	56 号								1/4 2/3	1	1/1		(1)	1/5	1/2	1/3		3/1 5	1	3		1	8	22
	57 号																						1	
	B 5																						1	
	K 5									1														1
	L 6								1						1				1					2
	M 1					2/2 1		1	1/1	1/1 1	1			1/4	1/2			1/1	4		1		12	13
	M 2								1/4 2/3	1	1/1		(1)	1/5	1/2	1/1		3/1 5	1	3		1	4	20
	M 3							1	1/1							1			1			1	2	3
	M 4					1			3/1 1/1	1				1	1	1			2	1			5	8
	M 5																		1					
	M 6					1			1/1					1/1		1			1				2	5
	M 8											1												
	M 24																						1	
	O 5																						12	
	O 6																						1	
	P 6					1			2/1 1/1		1		(1)	1/2	1/1 2	1/2		1/1	1	2	2		29	12
	P 9					2		1								1/1		1/1 1					2	5
Ⅲ層	3 号																						1	
	4 号																						3	
	14 号					1		1	1/2							1/3		1/2	2		1		5	9
	P－4															1/1								1
	P－10					1		1	1			1		1/1	1/5			1/1	1		1		6	11
Ⅳ層	3 号																					1		
	10 号													1/1										1
	32 号													1/1									1	1
	38 号		1 (1)			1/1 1/2		1/2	3/1 1/5	2	1/1 1	3		1/3	1/6	1/1	1	1/1 1	9	3	14	3	38	28
	40 号	1				2/2 3/4		1/1 (1)	5/6 2/4	1	1/2	1		2/5	1/2 7	2/1 2		2/8	75	1	97	2	127	38
	58 号																						1	
	60 号								2/2 1/1	1/1	2/1	2			1/1	1/1		1/1 1					19	10
表採					1	1/1 2			1/3 2/4	1	1	1	(2)	1/4	1/3	2/1 2	1/1	1/1 1	4	1	4		16	23
最少個体数		5	1	0	4	58	2	33	153	34	40	22	20	82	98	43	5	91	427	120	449	15	1,845	691

爬 虫 類

リクガメ類：背甲骨板の椎骨板、縁骨板の断片が出土している。

Tab. 79 リ ク ガ メ

層位	遺構	部位	個数	図版番号
Ⅱ層	6 号	不明	1	PL. 67－下－7
	16 号		1	〃
	23 号		1	〃
	27 号		1	〃
	28 号		1	〃
	32 号		1	〃
合計			6	〃

ウミガメ類：骨の総数は154 点と多い。大部分が骨板片であるが、歯骨の破片が3点あり、これにはアオウミガメの歯骨が認められた。この他のアカウミガメなども含まれるかと思われるが確認していない。ウミガメ類を多く出土するのは、南島の特徴の一つであるが、本遺跡の例はそうした傾向をよく示す一例といえよう。

Tab. 80 ウ ミ ガ メ

層位	遺構・グリット	部位	個数	図版番号
表採	不明		3	PL. 67－上－6
Ⅰ層		左上腕骨	1	PL. 67－上－1
		左下顎骨	1	
		不明	9	
		小計	14	
Ⅱ層	2 号	不明	1	
	3 号	〃	2	
	6 号	〃	3	
	7 号	〃	2	
	8 号	〃	3	
	9 号	〃	1	
	10 号	尺骨	1	PL. 67－上－7
	〃	不明	1	
	12 号	〃	6	
	13 号	左下顎骨	1	PL. 67－上－3
		不明	1	
	15 号	尺骨	1	PL. 67－上－8
		不明	12	
	16 号	〃	1	
	18 号	〃	20	
	21 号	〃	4	
	22 号	〃	4	
	23 号	左下顎骨	1	PL. 67－上－2
		不明	14	
	24 号	〃	5	
	27 号	〃	2	
	28 号		4	
	32 号	左上腕骨	1	PL. 67－上－4
		不明	12	
	33 号	〃	1	
	34 号	〃	8	
	36 号	〃	3	
	50 号	〃	1	
	52 号	〃	1	
	53 号	〃	2	
	55 号	指骨	1	PL. 67－上－10、11
		不明	9	
	56 号	〃	2	
	小計		131	
Ⅲ層	14 号	不名	1	
Ⅳ層	49 号	〃	3	
	61 号	〃	5	
	小計		8	
合計			154	

ヘビ類：ハブの椎骨が2個出土している。

左右前関節突起間巾　14.0　16.0±

前関節関節頭左右巾　6.0

後関節突起巾　　11.4　12.0±

Tab. 81　ハ　　ブ

層　位	遺　構	部　位	個　数	図　版　番　号
Ⅳ　層	40　号	脊　　椎	2	PL. 66—下—8

鳥　類

本遺跡において出土した鳥類の遺存骨は少なく、種類も僅かにアホウドリを検出したにとどまる。

Tab. 82　鳥

層　位	グリッド	部　位	個　数	図　版　番　号
Ⅰ　層	M　2	右上腕骨近位端	1	PL. 66—下—1(アホウドリ)
Ⅱ　層	12　号	破　　片	1	
	27　号	〃	1	

哺　乳　類

本遺跡において哺乳類として検出出来たのは、イノシシが大部分で、その他の種類は全く少なかった。

クジラ類としたのは部位不明の断片であり、イルカ類としたのも助骨片であって、海棲獣とみられる構造の海綿体を認めたものであるが、椎体などが確認されず不確かである。齧骨類としたのは、ケナガネズミの右下顎骨1片のみである。イヌは断片的な四肢骨があったが、2点の環椎は成獣とやや若い個体のもので、縄文犬の小形（長谷部の5分類による）のものに一致し、九州島以北では雌にみる大きさである。上腕骨もこの環椎と一致する大きさの個体とみてよい。

ジュゴンはやはり断片的な骨を検出している。肋骨が目立つのは、骨器の素材として持ち込まれていたからに他ならない。左下顎骨が断片であるが出土しているのは珍しい。ジュゴンの骨は打ちたたかれ、断片になっている骨が多いからである。

Tab. 83　ジュゴン

層　位	遺　構 グリッド	部　位 肋　骨	椎　体	肢骨片	その他	合　計
Ⅰ　層		3		2	5	10
Ⅱ層	2　号				1	1
	3　号			1		1
	4　号				1	1
	6　号	11		1	1	3
	7　号			1		1
	8　号	2				2
	10　号				1	1
	12　号	2			1	3
	13　号				1	1
	15　号	1			1	2
	18　号	6			7	13
	19　号			1		1
	20　号				1	1
	21　号	1	3	1	1	6
	22　号	1				1
	23　号				1	1
	27　号	1			2	3
	28　号	1		1		2
	31　号				2	2
	34　号				1	1
	45　号	3				3
	55　号	2				2
	小　計	21	3	6	22	52
Ⅲ層	14　号	1			2	3
	P—10				1	1
	小　計	1			3	4
Ⅳ層	38　号			1	1	2
	40　号	1			3	4
	小　計	1		1	4	6
合　計		26	3	9	34	72

Tab. 84 クジラ

層位	グリッド	部位	個数	図版番号
I層	M－1	不明	1	

Tab. 85 イルカ類（?）

層位	遺構	部位	個数	図版番号
II層	55号	肋骨	1	PL. 66—下—3

Tab. 86 ケナガネズミ

層位	遺構	部位	個数	図版番号
IV層	38号	右下顎骨	1	PL. 66—下—2a, 2b

Tab. 87 イヌ

層位	遺構	部位	個数	図版番号
I層	M－2	肋骨片	1	
II層	6号	右上腕骨近位端	1	
		〃 中～遠位端	1	PL. 66—下—6
	28号	環椎	2	PL. 66—下—4
	35号	左尺骨骨体	1	PL. 66—下—7
合計			6	

イノシシ

多くのイノシシの遺骸が出土している。頭骨、四肢骨の大部分が打ち割られた状態で出土しており、完存する骨は距骨、踵骨、中手、中足骨、指骨に限られた。しかし、これらの骨も多くが打ち割られて、骨髄食の跡を示していた。

Tab. 88 イノシシ骨出土一覧（歯をのぞく）

層	遺構		cra 頭蓋骨	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨	scap 肩甲骨 pⓈd	hum 上腕骨 pⓈd	ul 尺骨 pⓈd	rad 橈骨 pⓈd	mc 中手骨 pⓈd	pel 寛骨 pⓈd	fe 大腿骨 pⓈd	tib 脛骨 pⓈd	fib 腓骨 pⓈd	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 pⓈd	dig 指骨 IⅡⅢ	破片
表採		r	1		2			①		1			①	1			1	1	6
		l						1①									1		
I層	M－2	r			2	1①							②						7
		l						①							1				
	M－4	r					①	1①		1							2		11
		l						①											
	M－6	r			2														
		l																	
	小計	r			4	1①	①	1①		1			②				2		18
		l						②							1				
	1号	r		1		①		①											
		l												1					
	2号	r			2												2		
		l								1									

層	遺構	cra 頭蓋骨	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨	scap 肩甲骨 pⓈd	hum 上腕骨 pⓈd	ul 尺骨 pⓈd	rad 橈骨 pⓈd	mc 中手骨 pⓈd	pel 寛骨 pⓈd	fe 大腿骨 pⓈd	tib 脛骨 pⓈd	fib 腓骨 pⓈd	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 pⓈd	dig 指骨 ⅠⅡⅢ	破片
Ⅱ層	3号	r l 3	1					①		①		① 2					1	4
	4号	r l		1							1							2
	6号	r l		1	1	①1	1			21		① 1		1		2	2	14
	7号	r l								1 ①						1		1
	8号	r l		1 4			1 ①		1	2						1	2	
	9号	r l				1				1		1						2
	10号	r l					① ①	①	1									3
	11号	r l		1				①			1	1		1 1				3
	12号	r l		2 2	③	①1					1 ②			1				14
	13号	r l 1		1	1				1									6
	15号	r 1 l 1	1	1	1	①	1①	1		①	1					5 1	2	21
	16号	r l																4
	17号	r l		2		1			1									
	18号	r l		4		①1	1	2	1	1	①					2	2	32
	21号	r l		4		①		1 1							2	1	1	56
	22号	r l 1		1 1		1	①	①	1		①		2	1			2	4
	23号	r l 1				①3	①				1 1	2				1		20
	24号	r l		2			1					1				1		5
	25号	r l				①	①				①						1	
	27号	r l		4 1			1① ①	2 1			1 ①	2				1	1	12
	28号	r l		1 1	1						② 1	1 ①			1	1		6
	30号	r l			1						1	1						13
	31号	r l		1	1	1	1②		1		②			1		1 1	2	17
	32号	r l		1			1				①		1				1	7
	34号	r 1 l			1		① 1				②	2② 1			1	① 1		13
	35号	r l		2			①		1			1						15
	36号	r l 2		1	1 ①	② ①1					1	①					3	27
	45号	r l					1 ①											1

層	遺構	cra 頭蓋骨	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨	scap 肩甲骨 pⓈd	hum 上腕骨 pⓈd	ul 尺骨 pⓈd	rad 橈骨 pⓈd	mc 中手骨 pⓈd	pel 寛骨 pⓈd	fe 大腿骨 pⓈd	tib 脛骨 pⓈd	fib 腓骨 pⓈd	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 pⓈd	dig 指骨 IⅡⅢ	破片
Ⅱ層	52号	r		3	1	①							1		1		1	9
		l				1												
	53号	r						1									3	2
		l			1													
	55号	r			①						3							43
		l 2		1 1	1	2	1 ②	3								1		
	56号	r			②1		①	③		1	1			1		1	3	8
		l		2	②1	①1	1 ①	②	1						1			
	P−9	r															1	
		l		1														
	不明	r											1			1		
		l																
	小計	r 2	1		2⑦3	⑥3	7⑩	5⑤1	8	④1	1⑨7	3⑤1	1 1	2 3	5	1①		
		7			1					1 3	2 2	10	1			20	28	364
		l 3	2 1	14 36	3③4	2⑥10	5⑨	4④2	2	③	2④	1①1	3	1 2	1	4		
Ⅲ層	14号	r															1	10
		l				2 1			1									
	33号	r																2
		l																
	P−10	r															1	
		l																
	小計	r															2	12
		l				2 1			1									
Ⅳ層	40号	r 1																
		2	1	1 1			1		1	①1							2	17
		l 1				1					②							
	55号	r				1												
		l				1												
	60号	r				1		1										29
		l		2 2	1		1						1					
	小計	r 1																
		2	1	3 3		1 1	1	1	1	①1							2	46
		l 1			1	2	1				②		1					
合計		r 3	1		3⑧3	1⑦4	9⑫	6⑤1	11	⑤2	1⑦7	4⑧1		2③	5	2①		
		10			1					1 3	2 2	10				22	33	446
		l 4	3 1	17 45	4③4	4⑥3	7⑫	4④2	3	③	2⑥	1①1		1③	1	5		

注 1. p ⟶ 近位端
d ⟶ 遠位端
s ⟶ 中間部
2. r ⟶ 右
l ⟶ 左

頭　骨：頭蓋、下顎骨ともに破損度は高く、特に頭蓋はその部分的な骨の認定を困難にする程にこわれており、従って、その数量も表示の上に現わされたのは全体の一部とみなければならない。図版では、そのうちの涙骨、頬骨、後頭骨を示し、歯牙のある切歯骨、上顎骨とその遊離歯を示した。

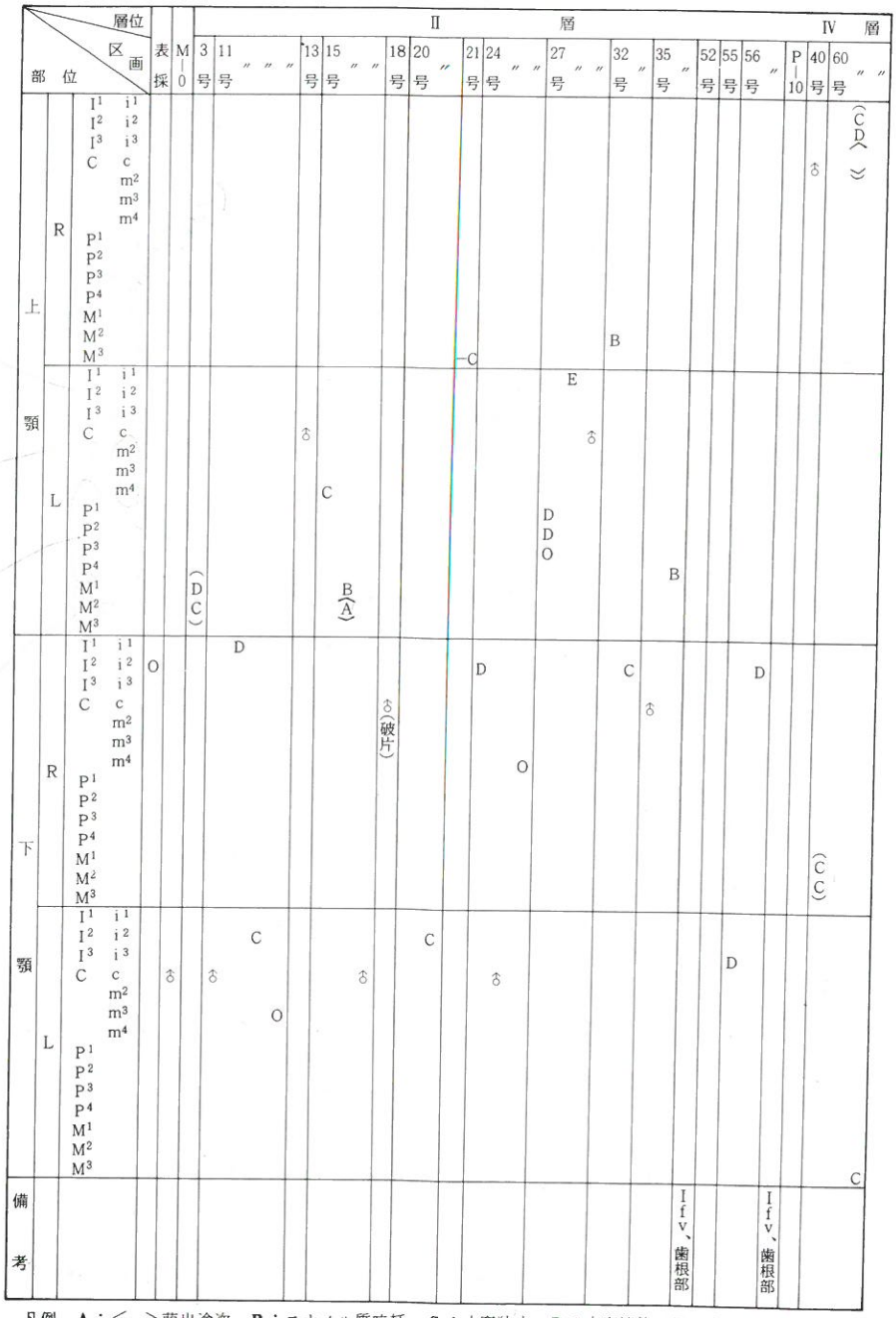
下顎骨もまた破かいされていた。下顎骨自体数が少なく、図版に示し得る程度の標本は $M^{1.2}$ を残植する１点のみであった。

歯牙の出土は総数でも40点足らずであって最少個体数として示される。四肢骨から推定歯牙数の10％に満たないものであることを考えると、顎骨自体が別の場所に運ばれているということも考えなければならないだろう。歯牙のうちで、性別を確認できる犬歯は、上顎、下顎のそれぞれの犬歯があり、すべて雄獣のものであった。成獣で年齢を経た個体の犬歯は大きく、下顎犬歯の弧状に湾曲する径が95㎜に達するものもあった。

臼歯については、乳臼歯は上・下顎のもの各１点、M^2の未萌出例が１点、M^1のエナメル質部分のみの咬耗２点、エナメル質に小窩の連続する段階のものが１点であった。

M^1の未萌出段階は生後半年未満であり、M^2未萌出は1.5年以上２年に達するものである。M^3は２例があり、すでにエナメル質に小窩のあく段階のものであり３年を経ている個体とみてよい。

Tab. 89　イノシシ歯骨出土一覧



以上のことから、本遺跡で捕獲されている個体は、ごく若い個体は少なく、成獣が主とした対象として狙われていたことがわかる。このことは、今回の資料が多くないため充分確かめることができたとはいえず、今後さらに資料の増加を待って考えていく必要があると考えている。

椎　骨：全椎骨数17点、最小個体数から推定される総数の4.6%である。頚椎７、胸椎15、腰椎６として計算した。一般に椎体の出土が多くないことは、本土各地の遺跡においても認められるところで、本遺跡の場合でも同様であった。脊柱は、その個体が人以外の獣による捕食されると、そのほとんど残されるようである。おそらく四肢骨の場合よりも強靱な靱帯でつながっているからであろう。このような脊柱が遺跡でのこりにくいということは、獲物が別の地点で解体されていることが予測させる。本遺跡では、頭蓋や顎骨も少ない。頭骨から脊柱がひとつづきのものとして扱われることもあったかと思うからである。あるいはまた集落地において、解体が徹底され、分断された小さい骨がイヌなどによって分散させられるということが生じた結果なのかも知れない。

四肢骨：多くの骨がのこされたが、特に目立ったのはII、IVの層準からで、II層は広い範囲から、IV層のは狭い範囲であったが、埋存率は比較的高かったとみてよい。

肩甲、上腕、橈、尺骨の前肢骨、大腿・脛骨の後肢骨が多くのこされた骨で、上腕骨左の遠位端が13点で最も多く尺骨の近位、大腿骨の遠位端が多かった。尺骨は骨器として使われるので、さらにこれより多く、結局最少個体は10数個体とみるのが妥当なのであろう。

なお、本資料については、それぞれの部位の骨のペアリングを通して、さらに実数にせまる可能性ものこされており、今後も検討を進めたいと考えている。

金子　浩昌（早稲田大学考古学研究室）

第Ⅴ章　総　　括

前章までにおいて、第１次～第３次にわたる発掘調査で検出された遺構・遺物について述べてきたが、最後に若干のまとめをして結びとしたい。

本遺跡は沖縄貝塚時代中期（縄文晩期相当）の大集落であり、日本アイソトープ協会に依頼した４点の試料（木炭）の測定結果(注1)はつぎのとおりである。

第49号竪穴住居跡（埋土）	3050±65yB.P.	(2960±65yB.P.)
第７号竪穴住居跡（床面）	2860±90yB.P.	(2770±90yB.P.)
第８号竪穴住居跡（埋土）	3060±65yB.P.	(2970±65yB.P.)
第44号竪穴住居跡（床面）	3120±75yB.P.	(3030±70yB.P.)

この測定結果は、本遺跡の上限にほぼ近い年代を示しているものと思われる。なお、下限はもっと下がるものと思われる。測定結果の出た４つの竪穴住居跡では、重複や出土遺物等から検討して７号竪穴が最も新しい竪穴であり、測定結果と符合する。

竪穴住居跡は第１段丘で１軒、第３段丘で１軒、第４段丘で40軒検出された。最も大きいのは18号竪穴で、最も小さいのは49号竪穴である。大多数は１辺が２～３ｍの方形である。深さは38・58号などのように60cmもある深いものから、21・22号のように15cmの浅いものまであり、平均して30cm前後である。壁は地山を削っただけのと、積み石で壁面化粧したのがある。多くは壁面化粧されており、壁面化粧の積み石が全く存在しない竪穴は¼ぐらいである。しかし、積み石が４壁に見られるのは57・58号竪穴など数軒である。なお、積み石による壁面化粧のある竪穴は仲原遺跡で10軒検出されている(注2)。炉跡は切り合って消失したと考えられるものや、道路下に延びて全面検出できなかった竪穴等を除けば、すべて竪穴内で検出された。形は円形や楕円形状のが多く、焼土の上には灰層が堆積していた。柱穴は竪穴の壁面沿いに廻らされているのが18軒もある。１辺に３本単位で計９本の柱が立つのが基本と考えられるが、岩盤があって穴の掘れない所が多く、１辺に２本とか、直線上に並ばないなどの変形が見られる。柱穴は口径８～20cm、深さ８～25cmと小さく、柱は直径７～10cmぐらいのものだったと考えられる。階段が付いているのは38・23・57・58・49・32号の６軒である。57号以外はすべて40cm以上の深い竪穴であり、深い竪穴には階段が付いていたことが明らかとなった。階段は、地山を削って造られたものと、琉球石灰岩を並べたものがある。このように、炉跡、柱穴、階段、壁面化粧などがセットで検出され、この時期の竪穴住居跡の下部構造が解明された。

礫床住居跡は第１段丘で１軒、第２段丘で１軒、第３段丘で１軒、第４段丘で９軒検出された。最も大きいのは56号礫床で、最も小さいのは１号礫床である。12軒のうち８軒は２～３ｍ×４～６ｍの長方形状のものである。礫床住居跡は地山を5～10cm堀り凹め、その凹みにこぶし大の角礫を敷き詰めている。なお、竪穴の上を利用する時は竪穴に頭大・こぶし大の石を投げ込んでか

ら礫を敷いている。炉跡は中央ではなく、端部に造られているのが多い。炉跡部分は土を敷いてあったり、直接地山面を利用したりしているので、焼土ははっきりしていた。焼土の上には灰層が堆積していた。柱穴は3・56号のように礫床内にあるのと、27号のように礫床外にあるのが見られるが、礫床の下を発掘してないのが多く、全体的に解明できないまま終了した。礫床住居跡の下には竪穴住居跡が埋まっているのが多く、竪穴住居跡よりは新しい住居形態と考えられる。

竪穴住居跡と礫床住居跡の特徴を述べたが、遺構の重複しているのが多いので切り合い関係から検討してみると、

①58・50・34号では、58号竪穴の埋土を掘って50号竪穴が造られ、つぎに50号竪穴を埋めて34号礫床が造られている（古い順58→50→34）。

②49・3号では、埋まった49号竪穴の上に3号礫床が造られている（49→3）

③48・59・28号では、48号竪穴を59号が切っており、59号竪穴を埋めて28号礫床が造られている。（48→59→28）。

④43・44・27号では、43号竪穴の埋土を掘って44号竪穴が造られ、つぎに44号竪穴を埋めて27号礫床が造られている。（43→44→27）。

⑤45・46・47・61・7・6号では、45号竪穴を切って46号が造られ、つぎに、45・46号を切って7号竪穴が造られている。最後に45・46・47の上に6号礫床が造られている。（45→46→47→61→7→6）。

⑥41・42・8・7号では、41号竪穴を42号竪穴が切っており、41・42号の埋土を掘って8号竪穴が造られている。8号竪穴は7号竪穴に切られている。（41→42→8→7）。

⑦25・24号では、25号竪穴の埋土の上まで24号礫床が延びている。（25→24）。

⑧38・39・40・11・14・12・13・20・21号では、38号竪穴を39号竪穴が切り、39号竪穴を40号竪穴が切っている。40号竪穴は11号竪穴に切られ、11号竪穴は12・13号竪穴に切られ、12号竪穴は13号竪穴に切られている。また、もう一方では、38号竪穴を14号が切り、14号竪穴を13号竪穴が切り、13号竪穴と20号竪穴を21号竪穴が切っている。（38→39→40→11・14→12→13・20→21）

⑨32・19号では、32号竪穴の埋土を僅かに掘って19号竪穴が造られている。（32→19）

⑩35・36・37・18号では、35・36・37号竪穴を18号竪穴が切っている。（35・36・37→18）

⑪60・55号は、60号の埋土の上に55号の炉跡が一部乗っている。（66→55）

以上の重複関係から、深い竪穴は浅い竪穴より古いことが確認された。そこで深さで分けてみると、

①30cm以上の深い竪穴　23・32・35・36・37・38・39・40・41・42・48・49・50・58・60。

②20～30cmの中深の竪穴　8・11・12・13・14・18・25・43・44・45・46・47・57。

③15～20cmの浅い竪穴　　7・9・15・19・20・21・22・26・29・31・61。

となる。これらは即同時期とはならないが、時期に幅を持たせて考えれば一応の区分にはなると考えられる。特に①と③には明らかに時期差が見られる。

出土遺物は土器が圧倒的に多い。土器はB群土器が主体で、その中にA群土器が混入しているという状況である。A群土器だけ検出される遺構はない。A群土器の有文は殆ど埋土からの出土であり、竪穴の床面ではA群Ⅶ類とB群土器が検出されている。A群土器には、A群Ⅶ類のようにこの時期までB群土器と共存関係にあったと考えられるものと、A群Ⅰ～Ⅱ類などのように周囲の遺跡から持ち込まれたと考えられるものがある。なお、礫床住居跡からA群土器の有文が検出されているが、それも持ち込まれたものと考えられる。B群土器は口縁部が外反し、頸部で締り、胴部で張る尖底深鉢形土器が主体で、それに壺形土器、浅鉢形土器などが加わる。この手の土器を「仲原式土器」として提唱されている(注3)。このB群土器は焼成良好な薄手土器で、外面はヘラ削りとヘラ磨き（磨研）で調整されており、内面は貝殻条痕がほとんどである。ヘラ削りは斜め上から斜め下へと、上から下へとが見られる。ヘラ削りの上からヘラ磨き（磨研）されているのも見られる。ヘラ削りやヘラ磨きという器面調整はこの土器の大きな特徴であり、明確に一形式を示している。尖底深鉢形土器には胴部の張った部分に焦げや煤などが廻っているのが見られることから、煮炊き用の土器として使用されたと考えられる。なお、壺形土器の外面に丹塗りと見られる赤色土器が2点あり注目される。

石器は石斧が主体である。両刃磨製石斧が多く、扁平片刃磨製石斧がそれに続いている。両刃石斧の刃部の一端が多く減耗しているのが10点ぐらいあり、それは縦斧としての使用が考えられる。刃部が打欠したのを再度研磨して再使用したものや、基部で折れたのを敲石に再利用したものなどがあり、遠く国頭や慶良間から運ばれてきた石器がいかに大事にされていたかを知ることができる。片刃石斧の裏面刃縁に小さな刃こぼれが並んでいるのは使用痕と考えられるが、それは片刃石斧の使用方法や用途などを知ることができる好資料である。石鏃はチャート製が2点検出された。本遺跡とほぼ同じ時期の地荒原遺跡、隅原遺跡、兼城上原遺跡などでも検出されており、この時期に広く分布したと考えられる。15号竪穴の床面に座ったまま検出された石皿は好資料である。石皿の破片や磨石が多いことから、かなりの必需品であったと考えられる。32・49号竪穴の炉跡のすぐそばに置かれていた平坦な粘板岩は、使用痕は確認できなかったが、調理用の石器と考えられる。

骨歯製品が多く検出された。骨針（23点）、ヘラ状製品（6点）、骨錐（16点）などの実用品と、イヌの犬歯製有孔製品（2点）、イノシシの犬歯製品（5点）、サメ歯有孔製品（1点）などの着装品（装飾品）が多い。骨製品の材料としてはイノシシとジュゴンの骨が多く利用されている。

貝製品も豊富である。貝刃（7点）、螺蓋製貝斧（9点）、スイジガイ製利器（12点）、ホラガイ系利器（7点）などの利器、夜光貝などを使った匙状製品（20点）、ホラガイ有孔製品（4点）

などの容器、サメ歯状模造製品（8点）、貝輪（5点）などの着装品に大別される。スイジガイ製利器が第32号・第48号竪穴住居跡の炉跡の灰層から検出されたことは、その用途を考える上で重要な意味を持つ。

食料残滓としては貝殻と獣魚骨が多く検出された。貝殻は陸産マイマイが主体で、第22・23・49号竪穴住居跡などでは陸産マイマイの層が形成されていた。陸産マイマイに比して海産の貝は少ない。脊椎動物はブダイ科、ベラ科、フエフキダイ科、ハリセンボン科などの魚骨とウミガメ、ジュゴン、イノシシなどが多く検出された。ほかにサメ、リクガメ、ハブ、鳥骨類にアホウドリ、獣類にクジラ・イルカ類、ケナガネズミ、イヌなどが検出されており、食料残滓は豊富である。

以上の調査結果で、本遺跡の重要性が理解できる。本遺跡は早急に国の史跡に指定し、保存と活用を計らねばならない。

注1　社団法人日本アイソトープ協会で測定された。1984年3月19日

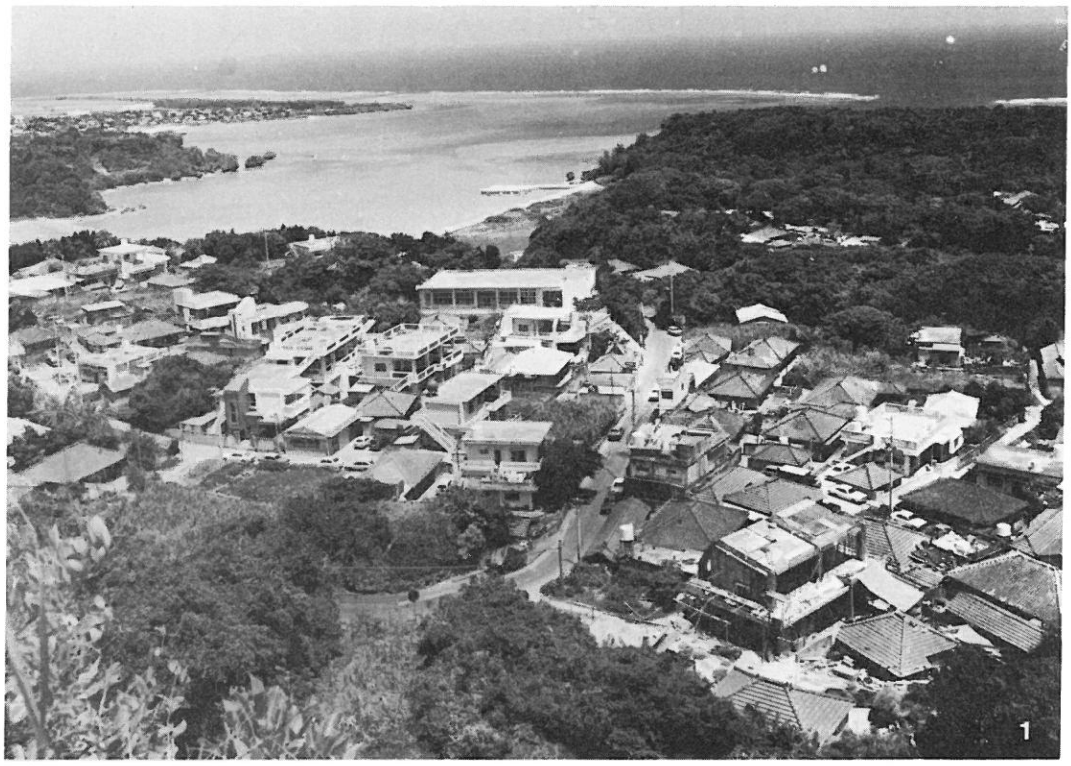
2　「伊計島の遺跡―神山遺跡確認調査概報―」沖縄県教育委員会

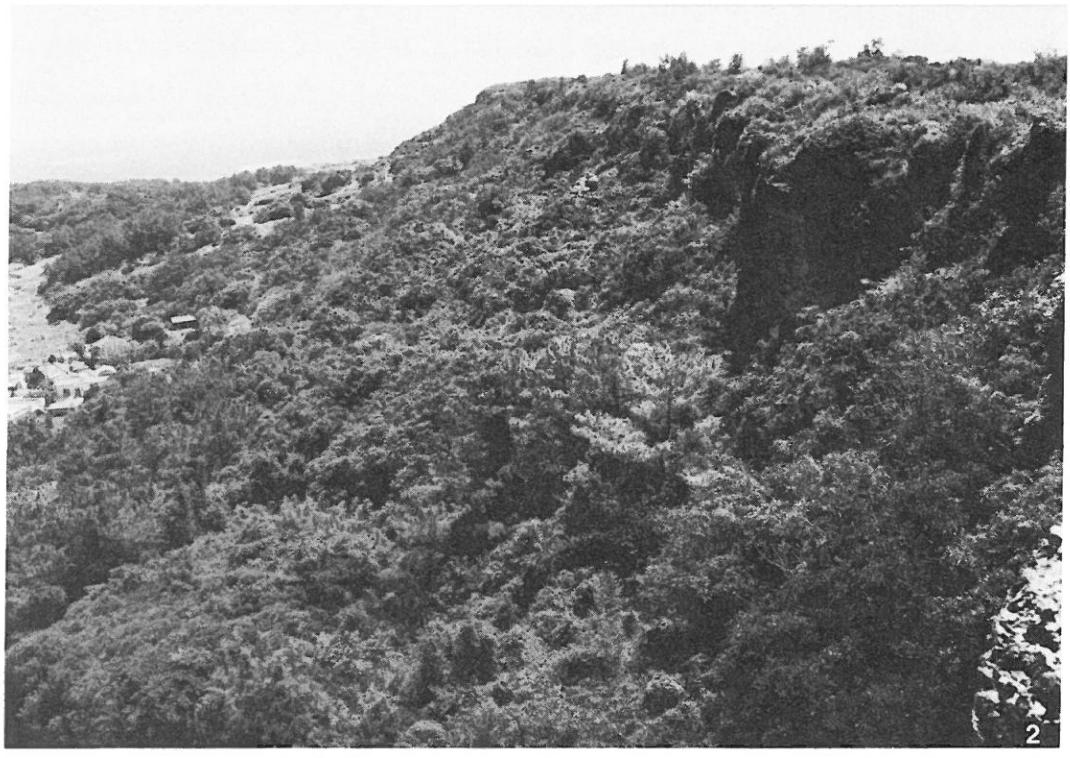
3　上原静・当真嗣一「仲原式土器の提唱について」紀要第1号　沖縄県教育委員会

図　　版

PL. 1　宮城島の空中写真（Sがシヌグ堂遺跡）　1984年9月撮影　1：20,000

PL. 2　　1．遺跡遠景（Sが遺跡）　　北東の伊計島から
　　2．　〃　　〃　　南東の宮城小学校から

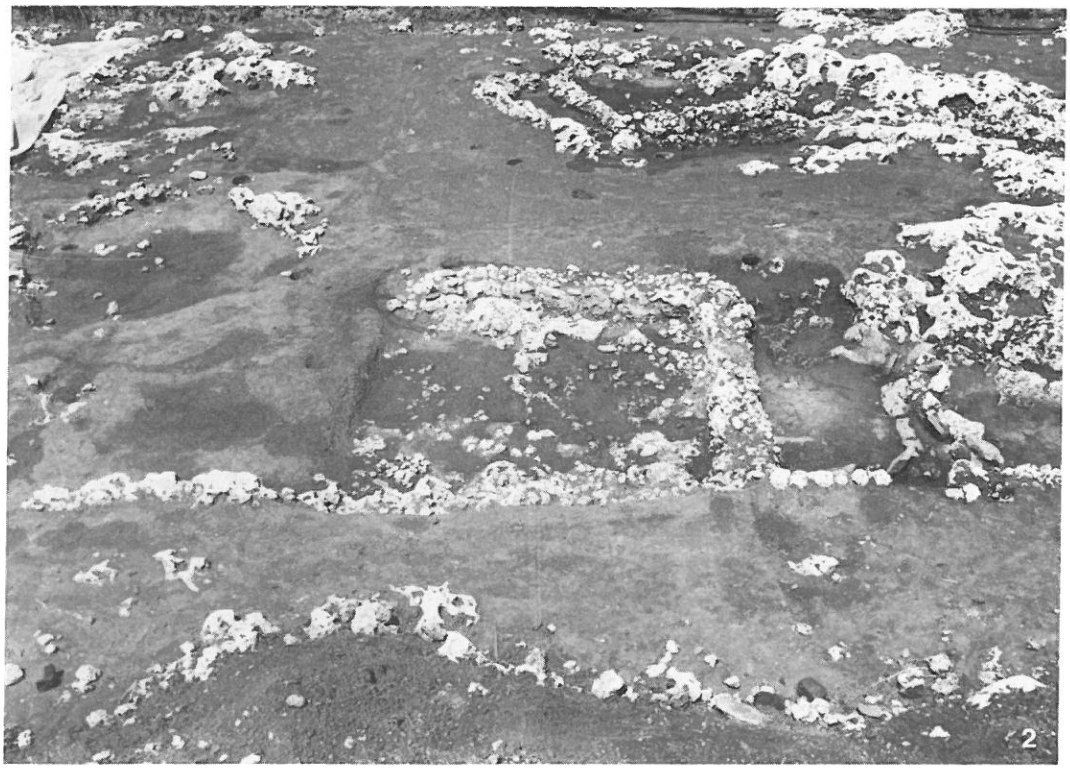




PL. 3　　1．宮城島の集落と港　　遺跡から
　　2．遺跡東側の地形　　〃

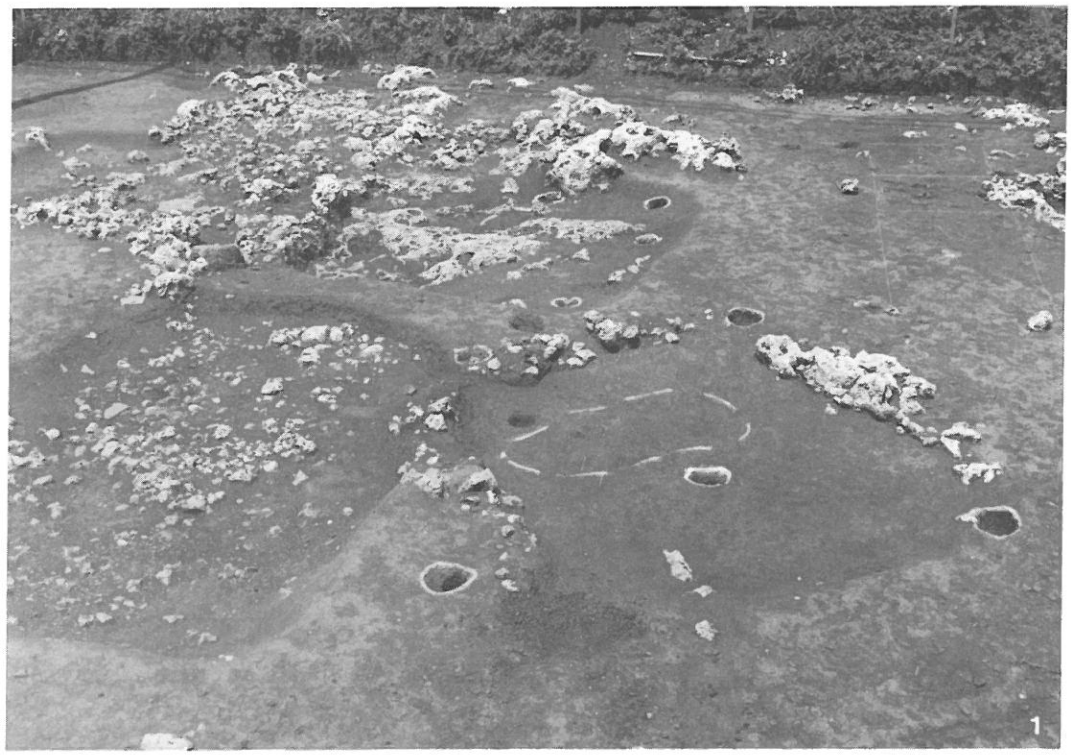
PL. 4　1．発掘前の状況　南から
　　2．　〃　北から

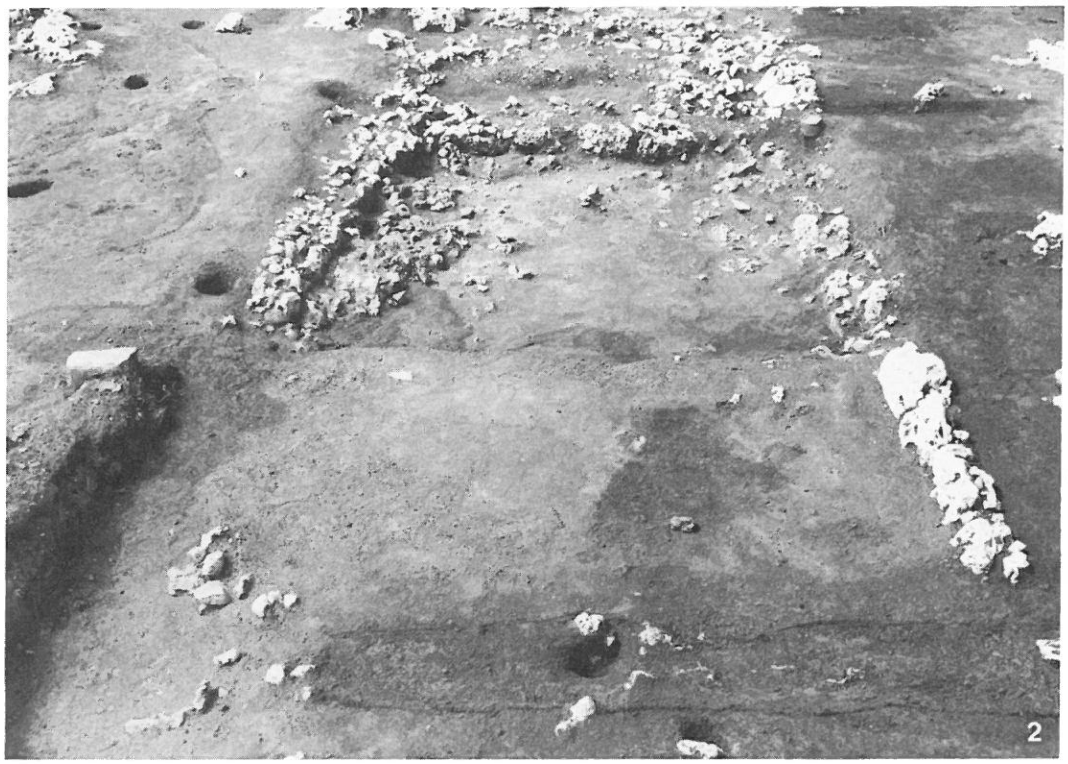
PL. 5　　1．第2・3・4段丘の発掘　　南から
　　2．第4段丘の竪穴住居跡発掘直前　　〃



PL. 6　1．第4・3・2段丘で検出された遺構　西から
2．第4段丘で検出された遺構　東から

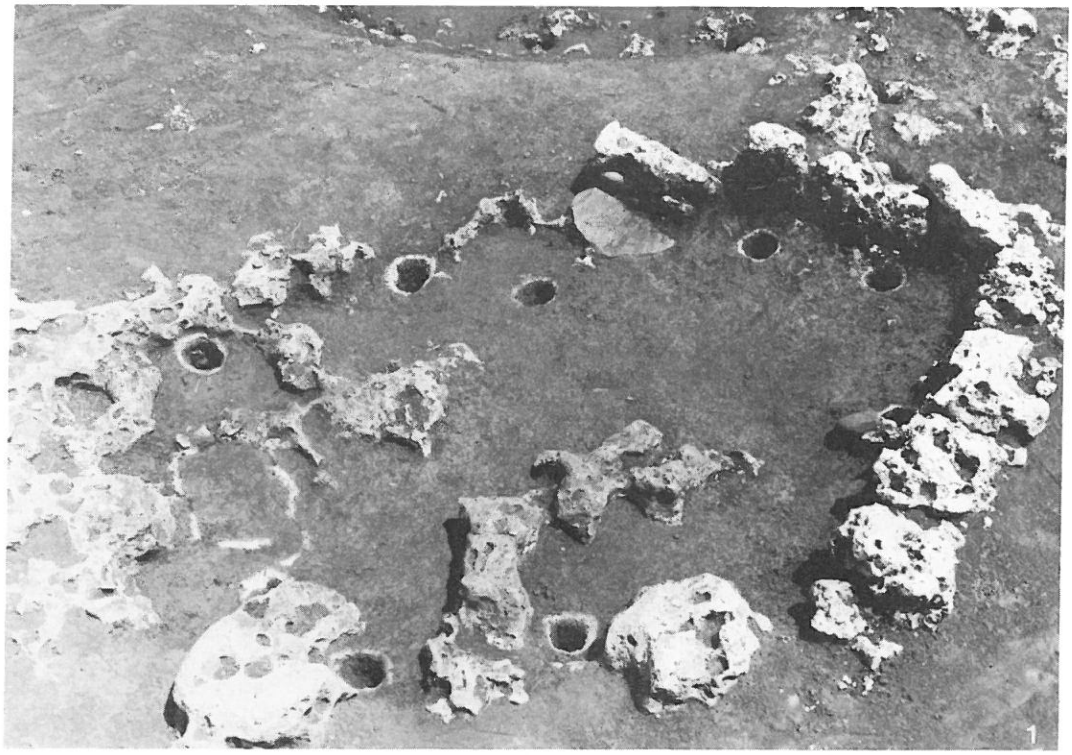
PL. 7　1．第4段丘で検出された遺構全景　南から
2．　〃　〃　北から



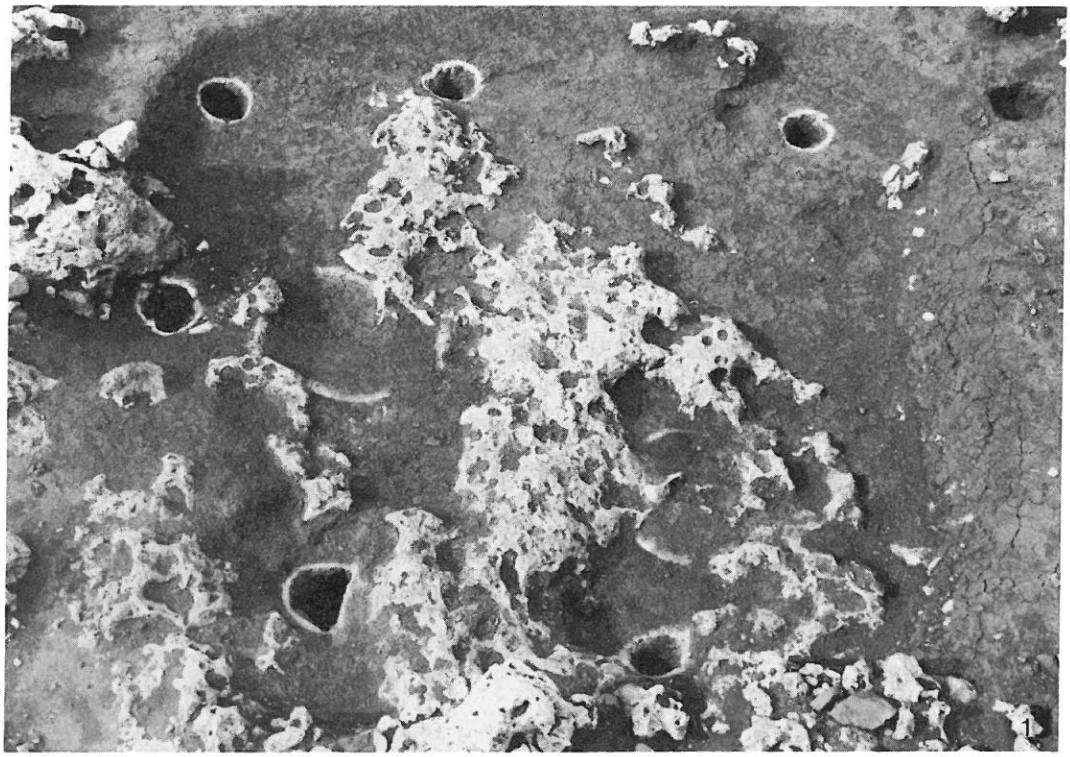


PL 8　1．第７・８号竪穴住居跡（奥は25号竪穴と24号礫床）　東から
2．第61・47号竪穴住居跡（奥は46・45号竪穴）　南から

PL. 9　　1．第15号竪穴住居跡　　南から
　　2．第20号竪穴住居跡　　〃

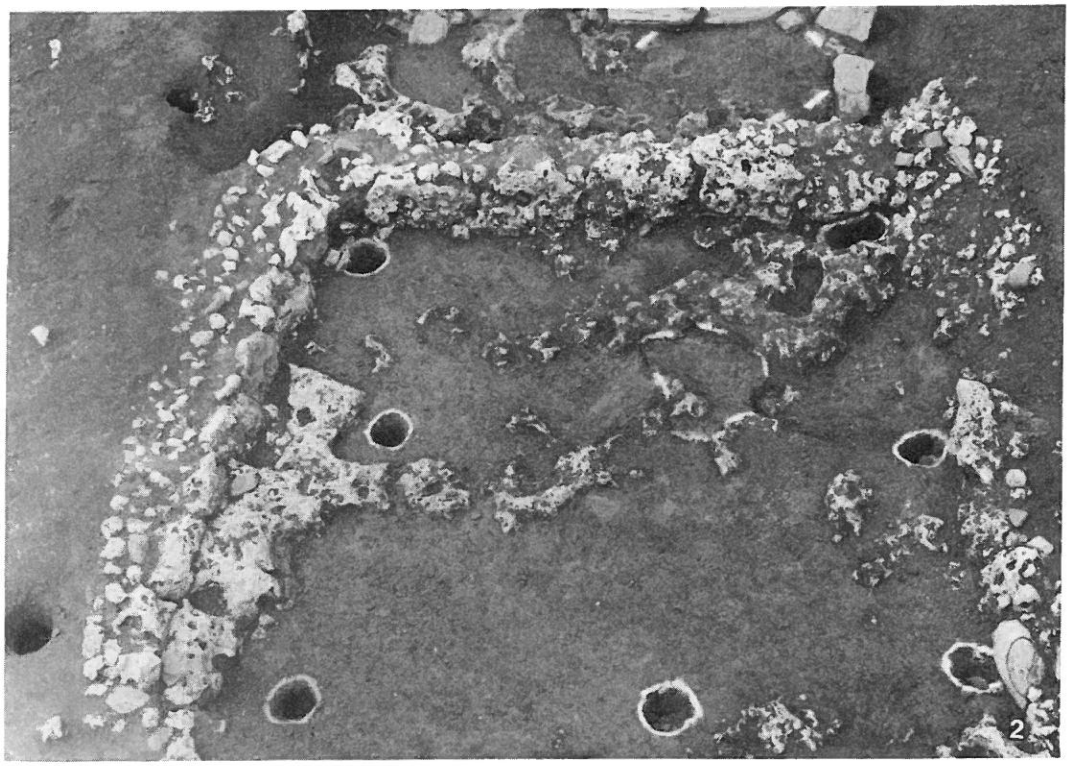


PL.10　1．第22号竪穴住居跡　南から
2．第23号竪穴住居跡　〃



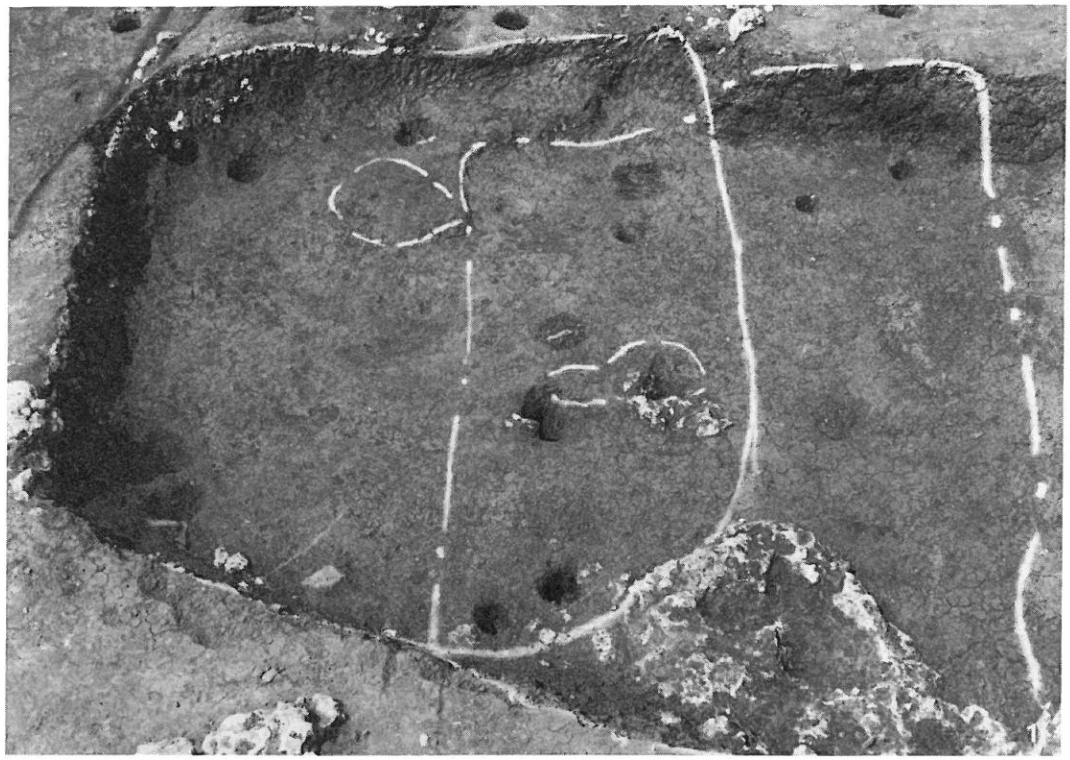
PL.11　1．第25号竪穴住居跡　西から
2．第35・36・37・18号竪穴住居跡　南から

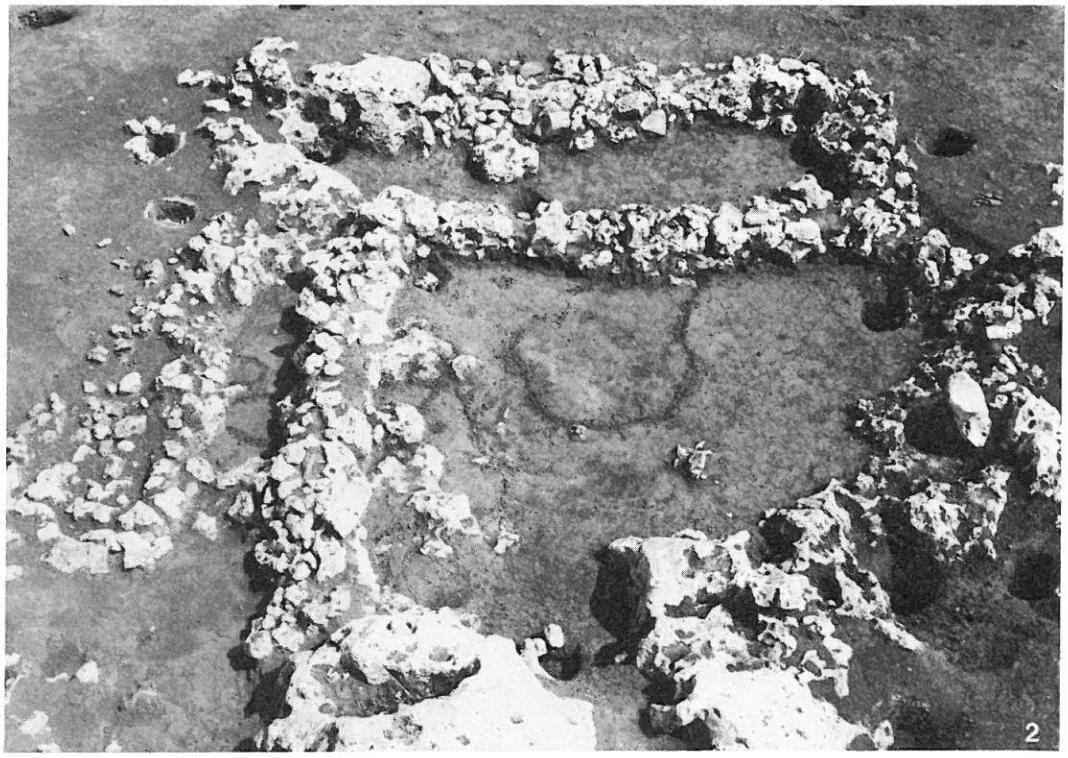
PL.12　1．第19号（上）と32号竪穴住居跡の重複　東から
2．第32号竪穴住居跡（19号の下部遺構）　〃



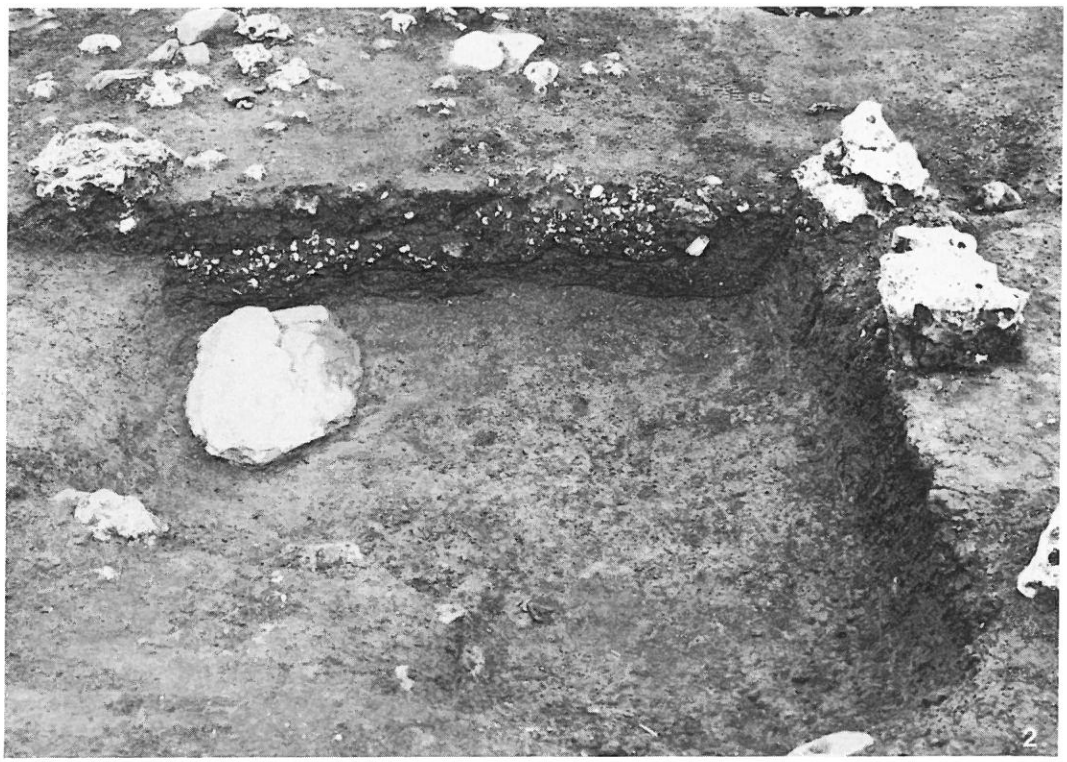
PL.13　1．第35・36・37号竪穴住居跡（奥は43・44号竪穴）　東から
2．第37号竪穴住居跡　南から

PL.14　1．第38・39・40号竪穴住居跡（右上のは15号竪穴）　西から
　　2．第38号竪穴住居跡　〃

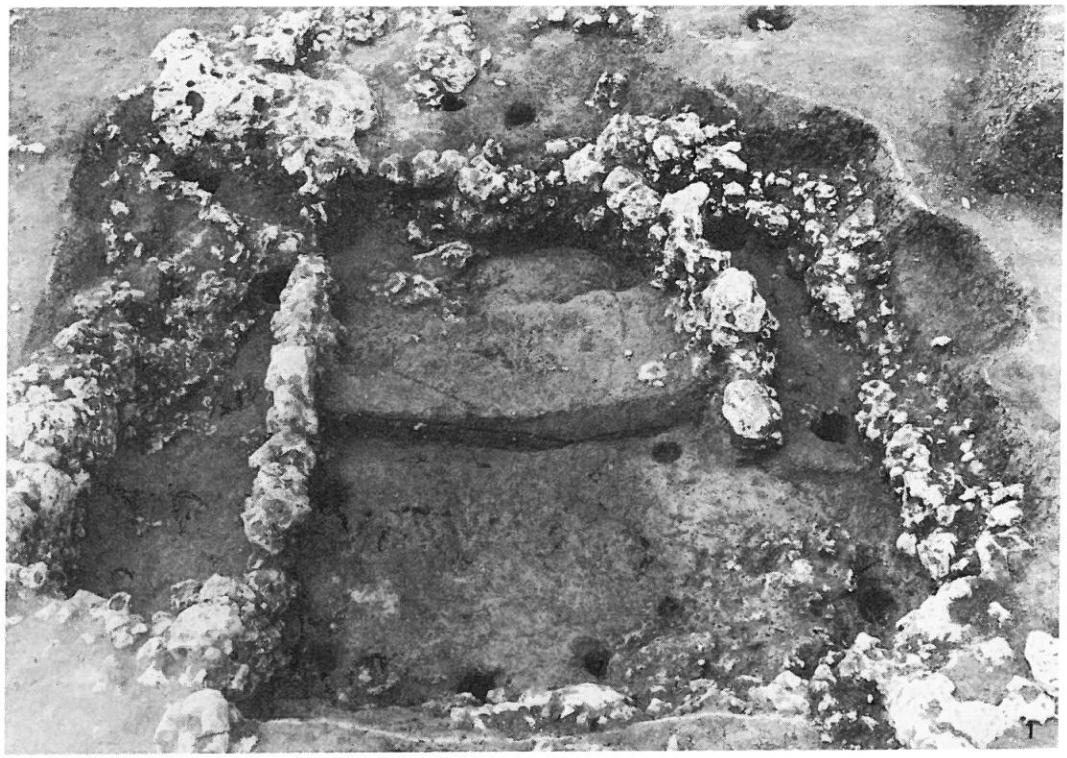


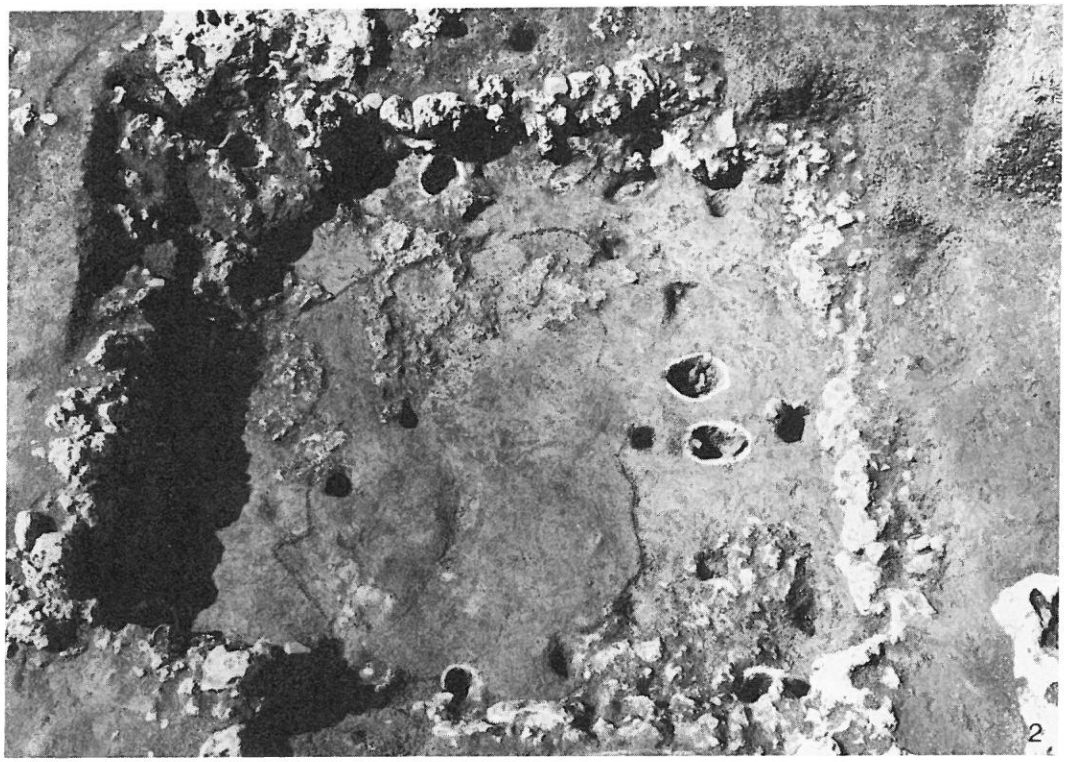


PL.15　1．第41・42号竪穴住居跡　南から
2．第43・44号竪穴住居跡　北から

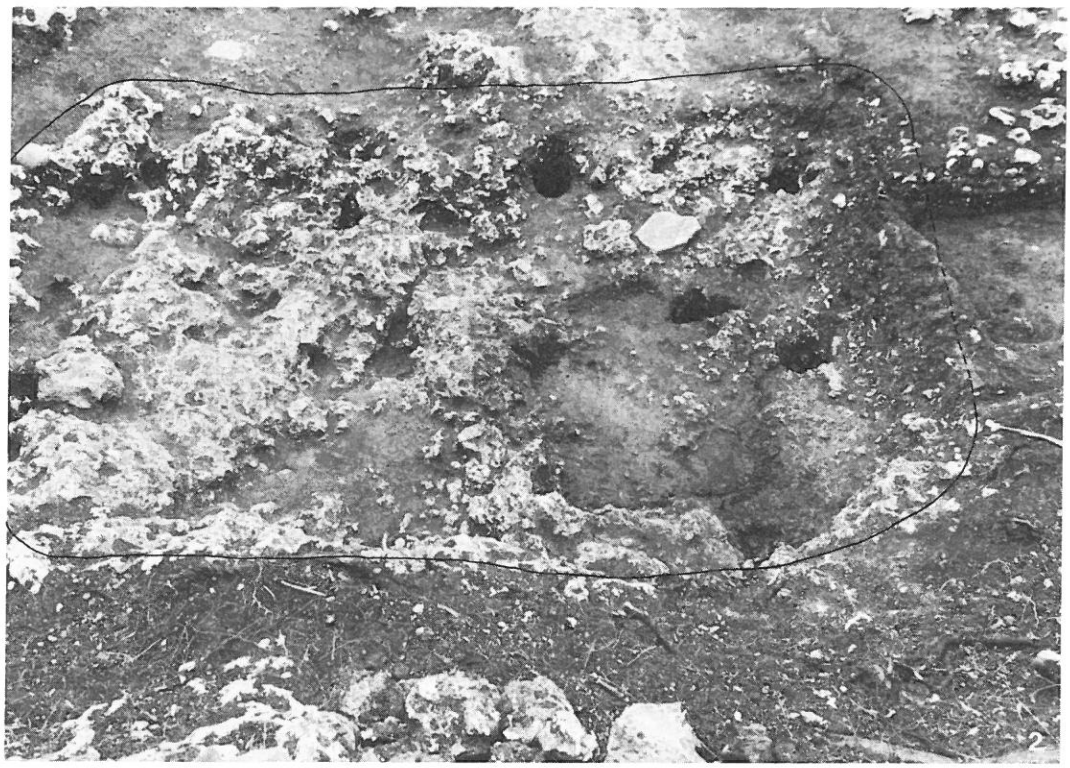


PL.16　1．第48号竪穴住居跡　　北から
　　2．第49号竪穴住居跡と竪穴内の層序　　南から



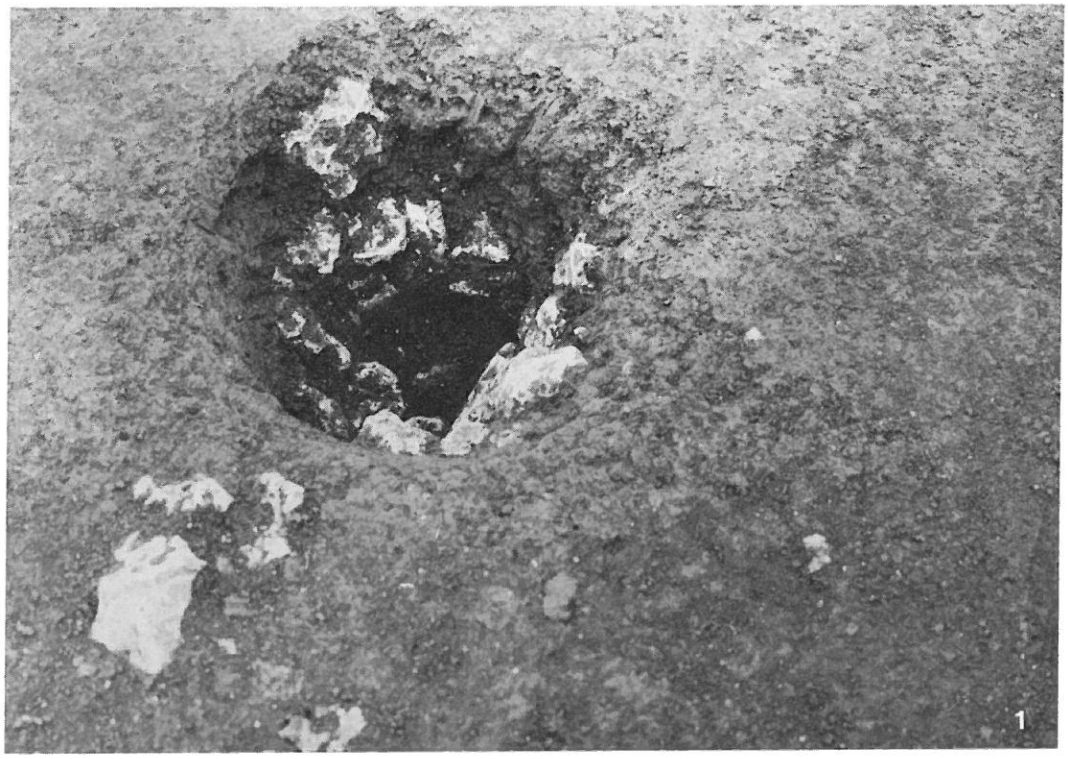


PL.17　1．第50号（上）と第58号竪穴住居跡の重複　南から
2．第58号竪穴住居跡（50号の下部遺構）　〃



PL.18　1．第57号竪穴住居跡（第３段丘）　南から
　　2．第60号竪穴住居跡（第１段丘）　北から

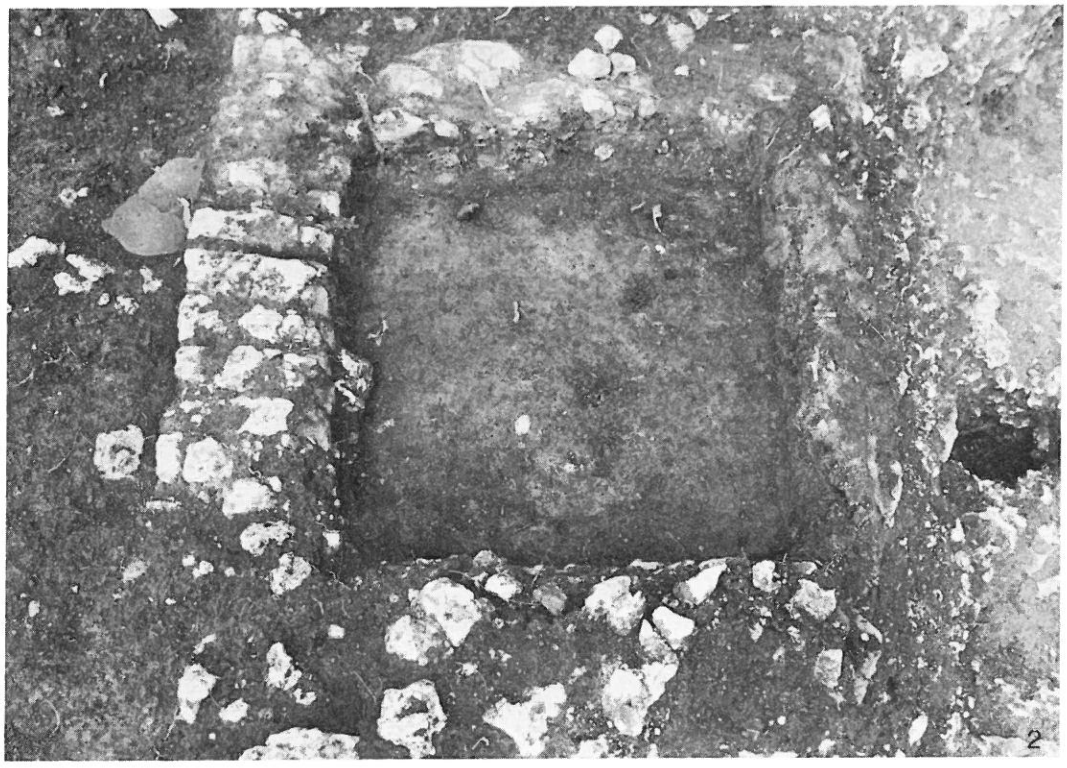
PL.19　1．第1号礫床住居跡と炉跡（礫床を2分の1発掘）　東から
2．第3号礫床住居跡（4分の3発掘した状況。竪穴は49号）　西から



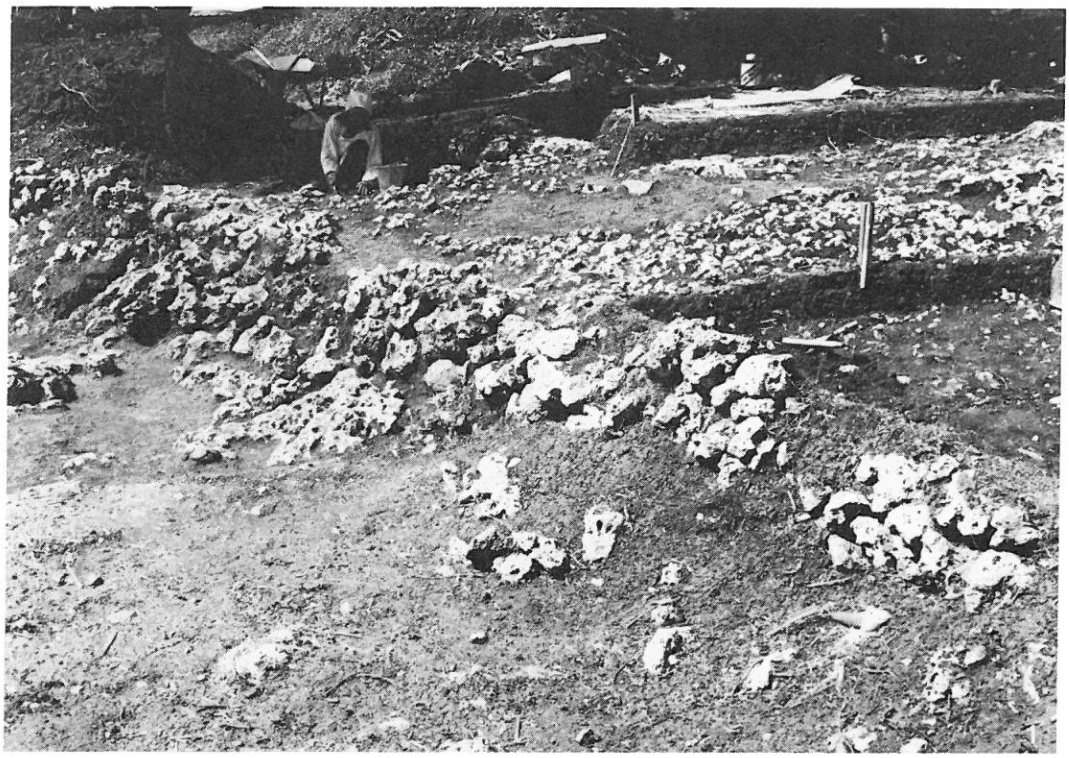
PL.20　1．第3号礫床住居跡の柱穴
2．　〃

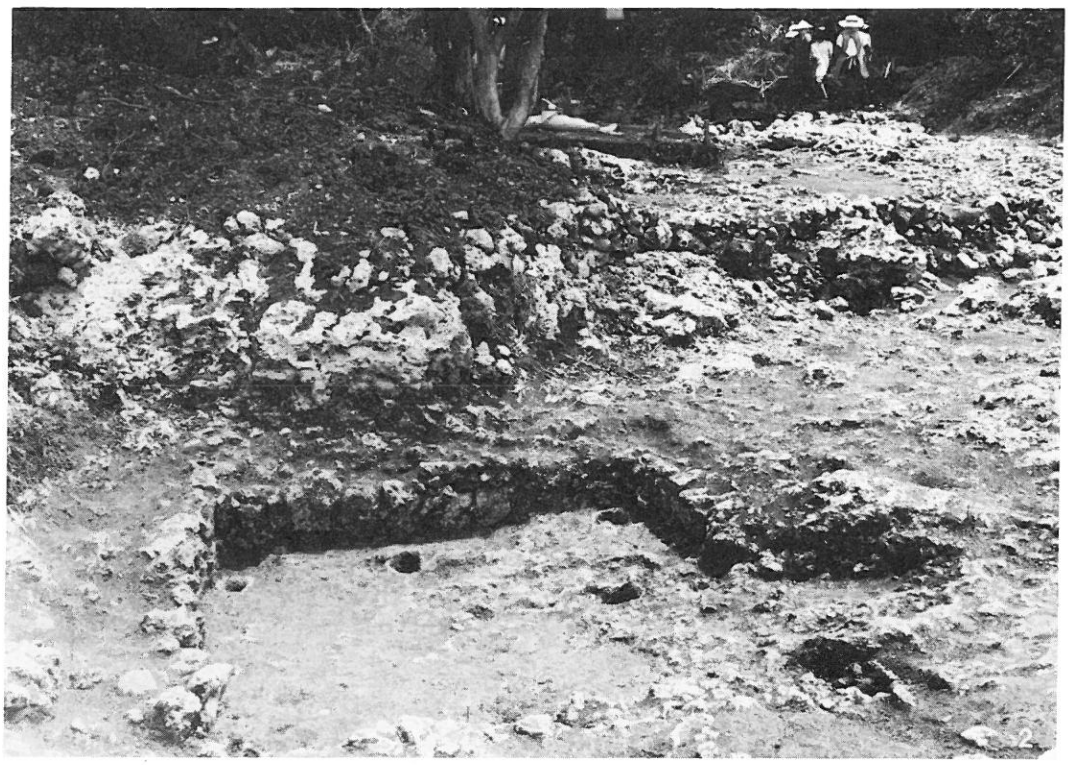
PL.21　1．第33・34号礫床住居跡　南から
2．第51・52号礫床住居跡（第３段丘）　〃

PL.22　1．第56号礫床住居跡（第２段丘）　南から
　　2．第56号礫床の柱穴　〃

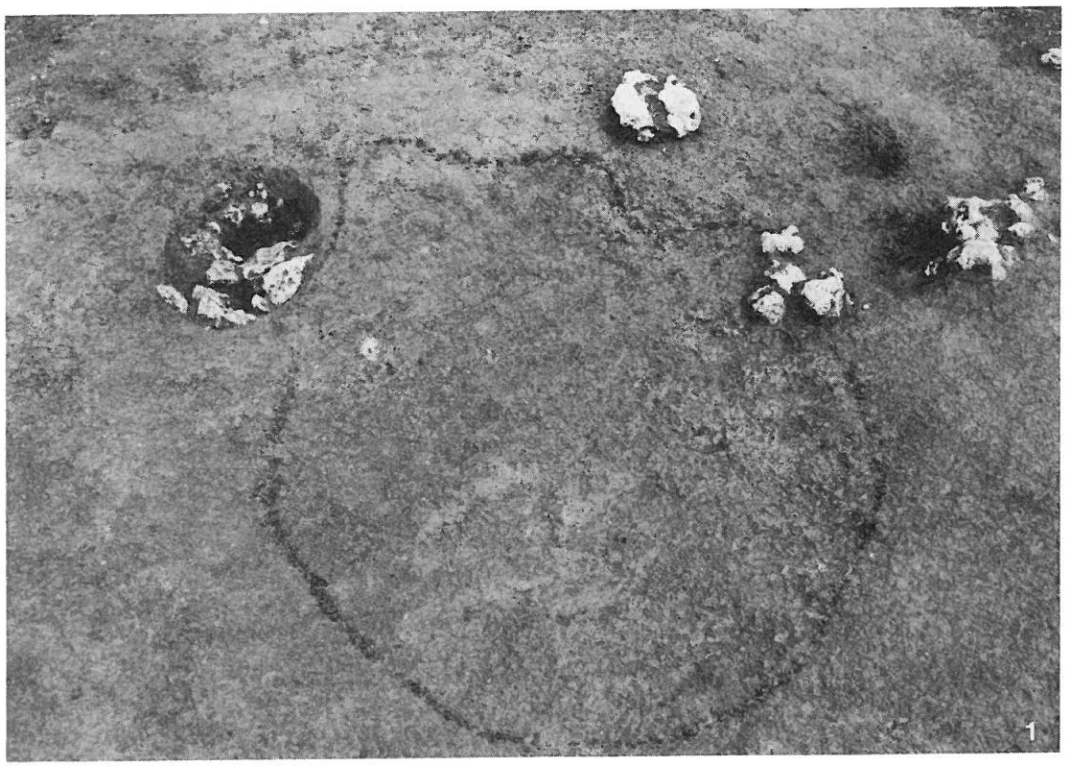


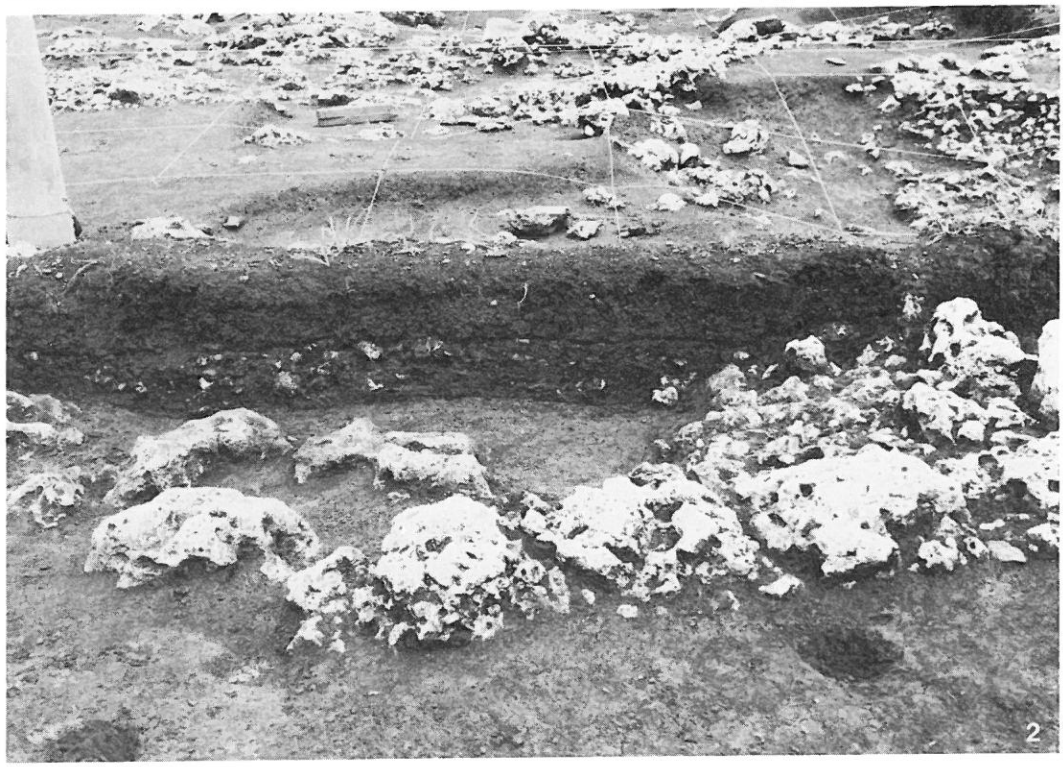
PL.23　1．第55号礫床住居跡（第１段丘）　西から
　　2．第55号礫床住居跡の炉跡　南から



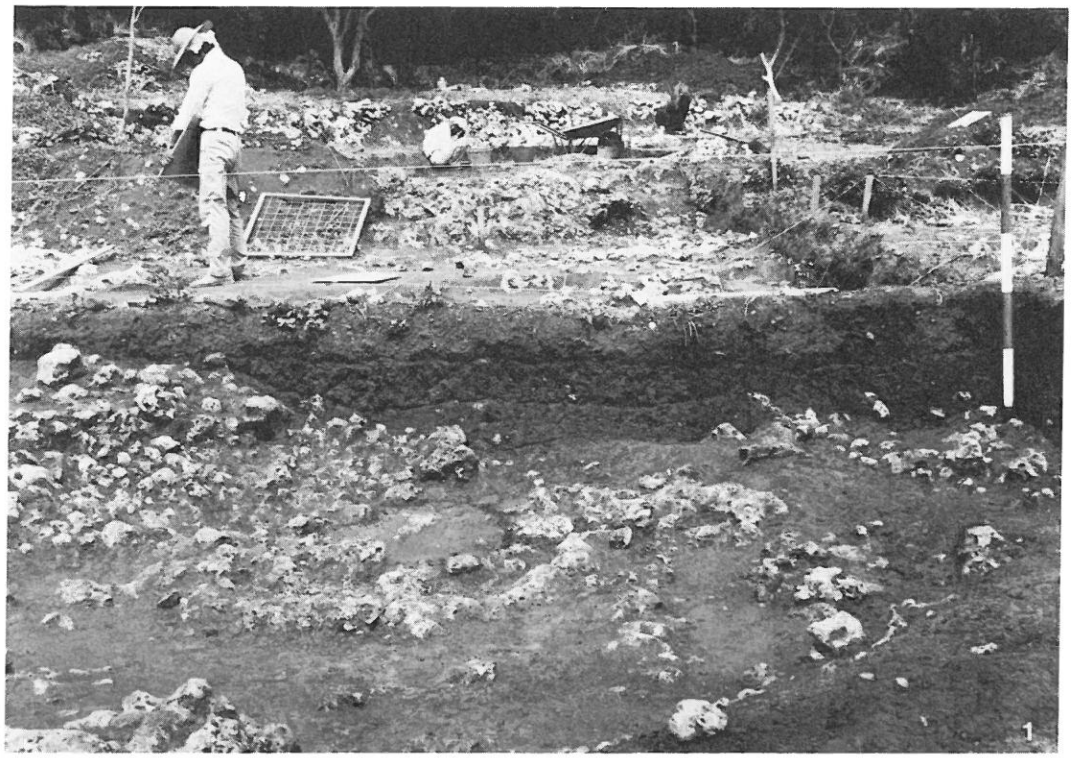


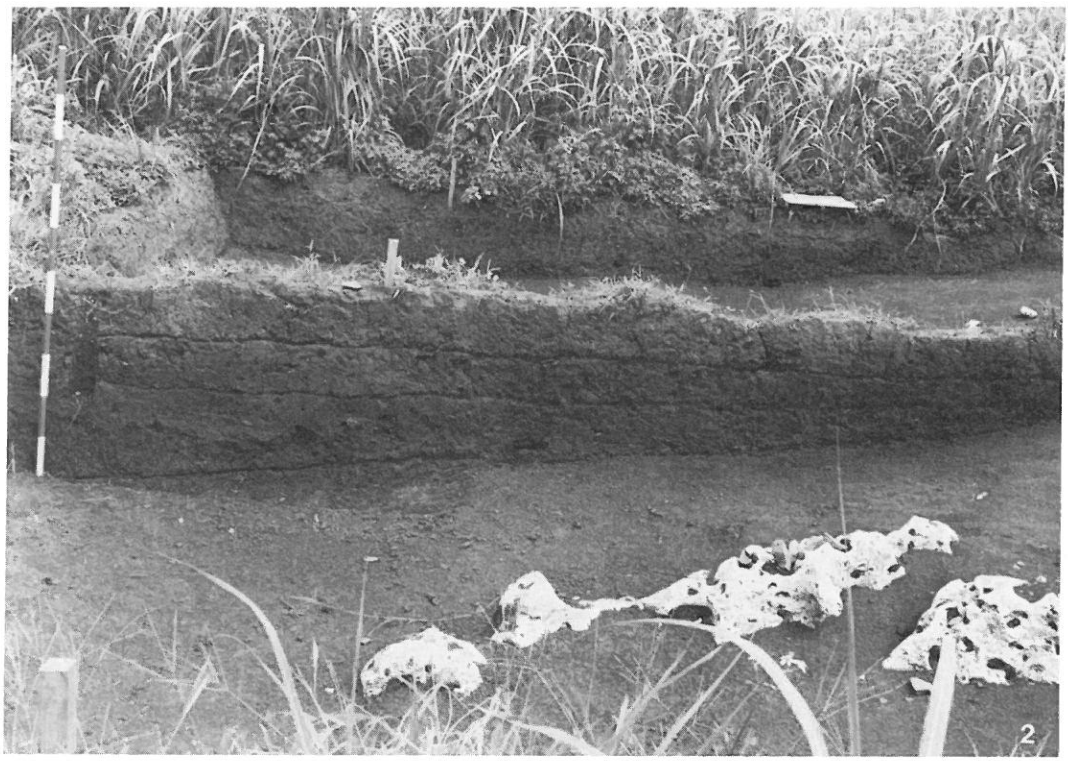
PL.24　1．第２・３段丘の間にある土留め石積み　南西から
2．　〃　〃　北西から
（竪穴は57号）



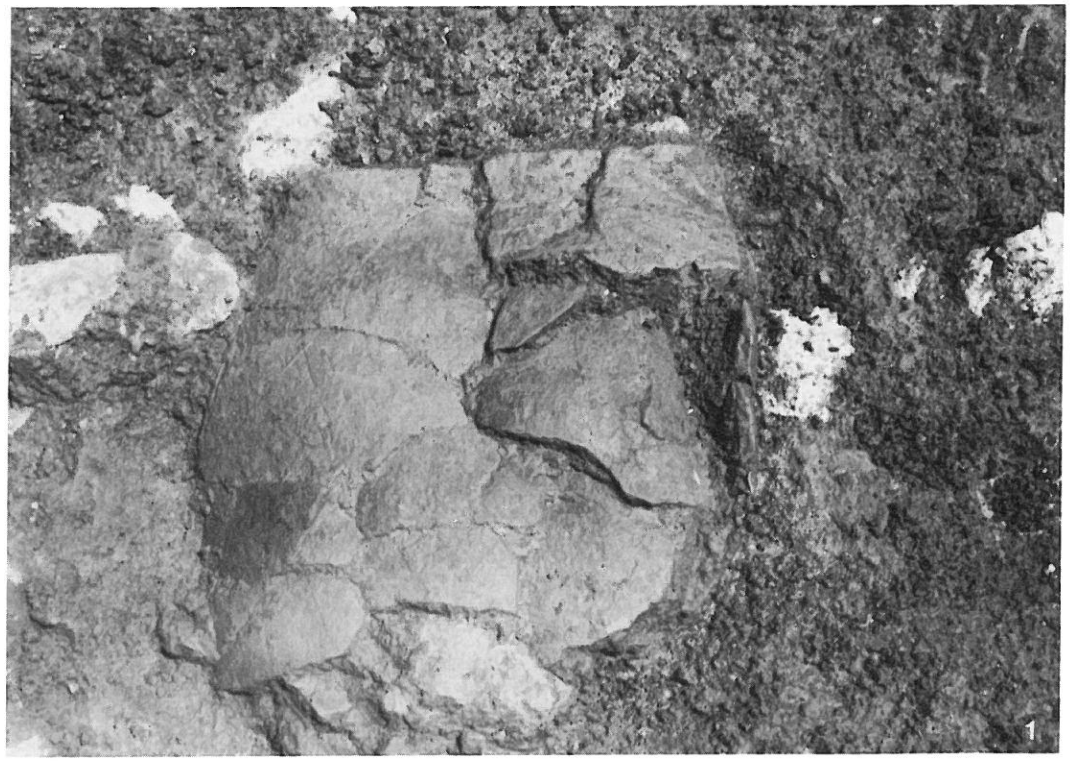


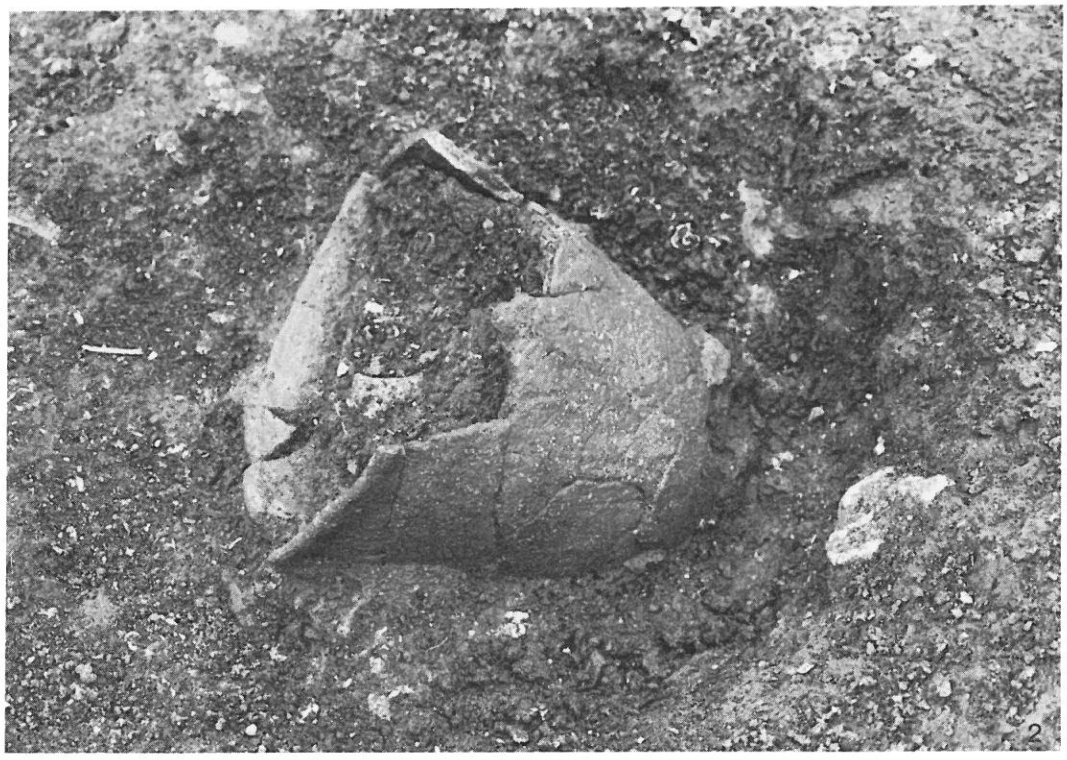
PL.25　1．第２号屋外炉跡　　西から
　　2．第22号竪穴内の層序　　南から





PL.26　1．第12・11号竪穴の層序　北から
2．P10北壁の層序（第5段丘）　南から



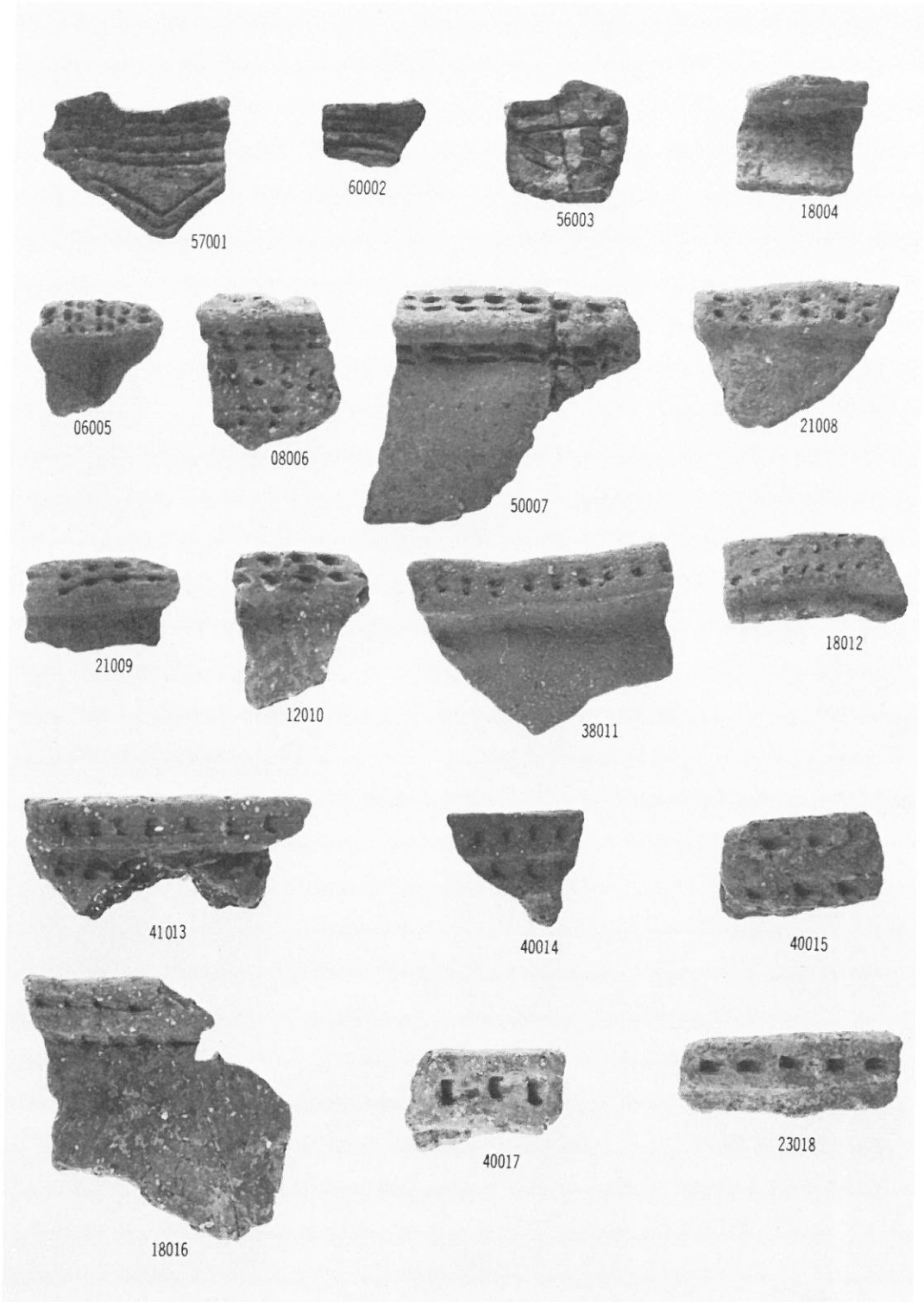


PL.27　1．第18号竪穴で検出された土器
2．第49号竪穴で検出された土器

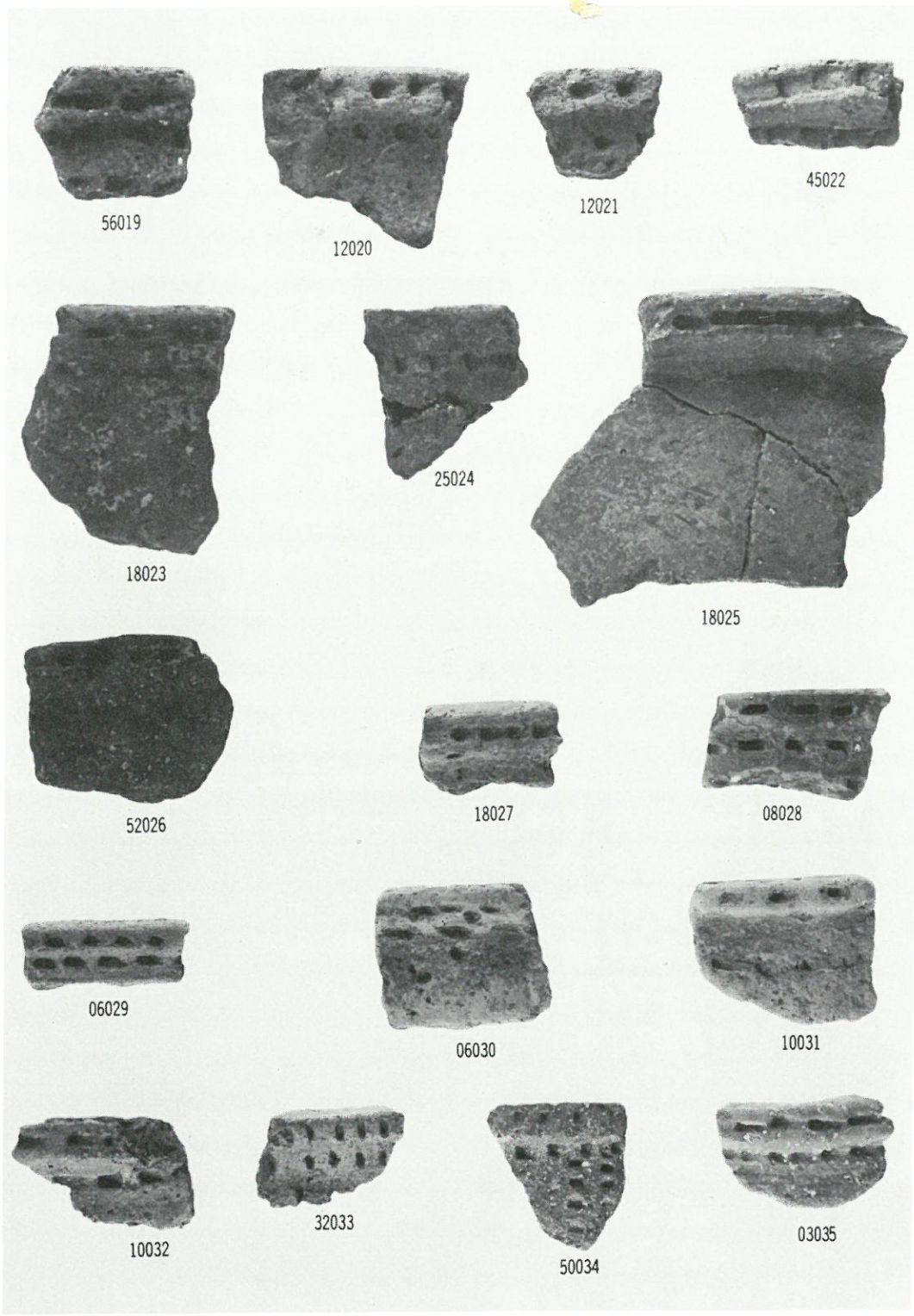
PL.28

1．第34号礫床で検出された土器
2．第40号竪穴で検出されたチャート製石鏃

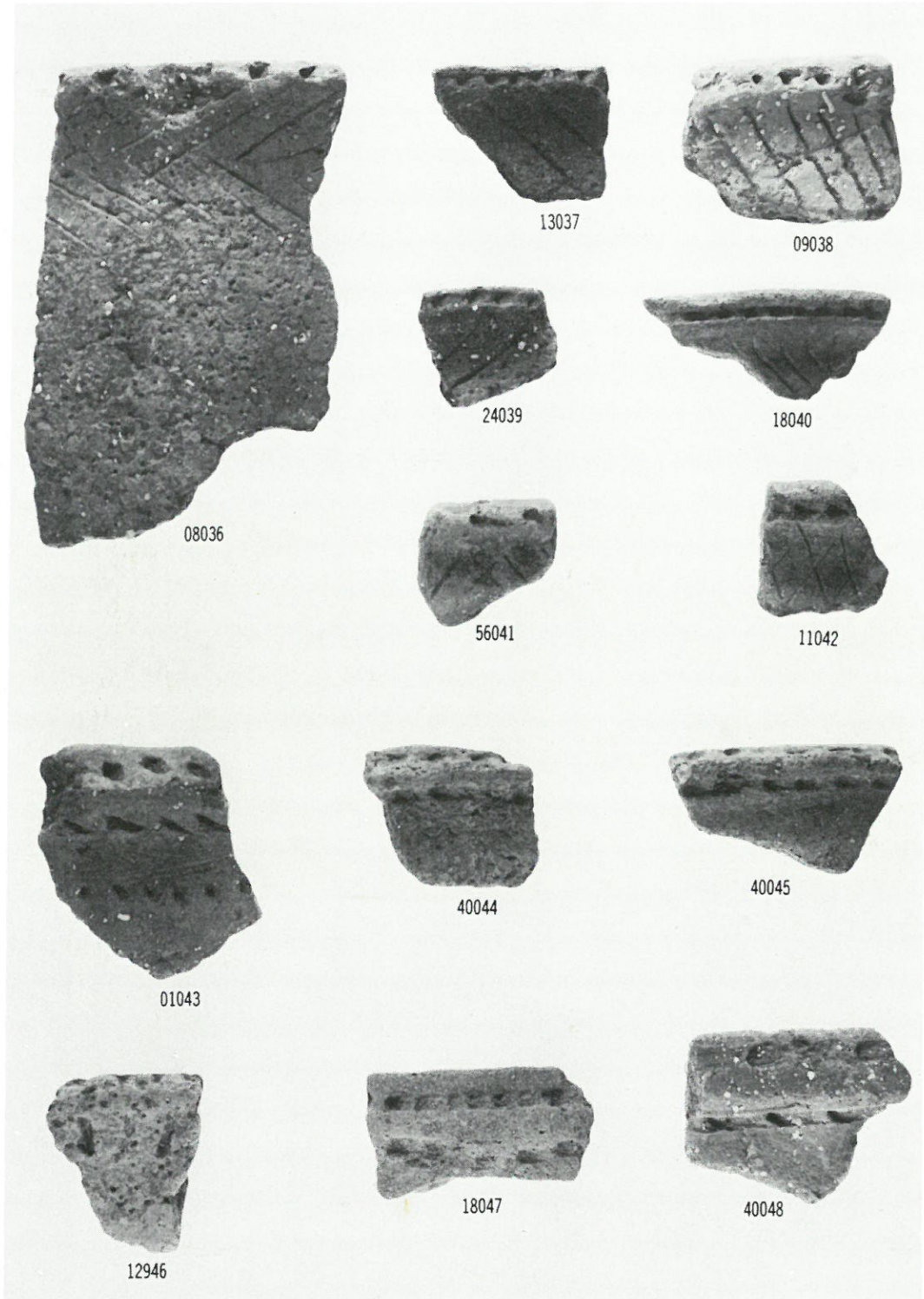
PL.29　1．第34号礫床で検出されたホラガイ製品
2．第32号竪穴の炉跡で検出されたスイジガイ製利器



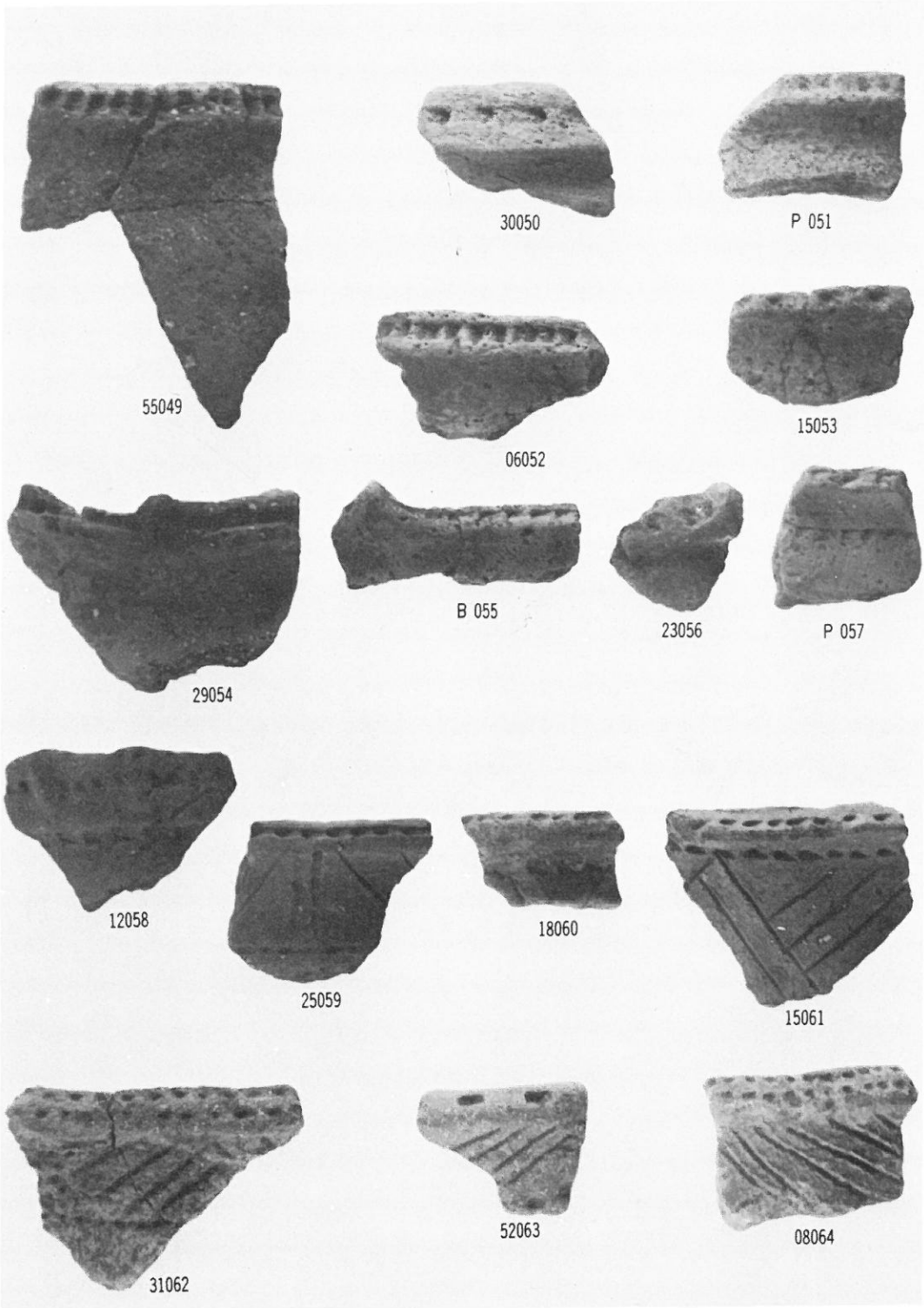
PL.30 (Fig.41)　　土器



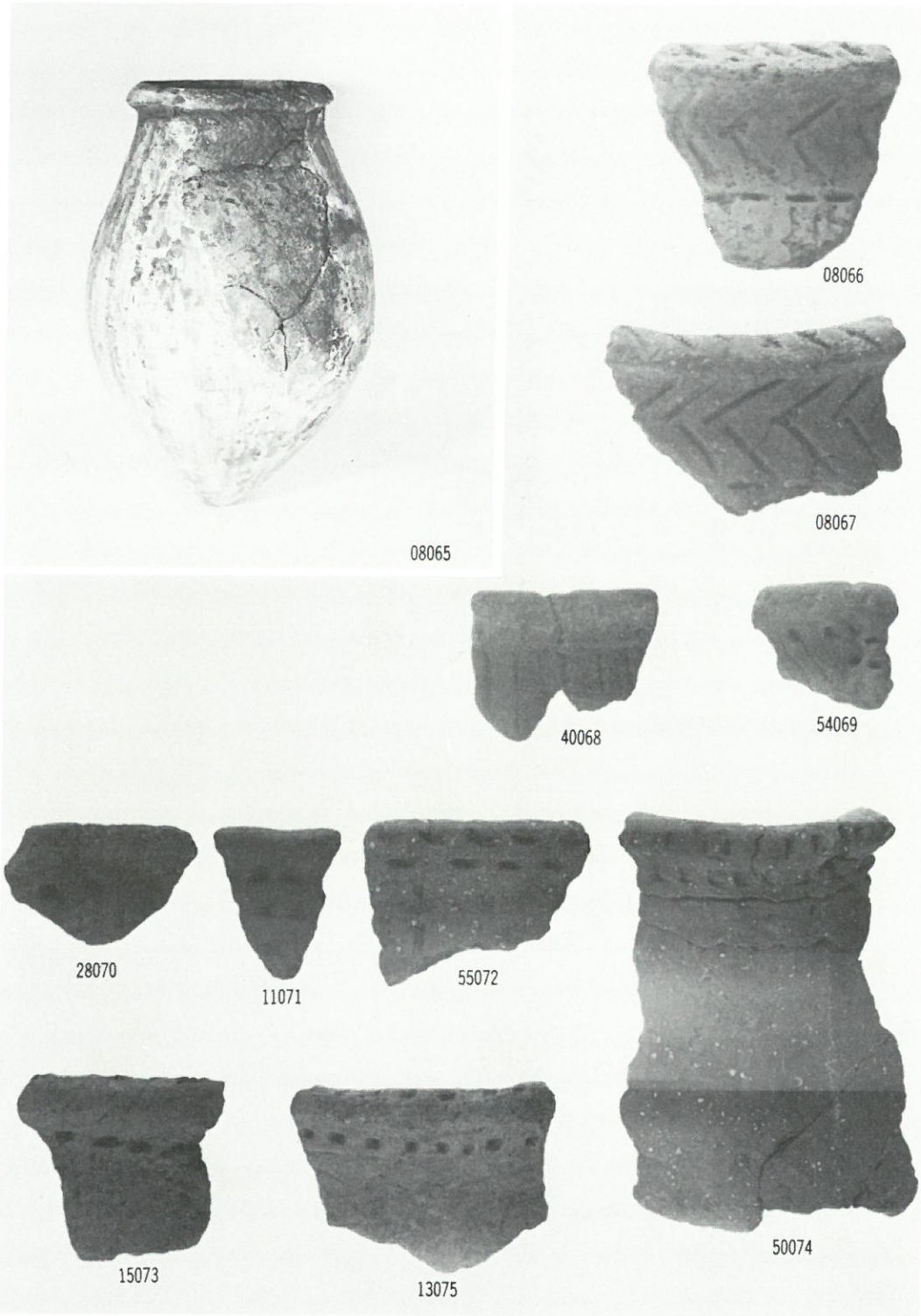
PL.31 (Fig.42)　　土器



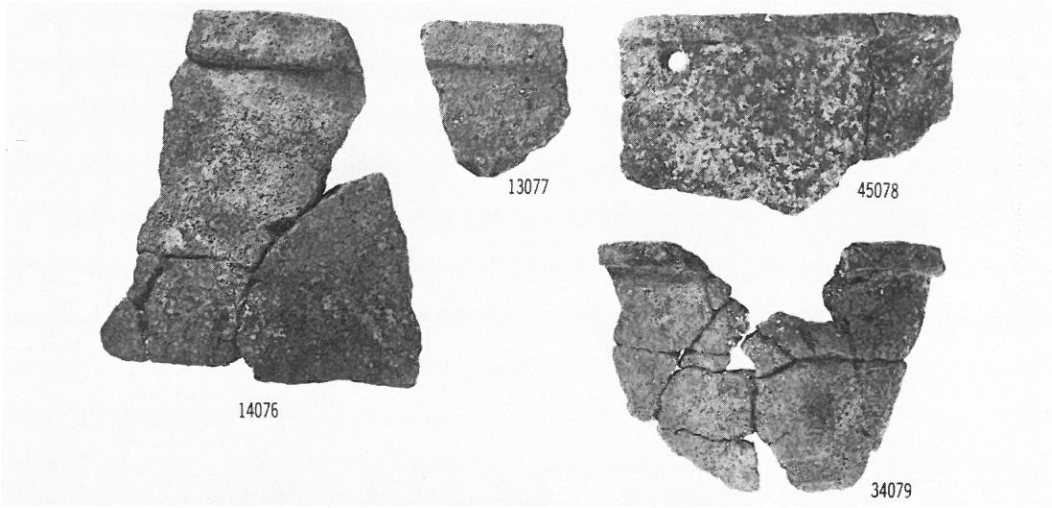
PL.32 (Fig.43)　　土器

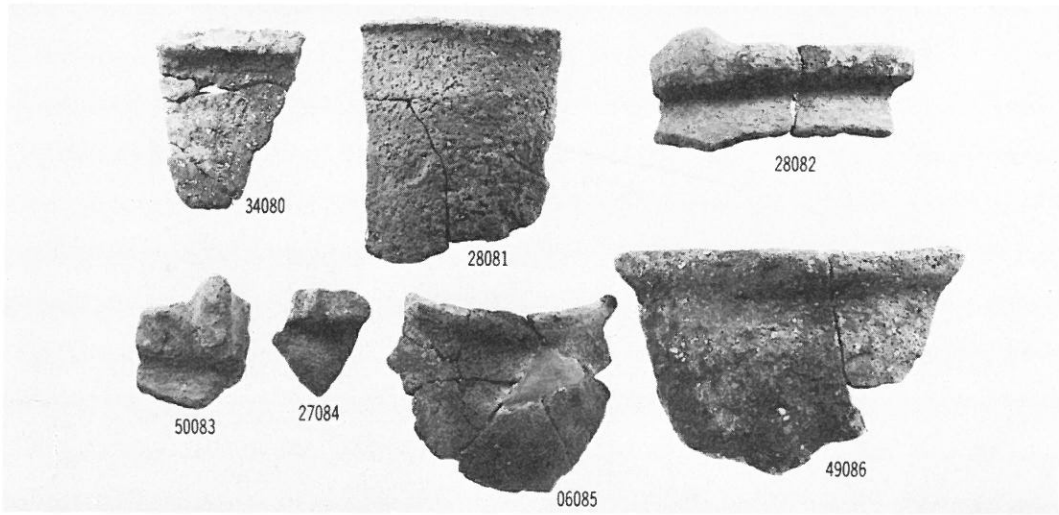


PL.33 (Fig.44)　　土器

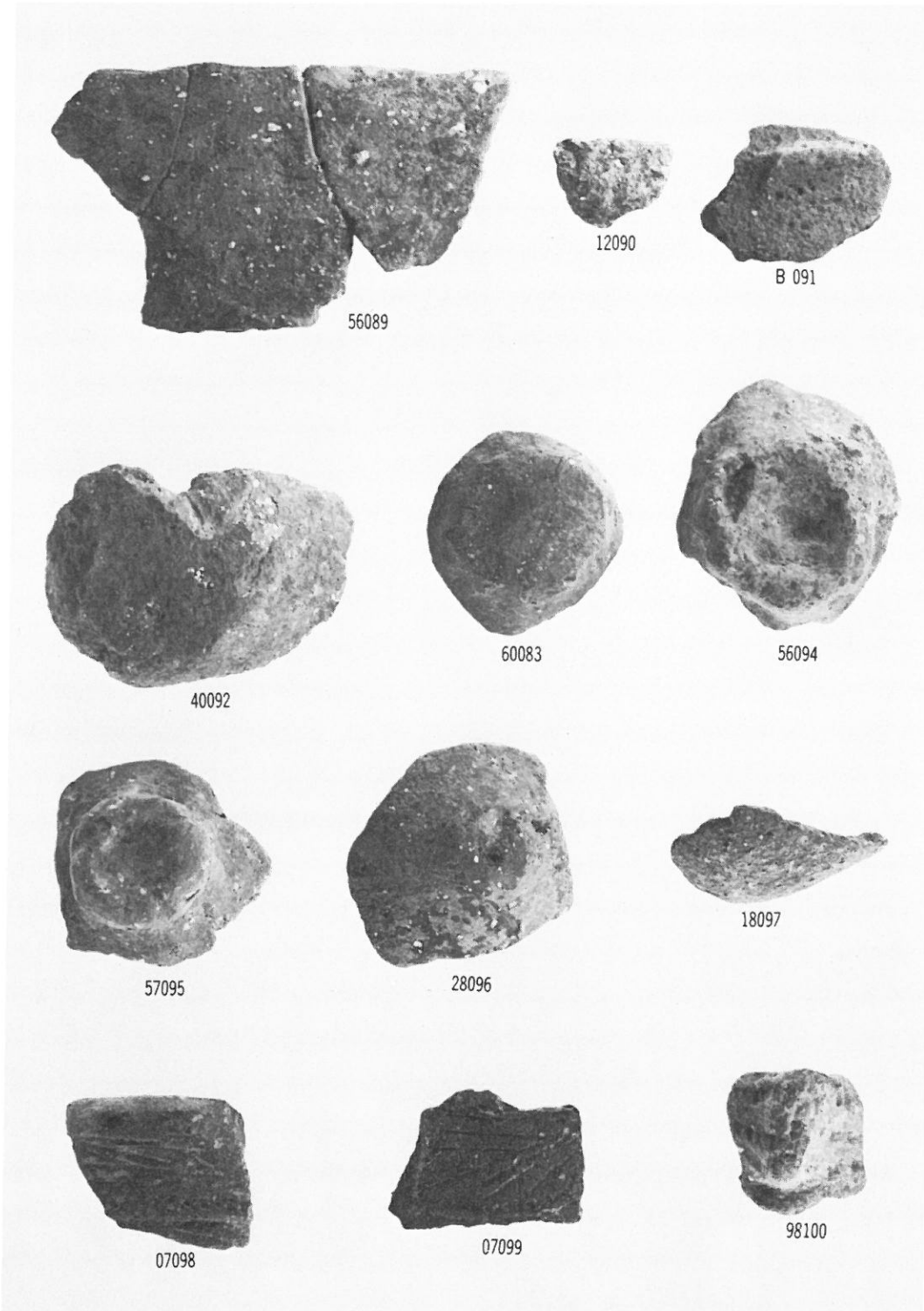


PL.34 (Fig.45)　　土器

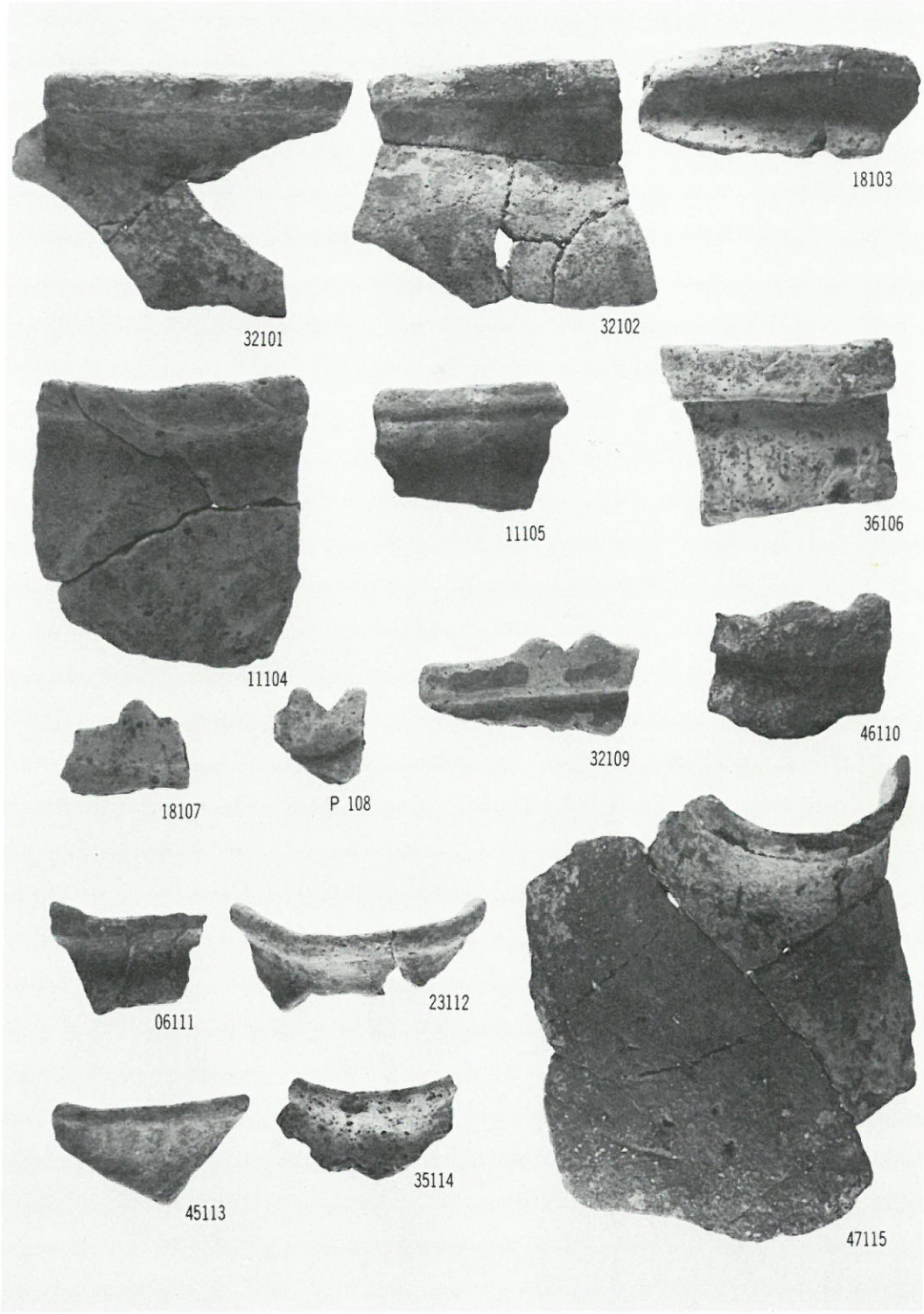




PL.35 (Fig.46)　　土器



PL.36 (Fig.47)　　土器

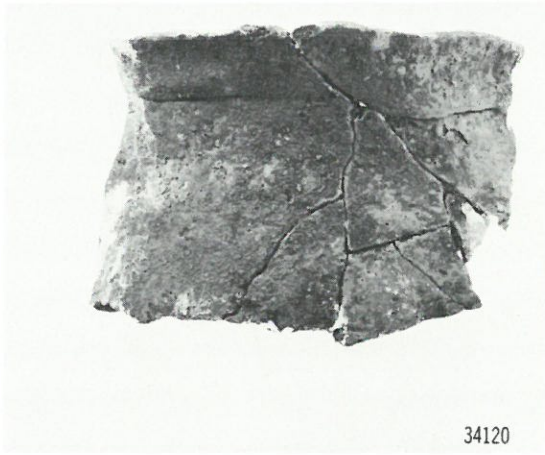


PL.37 (Fig.48)　　土器

15116

34119

50117



34120

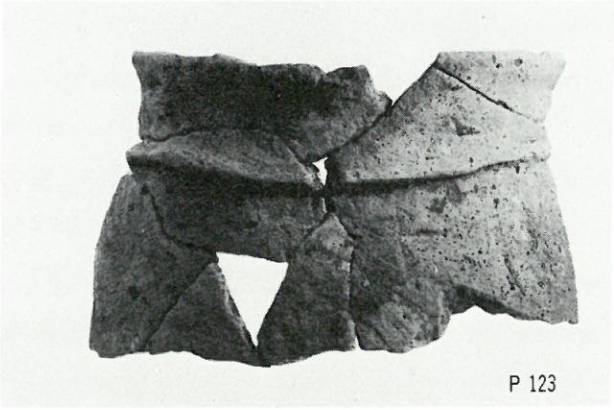
18118

34121

PL.38 (Fig.49)　　土器

34122

34124

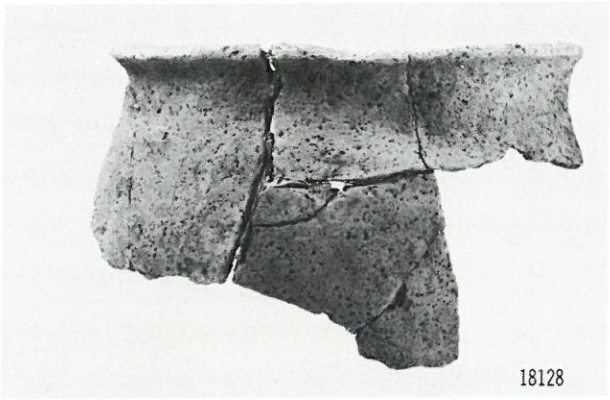

P 123

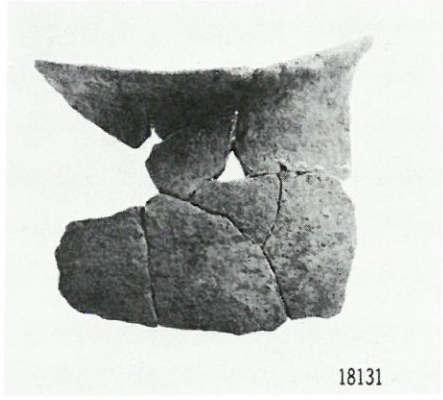
56125

18126

18127

PL.39 (Fig.50)　　土器

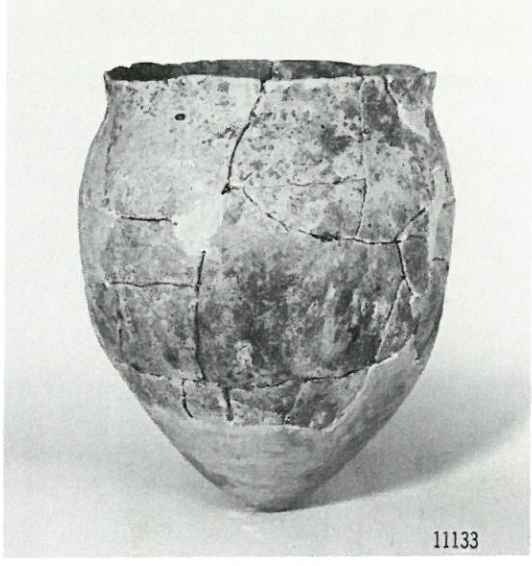

18128


18131

18129

15132

18130


11133

PL.40 (Fig.51)　　土器

12134

34135

34136

34137

34138

34139

PL.41 (Fig.52)　　土器

34140

34141

34142

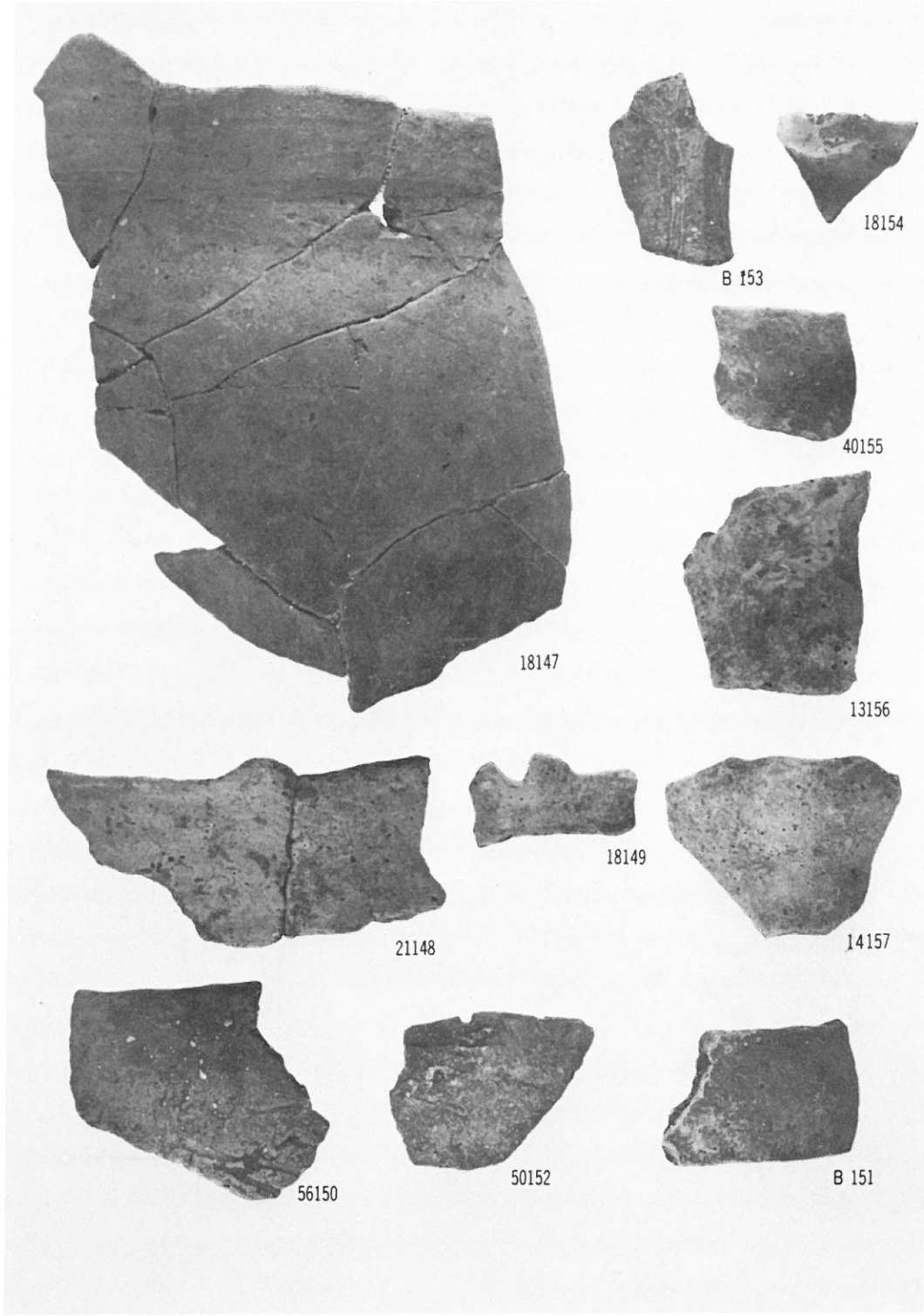
34143

34144

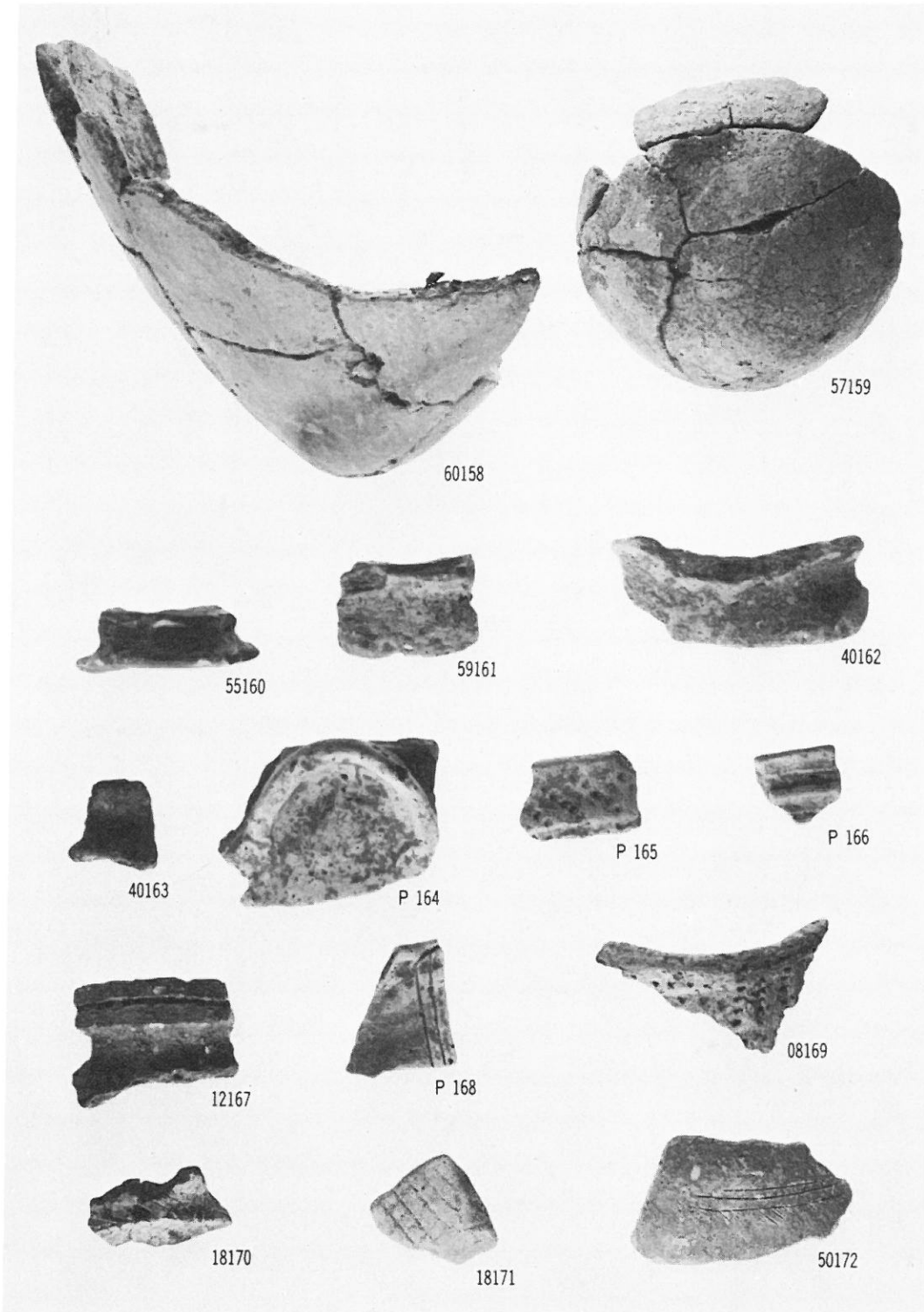
34145

34146

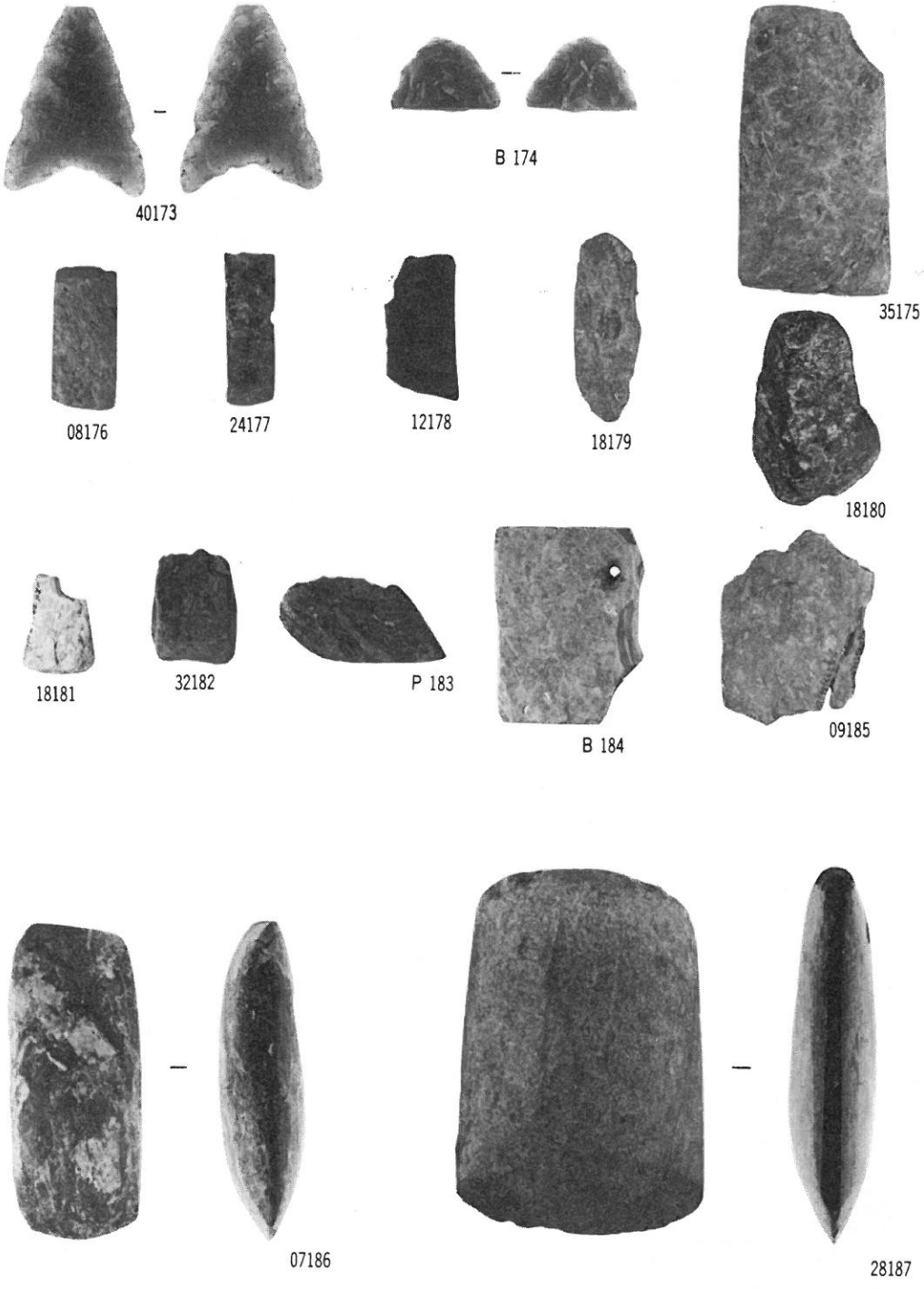
PL.42 (Fig.53)　　土器



PL.43 (Fig.54)　　土器



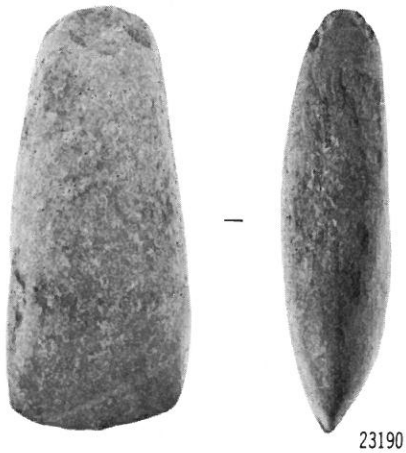
PL.44 (Fig.55)　　土器



PL.45 (Fig.56)　　石器

52188

08189



23190

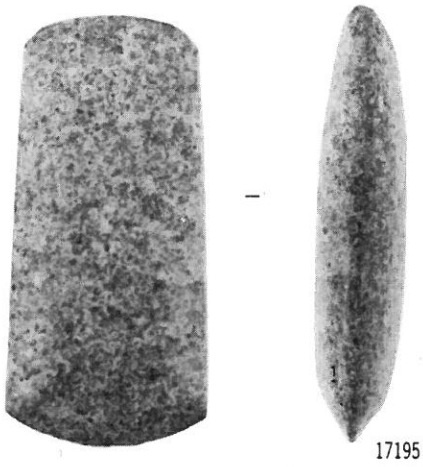
24191

53192

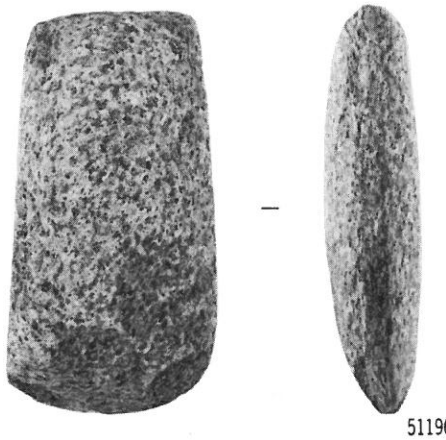
45193

PL.46 (Fig.57)　石器

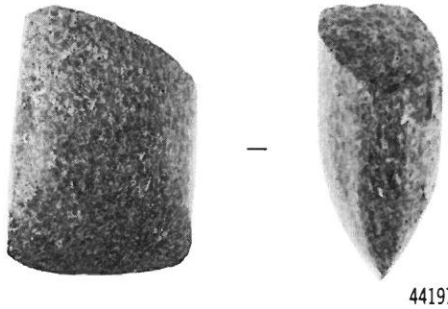
57194



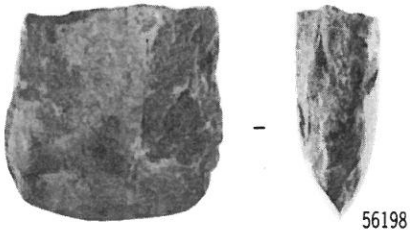
17195



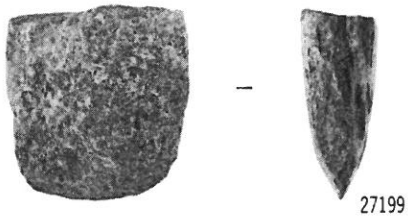
51196



44197

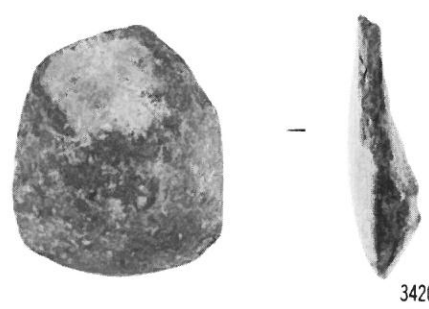


56198

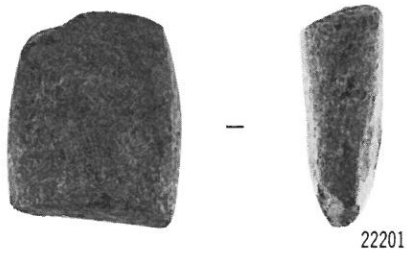


27199

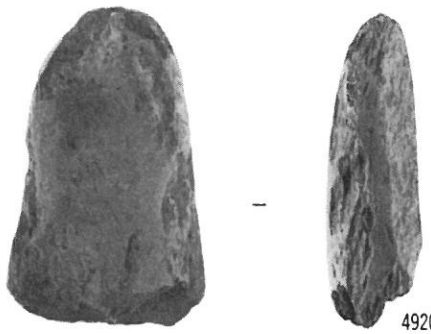
PL.47 (Fig.58)　石器



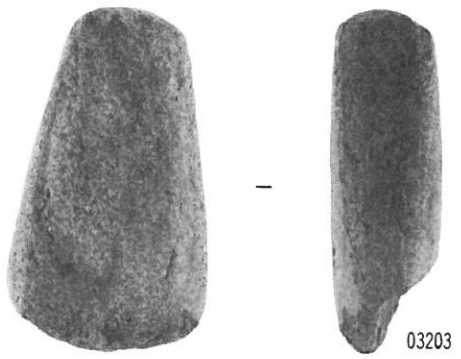
34200



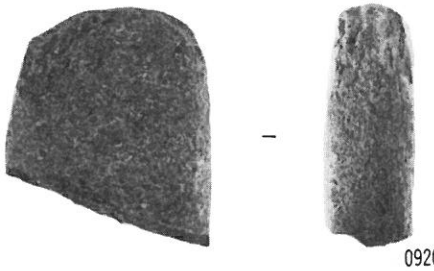
22201



49202



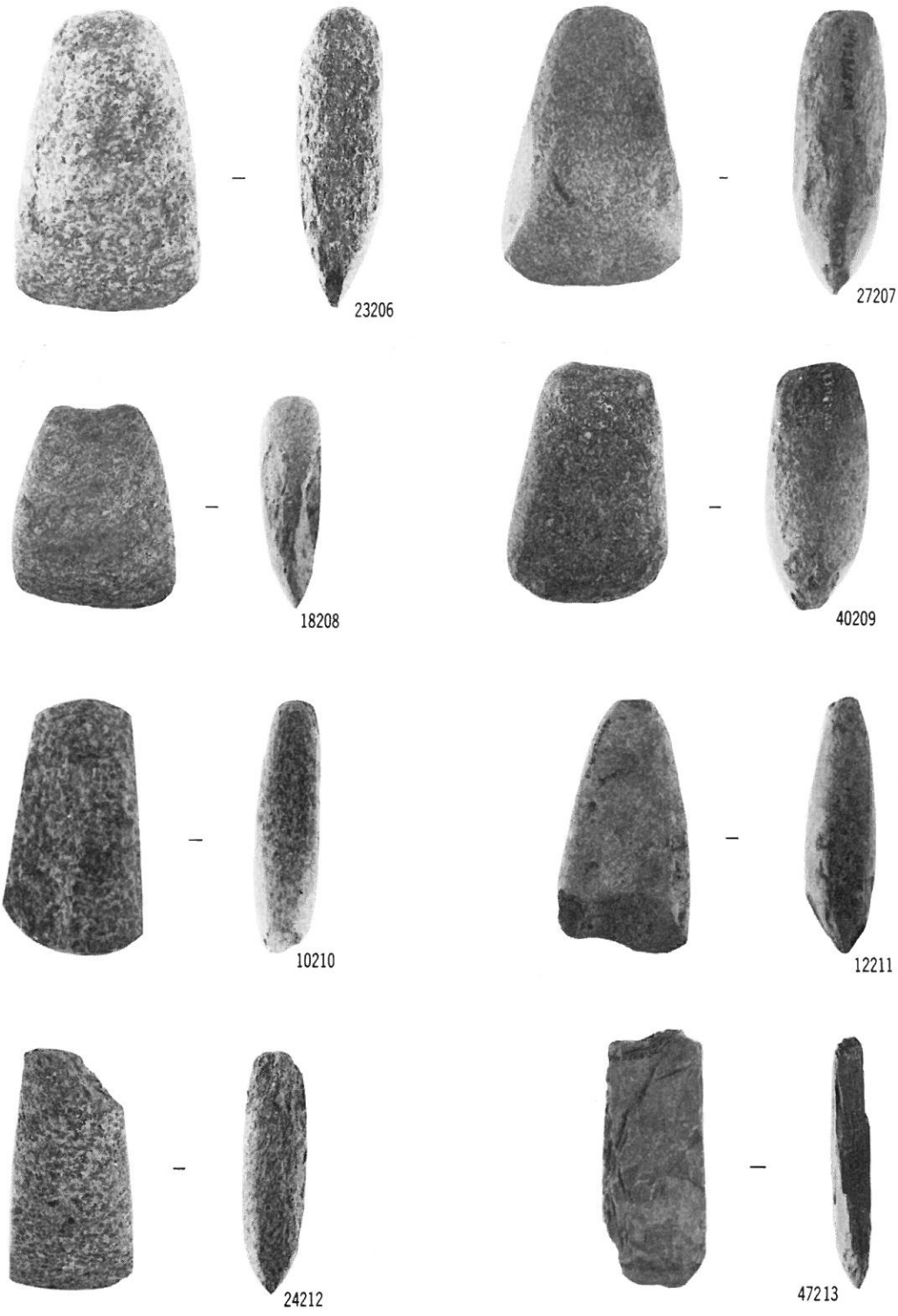
03203



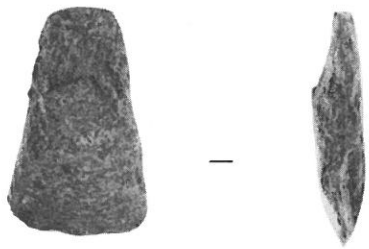
09204

40205

PL.48 (Fig.59)　　石器



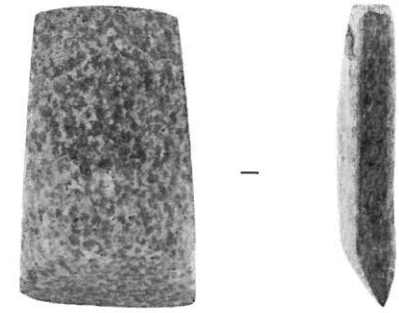
PL.49 (Fig.60)　　石器



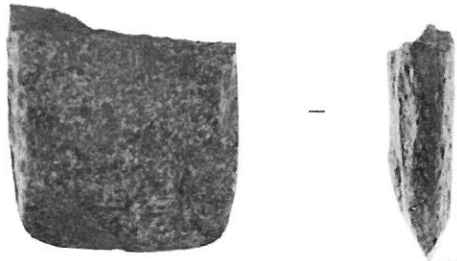
18214

56215

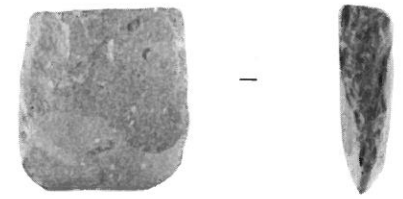
22216



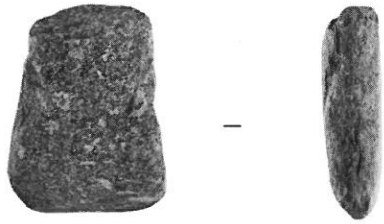
23217



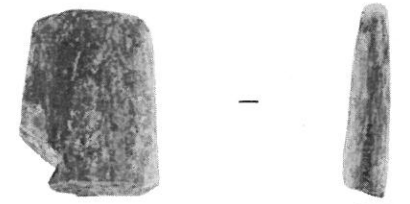
40218



51219

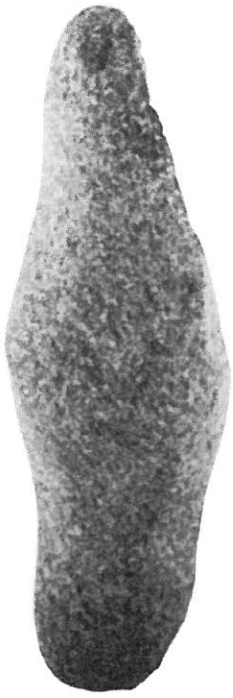


35220



32221

PL.50 (Fig.61)　　石器



41222

08223

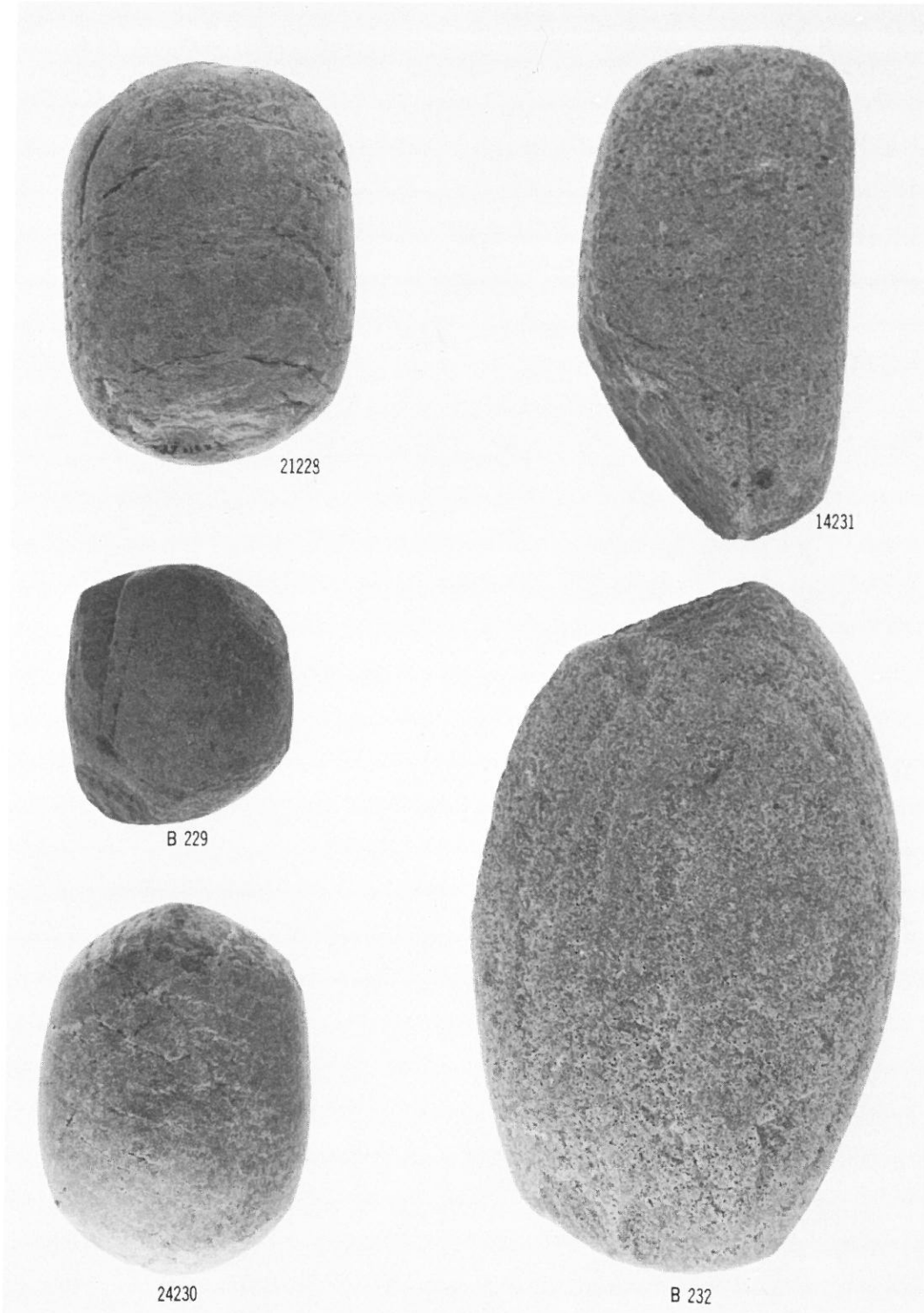
09224

18225

57226

21227

PL.51 (Fig.62)　　石器



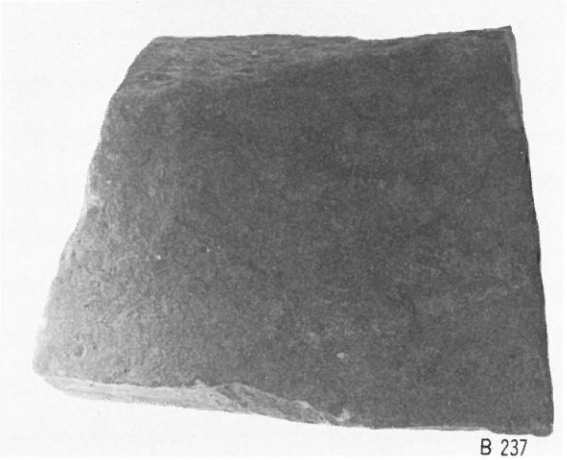
PL.52（Fig.63）　石器

B 233

B 234

48235

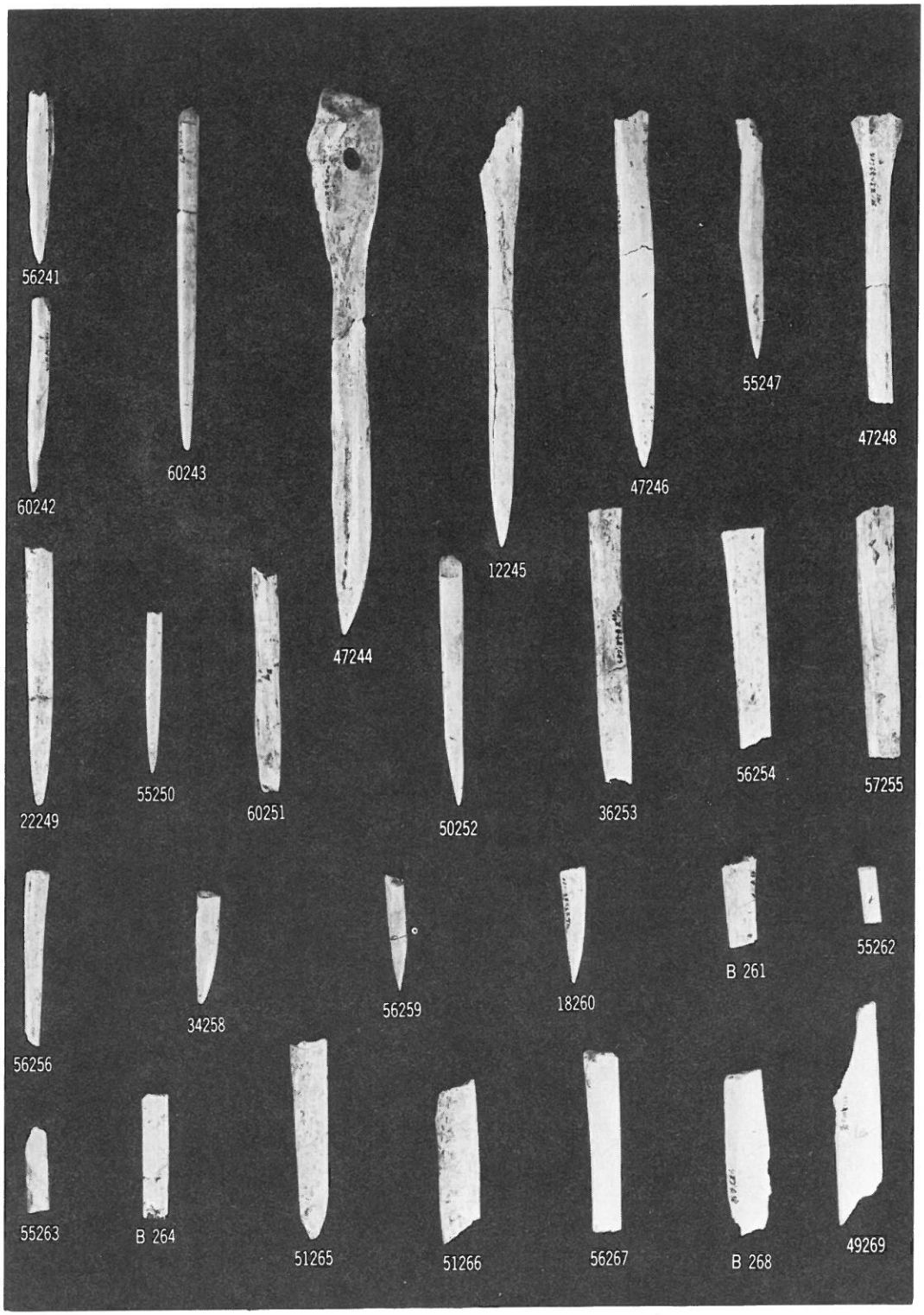
09236


B 237

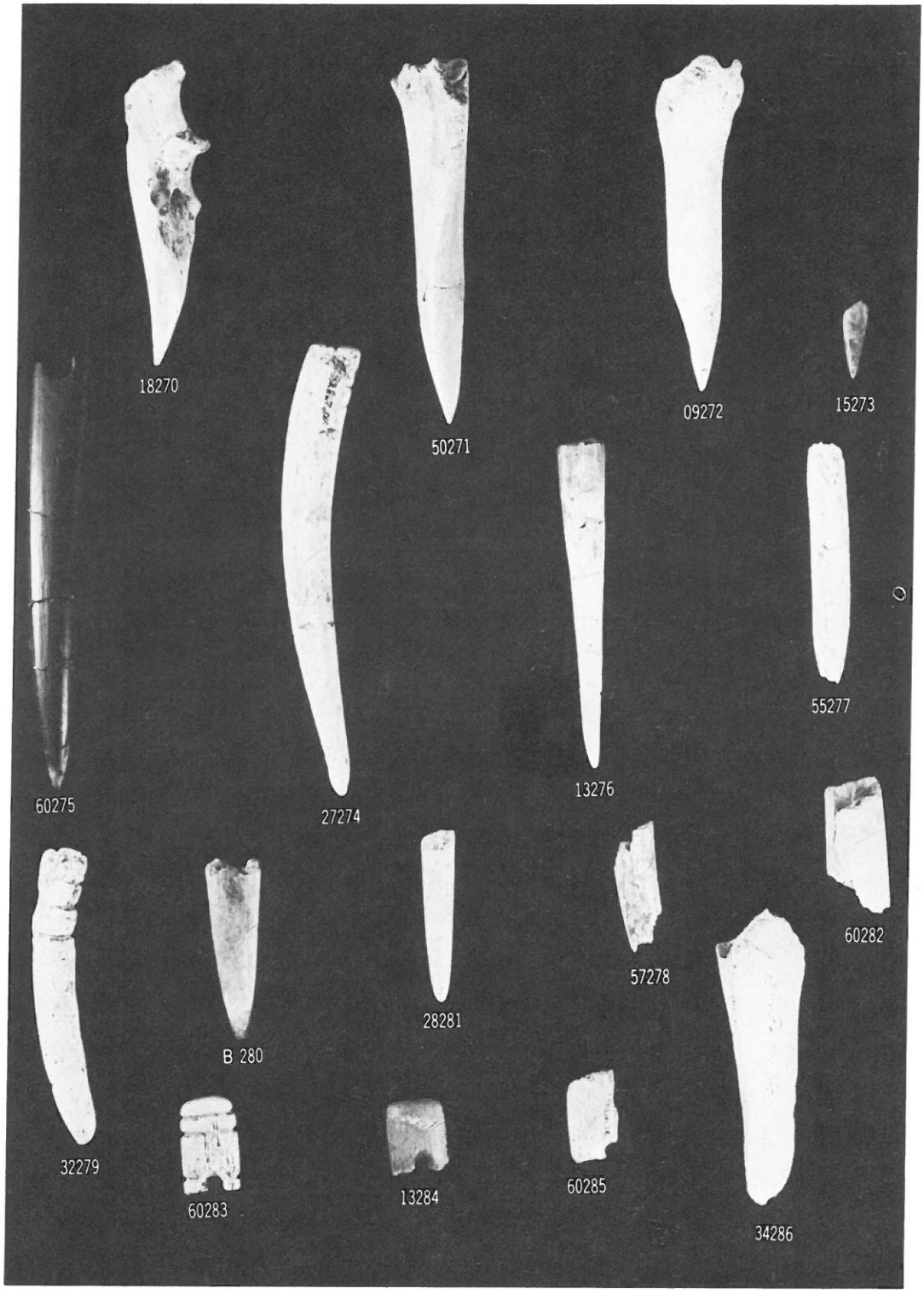
B 238

PL.53 (Fig.64)　　石器

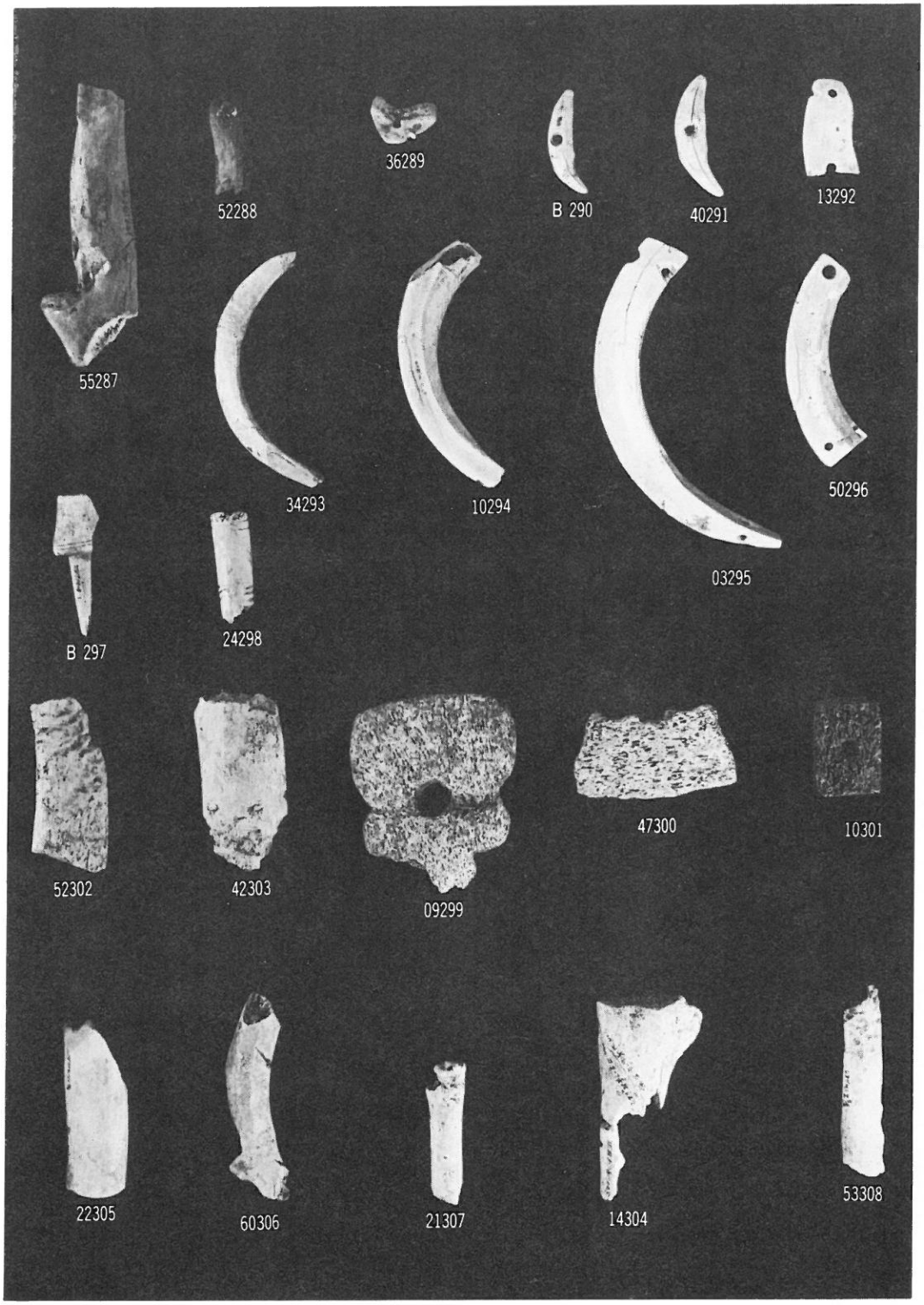
PL.54 (Fig.65)　　石器



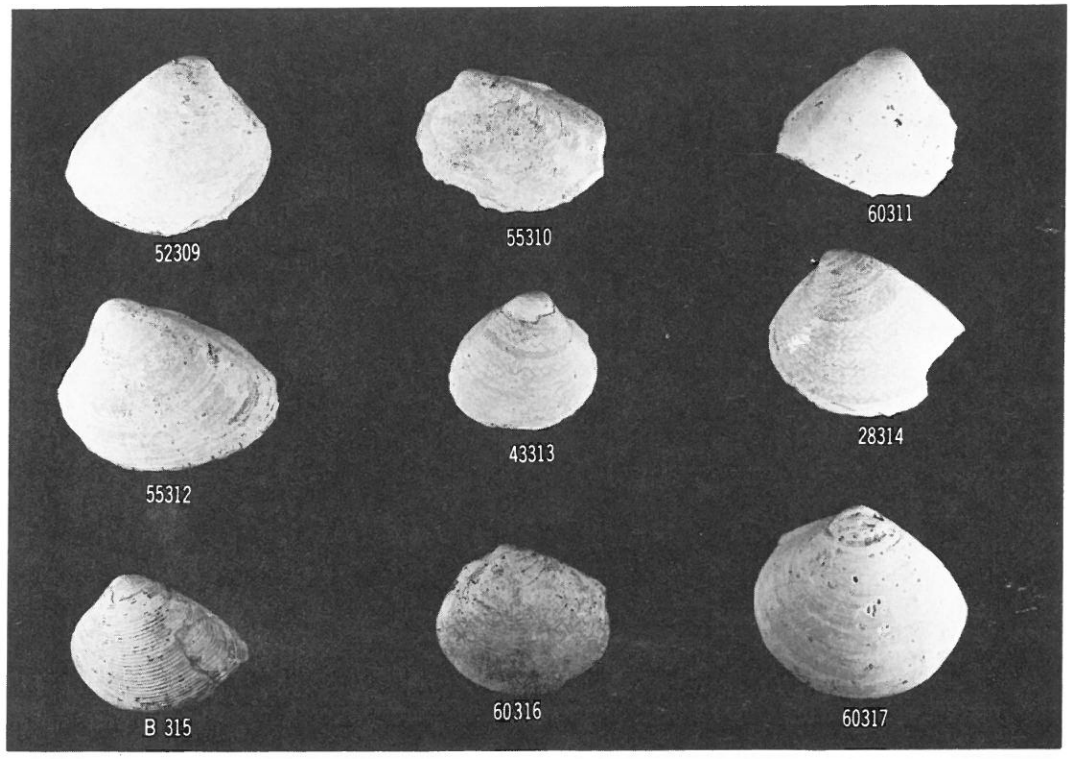
PL.55 (Fig.69)　　骨製品（骨針）

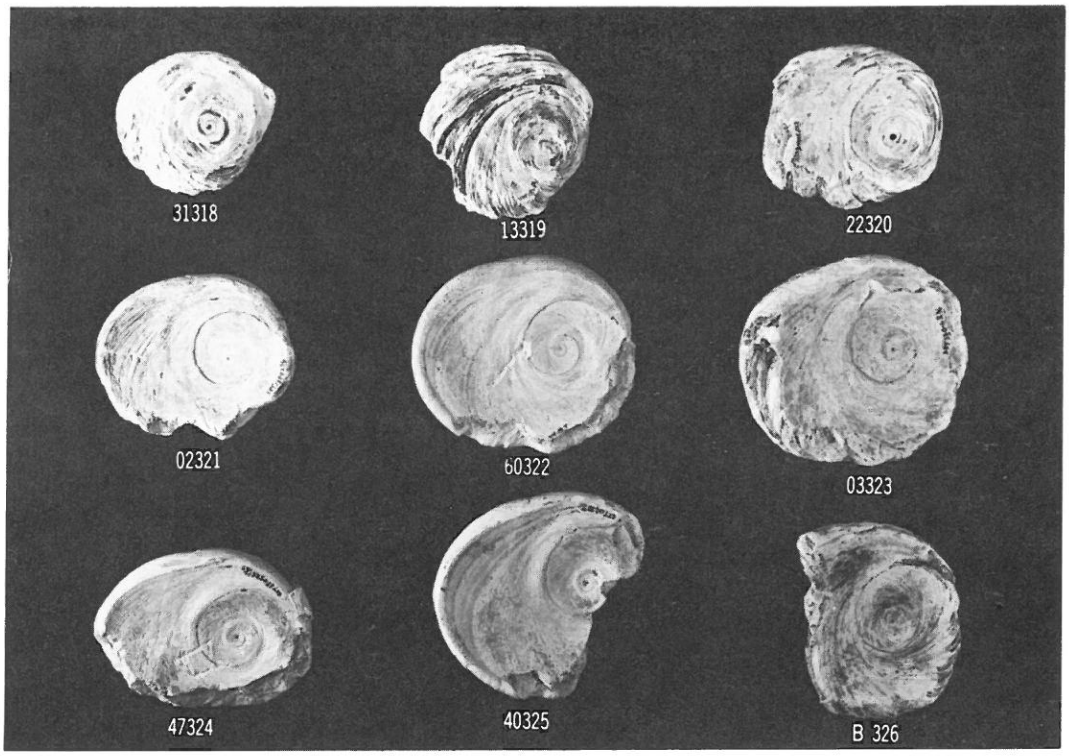


PL.56 (Fig.70)　　骨製品（骨錐－イノシシ、ジュゴン）

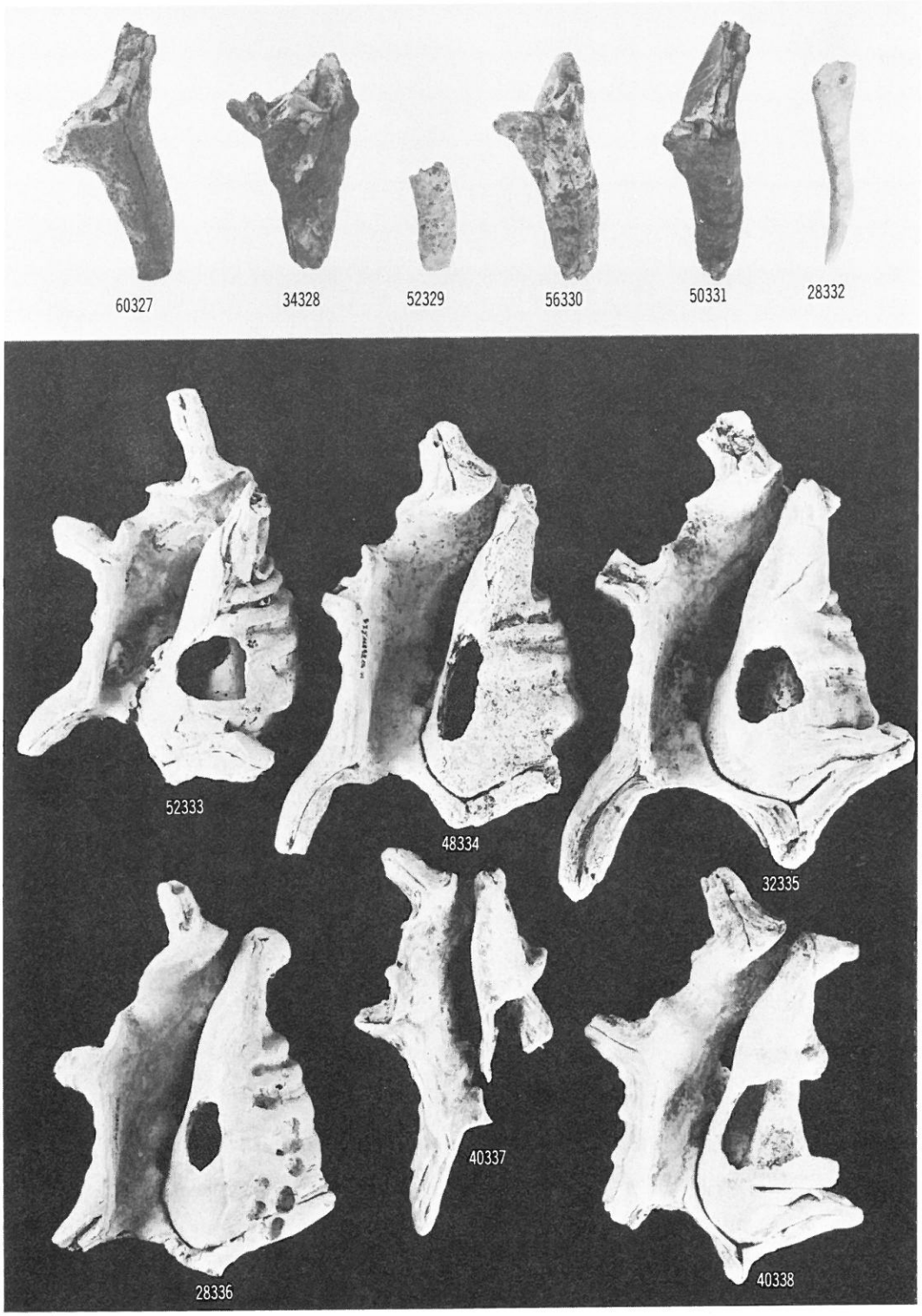


PL.57 (Fig.71)　　骨製品（装飾品、他）

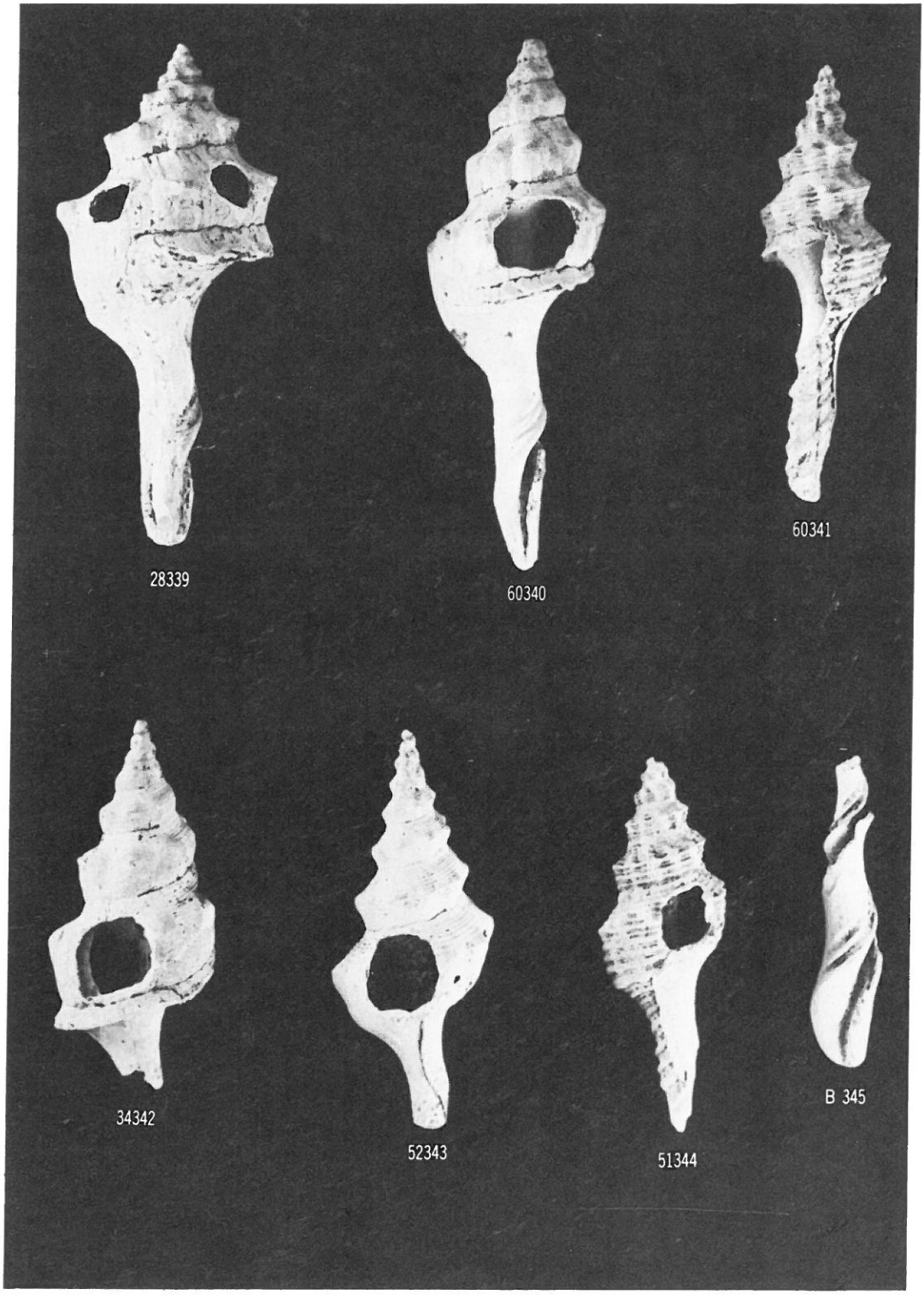




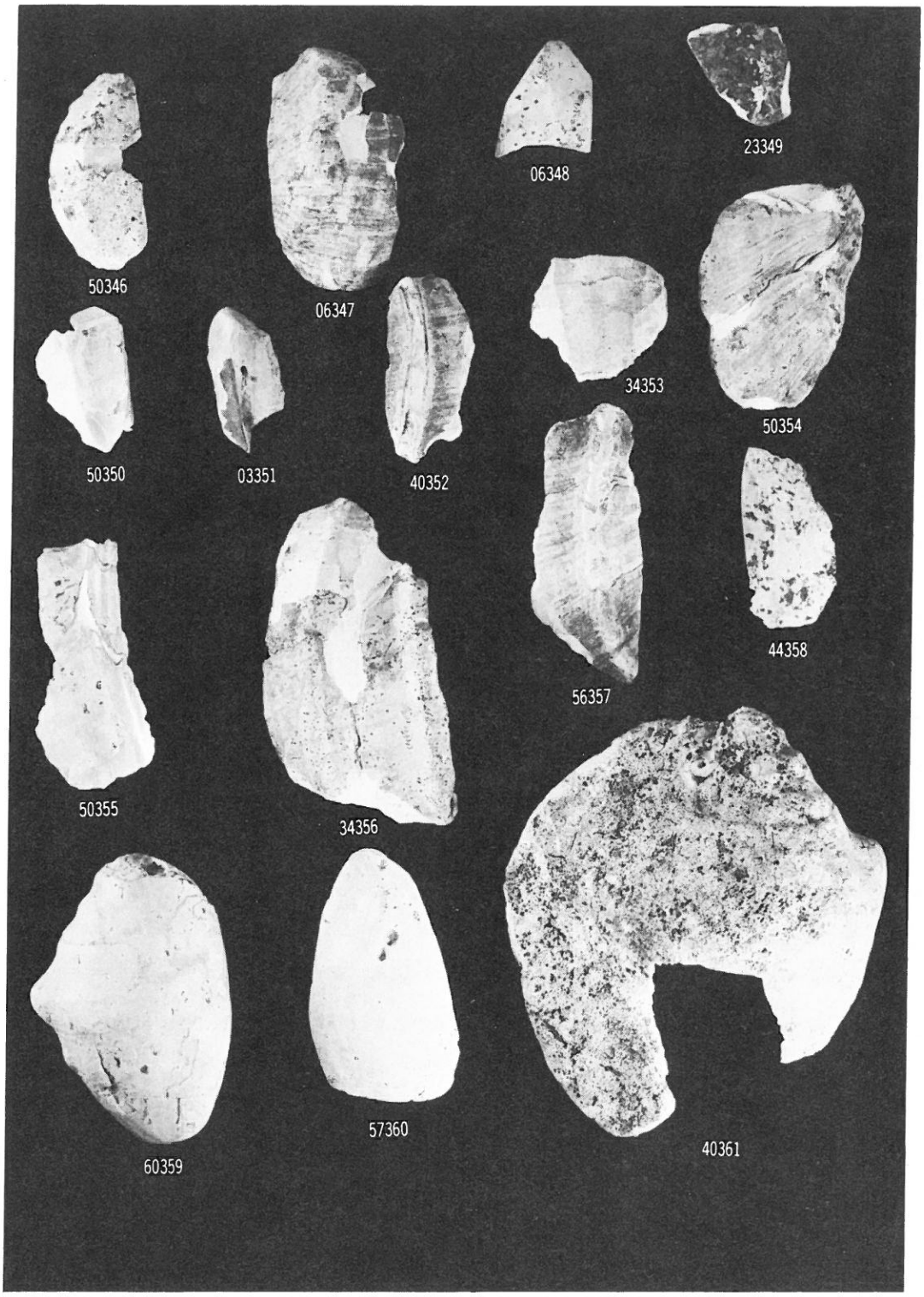
PL.58 (Fig.72)　　貝製品（上－貝刃、下－螺蓋製貝斧）



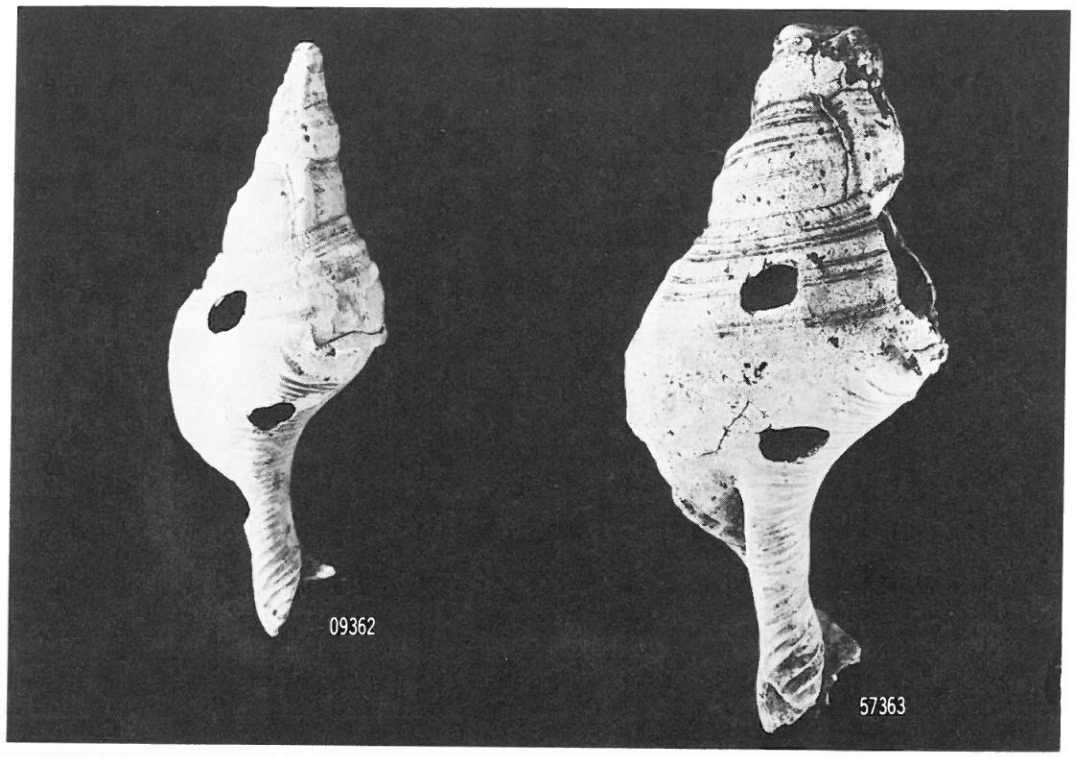
PL.59 (Fig.73)　　貝製品（スイジガイ製利器）

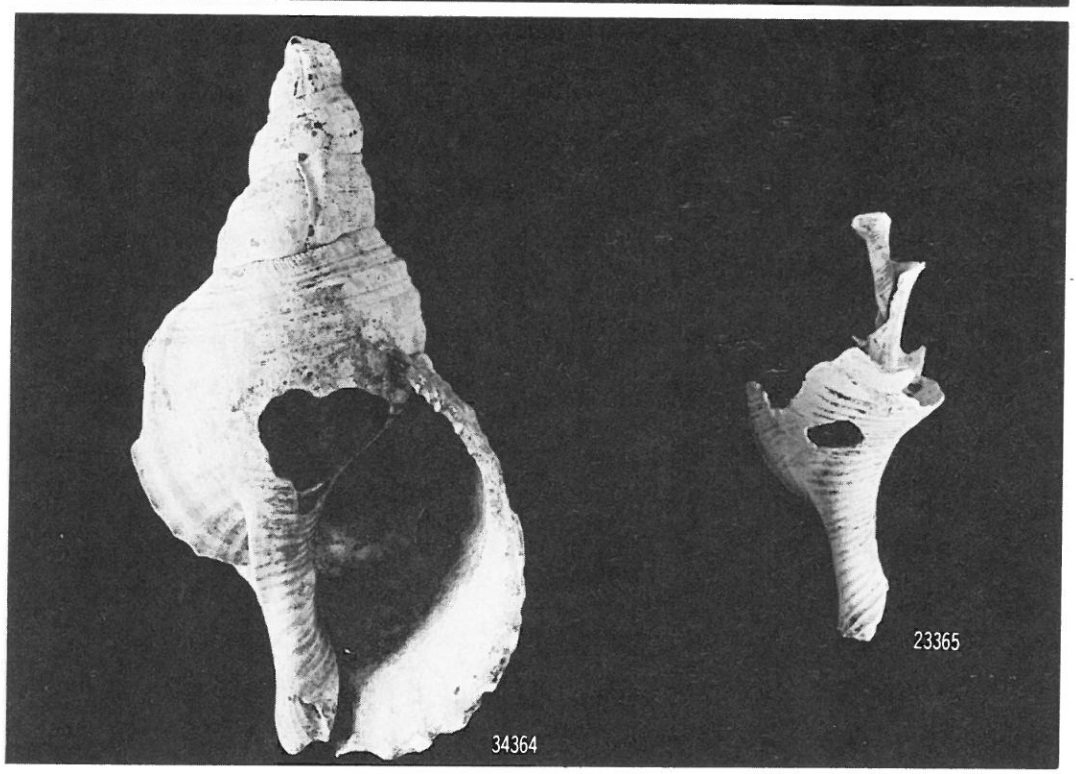


PL.60 (Fig.74)　　貝製品（ホラガイ系利器）

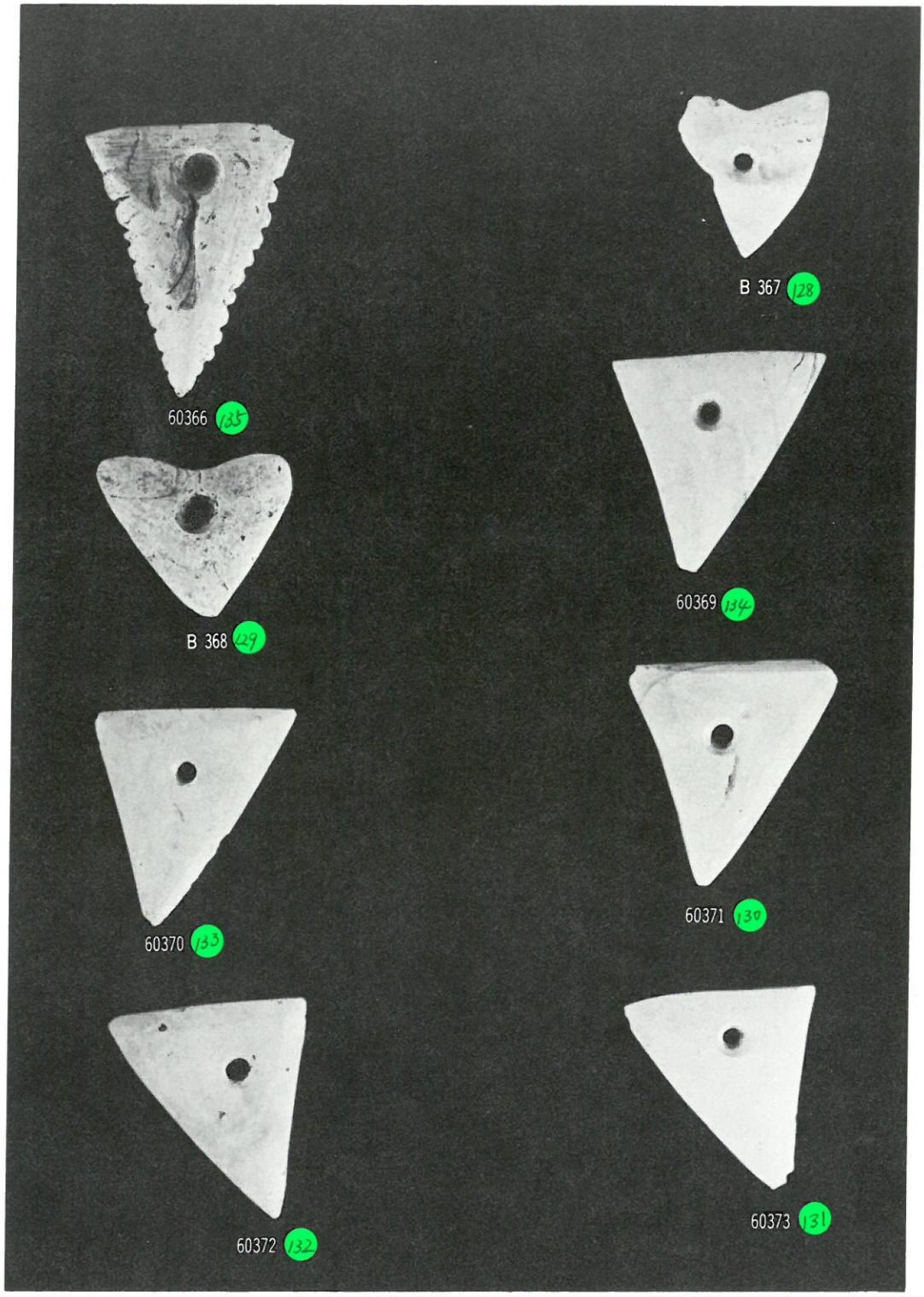


PL.61 (Fig.75)　　貝製品（夜光貝製匙、巻貝製匙状製品、その他）

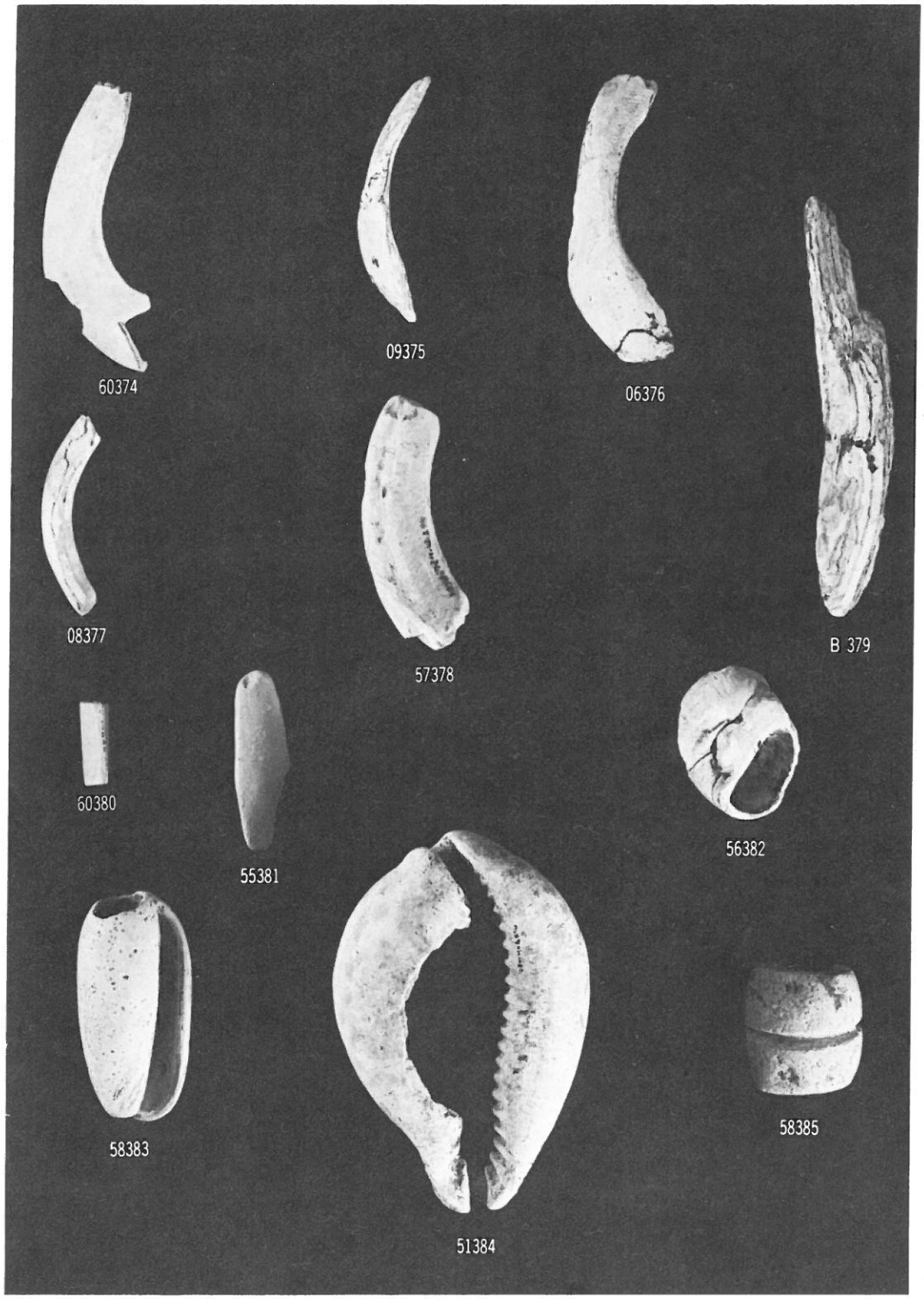




PL.62（Fig.76）　　貝製品（ホラガイ有孔製品）



PL.63 (Fig.77)　　貝製品（サメ歯状模造製品）



PL.64（Fig.78）　貝製品（貝輪、他）

上・ブダイ科（ナンヨウブダイ・イロブダイ・その他）

ナンヨウブダイ（1．右前上顎骨　2．左前上顎骨（内面）　3．右歯骨　4．左歯骨（内面）　5．左上咽頭骨（咬面）　6．右上咽頭骨（内側）　7．下咽頭骨）

イロブダイ　（8．右前顎骨　9．左前顎骨　10．右歯骨　11．左歯骨　12．右上咽頭骨（咬骨）　13．左上咽頭骨（外側）　14．下咽頭骨）

その他（15．右前顎骨　16．左前顎骨（内側）　17．左前上顎骨　18．右歯骨　19．左歯骨（内側）　20．左前上顎骨　21．下咽頭骨　22．右前上顎骨　23．左前上顎（内側）　24．右歯骨　25．左歯骨（内側）

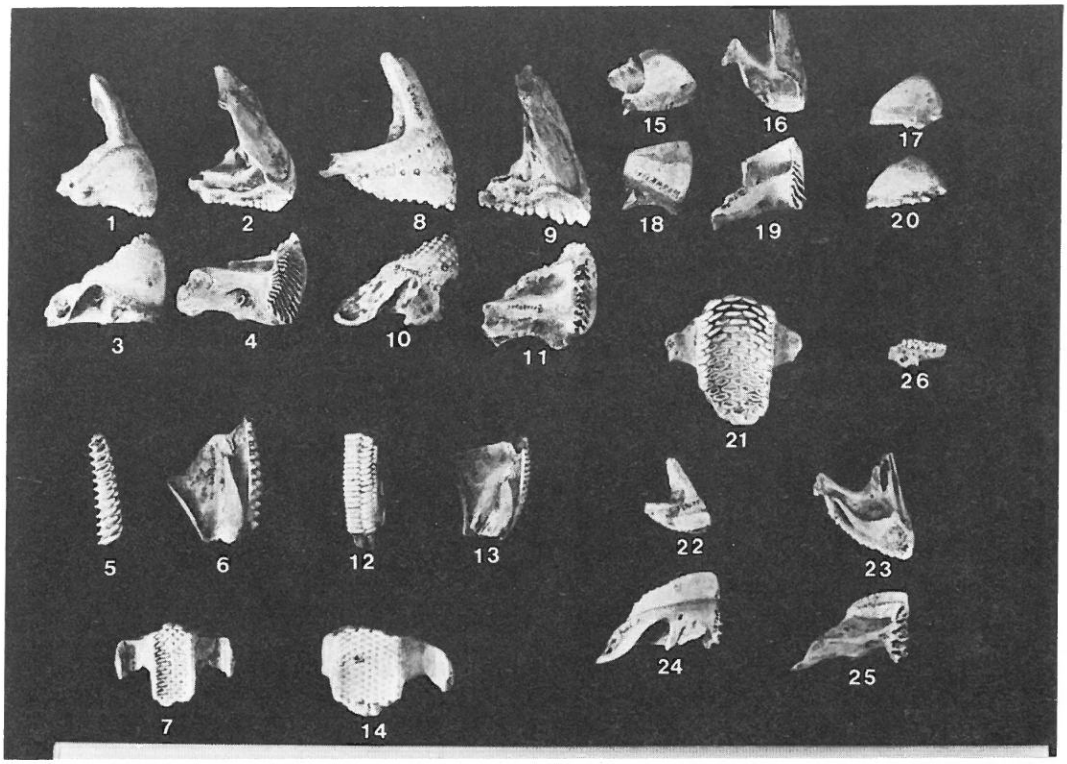
下・ベラ科・フエフキダイ科・ハリセンボン科

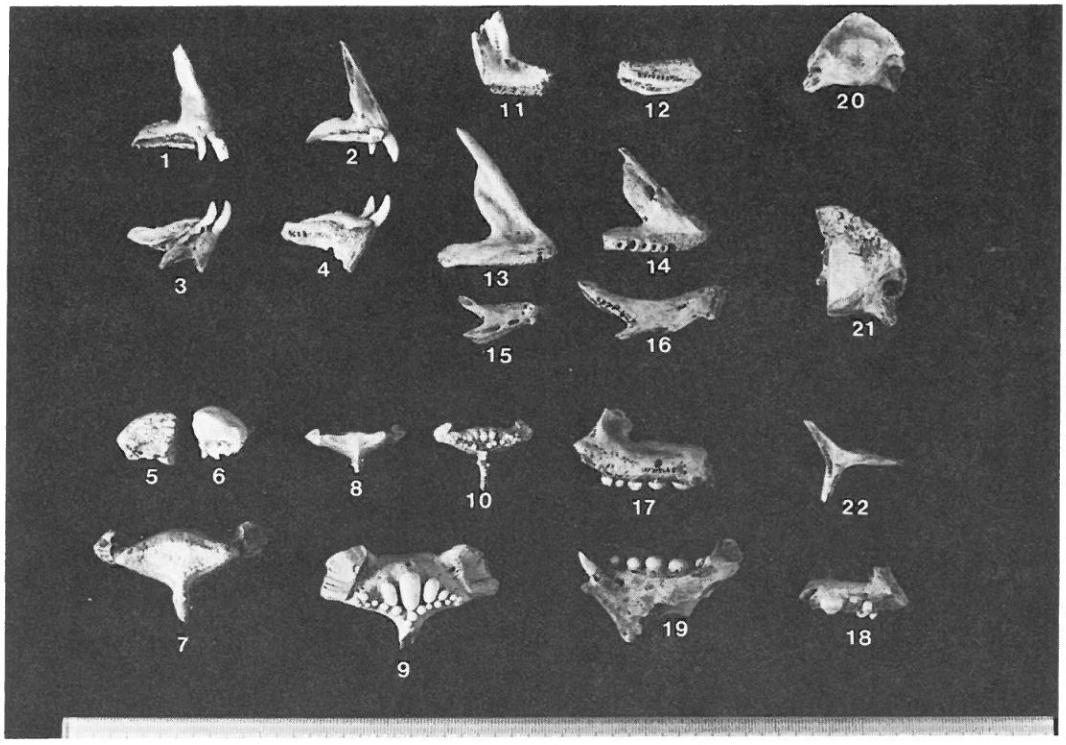
ベラ科（1．右前上顎骨　2．左前上顎骨（内側）　3．右歯骨　4．左歯骨 5．右上咽頭骨　6．左上咽頭骨　7・8・9・10、下咽頭骨）

フエフキダイ科（11・13．右前上顎骨　12・15．右歯骨　14．左前上顎（内側）　16．左歯骨（内側））

ヨコシマクロダイ（17．左前上顎骨　18．左前上顎骨（内側）　19．左歯骨）

ハリセンボン科（20．下顎骨）


1
2
8
9
15
16
17
18
19
20
3
4
10
11
21
26
5
6
12
13
22
23
24
25
7
14


11
12
20
1
2
3
4
13
14
21
15
16
5
6
8
10
17
22
7
9
19
18

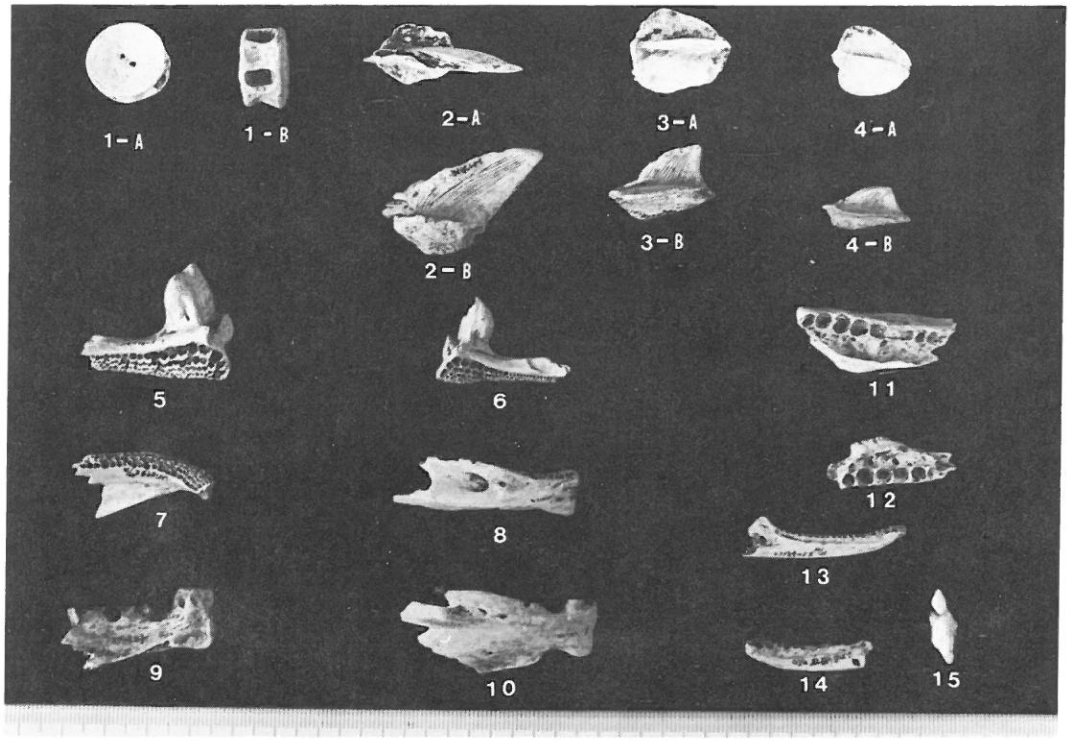
PL.65　魚骨

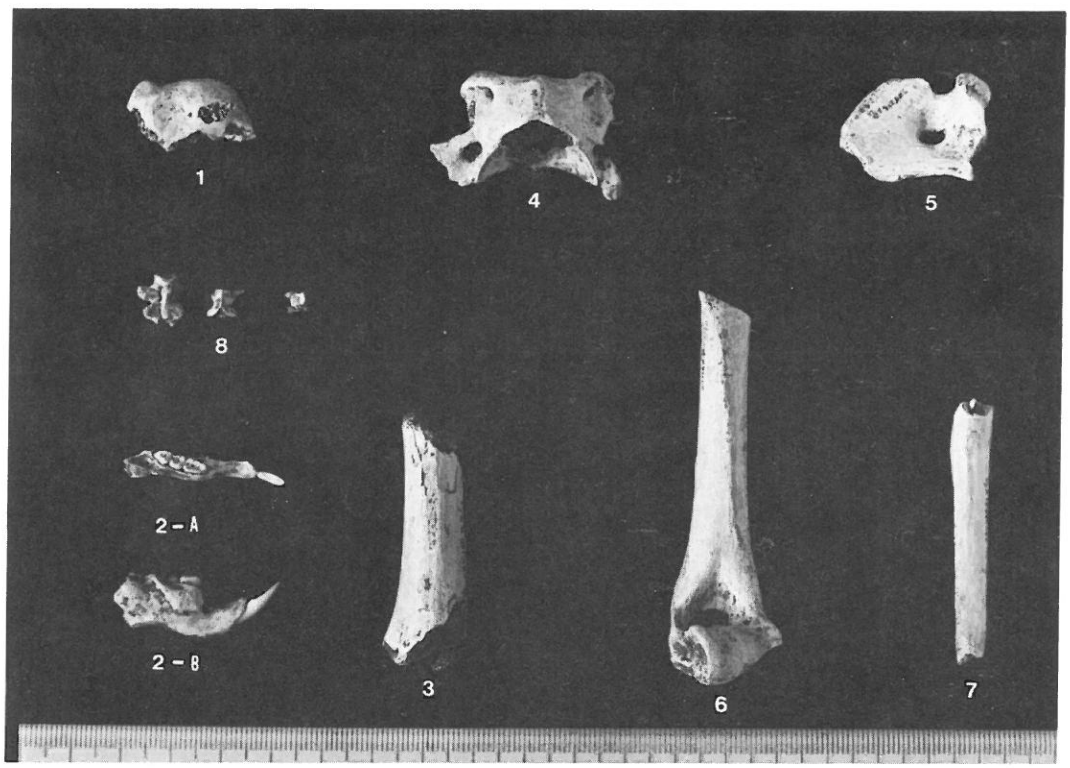
上・サメ目・ニザダイ科・ハタ科・ウツボ科・カマス科

1－a・b．サメ椎骨　2－a・b．3－a・b．4－a・b．ニザダイ科の尾部棘状の鱗　ハタ科（5．左前上顎骨　6．右前上顎骨　7・9．左歯骨内側面　8・10．右歯骨外側面）　ウツボ科、11～14　カマス科、15

下・アホウドリ・イルカ類？・ネズミ類・イヌ

1．アホウドリ右上腕骨近位端　2．ネズミ右下顎骨　3．イルカ類？、助骨片　イヌ（4・5．環椎　6．右上腕骨遠位端　7．右尺骨　8．ハブ脊椎）





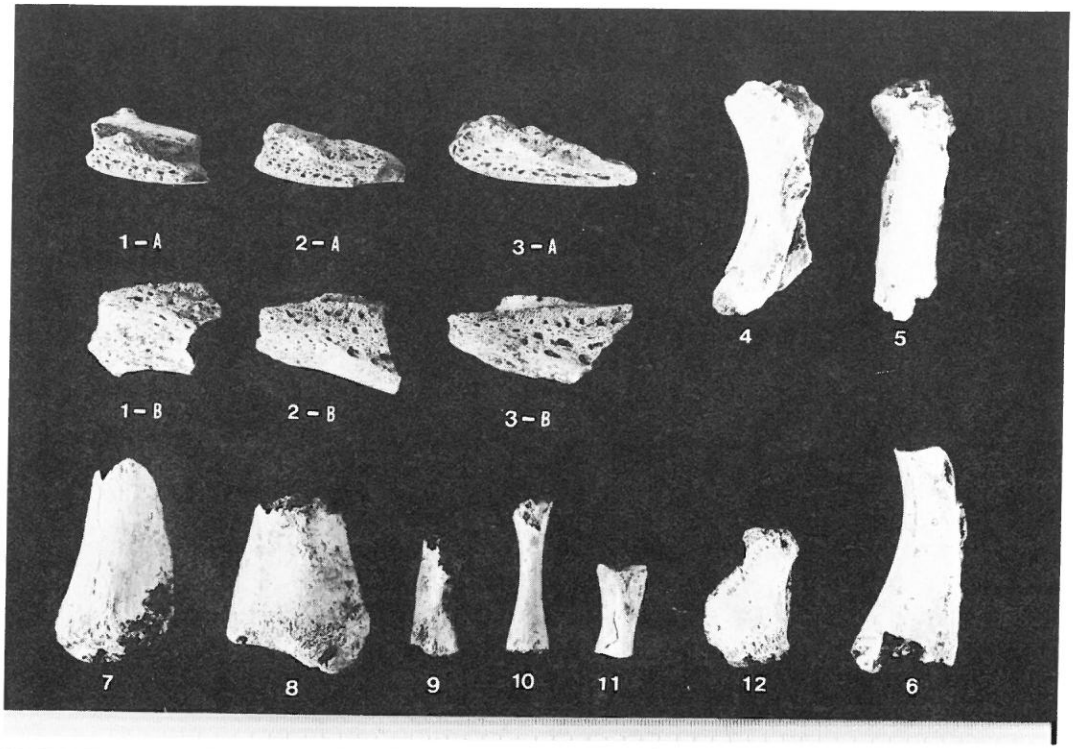
PL.66　魚骨・イヌ・ケナガネズミ・他

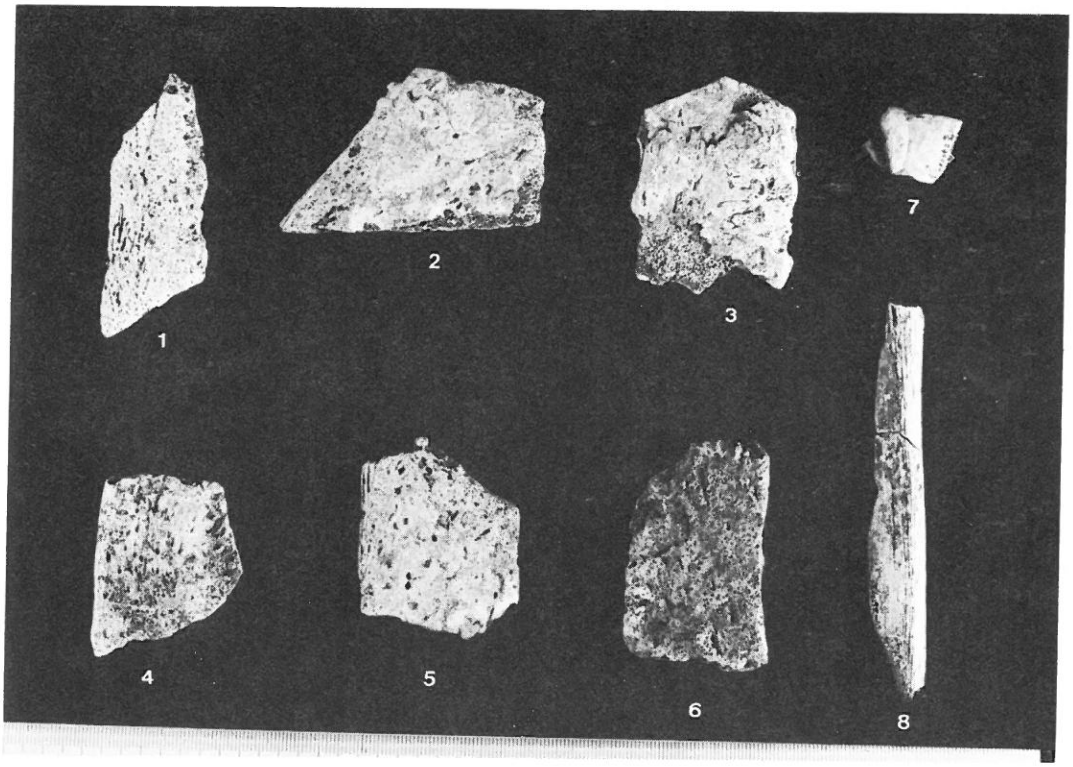
上・ウミガメ類

1－a・2－a・3－a．アオウミガメ歯骨片咬面　1－b・2－b・3－b．アオウミガメ歯骨片側面　4・5・6．上腕骨片　7・8・9．尺骨片　10・11．指骨　12．中足骨

下・ウミガメ類・リクガメ類・ヒト

1・2・3・5・6．ウミガメ背甲　4．ウミガメ縁甲　8．ヒト脛骨？　7．リクガメ





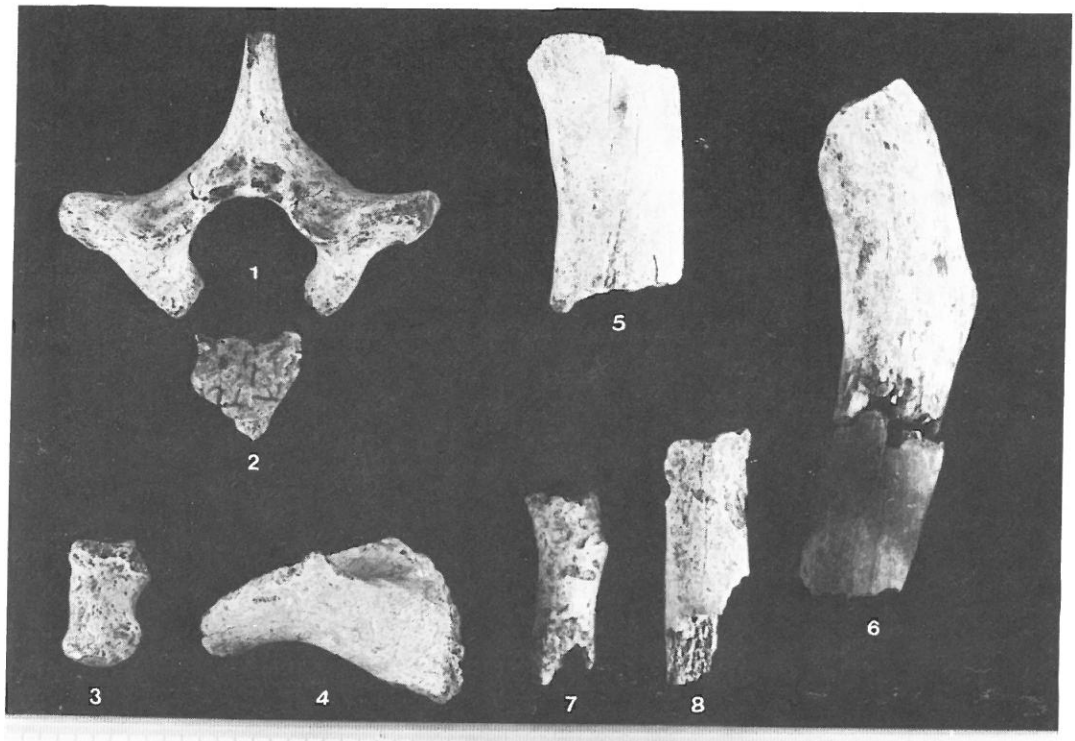
PL.67　ウミガメ・他

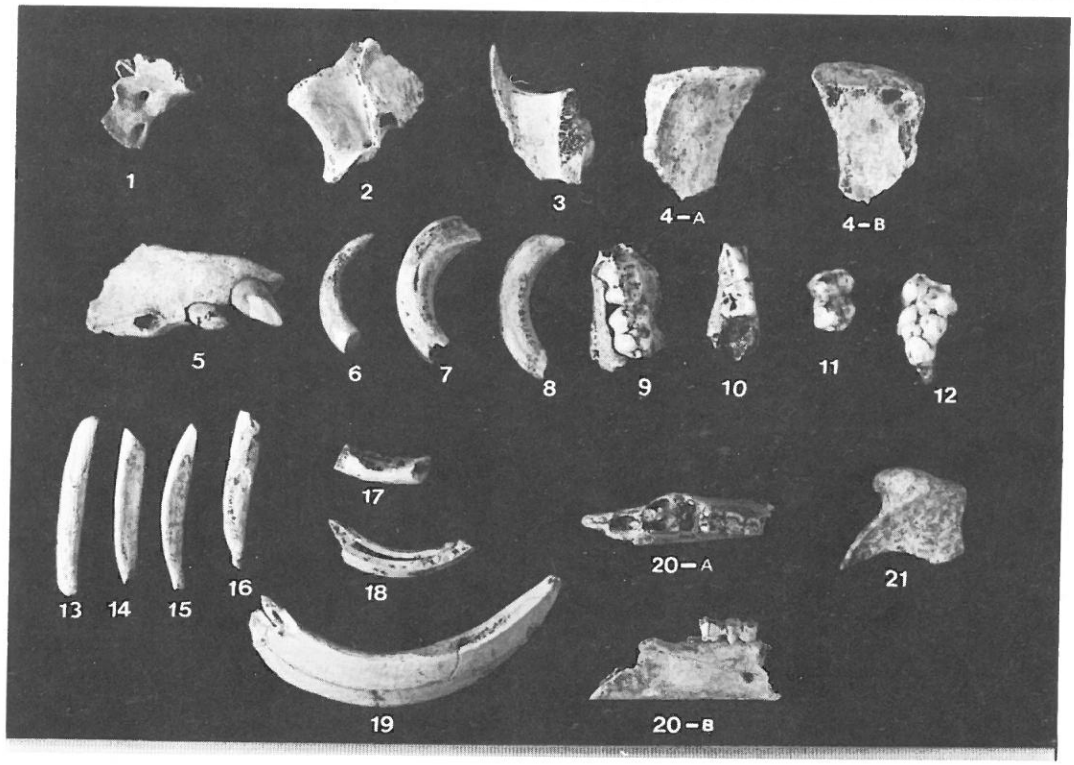
上・ジュゴン

1．椎体端部　2．椎体　3．指骨　4．右下顎骨　5・6・7・8．肋骨（6は咬痕有り）

下・イノシシ

1．右涙骨　2．右側頭骨　3．右側頭骨　4．側頭骨　5．右切歯　6．切歯　7．右上顎犬歯　9．左上顎第1・2後臼歯　10．右上顎第3・4前臼歯　11．右上顎・第2後臼歯　12．右上顎第3後臼歯　13・14・15・16．下顎切歯　17・18・19・20．右下顎犬歯　21．右下顎骨





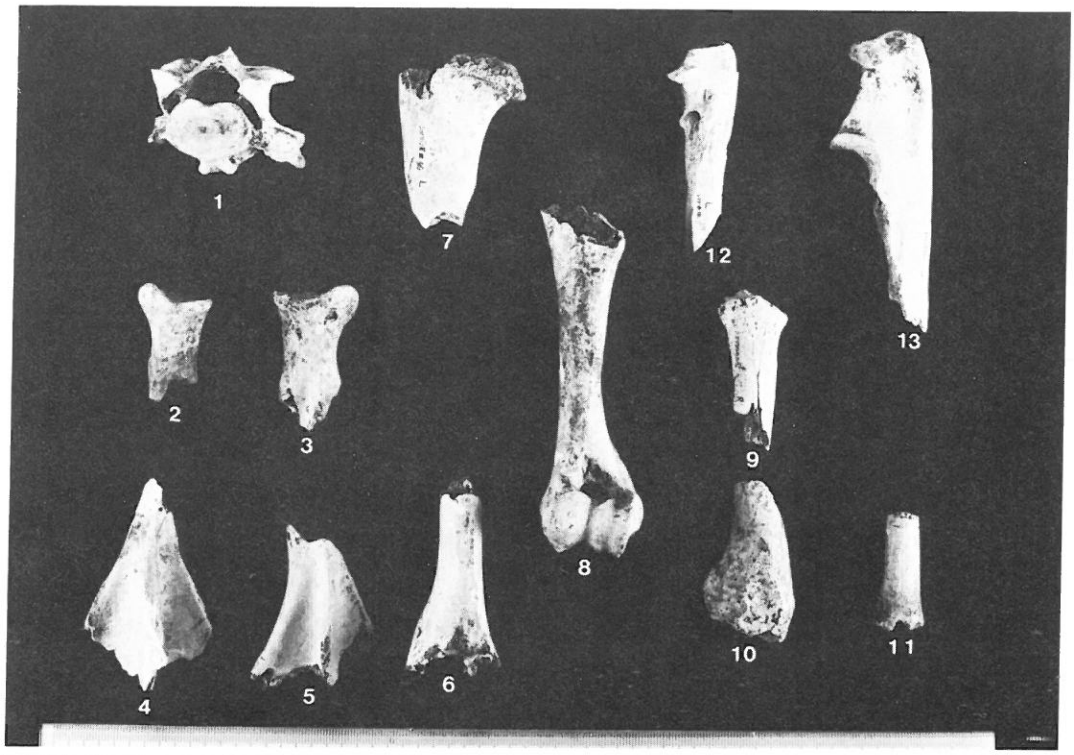
PL.68　イノシシ

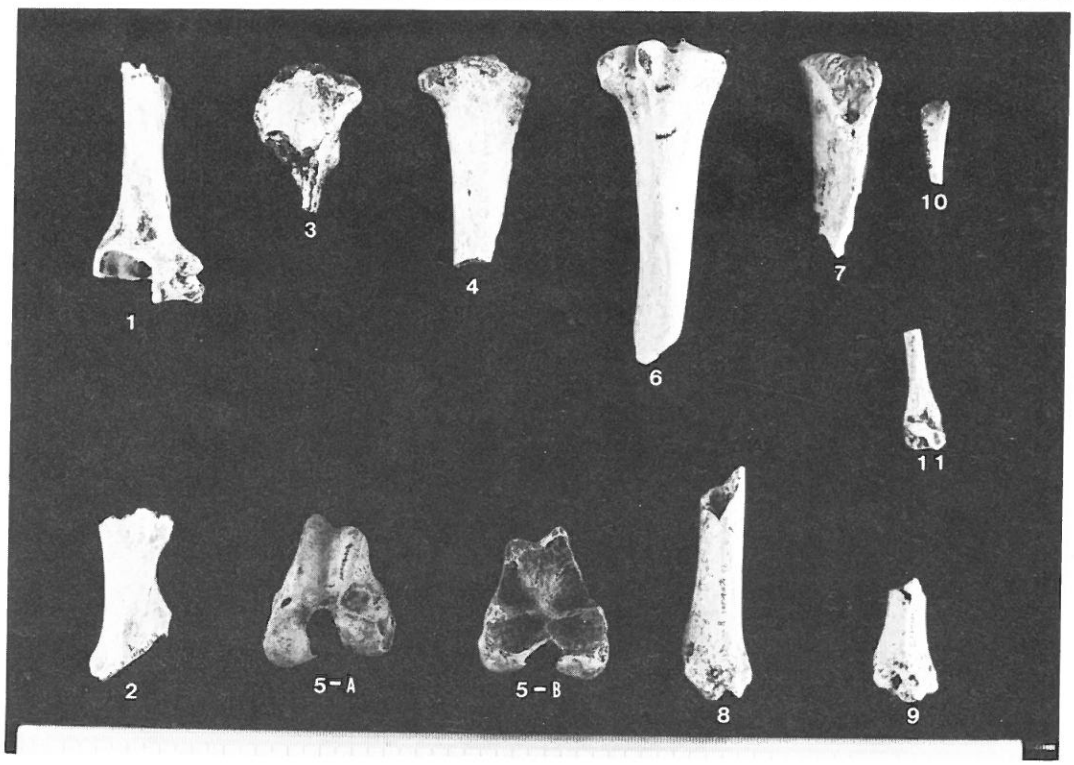
上・イノシシ

1．椎体　2．右肩甲骨近位端　3．左肩甲近位端　4．右肩甲骨骨体　5．左肩骨骨体　6．右上腕骨　7・8．左上腕骨　9・10．右橈骨　11．左橈骨　12．左尺骨　13．右尺骨

下・イノシシ

1．右寛骨　2．左寛骨　3．右大腿骨近位端　4．左大腿近位端　5－a．左大腿骨骨端　5－b．左大腿骨骨端（裏面）　6．右脛骨近位端　7．左脛骨近位端　8．右脛骨遠位端　9．左脛骨遠位端　10．右腓骨近位端　11．左腓骨遠位端

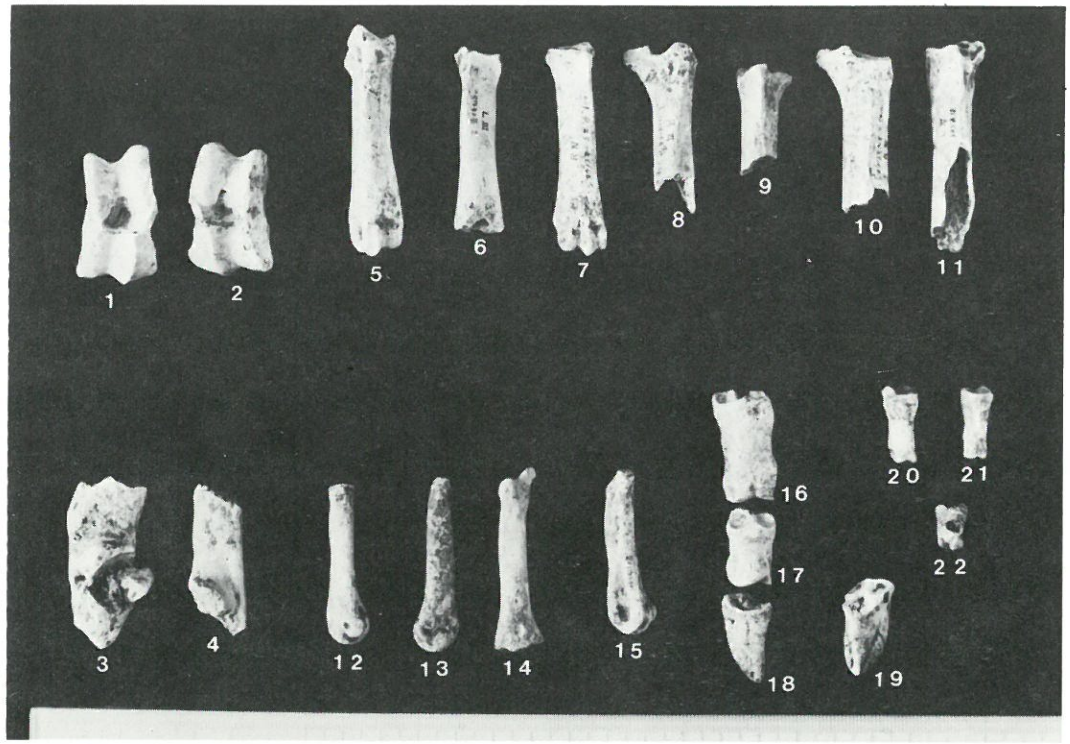


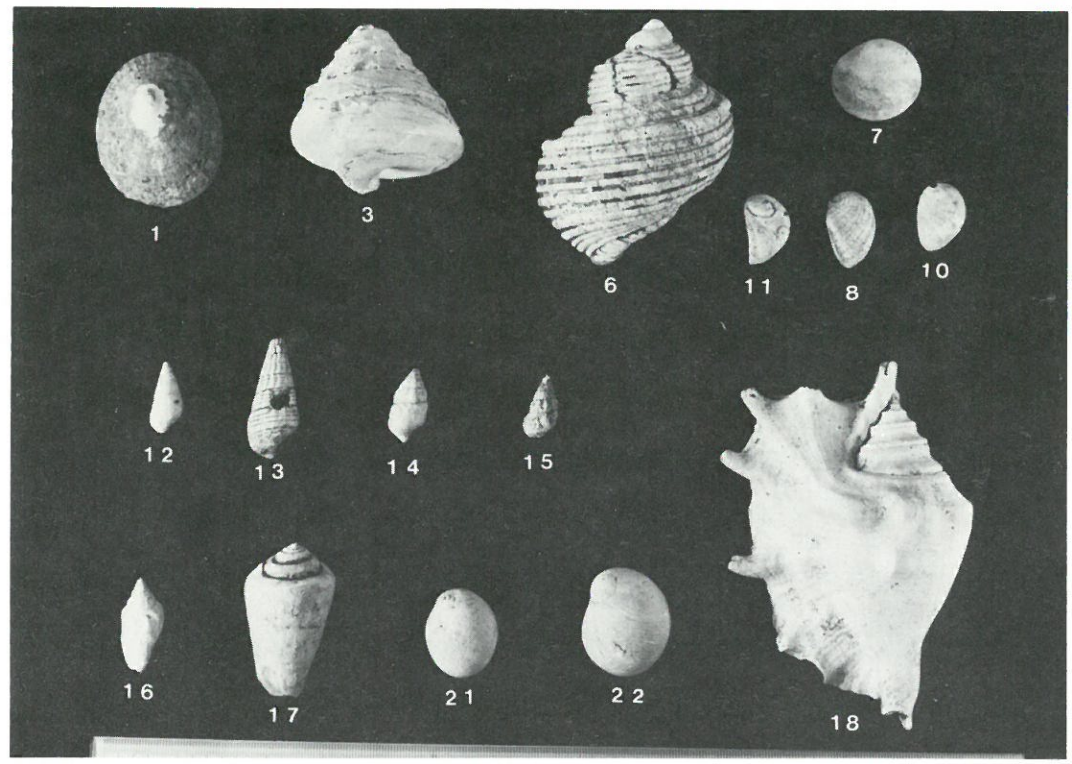


PL.69　イノシシ

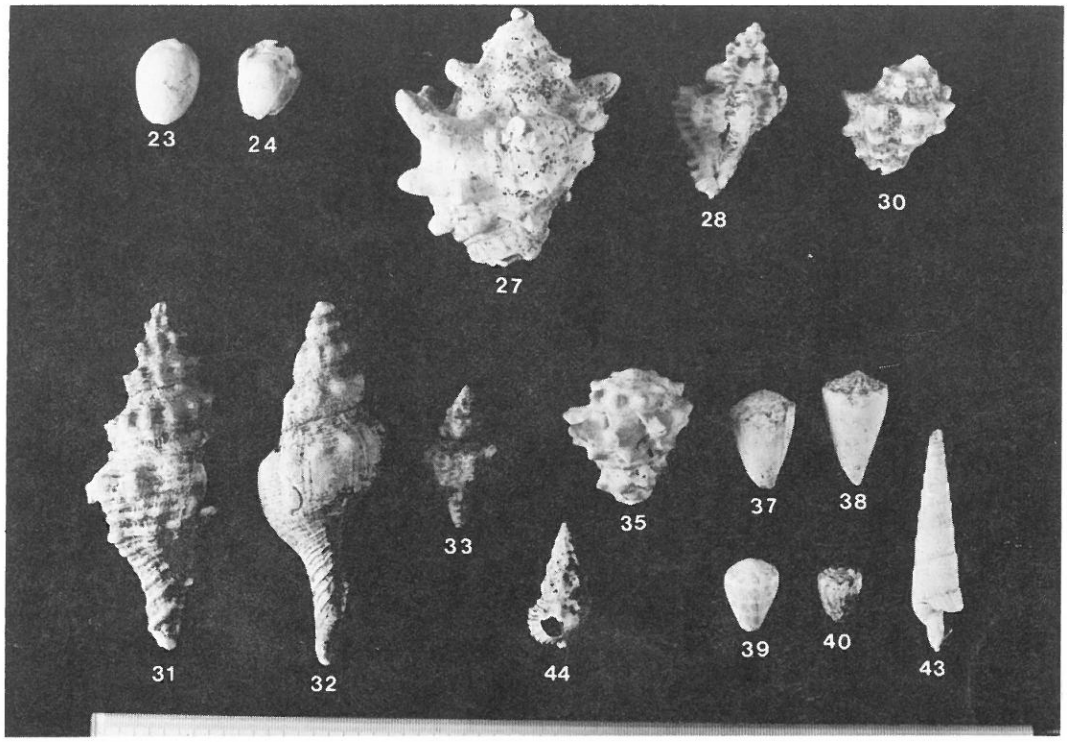
上・イノシシ

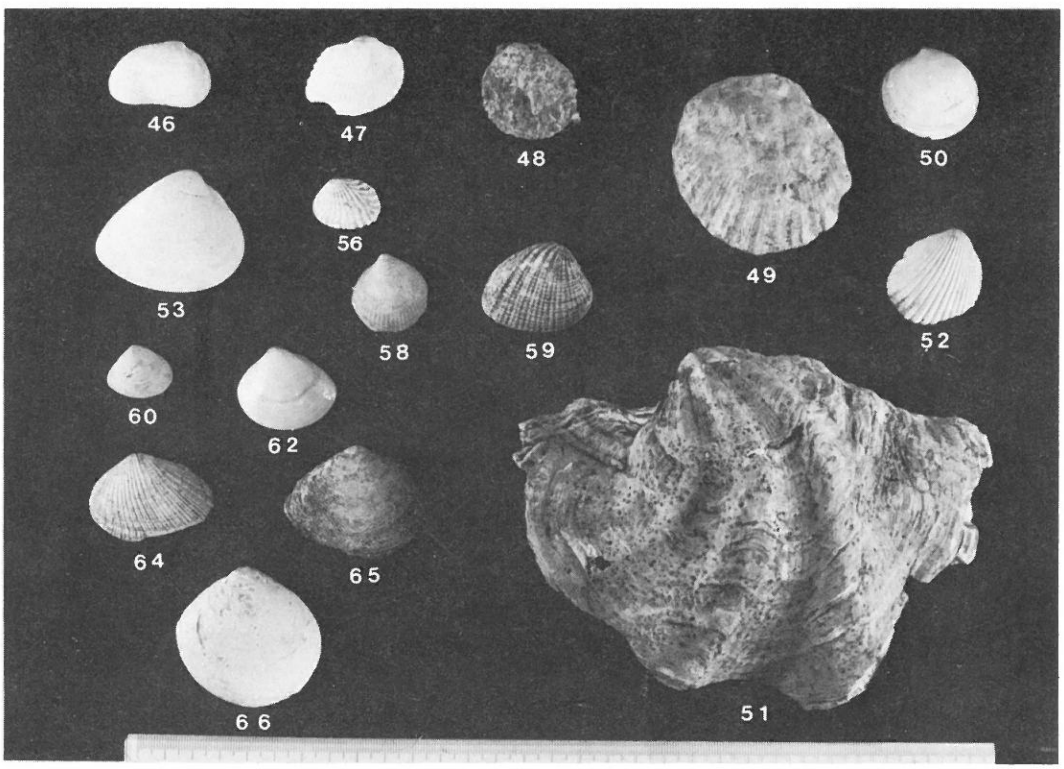
1．左距骨　2．右距骨　3．左踵骨　4．右踵骨　5・6．左第3中手骨　7．右第4中手骨　8．右第3中足骨　9．左第3中足骨　10．右第4中足骨　11．左第4中足骨　12・13・14・15．中手（足）骨　16．基節第3か第4指骨　17．中節第3か第4指骨　18・19．末節第3か第4指骨　20・21．基節第2か第5指骨　22．中節第2か第5指骨


1
2
5
6
7
8
9
10
11
3
4
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22


1
3
6
7
11
8
10
12
13
14
15
16
17
21
22
18

PL.70　イノシシ・貝類


23
24
27
28
30
31
32
33
35
37
38
39
40
43
44


46
47
48
50
53
56
49
58
59
52
60
62
64
65
66
51

PL.71　貝類

沖縄県立埋蔵文化財センター
平 12. 4. 1 成
000333
210.0254
Ok14

沖縄県文化財調査報告書第67集

シ ヌ グ 堂 遺 跡

—第1・2・3次発掘調査報告—

発行　1985年3月30日
沖縄県教育委員会
沖縄県那覇市旭町1
TEL　0988－66－2731
印刷　1985年3月26日
文進印刷株式会社
TEL　0988－55－2323